ISSN 0913-042X

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

年報

昭和
63年度

1989

序

本センターが海部郡弥富町にある愛知県埋蔵文化財調査センターに移転して早くも一年が経たち、資料の管理や、活用、化学分析や保存処理などの業務もようやく軌道にのりつつあります。また、昭和63年においても県内16ヶ所で発掘調査が実施され、多くの成果があがっております。

今年度もこれらの調査や普及活動の記録を「年報　昭和63年度」として公表することとなりました。本書が、考古学の研究はもとより、埋蔵文化財の保護と活用のうえでも、お役に立つことができればまことに幸いと存じます。

さらに、本書の刊行及び発掘調査にあたっては、専門委員の諸先生及び愛知県教育委員会の御指導並びに建設省、日本道路公団、愛知県土木部、総務部、地元市町村その他の関係者の方々に多大な御協力をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　中根　昭二

例　言

1．本書は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの昭和63年度事業の概要をまとめたものである。

2．調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県土木部及び愛知県総務部から、愛知県教育委員会文化財課を通じての委託を受けて、本センターが実施した。

3．調査の概要は、各遺跡ごとにまとめて掲載した。

4．普及活動の概要は、本センターの事業のうち、研修会、埋蔵文化財展などの埋蔵文化財の発掘調査以外の事業についてその概要を掲載した。

5．調査研究は、発掘調査及び整理作業を通じて研究成果の一部を集録した。

6．発掘調査にあたっては、専門委員の各氏及び愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導助言をいただいた。

7．本書の作成にあたっては、浅野弘一、伊藤千春、枝廣千代子、鎌倉崇志、亀井けい子、河合明美、佐藤治、佐藤規子、杉山美雪、武内剛、橋真美子、永草康次、長谷川恵子、山口昌直、各氏の協力を得たほか、関係各機関並びに、地元作業員の方々には過大の援助を賜わった。

8．文責は各文末に記した。

財団法人　愛知県埋蔵文化財センターの組織

役　員

理事長

中根　昭二

常務理事

鈴木　正明

監　事

福地　甲子八

理　事

小金　　潔	県教育長
井関弘太郎	名古屋大学名誉教授
伊藤　秋男	南山大学教授
大参　義一	信州大学教授
坪井　清足	財大阪文化財センター理事長
楢崎　彰一	名古屋大学教授
花木　篤雄	都市教育長協議会会長(一宮市教育長)
金島　　覚	町村教育長協議会会長(西枇杷島町教育長)
下田　修司	県土木部長
白井　正巳	県教育委員会社会教育部長
林　　正治	清洲貝殻山貝塚資料館館長(清洲町長)
山田　五夫	県陶磁資料館館長

監　事

小倉　政則	県出納事務局次長
鈴木　　毅	県教育委員会総務課長

専　門　委　員

考　古　学	楢崎　彰一	名古屋大学教授
地　理　学	井関弘太郎	名古屋大学名誉教授
文献　史学	早川　庄八	名古屋大学教授
建築　史学	浅野　　清	愛知工業大学教授
動・植物学	渡辺　　誠	名古屋大学助教授
形質人類学	池田　次郎	岡山理科大学教授
保存　科学	江本　義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長
岩　石　学	諏訪　兼位	名古屋大学教授
木材組織学	木方　洋二	名古屋大学教授

職　員

事務局長(兼管理課長)　太田　正男

管理課

主　査　古田　伴弘

主　事　鈴木　孝治　田上　堅三
　　大野　智靖　小倉　晴美

調査課

課　長　明壁　正毅

課長補佐兼主査　森　　勇一

主　事　赤塚　次郎　石黒　立人
　　松原　隆治　服部　信博
　　後藤　浩一　真鍋　雅治

主　査　山仲　寅治

主　事　樋上　　昇　神谷　友和

嘱　託　菅沼　圭介(88年11月退職)

嘱　託　金子　健一

主　査　平田　睦美

嘱　託　野口　哲也

課長補佐兼主査　土屋　利男

主　事　池本　正明

嘱　託　菅沼　良則(88年11月退職)

主　事　北村　和宏　福岡　晃彦
　　酒井　俊彦　安井　俊則

主　査　水谷　朋和

主　事　川井　啓介　宮腰　健司
　　日比　　宰

嘱　託　飴谷　　一

主　事　鈴木　正貴

嘱　託　岡本　直久

主　査　梅本　博志

主　事　小澤　一弘　佐藤　公保

嘱　託　伊藤　隆彦

主　事　城ヶ谷　和広

嘱　託　松田　　訓　加藤　とよ江

目　　次

Ⅰ.遺跡調査の概要 …… 1
調査の理由と工程…… 2
遺跡の位置…… 4
朝日遺跡…… 6
清洲城下町遺跡……12
名古屋城三の丸遺跡……20
松河戸遺跡……34
勝川遺跡……40
岩倉城遺跡……44
池下古墳……48
加美遺跡……49
岡島遺跡……52
志貴野遺跡……54
杉山端城跡……56
諏訪遺跡……57
麻生田大橋遺跡……58
下山古墳……62
松崎貝塚遺跡……66
小島遺跡……67
試掘調査……68
Ⅱ.調査研究
朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体……渡辺　誠……70
古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷……森　勇一・伊藤隆彦……76
木製農耕具の地域色とその変遷―勝川遺跡出土資料を中心として―……
樋上　昇……92
三の丸遺跡出土の奈良・平安土器―尾張の集落址における様相―……
城ヶ谷和広…… 126
年輪年代法による清洲城下町遺跡・勝川遺跡出土木製品の年代測定について
光谷拓実…… 136
五条川流域における「下呂石」の分布について……飴谷　一…… 144
朝日遺跡出土の動物遺存体……宮腰健司・佐藤　治…… 150
清洲城下町遺跡出土の井戸桶に関する考察……鈴木正貴…… 158
Ⅲ.埋蔵文化財センターの活動
埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会…… 170
発掘調査技術等研修会…… 171
資料の貸出・提供…… 172
現地説明会…… 173
Ⅳ.付篇（受贈図書目録）…… 174

遺跡調査の概要

調査の理由と工程

1．発掘調査

調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	朝日遺跡	A	417.5	88. 7～88. 9	石黒・宮腰・日比・飴谷
			B	770	88. 4～88. 6	石黒・川井
			D	491.5	89. 1～89. 3	石黒・川井
			G	962	88.12～89. 3	松田・日比・飴谷
			J	649	88. 4～88. 6	水谷・川井・岡本
			L	849	88. 4～88. 5	水谷・岡本
			M	761	88. 4～88. 6	水谷・日比・飴谷
		(5,632㎡)	N	732	88. 7～88. 8	石黒・宮腰・日比
		勝川遺跡		642	88.11～89. 2	平田・服部
		松河戸遺跡	A・B	2236	88. 4～88.10	山仲・野口
			C	3175.5	88. 4～88. 8	平田・真鍋・樋上
			I・J・K	3303.5	88. 8～88.11	平田・真鍋・樋上
			D・E	8749	88.12～89. 3	山仲・松原・後藤・金子
			G・H	7762	88. 4～88.11	山中・後藤・菅沼(圭)
		(27,651㎡)	L	2425	88.12～89. 3	山仲・岡本
	(35,600㎡)	池下古墳		1675	88.12～89. 3	赤塚・真鍋
建設省	国道23号バイパス	志貴野遺跡	A	1750	88. 4～88. 6	福岡・北村
		(4,000㎡)	B・C	2250	88. 7～88. 9	土屋・福岡
		小島遺跡		1000	89. 1～89. 3	安井・池本
	(5,800㎡)	試掘		800	88. 4	池本・菅沼(良)
建設省	合同庁舎建設	名古屋城三の丸遺跡	F	3100	88. 4～88. 8	梅本・小沢・城ヶ谷・佐藤
愛知県総務部	新図書館建設関連	名古屋城三の丸遺跡	A	1400	88. 8～88.12	松田・城ヶ谷・加藤・金子
			B	1700	88. 5～88. 7	松田・加藤・伊藤
			C・D	4100	88. 8～88.12	梅本・小沢・佐藤・伊藤
		(7,600㎡)	E	400	88. 4	松田・加藤
愛知県土木部	勝川土地区画	勝川遺跡		450	88. 5～88. 6 88.10～88.11 89. 2～89. 3	神谷・服部・野口
	県道萩原・多気線	岩倉城遺跡		1470	88. 4～88.10	松原・服部
	県道東三河環状線	麻生田大橋遺跡		1900	88. 8～89. 1	安井・福岡・北村

調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
愛知県土木部	県道新川・清洲線	清洲城下町遺跡	E	410	88. 6~88. 8	水谷・川井・鈴木
			F	330	88.12~89. 2	水谷・鈴木
			G	240	88. 4~88. 6	水谷・鈴木
			H	150	88. 6~88. 7	水谷・川井・鈴木
			K	280	89. 2~89. 3	梅本・鈴木
			L	480	88.10~88.12	水谷・岡本
			M	590	88.10~88.11	水谷・岡本
		(2,860㎡)	N	380	88.10~88.11	水谷・飴谷
	県道蒲郡・碧南線	岡島遺跡	A・B	1200	88.10~89. 1	池本・菅沼(良)・樋上・野口
		(2,400㎡)	C・D	1200	89. 1~89. 3	池本・樋上・野口
	小川橋整備	加美遺跡	A・B・C	2500	88. 5~88. 9	池本・菅沼(良)
	国道247号線	松崎貝塚		2000	88.12~89. 3	土屋・福岡・北村
	国道151号線	諏訪遺跡	A^1・A^2	900	88. 4~88. 5	安井・酒井
	(1,900㎡)	杉山端城遺跡		1000	88. 5~88. 7	安井・酒井
	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	260	88. 8~88. 9	日比・飴谷
			B	550	88. 7~88. 9	水谷・川井・岡本
			C	860	88. 8~88.12	水谷・日比・川井・鈴木
			D	580	89. 1~89. 3	梅本・佐藤・城ヶ谷・加藤
			R	660	88.11~89. 1	佐藤・日比・鈴木・飴谷
			S	790	88.12~89. 1	水谷・川井・岡本
		(3,800㎡)	Q	100	89. 2	佐藤・城ヶ谷
(19,780㎡)	東幡豆港港湾改修	下山古墳		500	88. 6~88. 9	土屋・北村

2．報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	阿弥陀寺遺跡	30,415㎡	昭和56～昭和60年度
		町田遺跡	9,882㎡	昭和62年度
		廻間遺跡	15,283㎡	昭和60～昭和61年度
愛知県土木部	小川橋整備	加美遺跡	2,500㎡	昭和63年度
	国道151号線	諏訪・杉山端城遺跡	1,900㎡	昭和63年度
	東幡豆港港湾改修	下山遺跡	500㎡	昭和63年度





1．岩倉城遺跡
2．勝川遺跡
3．松河戸遺跡
4．池下古墳
5．名古屋城三の丸遺跡
6．清洲城下町遺跡
7．朝日遺跡
8．下山古墳
9．杉山端城遺跡
10．諏訪遺跡
11．麻生田大橋遺跡
12．松崎貝塚
13．加美遺跡
14．志賀野遺跡
15．小島遺跡
16．岡島遺跡



(1/50000)






西幡豆
東幡豆港
吉良
中之浜
沖島
東海市
大田町
横須賀町
加木屋町
新池
桜井町
小川町
大府
天神
新村町
西浅井町
中根町
小島町
尾花町
上永良町
丹過
岡島町
高横須賀町
豊栄
新城
吉水
稲木
野田
石田
川田
豊島
中市場
西尾
大和田町
小焼野町
高浜
家武町
仲栄

朝日遺跡

調査の経過

昭和60年に始まった本センターによる調査も、本年度で第４次調査となり、昭和47年に県教育委員会によって調査が開始されてから、中断を含めてすでに17年経過したことになる。しかしなお新しい事実を蓄積しつつある。（石黒立人）

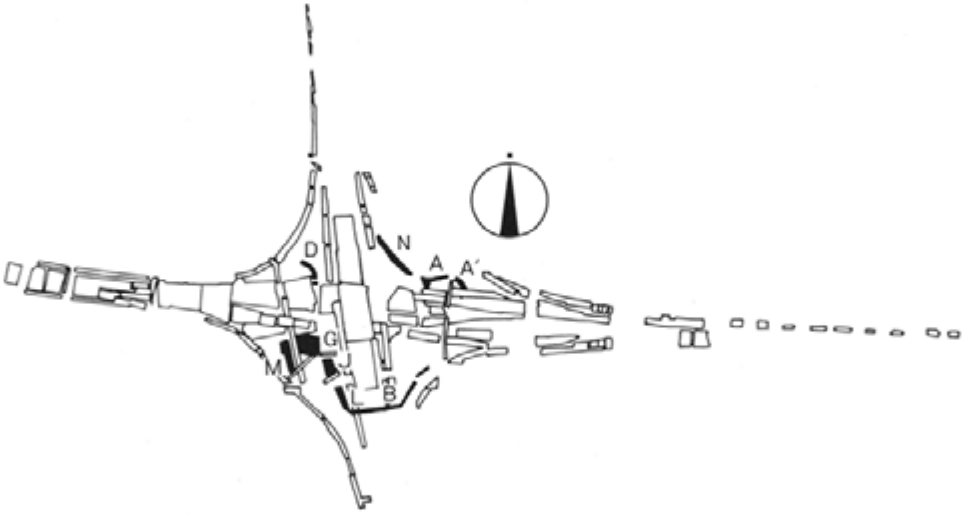
調査の概要

AA′・N区は，谷Bを挟んで東西に位置する。基本層序は、ともに水田耕土以下にⅠ：灰色粘土、Ⅱ：灰褐色シルト、Ⅲ：黒褐色シルト（弥生時代包含層）、Ⅳ：明青灰色シルト（弥生時代基盤）となる。遺構の少ない地区では局所的にⅣ層上部に弥生時代基盤として黒褐色シルトが分布する。

A区では谷B南半と若干の遺構が、A′区では谷Bに平行する大溝（ＳＤ01）１、掘立柱建物１を検出した。ＳＤ01の上層からは若干の木製品が出土した。A′区では朝日遺跡で初めて縄文時代後期の遺構（ドングリピット２基）を検出した。

ドングリピット２基は、谷ＢとＳＤ01の間にあり、谷Bに平行する深さ約15cmの溝状の落ち込み（ＳＸ01）下に存在した。そのうちの１基では、ピット内上部に、底部を欠くが、ほぼ完形の縄文時代後期の土器が遺存し、下部からドングリが出土した。

N区では、弥生時代中期前半に属す竪穴住居群と大溝、後半に属す方形周溝墓群を検出



第１図　調査区位置図

した。住居は円形１、方形３で、円形住居内にはカキを主とする貝殻が廃棄されていた。方形周溝墓は少なくとも６基存在するが、周溝からの完形に近い土器出土例は１例と少ない。

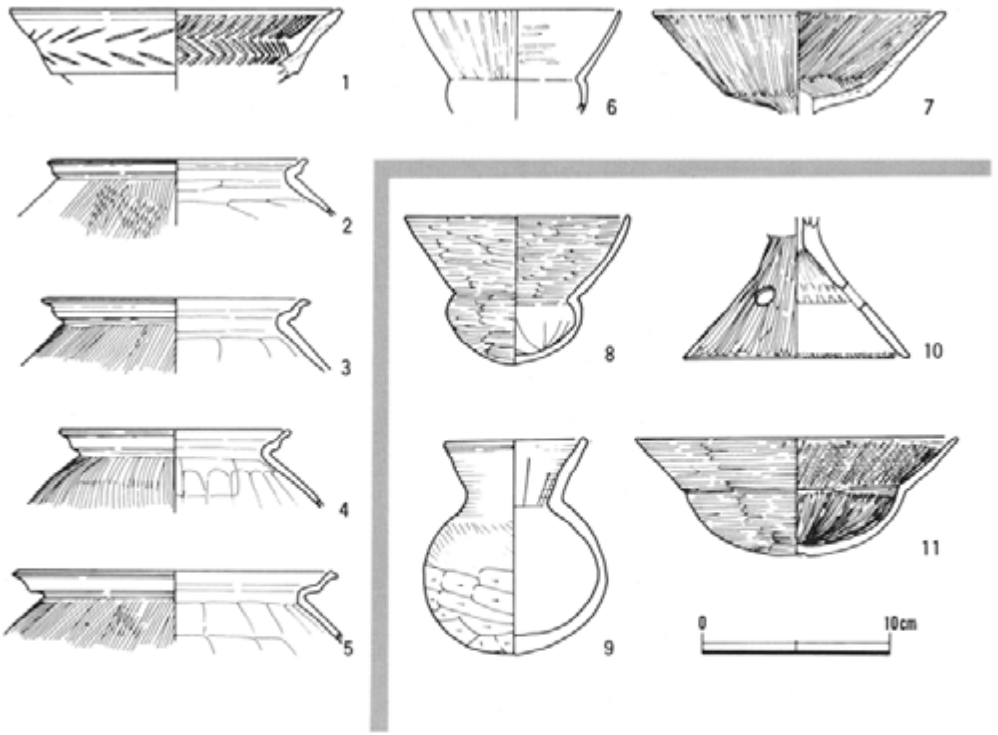
（飴谷　一）

B区

B区は細長い調査区のため遺構の面的な把握は困難であったが、それでも「旧河道C」と呼ばれた谷部分の断面を調査できたこと、この谷西方で古墳時代住居と弥生時代後期方形周溝墓などを検出できたことは成果であった。

谷部分は、下半部の堆積層が砂層と植物遺体（流木含む）からなり、また基盤面がすべて砂であった点で、これまで知られていた谷Cの様相とは大きく異なることが注目される。自然地形としての谷・河道ではない可能性がある。古墳時代住居はほぼ正方形に近いプランで４本柱をもつ。底面からは土器多数と砥石が出土した。元屋敷期の新しい段階に位置づけうる。弥生時代後期方形周溝墓は全体の半分弱を検出したにすぎないが、周溝からは山中式に属す華麗な土器が出土した。周溝埋土上部からは古墳時代住居と同時期の土器が出土している。

（石黒立人）



第２図　B区出土古墳時代土器（１－７　ＳＺ01上層出土、８－11　ＳＢ02出土）

J区

J区は検見塚の南に位置する。基本層序は、水田耕土以下に、Ⅰ：灰色粘土層・Ⅱ：黒色砂質シルト、Ⅲ：黄灰色シルト層（基盤）である。調査区南隅は旧調査区と重なる。

Ⅱ層上面において中世方形土坑８基を検出し、他にⅠ層が不整方形に落ち込む個所において、古墳時代前期の住居１軒を検出した。

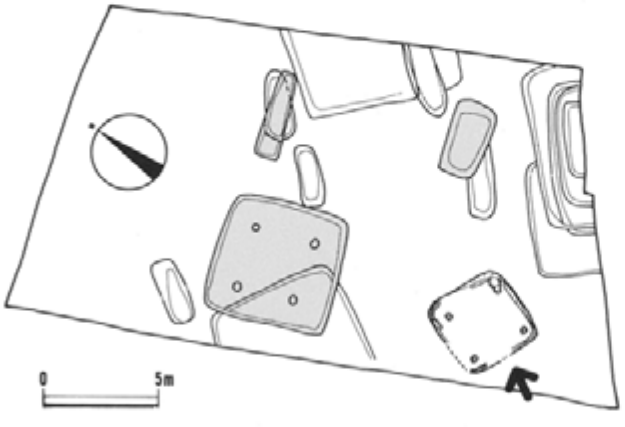
Ⅱ層は、弥生時代各期の遺構による撹乱が著しく遺構検出が困難なため、把みすい黄灰色シルト層上面での遺構に検出した。その結果、住居・土坑を中心とする弥生時代中期～後期の遺構を多数検出することができた。弥生時代後期後半（欠山期）の住居と確定できる資料は、本遺跡において今回が初見となる。また、調査区北隅では、弥生時代後期の溝の南肩を検出した。埋土中に貝を含む様子であるが、調査区外に及ぶため、確認するには至らなかった。

本調査区では特に注目したいのは、弥生時代後期後半（欠山期）の遺構に見られる方向性である。この時期の住居・土坑には、N－72°－E[註]の傾きを持つもの（A群：スクリーントーン表示）と、N－47°－E[註]のもの（B群）の２群が存在する（第３図）。もしこのような方向性が広い範囲にわたるなら重要である。本調査区が南居住域中央近くに位置していること、A・B群に含まれる土坑が隅丸長方形という特殊な形状を呈していることも含め、この様な方向性の問題は、南集落の中心地の様相を解明する上での手がかりとなる一資料と考える。

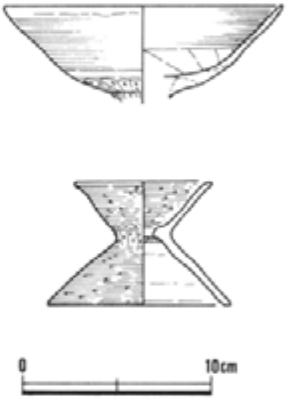
註：方向は隅丸長方形土坑の長軸を基準とし、角度は該当遺構の平均値　（岡本直久）

L区

L区は南居住域南隅に位置する。基本層序は、水田耕作以下・Ⅰ：灰色粘土層、Ⅱ：黒



第３図　J区住居と土坑（矢印は古墳時代住居）



第４図　J区古墳時代住居出土土器

色砂質シルト・Ⅲ：黄灰色砂層（基盤）である。

まず、Ⅱ層上面を遺構検出面として調査を開始し、中世方形土坑４基を検出した。その内３基は調査区北東隅にあり、Ⅱ層に若干達している程度であった。南東隅の１基は深さ0.5mを測る。また、調査区南隅においてⅠ層の溝状落ち込みが２条認められたため、これを掘り下げたところ、東西方向の溝２条を検出した。これらは、2.5mの間隔を置いて平行する。北の１条（ＳＤ01）は幅４m、深さ1.2mを測る。山中期に掘削され、欠山期に至り埋没し始める過程で再利用されている。南環濠の内環濠と考えられる。南の１条（ＳＤ02）は、幅2.5m、深さ１mを測り、山中期のうちで埋められている。当初、これを外環濠と考えたが、欠山期に使用されないことから、外環濠は欠山期に位置の変更が行われるか消滅すること、あるいはＳＤ02が元々外環濠ではないことなどの可能性が考えられる。今後、重要な問題として検討していく必要がある。

Ⅱ層は、断面での分層は可能だが、平面的な検出が困難なため、黄灰色砂層上面において遺構を検出した。住居は弥生時代中期のものを中心とする。土坑は炭化物、焼土が幾層も重なる袋状土坑、貝の廃棄土坑等を検出した。（岡本直久）

M区

M区はＪ区の西に位置する。基本層序は、Ⅰ：黄灰色粘土、Ⅱ：茶褐色砂質シルト、Ⅲ：黒褐色砂質シルト、Ⅳ：黄灰色シルト、Ⅴ：灰色粗砂である。各層の時期は、Ⅰ層：中世、Ⅱ層：弥生時代後期から古墳時代、Ⅲ層：弥生時代中期から後期に対応すると考える。そしてⅣ層は調査区北側の基盤、Ⅴ層は調査区南側の基盤である。基盤の状態はⅤ層が南から北へ緩やかに下降し、その勾配を埋める形でⅣ層が堆積しており、Ⅳ・Ⅴ層がほぼ同一レベルで平坦面を形成している。この上面から遺構の展開がみられる。

確認し得た遺構のうち、住居は12軒あり、円形住居１（弥生時代中期）の他はすべて隅丸方形住居（ほとんどが弥生時代後期か）であり、火災に遭ったと考えられる住居（弥生時代後期）も１軒検出した。

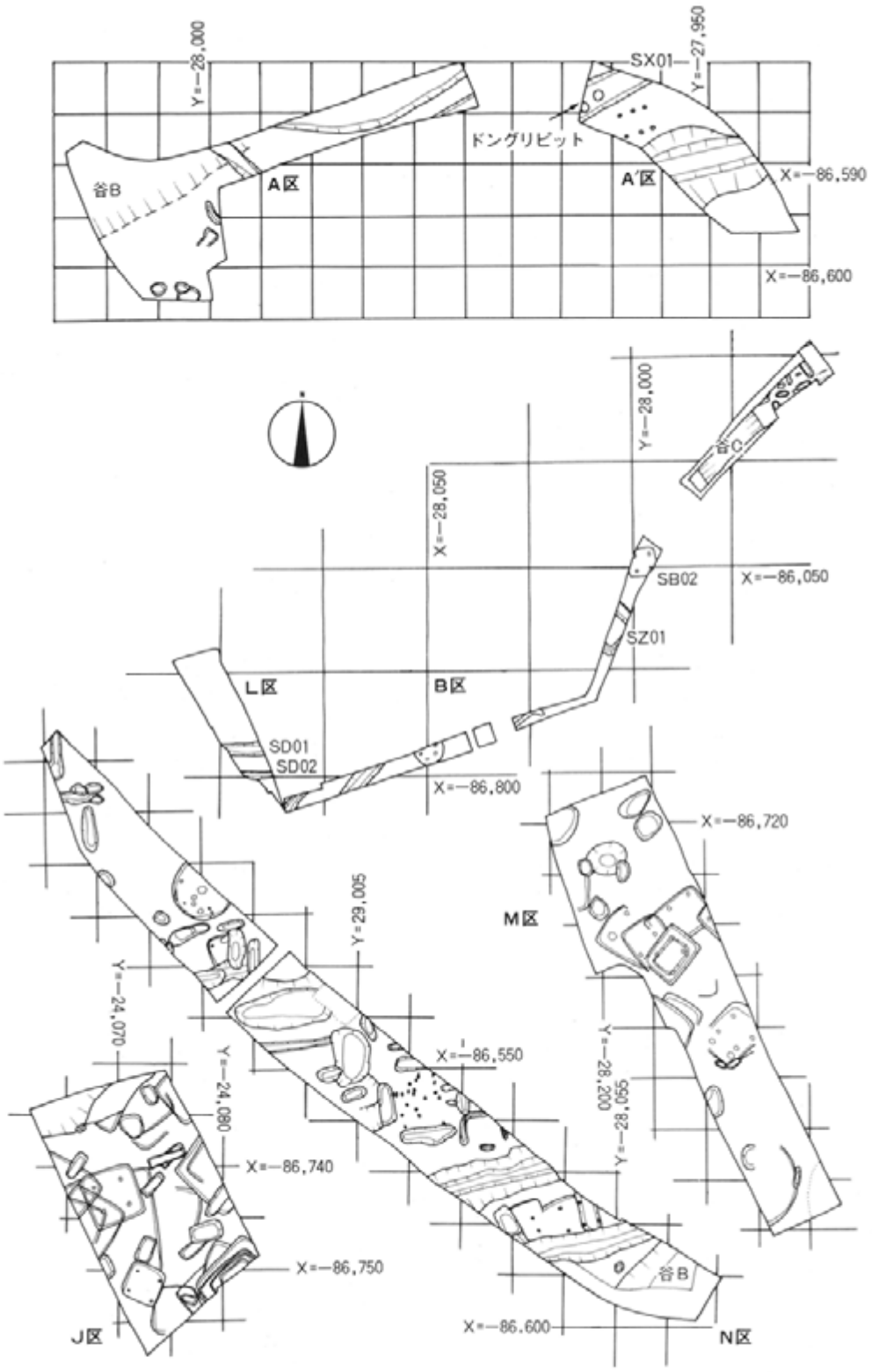
土坑はうち１基は古墳時代前期に属し、その他は弥生時代中・後期に属する。中には廃棄坑と思われる多量の土器が詰まっていた土坑もあった。（飴谷　一）

まとめ

1．A区で検出したドングリピットは、朝日遺跡の理解を縄文時代にまで拡げざるを得なくした。集落の存在を考慮しなければならない。

2．古墳時代住居跡の好例をＢ・Ｊ区で検出した。該期に集落のあることはこれで確定。

（石黒立人）



第5図　各調査区遺構配置図



A'区



N区



B区



M区



L区



J区

清洲城下町遺跡



第1図　63年度調査区位置図
堀の復元（千田嘉博氏による）

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を流れる五条川中流域に形成された自然堤防及び後背湿地上に位置する。織田信長ゆかりの清須城を中心に清洲町のほぼ全域に広がり、戦国時代から江戸時代初期までを主とする遺跡である。

環状2号線建設(昭和59年度～61年度)、五条川改修（61年度～現在)、県道清洲・新川線拡幅(62年度～現在）の各事業に伴って発掘調査を進めている。本年度の発掘調査は、河川改修関係(A～D・Q～S区)、県道関係（E～N区）の合計15調査区、6660㎡を対象とし、これまでの総調査面積は35,891㎡に上る。

既設の地下埋設物による遺構の寸断などの支障もあったが、おおむね良好な状態で遺構・遺物を検出することができた。

時期区分は、Ⅰ期（古墳時代）Ⅱ期（奈良、平安時代）Ⅲ期（鎌倉、室町時代）Ⅳ期（城下町期）Ⅴ期（宿場町期）である。

（水谷朋和）

五条川河川改修関係

遺構

本年度は五条川河川改修に伴う発掘調査を７ヶ所で行い、城下町期を中心とした遺構を検出し得た。以下調査区ごとにその概要を記す。

Ａ区　検出遺構は、室町時代（ピット群）と城下町期後期の２期にわたる。特に城下町期後期の南北に走行する幅５ｍの溝を検出したが、調査区の制約から、性格は不明である。

Ｂ区　城下町期後期の溝１条、井戸３基、土坑等を検出した。井戸はすべて桶組みで、ＳＥ03からは廃絶時に投棄されたと思われる礫が深さ３ｍ以上にわたって堆積していた。

Ｃ区　城下町期の遺構として、大溝１条、井戸２基、自然流路２条等を検出した。大溝（ＳＤ14）は、西側を流れる五条川に接しておらず、一段テラスをもって更に深く掘り込まれていた。大溝の底部から面的な広がりをもつ礫群を検出したが、遺構に伴うものとは考えにくく廃絶時に一括投棄されたと考えられる。城下町期遺構の削平をうけ正確な規模は確認できなかったが、『清須村古城絵図』（蓬左文庫蔵）などにみられる清須城を巡る三重の堀のうち「中堀」に相当すると思われる。次に、宿場町期の遺構としては、17世紀末の良好な遺物が出土した廃棄土坑（ＳＸ05）、19世紀の井戸、溝等がみられた。

以上の遺構のほかに、地震による地割れ痕（８本）、噴砂がみられる。この現象に関する地震の時期は新旧二時期に分かれ、新期は濃尾地震、旧期は天正地震と推定される。

Ｒ区　城下町期後期の溝、土坑、井戸及び自然流路を検出した。自然流路は旧五条川と考えられ、その他の遺構はこの自然流路を整地した後につくられている。逆に整地層の南北両側のシルト層では同時期の遺構はほとんど検出しえなかった。

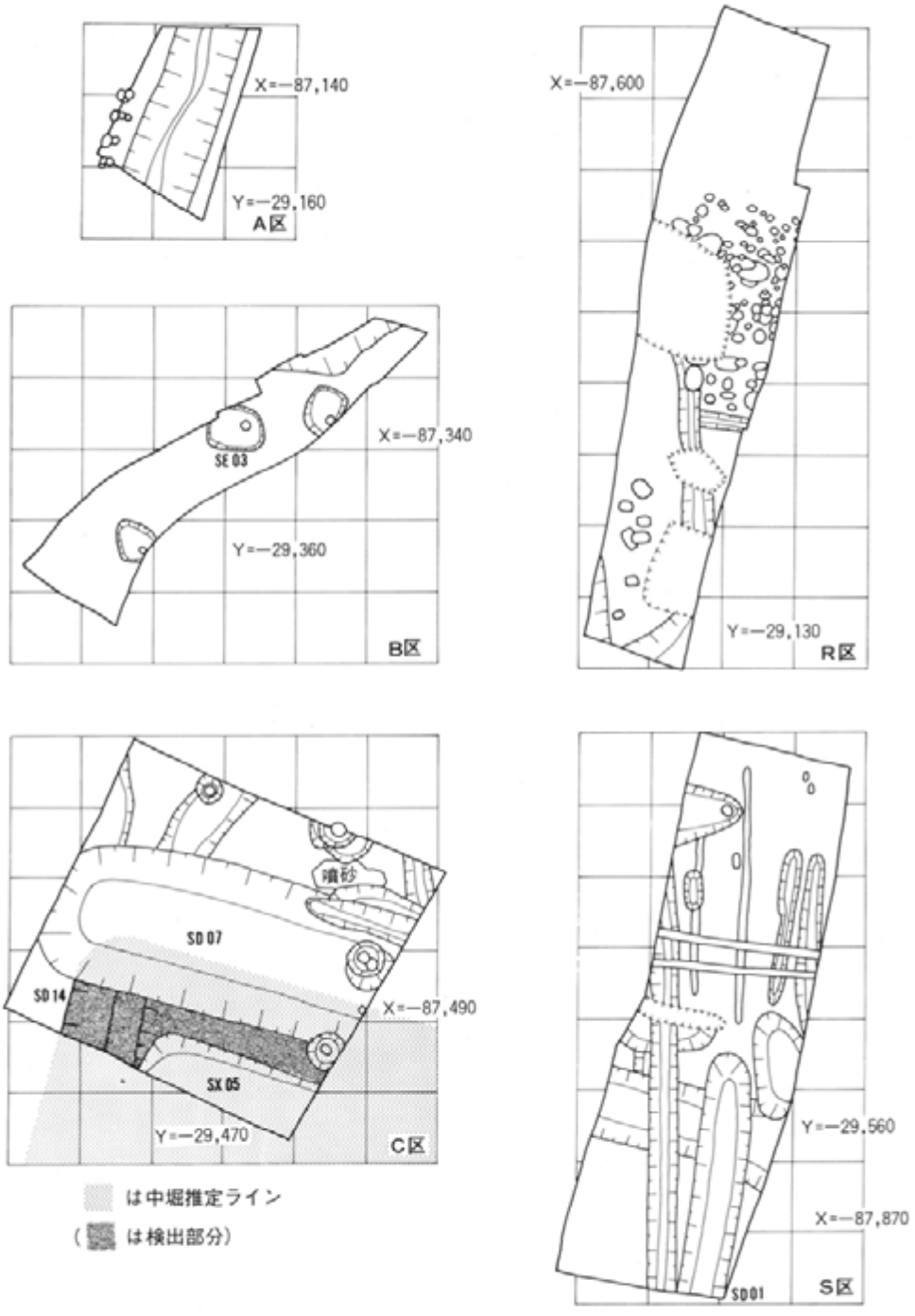
Ｓ区　検出遺構は、溝10条、井戸１基、土坑10基である。溝は南北方向に６条、東西方向に４条走行し、特にＳＤ01からは城下町期後期の良好な遺物が出土した。（川井啓介）



Ｃ区　地震痕



Ｃ区　ＳＤ14出土礫群



第２図　五条川河川改修関係遺構図（1/500）

出土遺物

出土遺物は、陶磁器類がその大半を占める。他に、下駄・漆器・曲物などの木製品、石臼・五輪塔・硯・砥石などの石製品、キセル・銭貨・釘などの金属製品等が出土している。

これらの遺物の大半は、城下町期後期に属するものであるが、C区を中心に江戸時代（17世紀～19世紀）の遺物も出土している。

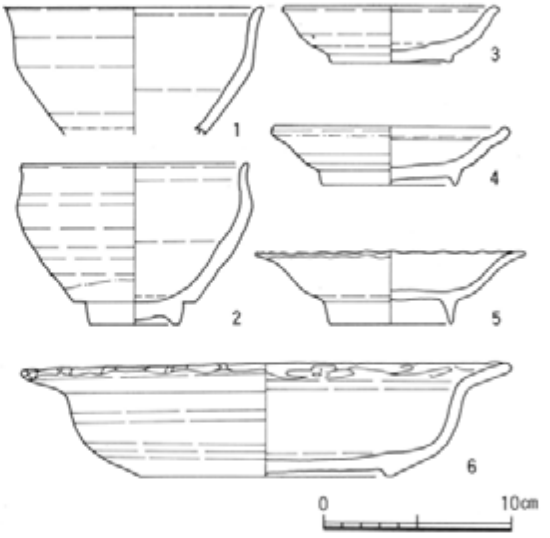
ここでは、城下町期後期の遺物として、中堀に相当すると考えられるC区ＳＤ14およびＳ区ＳＤ01の出土遺物を取りあげる。また江戸時代の遺物としては、C区ＳＸ05から一括して出土した遺物を取りあげる。以下はその代表的な出土遺物の概略である。

C区ＳＤ14（第３図１～５）　陶磁器類は瀬戸・美濃系、常滑系の製品が多く、備前系の擂鉢も出土している。１は鉄釉天目茶椀、２は銅緑釉天目茶椀、３・５は長石釉皿、４は透明釉皿で内面に鉄絵が施されている。これらはすべて瀬戸・美濃系の製品で、16世紀後半から17世紀中ごろに比定される。

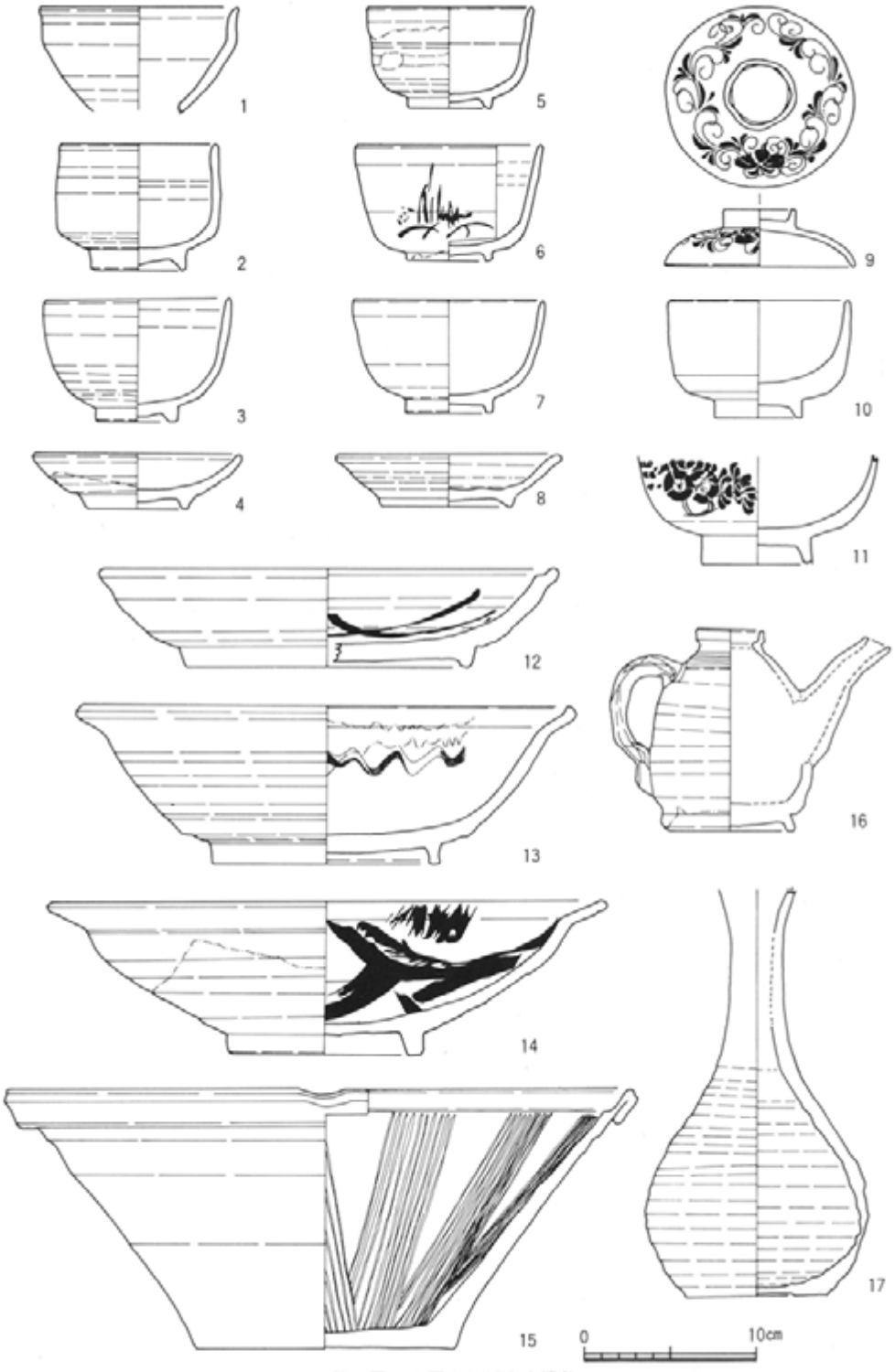
Ｓ区ＳＤ01（第３図６）　16世紀後半から17世紀初頭の、瀬戸・美濃系を中心とする陶磁器類が多く出土しており、土師器の皿や鍋もみられた。６は内面に草花文を施した黄瀬戸の鉢である。

C区ＳＸ05（第４図１～17）　瀬戸・美濃系、常滑系、唐津系等の陶磁器類が多く出土した他、木製品も出土している。１は鉄釉天目茶椀、２・３は鉄釉椀、５は腰錆茶椀、６・７は京焼椀、４は灰釉皿、８は長石釉皿である。また12・13は瀬戸・美濃系の鉢、14は唐津系の鉢、15は瀬戸・美濃系の擂鉢、16は鉄釉の水注、17は鉄釉の徳利である。木製品は漆器類・曲物・下駄などが出土し、９・10・11は漆器類である。９は外面が黒漆、内面が朱漆塗りの蓋で、外面に施された文様は朱漆で描かれている。10は内外面が朱漆塗りの椀である。また、11は外面が黒漆、内面が朱漆塗りの椀で、９と同様に外面に朱漆塗りの文様が描かれている。いずれも、17世紀後半から18世紀初頭にかけての遺物である。

（日比　宰）



第３図　C区・S区出土遺物



第４図　Ｃ区ＳＸ05出土遺物

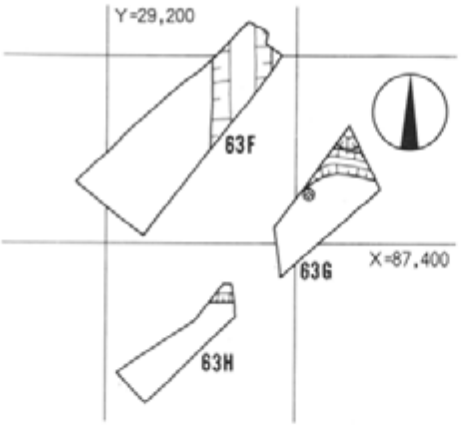
県道清洲・新川線関係

遺構

本年度の調査では、奈良・平安時代および城下町期の遺構が検出された。

奈良・平安時代の遺構として、E・N区で竪穴住居が検出された。調査区が狭いため全容が把握できないが、いづれも方形プランをなし、カマドは持たない。遺物は須恵器、土師器が若干出土したのみであった。G・H区でも明瞭な遺構こそ確認できなかったが、奈良時代の須恵器等が出土した。

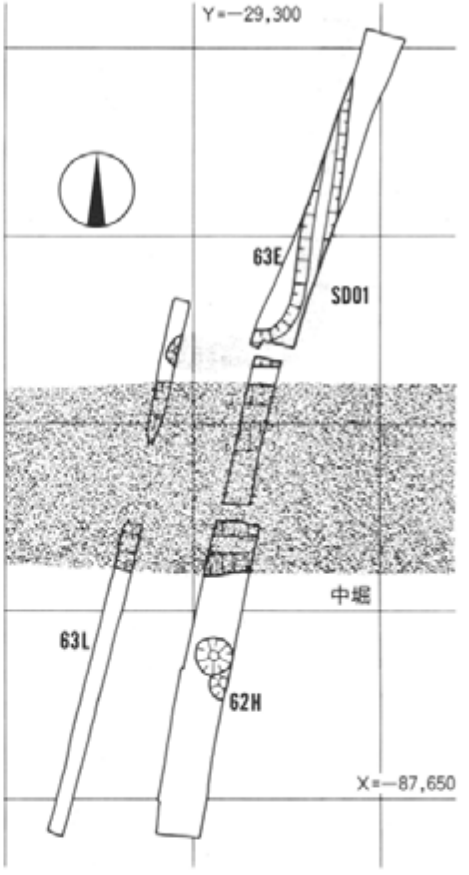
城下町期前期の遺構として、E・G・L区において、L字に屈曲する溝を2条検出した。いづれも幅約5m、深さ約1.5mを測るが、溝の内側では同時期の遺構は確認できなかった。このような溝はE区でも検出されており、屋敷地を方形に囲郭する溝の一部と考えられる。特に、E・L区で検出されたSD01は南北方向の長さが35m以上を測り、南端部で西の方向に屈曲する。屈曲した地点から約20mのところで溝は終結し、ここに土橋が存在したことが推定される。このSD01から陶磁器類の他、土師器皿が多量に出土した。



第5図　F・G・H区遺構図（1/1000）



E区　SD01土師器皿出土状態



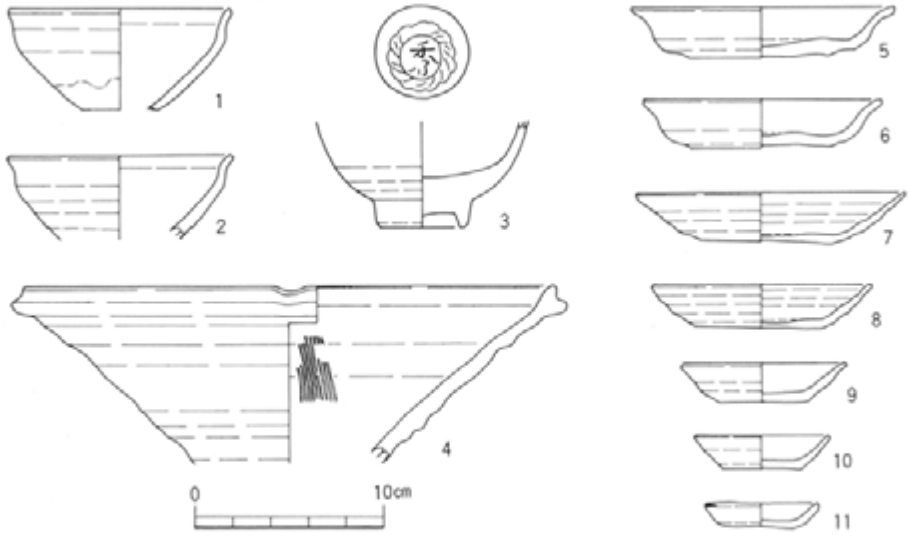
第6図　62H・63E・63L区遺構図（1/1000）

城下町期後期の遺構として、溝と井戸が検出できた。E・L区で確認された大溝は、62H区で検出した大溝SD01と同一のもので、「中堀」に比定される。幅は約25mを測り、16世紀末から17世紀初頭の陶磁器類等が出土した。

出土遺物

出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器や土師器、城下町期の陶磁器類や木製品等が存在する。このうち、E区SD01から出土した土師器皿を紹介する（第7図）。

土師器皿は主にSD01の西肩斜面から一括して出土した。出土状況から見て、SD01が埋覆する過程で、大部分の皿を上に向けた状態で廃棄されたものと思われる。この土師器皿は法量から大・小の2種に大別できるが、更に形態から4類に分類できる。A類はロクロ成形の土師器皿で、体部下部に稜を持ち、やや外反しながら立上がるものである（A1類－口径14.0～15.0cm・A2類－口径12.0～13.5cm）。B類はロクロ成形で、体部は直線的に立上がり、器厚がやや薄いものである（B1類－口径14.0～15.0cm・B2類－口径12.0～13.0cm）。C類はロクロ成形で、体部中央に稜をもち、口縁部でやや外反するものである（C1類－口径8.0～9.0cm・C2類－口径6.5～7.5cm）。D類は非ロクロ成形の土師器皿で、口縁部にナデ調整を施すものである（口径5.0～6.0cm）。今回一括して出土した土師器皿は321点を数えるが、その内訳はA類111点、B類31点、C類141点、D類38点である。これらの土師器皿は炭化物の付着がほとんど見られず、破損したものが少ないことなどから、短期間に使用・廃棄されたものと推測され、15世紀後半代に比定できる。　　（鈴木正貴）



第7図　E区SD01　出土遺物
1・2　鉄釉天目茶椀　　3　青磁椀　　4　擂鉢　　5～11　土師器皿

まとめ

今年度の調査成果を時期ごとに整理しておく。

Ⅰ期（古墳時代）　今年度の調査では、遺構・遺物はほとんど確認できなかった。特にG・H区で当該期の遺構・遺物が存在しないことは、古墳時代の集落跡の拡がりは62E区を北限とすることを示すであろう。

Ⅱ期（奈良・平安時代）　五条川東岸に位置する自然堤防上に集落跡等が営まれる時期である。検出された遺構は、主として奈良時代から平安時代前期の竪穴住居のみであり、昨年度確認したような墨書土器を伴う平安時代後期の遺構・遺物は検出できなかった。

Ⅳ－1期（城下町期前期）　織田信雄が大改修を実施する1586年以前の清須城下町の時期である。五条川東岸に位置するE～L区では、屋敷地を囲郭する幅5m前後を測る方形の溝の一部が、昨年度に引き続き検出された。これは、この地区に方形の居館跡群が集中して展開するものと見られ、前期の清須城下町の構造解明の一助となるだろう。ただし、今回の調査では、囲郭する溝に土橋を有する例の他には、方形区画内の構造は明らかにできなかった。また、C区北西部で自然流路の一部を確認し、62C区で検出した旧五条川と見られる自然流路は西に大きく蛇行するものと思われる。

Ⅳ－2期（城下町期後期）　大改修以降清須越までの城下町の時期であり、良好な遺構・遺物を確認した。特にC・E・L区では幅約25mの大溝が検出され、埋没状態・位置から『清須村古城絵図』に見られる「中堀」に比定できる。「中堀」は旧五条川と接続せず、川の水を直接利用していないことが推定される。また、C区では17世紀中頃の遺物も伴出することから、「清須越」以降も「中堀」が存続した可能性がある。更に、C区で検出した「中堀」とE・L区で検出した「中堀」は位置関係が若干ずれており、この間に「虎口」などが存在することが考えられる。また、R区では場所による土坑などの遺構の密度の差があり、空間構成を検証する上で一考を要する。

Ⅴ期（宿場町期）　C区において19世紀の井戸群を検出した。井戸は切り合いを持つものもみられ、旧美濃街道方向に並ぶが、C区の南で19世紀の遺構が稀薄となり、当該期の宿場町の南端部に位置するものと考えられる。また、17～18世紀の比較的規模の大きい遺構群が存在するが、その意味付けは今後の課題である。

最後に、今年度の調査で新たに確認された地震痕について触れる。地震痕は切り合い関係などから、天正地震（1586）によるものと濃尾地震（1891）によるものが存在する。特に前者は、大改修の直前に発生したことから城下町期の前期と後期の遺構群を区分する重要なカギとなる一方、清須城下町に与えた地震の影響も問題となるだろう。[注]（鈴木正貴）

注　森勇一・鈴木正貴　「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」　『活断層研究第7号』1989

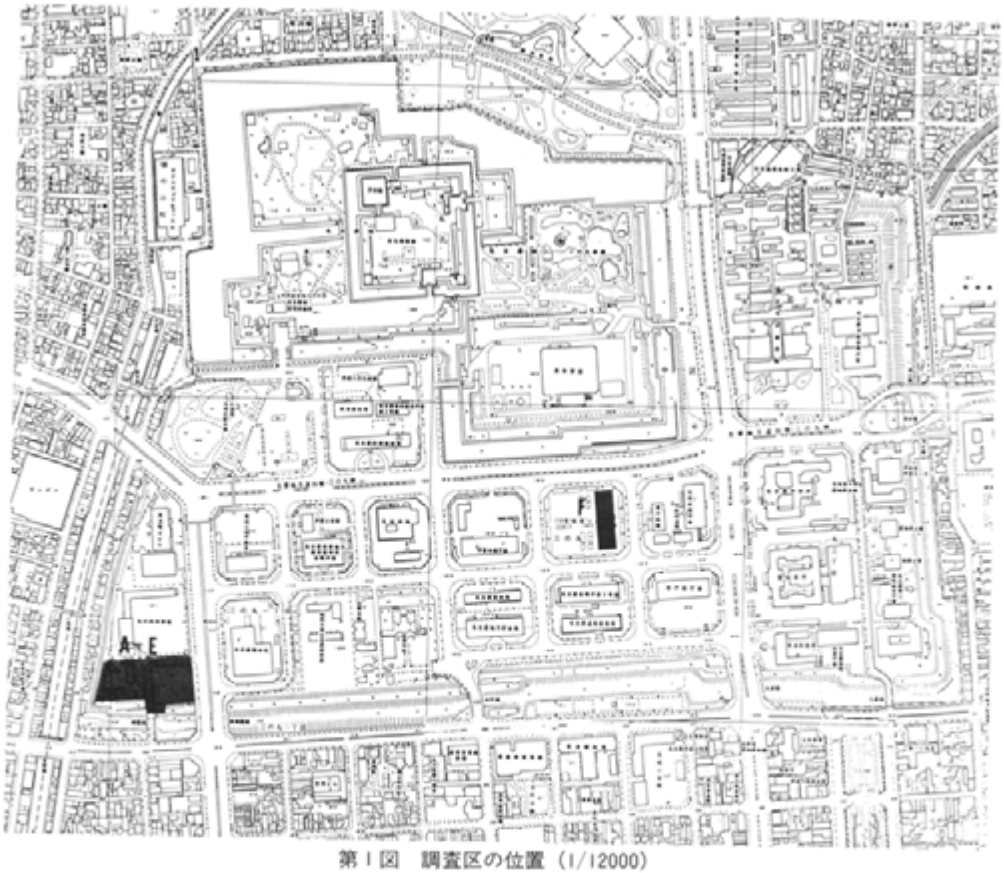
名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

立地と沿革

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の西北端に位置し、標高13m程を測る。城の外堀に囲まれたこの中区三の丸一帯は、現在では、官庁と公共施設の街となっているが、明治維新以前においては、成瀬氏、竹腰氏ら、尾張藩の重臣達の上屋敷（役宅）が立ち並ぶ武家屋敷地を形成していた。

この一帯は、慶長年間の名古屋築城以前においても、藤原氏一族の荘園としての「那古野庄」の名が文献にみえ、戦国時代では、織田信長の生誕地ともいわれる「那古野城」の故地とされている。また、考古学的にも、天守閣再建工事の際に、その基礎部分から、弥生時代中期を中心とする貝層が発見されるなど、三の丸遺跡は、単に近世のみならず、これらの時代を通じた遺跡と考えることができる。



第1図　調査区の位置（1/12000）

調査の概要

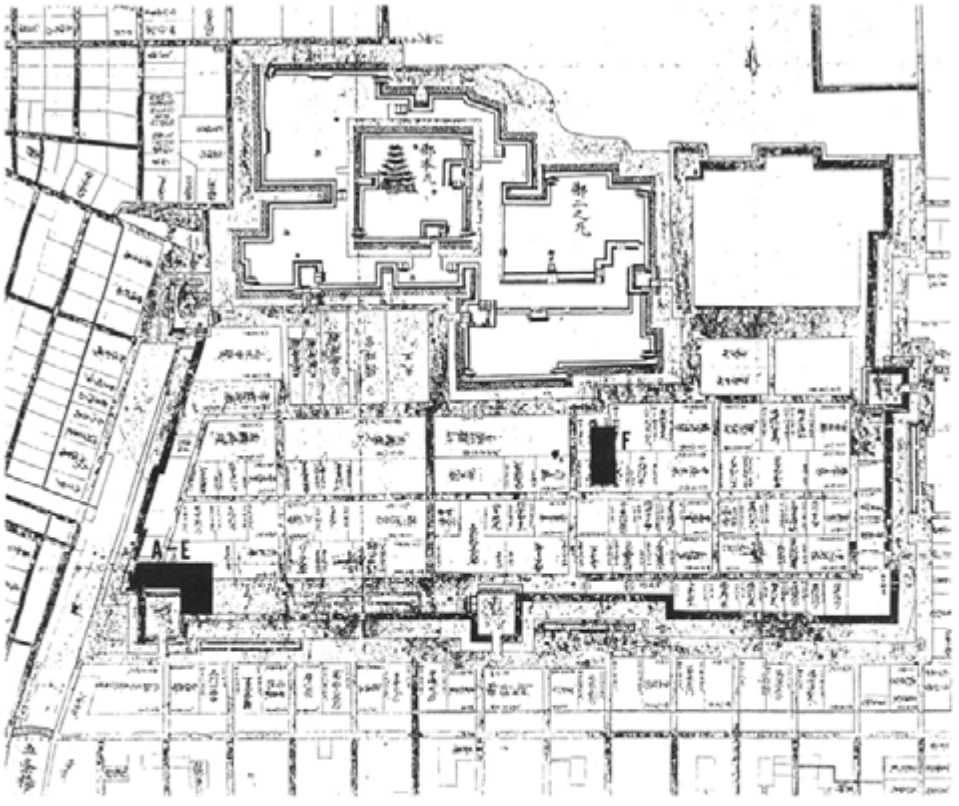
昭和63年度の調査は、市立丸の内中学に南接する愛知県新文化会館（図書館）建設用地7600㎡、（A～E区）及び、名城東小公園内の、名古屋第一地方合同庁舎建設用地3100㎡（F区）の2地点について実施した。このうち、新文化会館用地については、既に県教育委員会が昨年度1400㎡程を調査しているが、今回は、この部分も含め概要を報告する。

調査の結果、予期された通り、弥生～近世の遺構、遺物が確認されたが、それらは、概ね、Ⅰ期（弥生～古墳時代）、Ⅱ期（奈良～平安時代）、Ⅲ期（室町～安土・桃山時代）、Ⅳ期（江戸時代）の四期に区分することが可能であった。

調査地点のうち、A～E区では、Ⅰ期の竪穴住居十数軒の他、墳丘墓も確認され、それに続くⅡ期では、数十軒の竪穴住居と大型の掘立柱建物1棟が検出された。

また、F区では、Ⅰ～Ⅱ期については、若干の遺物がみられたのみであったが、Ⅲ期においては、幅6.5m、深さ3mにも及ぶ大溝を確認することができた。

Ⅳ期については、両地点とも、武家屋敷に伴なう井戸、地下室、土坑等の遺構と多くの遺物が出土し、「名古屋城三の丸」を解明する上で、貴重な資料となった。（梅本博志）



第2図　尾府名古屋図（蓬左文庫蔵一部分）

A～E区の調査の概要

Ⅰ期（弥生～古墳時代）

今年度の三の丸地区遺跡では、下層において弥生時代から古墳時代にかけての遺構を検出した。これらは継続的に営まれた生活の痕跡では無く、断絶期間を挟んで大きく二時期に別れた。堆積土は黒褐色を基調とするが、これをそれぞれの文化面で検出することは出来なかった。

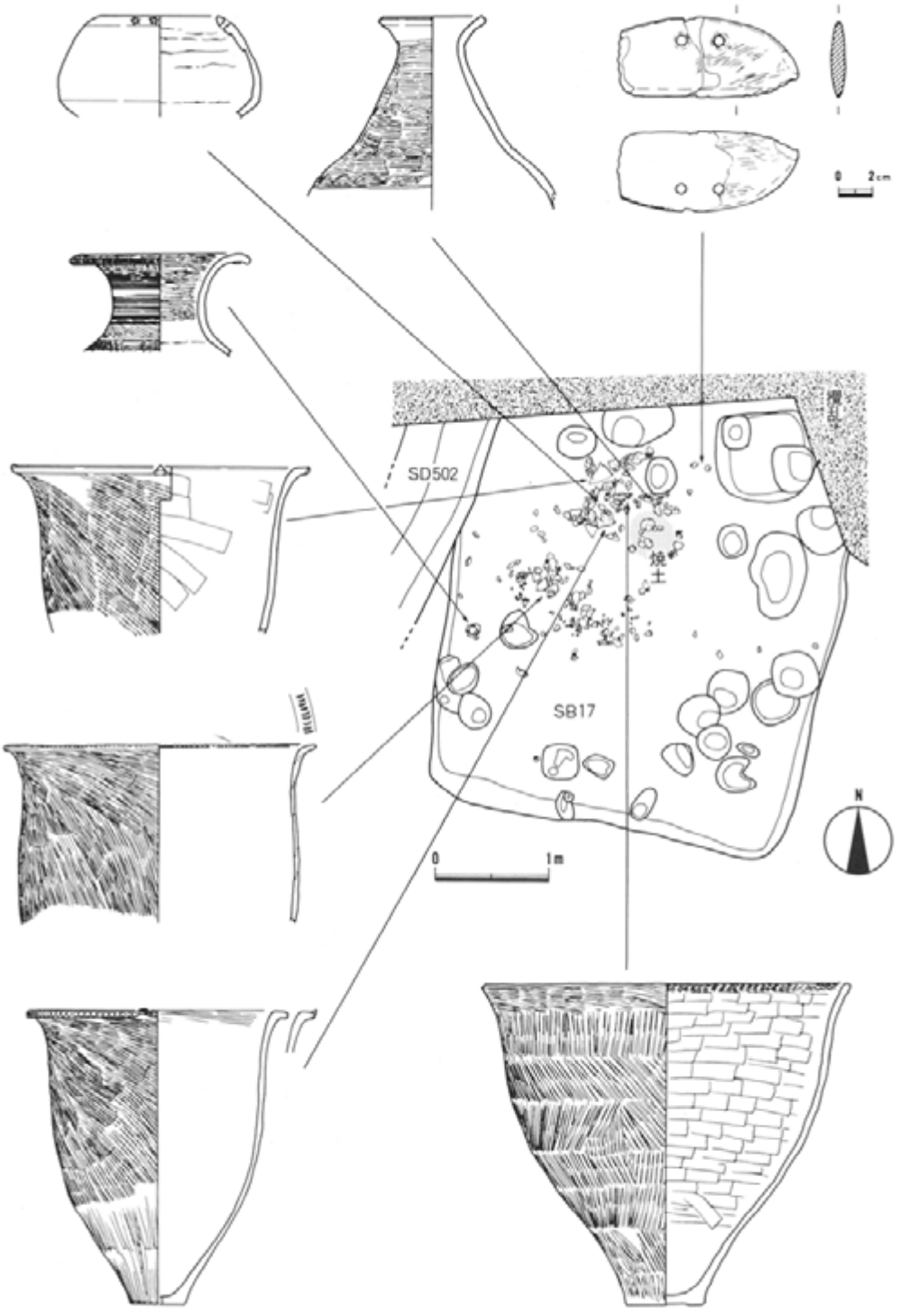
弥生時代の遺構は、主要遺構配置図の如く、竪穴住居５軒他、溝、土坑等を検出した。これらに伴い、また一部包含層中から弥生時代中期の壺、甕、石包丁等が出土した。ＳＢ17は、弥生時代の遺構の中で最も良好な状態で遺物が出土した住居である。中央やや北寄りに炉跡と思われる浅い窪みが認められ、その脇の床面直上の位置から無頸壺、太頸壺、長頸壺、条痕紋調整の甕、石包丁等が一括して出土した。時期としては、弥生時代中期中葉（貝田町古期）にあたるものと思われる。

古墳時代の遺構は、主要遺構配置図の如く、墓の可能性が考えられる。溝による方形区画３基、竪穴住居８軒の他、溝、土坑等を検出した。これらに伴い、また包含層中から、弥生時代後期末から古墳時代前半にかけての壺、甕、台付甕、高杯及びミニチュア製品等が出土した。

今回調査を行なった名古屋城三の丸地区は、名古屋台地（熱田台地）の北西端に位置するが、その出土遺物には周辺の各地域に於けるいくつかの特徴が窺える。これらの資料は、当該期の人的、物的交流を考える上で、貴重な資料となるであろう。　　（松田　訓）



第３図　主要遺構の配置（Ⅰ期）



第４図　Ａ区ＳＢ17出土状態及び実測図（土器はすべて1/6縮尺）

II期（奈良～平安時代）

三の丸遺跡における奈良・平安時代の遺構面は、調査区北部においては近世以降のかく乱をかなり受けていたが、御園門前の広場及び道路の下となった調査区南西部は黒褐色の包含層が厚く堆積し、残存状況は比較的良かった。

遺構　この時期の主な遺構としては掘立柱建物１棟、竪穴住居数十軒があげられる。

掘立柱建物は調査区南端にあり、一辺約70cmの隅丸方形の柱穴が柱間約180cmで東西３間、南北５間に並ぶ。時期は柱穴内出土遺物から奈良時代のものと考えられる。

竪穴住居は一辺３ｍ～６ｍの正方形で方位は北西にふっているものが大半である。カマドが確認できたものは少ないが、A区ＳＢ115では北壁中央にカマドをもうけ、土師器甕を逆に伏せ底部を台として使用した例もある。時期としては８世紀後半～９世紀前半ころのものがもっとも多い。

遺物　遺物は包含層の残りが比較的良かったせいか、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器などが多数出土した。また住居址内や土坑内より、いくつかの一括資料を得ることができた。

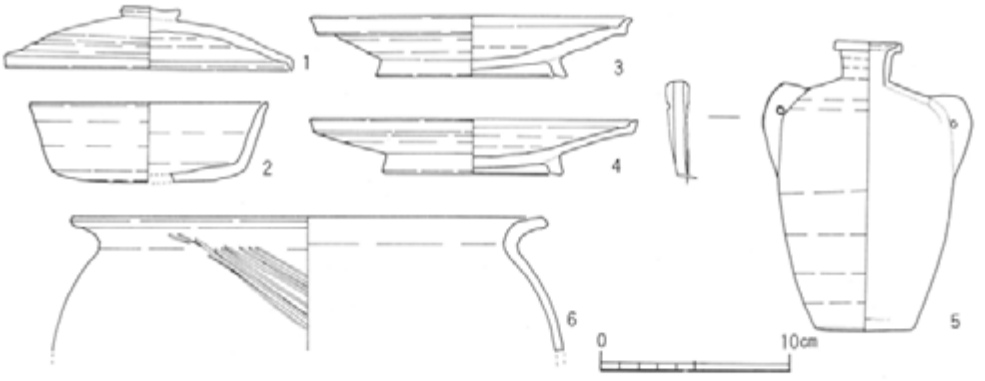
遺物のなかでは須恵器がもっとも多く、杯蓋・杯身・椀・盤など供膳形態を中心に、壺・瓶・甕が若干出土している。土師器は甕が多数出土しているが、その他の器種は甑片がわずかに見られるのみである。包含層中からは７世紀に遡る遺物もみられるが、遺構に伴なって出てくるのは８世紀になってからである。８世紀前半の遺物はあまり多くないが、８世紀後葉から９世紀前葉にかけてもっともたくさん出土している。この時期のまとまった一括資料としてA区ＳＢ11、D区ＳＢ02・ＳＫ166などがあげられる。ＳＢ11からは、ほとんど完形の灰釉陶器双耳瓶（第６図－５）が発見された。双耳瓶は口径3.5cm、器高15cmで、耳は面とりされ、上にあがり気味である。体部はやや茶褐色を呈し、肩から前面にかけて濃緑の灰釉がかかる。今回のように双耳瓶が住居内から完形で発見されることはほとんどなく、たいへん珍しい例である。時期的には０－10号窯期に含まれるものと思われる。平安時代になると灰釉陶器・緑釉陶器が見られるようになる。ＳＢ104内の土坑からはＫ－90号窯期の灰釉椀・皿・長頸瓶などがまとまって出土しており、消費地における灰釉陶器を考えるのに良好な例となろう。緑釉陶器は調査区東部の包含層中より、多く出土している。器種としては椀・皿・壺類があるが、なかには陰刻花文を施した段皿もある。

三の丸遺跡は猿投窯という窯業の一大中心地を控えた尾張における集落址の数少ない調査例として、今まで不明確であった消費遺跡での土器の様相を明らかにするうえで、貴重な資料となろう。

（城ヶ谷和広）



第5図　主要遺構の配置（II期）



第6図　A区　SBII出土土器



D区　堀立柱建物



A区　SBII土器出土状態

Ⅳ期（江戸時代）

遺構　Ⅳ期の遺構は、調査区の西寄りの地区と北東の地区へ集中して見られ、土塁沿いの南東の地区では、希薄である。『金城温故録』や城内絵図によれば、調査区はほぼ江戸時代を通じて、中条・大道寺両家の屋敷地と広場に相当しており、遺構の集中密度程度も屋敷地と広場の位置とほぼ合致する。また、屋敷地内のＳＫ147（Ａ区）より、「大道寺」と墨書された蓋（第８図－12）が出土しており、考古資料からも大道寺家の所在が確定できるものと思われる。

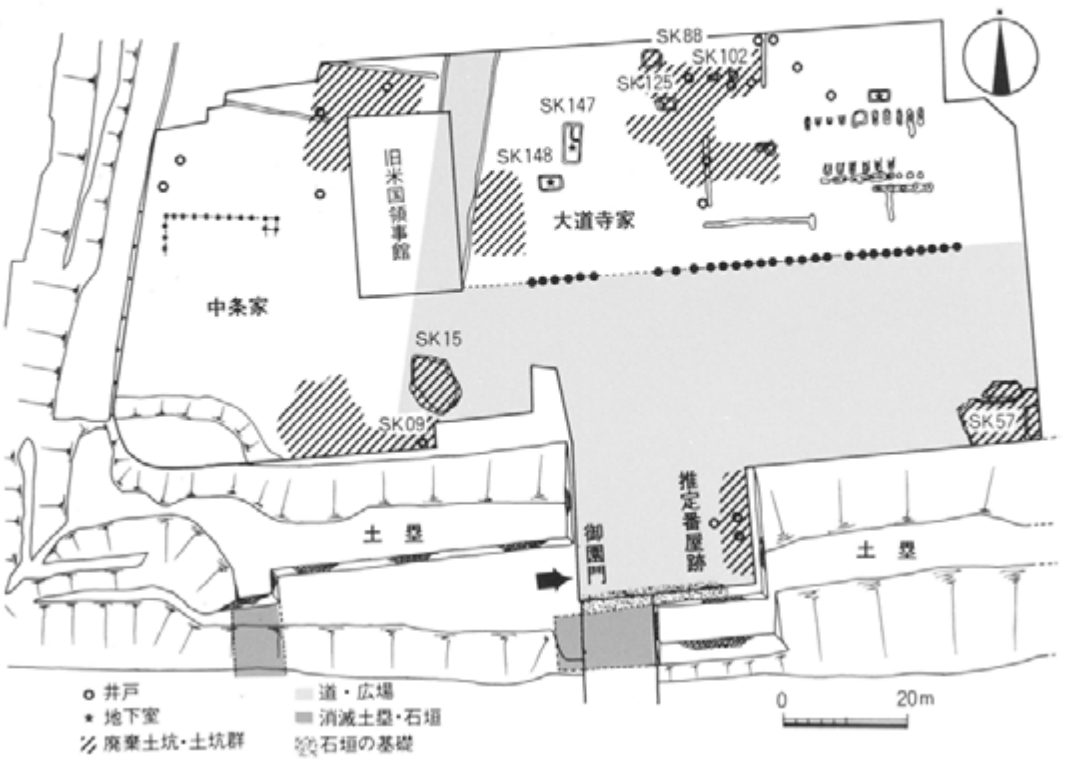
集中する遺構の中で特に著しいのは土坑であり、この大半が廃棄土坑である。中には、規模等から地下室を転用したと考えられるものがある。

調査区西・南側の土塁、石垣は、明治以降かなり改削・改築されているが、今回の調査で改削・改築前の土塁、石垣を知りえた。調査区南西隅では、土塁の延長が確認され、土塁のコーナーは城内側に張り出していることが判明した。調査区南中央の石垣下に、基礎と考えられる板築状の埋土をもつ土坑を確認した。その土坑は、南の石垣で現存の石垣よりさらに西へ延びており、当時の石垣が現存のものより西へ延びていたことが判った。したがって、御園門の位置は調査区内で確認できなかったが、城内絵図にある様に東西方向へ開口していたことが判明した。

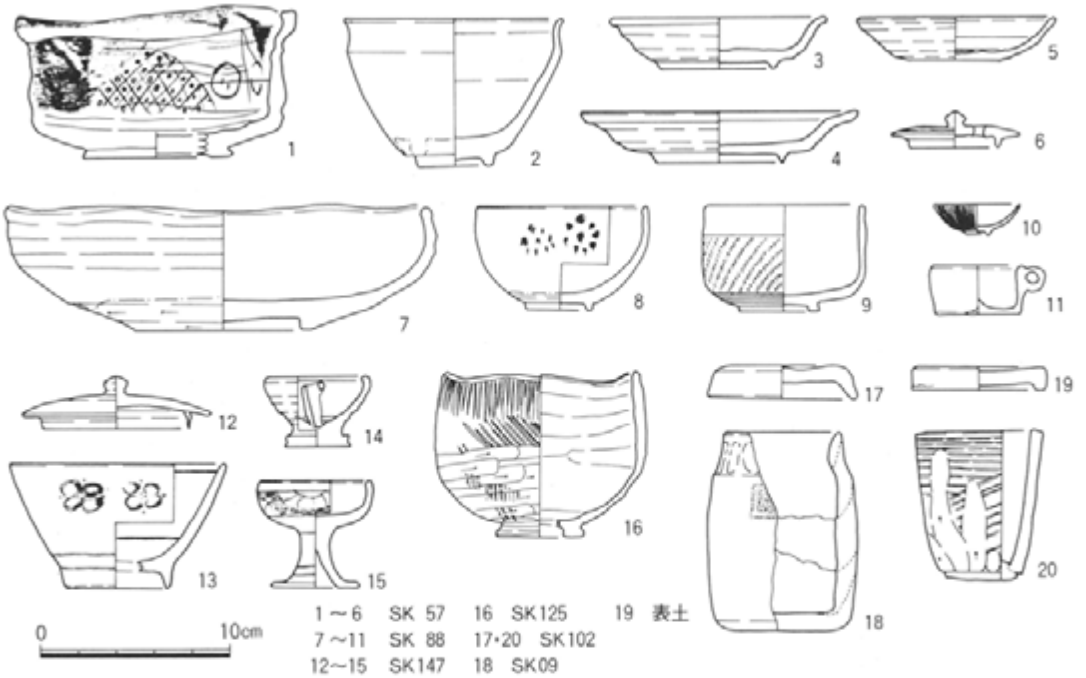
遺物　遺物は、江戸時代を通じて見られ、全体的に陶器の占める割合が高い。遺物数はコンテ数にして約1000箱に及ぶ。そのほとんどが廃棄土坑からの出土である。

１～６は、ＳＫ57（Ｅ区）出土。１は織部の椀。２は鉄釉の椀、天目茶椀。３は長石釉の皿。４は総織部の皿。５は無釉の皿。６は長石釉の香炉の蓋。これらは17世紀前半のものである。７～11はＳＫ88（Ｄ区）出土。７は灰釉の平鉢で、底部に「延享五年　　四　料理間附　　辰七月十九日納」と墨書される。８は、灰釉の椀、梅文湯呑。９はサビ釉と鉄釉の掛け分けの椀、鎧湯呑。10は磁器の小椀、紅皿。11は灰釉の小鉢、餌鉢。これらは18世紀後半から19世紀にかけてのものである。12～15はＳＫ147（Ａ区）出土。12は鉄釉の蓋で内面に「大道寺　　手□□附　　己七月十九日」と墨書される。13は染付けの椀、広東椀。14は秉燭。15は磁器で、仏飯具。これらは19世紀中頃のものである。16はＳＫ125出土で、手捏ねの椀、赤楽茶椀。17～20は焼き塩壺。18には「ミナト藤左ェ門」の刻印がある。17と18、19と20のセット関係が予想される。

全体的な傾向を見ると、一般的な日用陶磁器類と共に、１、６、16の嗜好品も見られ、高級武士の生活様相が伺える。　　（佐藤公保）



第７図　主要遺構の配置（Ⅳ期）



1～6　SK 57　16　SK125　19　表土
7～11　SK 88　17･20　SK102
12～15　SK147　18　SK09

第８図　Ⅲ期の遺物

F区の調査の概要

III期（室町～安土桃山時代）

遺構　名古屋城築城時の整地層下から、調査区北側を中心に、溝、井戸、掘立柱建物等が確認された。各遺構は、切り合い関係から大きく前・後期の2時期にわかれる。

前期の遺構として、ほぼ南北方向から東西方向へ走り、そして再び南北方向へ鍵手状に屈曲する溝（SD53、64）とその溝に南北方向のみ平走する溝（SD61）等がある。共に幅3m深さ1.5m～2mを測る。

後期の遺構は、井戸と溝（SD51、52）等がある。中でもSD51は幅5～6.5m、深さ3mを測る大溝である。この大溝は、幅5mの薬研状であったものを、巾6.5mの箱状に改削しており、箱状の溝底に薬研状の溝の痕跡を確認した。

『金城温故録』によると、名古屋城築城以前、大永年間（1521～27年）頃、名古屋城二の丸を中心とした地区に那古野城が築かれており、後期の遺構は調査区の位置、遺構の規模、後述する遺構内出土の遺物の時期から「那古野城」に伴う遺構の可能性が高い。中でもSD51は、その規模から堀に相当するものである。

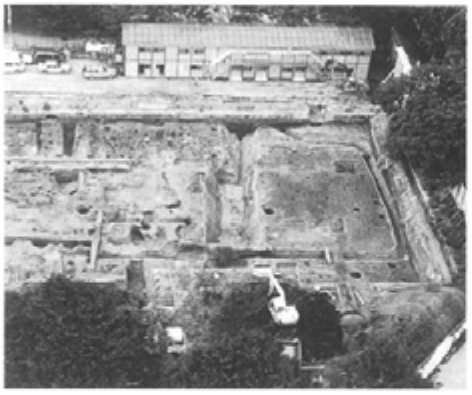
前期の遺構である鍵手状に屈曲する溝（SD53、64）は、その形状により屋敷地を画する溝と考えられる。従って、周辺に那古野城築城前の居館址の存在が想定される。

遺物　出土遺物は、瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の甕、中国陶磁、土師器等が見られ、全陶磁器の中でも瀬戸美濃産の施釉陶器の占める割合は非常に高い。

1～4は、前期の遺構であるSD61より出土した。1は鉄釉の椀で、体部下位から底部は無釉である。天目茶椀。2は無釉の皿で、内面に螺旋状の沈線が施される。3は口縁に鉄釉がほどこされた縁釉皿。内面全体にタール状のものが付着する。4は折縁の鉢である。灰釉が施される。これらは15世紀後半の遺物と考えられる。

5～12は、後期の遺構であるSD51より出土した。5、6は鉄釉の椀で、体部下位から底部にかけてサビ釉が施される。天目茶椀。7は灰釉皿。内底面と高台内は無釉である。丸皿。8は鉄釉皿で、底部は無釉であり、碁笥底である。9は灰釉皿。内底面のみ無釉である。内禿皿。釉は白濁している。10は無釉皿で内面に同心円状に沈線が施される。11は擂鉢。全面にサビ釉を施す。12は土師器鍋。内面上部に縦方向の吊り手がつく。内耳鍋。これらの遺物は16世紀初めから中頃の遺物と考えられる。

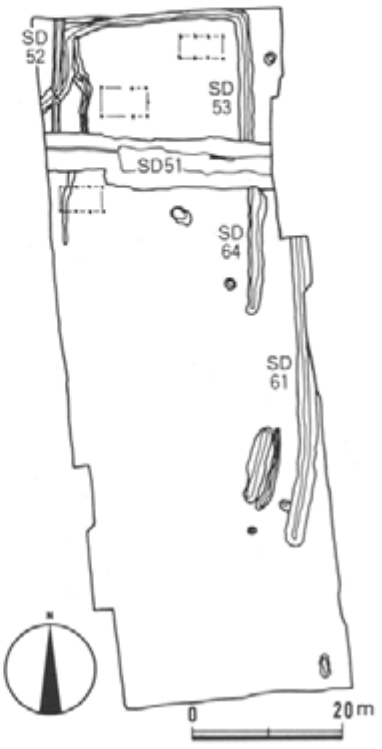
（佐藤公保）



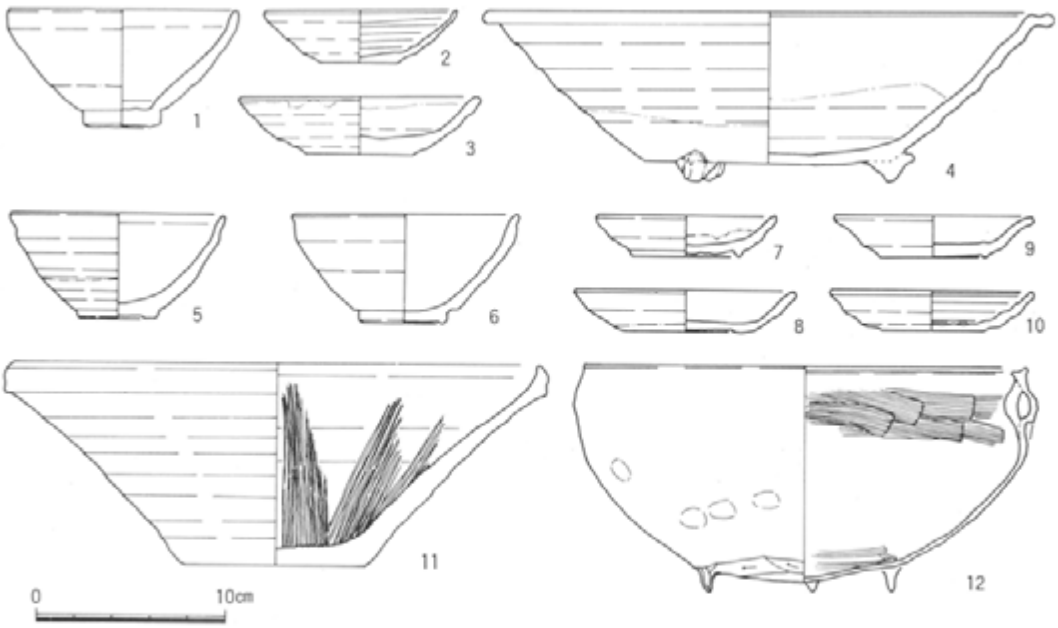
調査区北部の中世遺構群



大溝　ＳＤ51



第９図　主要遺構の配置（Ⅲ期）

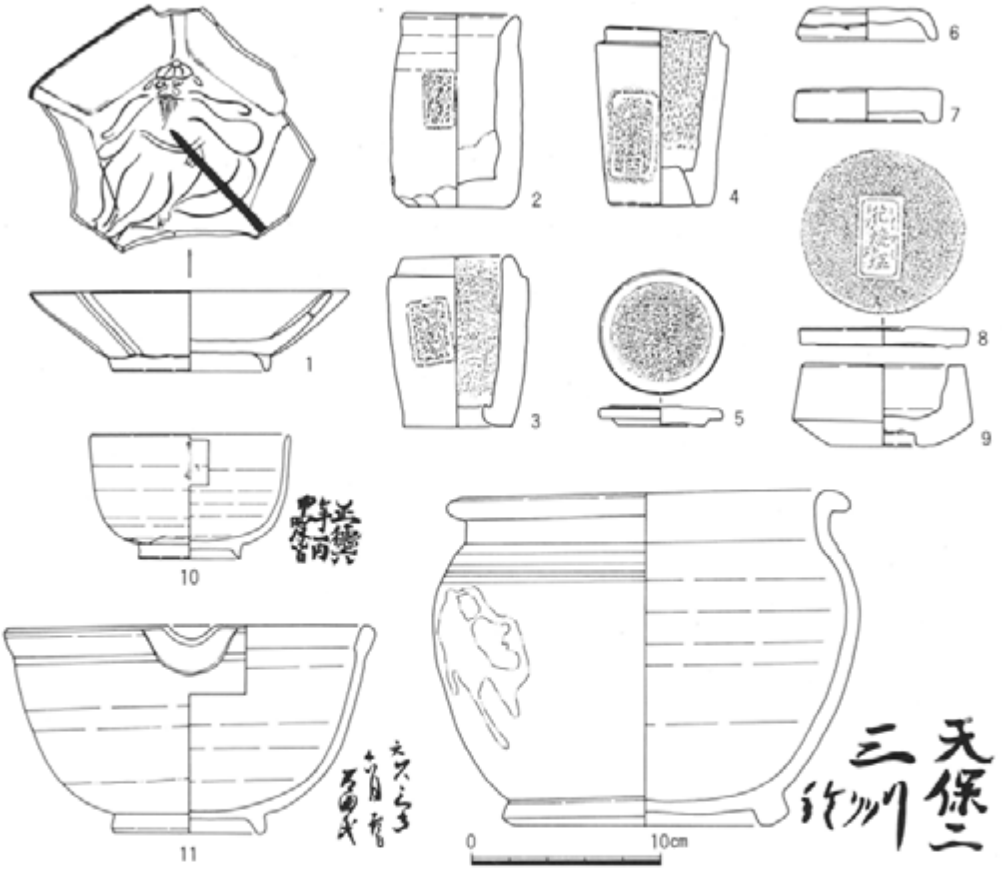


第10図　Ⅲ期の遺物　　1～4　ＳＤ61　　5～12　ＳＤ51

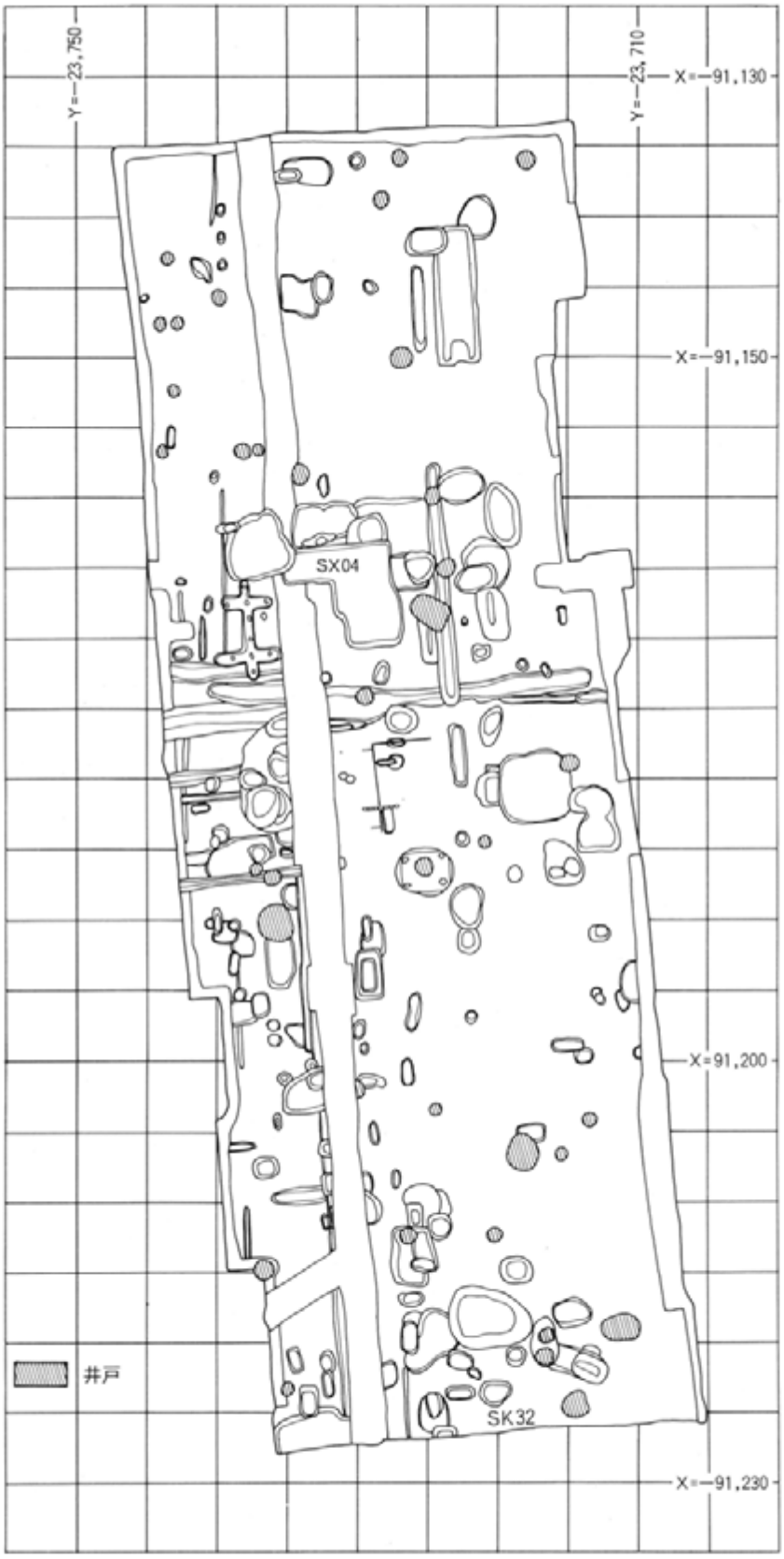
Ⅳ期（江戸時代）

遺構　検出した遺構は、建物礎石、柱穴、井戸、溝、地下室、廃棄土坑である。『尾府名古屋図』によれば、調査区は横井氏、下条氏、小山氏、生駒氏の屋敷にかかっており、遺構は各屋敷地に伴うものである。発掘区の西側と南側では廃棄土坑が集中しており、何度もくりかえし掘られた土坑内からは膨大な量の陶磁器類が出土した。

遺物　出土した遺物の大部分は陶磁器類で、キセル、釘の金属製品、硯、印鑑の石製品や織部瓦、人形、建物や道具類を模した小型製品等が出土している。陶磁器類の多くは瀬戸・美濃産であるが、陶器椀では、信楽など畿内産の製品といわれる肥前産の製品もみられる。第11図の１はＳＫ32出土の志野織部向付、２～４・９は焼塩壺で２は「天下一堺ミナト□藤左衛門」、３は「御壺塩師□堺湊伊織」、４は「難波浄因」の刻印がある。５～８は焼塩壺の蓋で、８には「イツミ□花焼塩□シタ」の刻印がある。８と９はセット関係が予想される。10は正徳六年（1716）銘のある灰釉碗、11はＳＸ04出土の文久三年（1863）銘のある灰釉片口鉢、12は天保二年（1831）銘のある鉄釉甕である。　（小澤一弘）



第11図　Ⅳ期の遺物



第12図　F区遺構配置図（1/500）

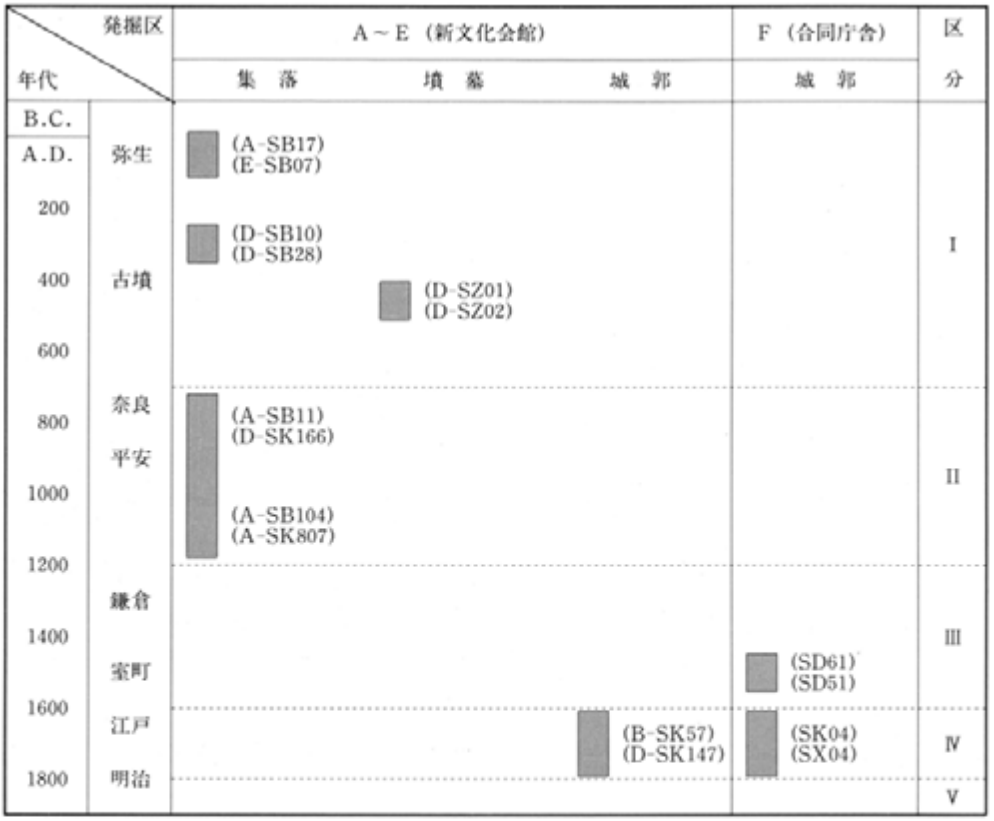
まとめ

1．A～E区で確認されたⅠ期前半（弥生時代中期）の住居群は、高蔵遺跡、古沢町遺跡等の資料から、ある程度概要が知られていた名古屋台地南半に対し、出土例が少なく、不明な点が多かった台地北部の様相を知る上での良好な資料となるものと考えられる。

2．Ⅰ期後半（古墳時代前半）の墳丘墓群は、ＳＺ02周溝の出土土器等から、５Ｃ前半を中心とする時期に形成されたと考えられるが、その形状は、東区片山神社遺跡検出例等と同様、基本的には「方形周溝墓」と相違するものではなく、在地における墓制のあり方の一端を示すものと考えられる。また、付近の包含層中からは、須恵質の円筒埴輪片も出土しており、付近には、これに続く時期の古墳が存在する可能性もある。

3．Ⅱ期の集落の性格は、明らかでないが、大形の柱穴を有する掘立柱建物の存在、あるいは、灰釉双耳瓶、陰刻花文を有する緑釉陶器などの出土品から、寺あるいは、地方の官衙といた様な何らかの公的施設の存在を推定し得るかもしれない。

4．F区では、「那古野城」の堀に比定される大溝が確認されたが、これに重複する形でそれ以前の、「居館」を区画すると思われる溝を検出することができた。文献によれば、この



第１表　三の丸遺跡の遺構の変遷

周辺を含むとされる「那古野庄」は、15C後半までは存続していたようであり、それとの関係も注目されるところである。

5．Ⅳ期の遺構については、A～E区で2軒分、F区では4軒分の屋敷地を検出し得たが、これは、古絵図等の記載とほぼ一致するものである。屋敷地内の建物は、礎石の大半が失われている為、明らかにはし難いが、井戸、地下室、廃棄土坑の分布等から、ある程度の配置は、復元し得ると考えられる。

6．名古屋城の三の丸一帯は、既に、官庁街としての整備が進んでいるため、遺跡そのものがほとんど残存していないのではないかとも考えられてきた。しかし、今回の調査では既設の建物の基礎等の攪乱部分を除き、名古屋台地上では、まれにみる良好な状態で、弥生～近世に至るまでの遺構が残されていることが明らかとなった。遺跡としての「三の丸」は、風致地区としての、ゆとりある空間構成が幸いし、台地上に残された数少ない保存状態のよい遺跡ということができる。

（梅本博志）



A・C・D区完掘状態

松河戸遺跡

調査の経過

松河戸遺跡は、春日井市の南東、庄内川と地蔵川に挟まれた沖積地に立地する。松河戸町一帯は近年に至るまで条里制遺構が広範囲に展開しており、名古屋市北区の庄内川流域より大規模に展開する条里制遺構の一部として捉えられてきた。醍醐寺文書の安食荘の記載とこれらの条理制遺構が関連づけられ、文献史学・歴史地理学によって、「古代安食荘」比定地とされてきた地域でもある。このことより、条里制遺構の形成過程の究明を調査の重要課題の一つとし、昭和62年度より環状２号線建設に伴う発掘調査として実施されてきた。

昭和62年度の調査の結果、現水田下に複数の水田面が存在することをセクションにより確認し、最下層の水田は15世紀代にさかのぼり得ることが明らかとなった。また、昭和14年地籍図では水田化されている場所でも、最下層の水田では、水田化されていない微高地が存在することが明らかとなった。この微高地では、縄文～古墳時代・中世の各時代の遺構が検出され、微高地の利用・開発といった新たな課題が与えられるに至った。なお、微高地の縁辺部には谷状の落ち込みがあり、^{14}Ｃ年代測定で3,120±120y. B. P. の年代を示す層火山灰が検出された。この点で、自然科学的にも、微高地・浅谷の成因を解明するうえで興味深い遺跡となった。

調査の概要

本年度は、９調査区（63Ａ～Ｌ区）を設定して実施した。63Ａ・Ｂ区は近世の遺構、63Ｃ～Ｌ区は条里地割に基づく中・近世の水田が検出された。

（後藤浩一）





第１図　松河戸遺跡発掘調査区位置図（1/6000）

A区　2条の溝と数基の土坑を検出した。SD01は「L」字状に曲がり西壁断面で幅3m・深さ80cmをはかる。調査区断面より、南部が高く、溝のコーナー付近の埋土内（有機質土層中）より昆虫が見つかった。この分析結果と地形から、SD01は調査区南隅から途中屈曲して、西へ向かってゆるやかな水流があったことが想定される。遺物は内耳鍋・土師器・銅貨・キセル雁首（がんくび）などが出土し、江戸時代初頭頃と思われる。溝の性格については、調査区南100mに白山神社があり、時代不詳の近世の村絵図にも載っていることから、あるいはこの神社との関連も考えられる。SD02は、SD01の東で平行して検出された。幅50cm・深さ20cm程である。遺物はSD01と同じく土師器片やキセル雁首などが出土している。

B区　井戸・溝・土坑・旧河道などを検出した。調査区南端で井戸を2基（SE01・SE02）検出した。ともに井戸枠は石組であり、平面形態は井戸枠が掘形の一方に片寄っている。SE01は東側半分のみ石組が残存しており、西側半分では石組がなく素掘りのままの状態であった。また、検出面より下へ1m程井戸枠の石がなく、SE02と近接して構築されていることから、SE02を作るために石を抜いたことも考えられる。埋土内の遺物は少ないが、A区SD01と近い時期と思われる。調査区中央南寄りで旧河道（NR01）を検出した。埋土がかなり荒い粗砂であることなどから恒常的に流れていたのではなく、東方100m離れた所にある庄内川の氾濫によって一時的に堆積したものと考えられる。また、調査区断面より、かなり上部から切りこんでいることがうかがえ、比較的新しい時期（少なくとも近世）まで庄内川の氾濫によって河道となっていたものと想定される。河道内より縄文土器・弥生土器・須恵器などが出土している。

（野口哲也）



A区　全景（北から）



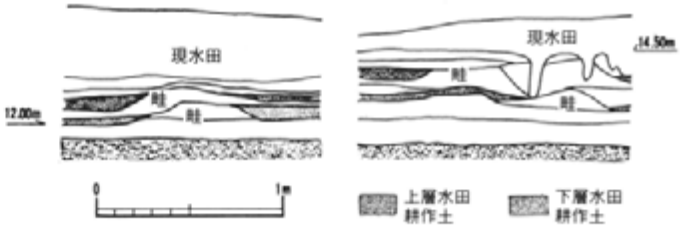
B区　南半（東から）

C～L区　先述した昭和62年度の調査成果を踏まえ、本年度では次の２点を課題として発掘調査を実施した。①現水田下の各々の水田の存続時期をおさえること。②本年度の調査区周辺は条里制遺構が残っており、現水田の畦畔と比較対応させながら条里地割の変遷をたどること。このため、現水田下の水田跡を層位的におさえ、順次掘り下げて調査を行うことにした。

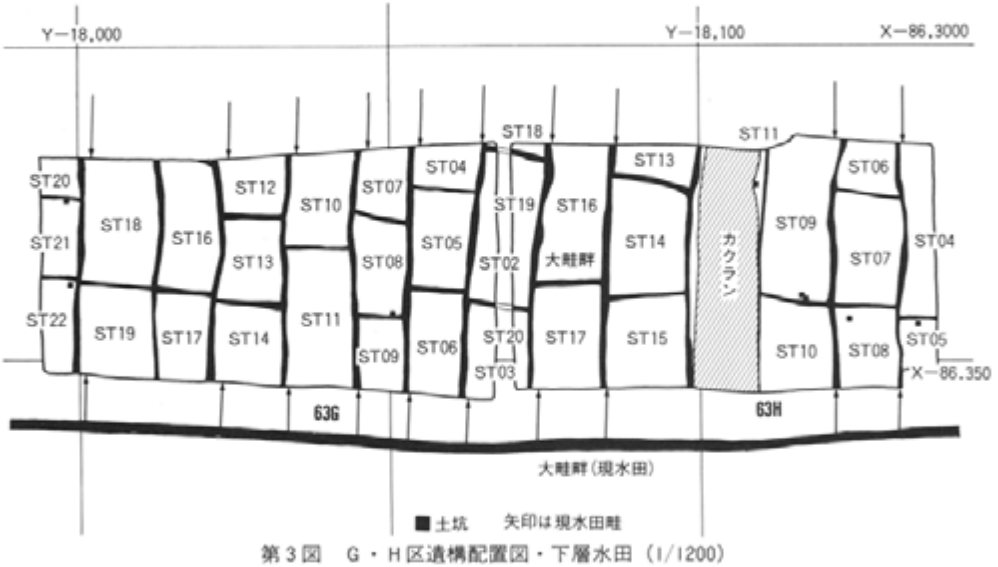
層位・時期：現水田下に２面の水田が確認された（第２図）。以下、上層水田、下層水田と区別して説明する。下層水田の遺構検出面の標高は、G区で約12m、K区で約14mと「東高西低」を示す。出土遺物により、下層水田の時期は15世紀後半～17世紀初頭、上層水田は17世紀中葉～19世紀中葉の年代が考えられる。

条里地割：調査区周辺は、ほぼ一町（約109m）四方の方格地割の水田が展開する（第１・４図）。D・E・F区東半とG・H・L区では南北方向の長地型の地割、D・E・F区西半とC・I・J・K区は東西方向の長地型の地割を示している。

次に、現水田の地割と下層水田の地割を比較する（第３・４図）。両者には若干のズレはあるものの、基本的な差異は認められない。この点は、上層水田と下層水田の地割にも認められ、下層水田の地割は現代に至るまで基本的に受け継げられていたことが確認された。なお、条里地割を区画する畦畔が上層水田と下層水田で



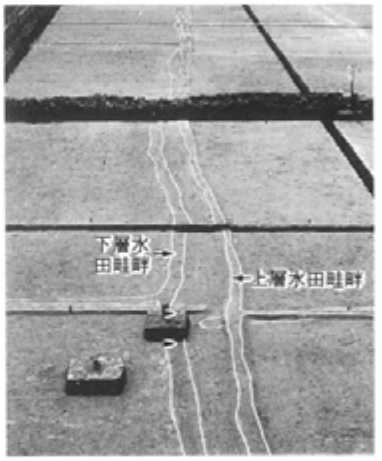
第２図　G・K区東西セクション（左G区，右K区）



第３図　G・H区遺構配置図・下層水田（1/1200）

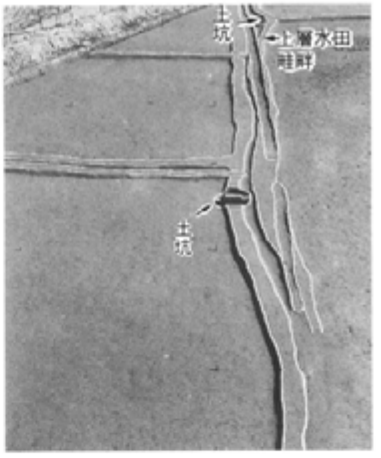
は大きく異なる箇所が一部認められた。

溝：Ｊ区東端で大畦畔（坪界）に沿って南北方向の溝を検出した。調査により２面確認され、上層・下層の水田に伴なう用水路と考えられる。上層溝は幅2.65ｍ・深さ40cmで、下層溝は幅1.85ｍ、深さ20cmを測る。溝の比高差は北方向に低く水は北流したものと考えられる。なおＨ区において大畦畔を検出したが、溝は確認されなかった。溝を伴なわない大畦畔は、他の畦畔と規模において格差は認められない。この点は、現水田においても同じである。



Ｃ区南半（東より）畦畔の重複

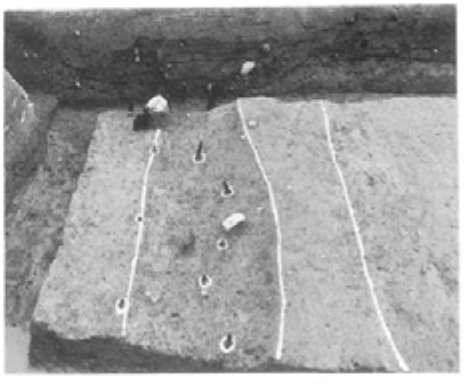
次に、参考のため、調査区周辺の現水田に伴なう水路系統を説明しておく（第４図）。Ｇ・Ｈ・Ｊ区南の大畦畔に沿う用水路は西流し、62Ａ～Ｄ区で検出された坪界の溝を流れ、最終的には地蔵川へ合流させたものと考えられる。南北方向では、Ｃ・Ｊ区西の用水路は北流、Ｌ区西の用水路は南流する。Ｌ区西の用水路は、現在では排水だけの機能しか有していない。



Ｋ区北半（西より）畦畔と土坑

土坑：Ｃ・Ｇ～Ｌ区にかけて28基検出された。いずれも長さ１ｍ前後の小型土坑で、次の共通した特長を有する。①畦畔を掘削ないしは近接して築かれる。軸方向は畦畔と同一。②埋土はブロック状の粘質土が充塡される。このことは、土坑の機能が失なわれた段階で、人為的に埋め戻されたことを窮わせる。③遺物は


Ｊ区東端（南より）上層構


Ｊ区東端（北より）下層溝

少量で基本的に無遺物。これらの３つの特長は土田遺跡のそれと類似するが、規模において異なり、土田遺跡で想定されている「墓」とは機能が異なるものと考えられる。①の点で水田と関連のある土坑と推測されるが、具体的な機能は民俗事例などとの比較検討を行って考えていく必要があろう。なお、K区では、下層水田に伴なう土坑をあたかも避けるように上層水田の畦畔が築かれており、そのことより、ある程度機能を有していた期間があったことが類推される。

微高地の利用と開発―まとめにかえて―

昨年度より注目されてきた微高地は、本年度はL区南半において確認された。地割の乱れにより、第４図のように南北に細長い微高地が推定でき、L区で確認された微高地はその北端にあたる。微高地上より、縄文前期・中世の遺構が検出されている。今回で、地蔵川以東の調査された微高地は６ヶ所を数える。ここでは、昨年度の調査も含め、現水田下に埋没する微高地の歴史を掘り起こしてみたい。

縄文時代　前期以降、後期に至るまで断続的に微高地に集落が営まれる。微高地沿辺の浅谷には小川が流れ、湿地にはハンノキや広葉樹が茂っていた（縄文中期）。松河戸遺跡62E・F区では、そのような自然環境を背景として、打製石斧・磨石等の出土により植物性食糧に立脚した生活の一端が窺われる。

弥生・古墳時代　弥生時代終末～古墳時代初頭の「古墳出現前後」の時期にかけ、町田遺跡東西両微高地に集落が営まれる。段丘上に立地する「勝川集落の拡散」という画期が認められる時期である。その後、５世紀後半～６世紀前半代の遺構が62A～G区の微高地にかけて認められ、６世紀前半には、鳥居松段丘縁端部に南東山古墳（円墳）、微高地上に勝川大塚古墳（前方後円墳）が築かれる。

古代　古代の微高地の利用状況は不明瞭である。ただ、町田遺跡の東微高地東端付近に篠岡窯産の緑釉陶器が若干出土したこと、62A・B区の中央微高地東端部より「加知」と墨書のある須恵器の杯身が出土していること等により、人間が足跡を記したことは確実と思われる。

中・近世　微高地周辺の湿地に「計画的な水田」が営まれた時代。中世末の段階には、微高地は水田化されていないが、微高地には農作業に関連したと思われる遺構が存在する。本格的に微高地が開発されるのは近世以降である。寛文年間（1661～1672年）に春日井市域の新田開発は最盛期を向かえ、微高地の開発はその流れに沿ったものと理解される。来年度の発掘区の微高地上に中世の遺構群がかかっていることが試掘で明らかとなっており、中近世の微高地の利用・開発といった側面で大いにその調査が期待される。（後藤浩一）



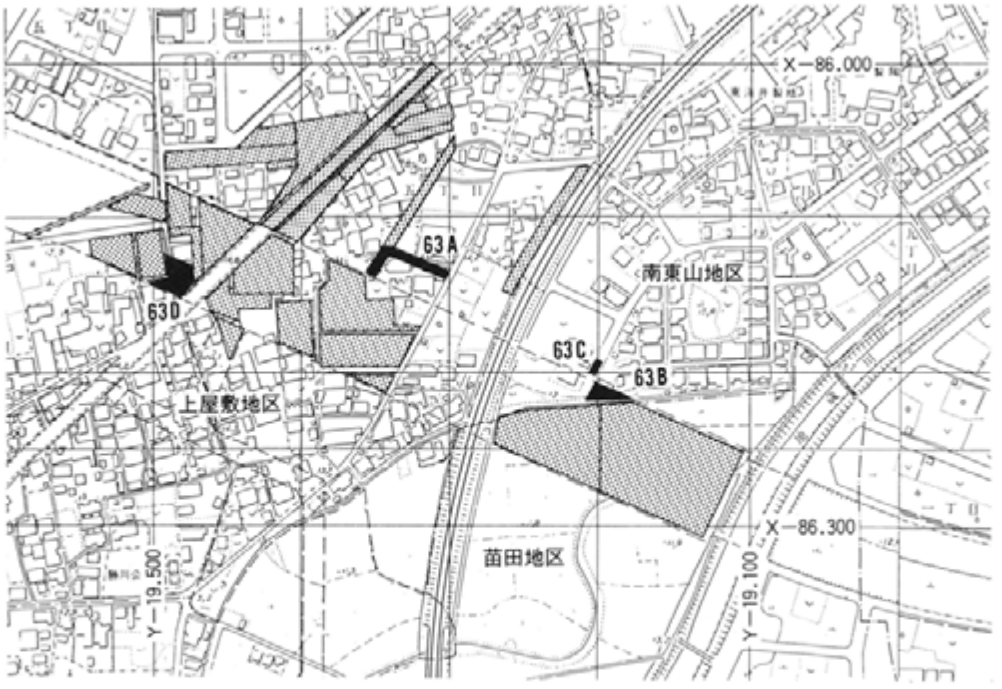
第4図　現水田と発掘された水田（下層水田）
矢印は水流の方向（太－用水路、細－水田内）

勝川遺跡

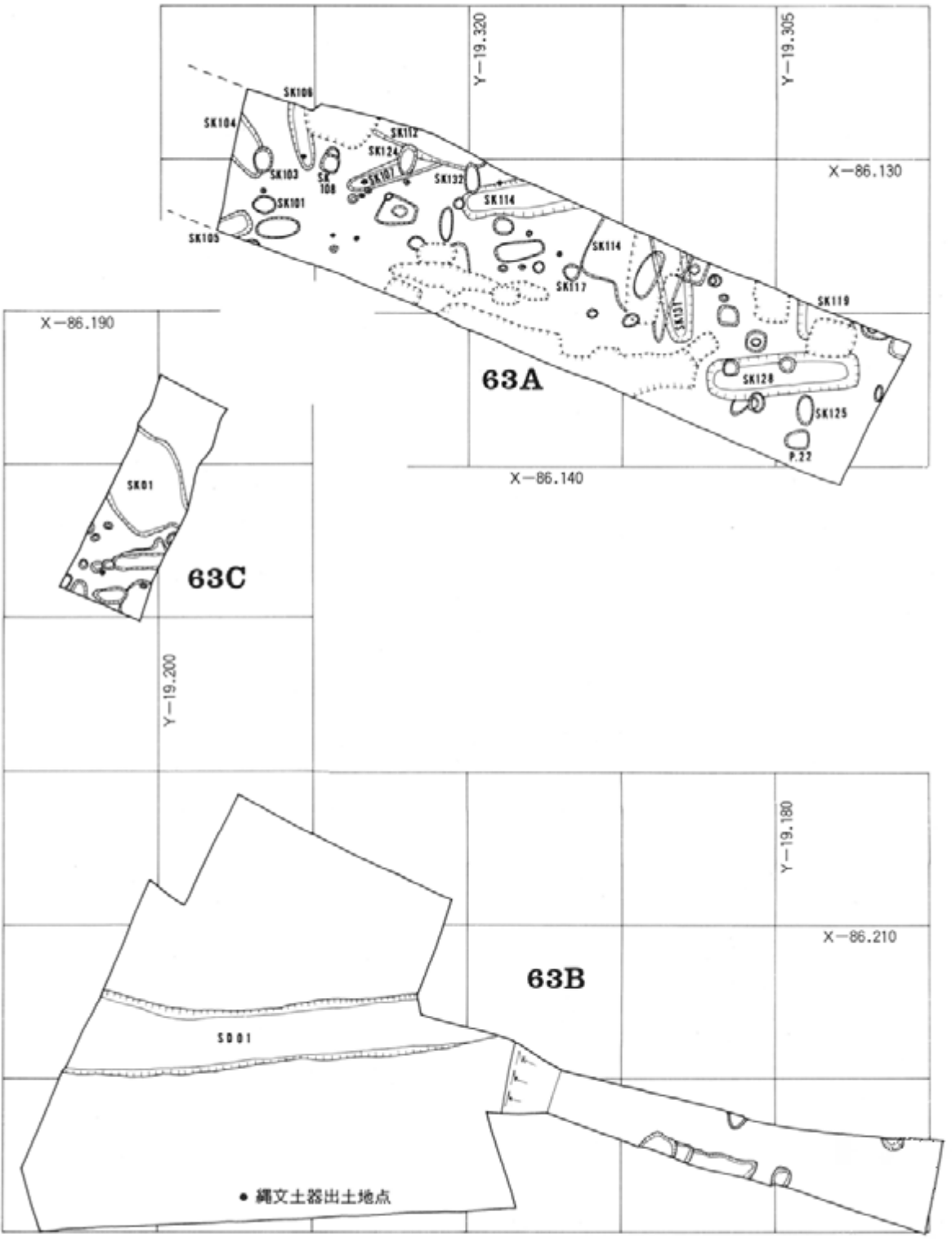
調査経過

勝川遺跡は鳥居松面とよばれる標高13mの洪積段丘上の南東側に立地している。その段丘下付近を地蔵川が南流している。東西550m・南北350m程の広がりをもっていて、小字名により南東山地区・上屋敷地区・苗田地区と3区分している。勝川廃寺関連の調査が発端となって以来、現在では勝川Ⅰ期（弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期～古墳時代前期）、Ⅲ期（勝川廃寺：奈良～平安時代）、Ⅳ期（勝川宿：江戸時代）の4時期の複合遺跡として位置づけられる。勝川Ⅰ期の遺構は南東山地区で竪穴住居・上屋敷地区に方形周溝墓・苗田地区に掘立柱建物群や木製未製品貯蔵土坑などがある。勝川Ⅱ期は上屋敷地区に方形周溝墓が多数ある。勝川Ⅲ期は、東西227m・南北148mの寺域が推定され、その中に掘立柱建物や溝がある。勝川Ⅳ期は下街道の宿場町関連遺構がある。

本年度の調査区は4ヶ所で、A・D区が上屋敷地区、B・C区が南東山区にあたる。A区で勝川Ⅰ～Ⅲ期、B・C区で勝川Ⅰ～Ⅱ期、D区で勝川Ⅳ期の遺構が確認できた。



第1図　勝川遺跡調査区位置図（1/5000）



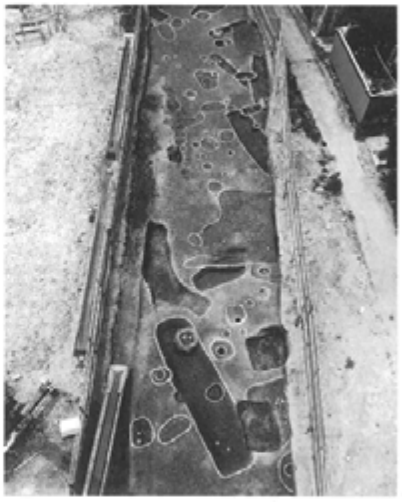
第２図　Ａ・Ｂ・Ｃ区主要遺構図（1/200）

各調査区の概要

A区　勝川Ⅰ・Ⅲ期の遺構が検出された。勝川Ⅰ期は方形周溝墓4基で、一部調査できた。ＳＺ01（ＳＫ128）、ＳＺ02（ＳＫ131と114）、ＳＺ03（ＳＫ106と107）、ＳＺ04（ＳＫ104と105）はいずれも4隅に陸橋部をもつものである。方位もほぼ同一の方向であり、周溝の様相も似ている。ＳＺ01は長4.7m・幅1.3m・深70cmと規模が大きく土器（第3図2、3）が出土し3は上層で2は底面から出した。中期前半の時期と考えられ、勝川遺跡では古相の方形周溝墓である。ＳＺ02は幅1.2m・深50cmで遺物は少量出土した。ＳＺ03・ＳＺ04は遺物がほとんどなく、ＳＺ03は北へＳＺ04は西に拡がるだろう。時期は高蔵期頃と考えられる。

勝川Ⅲ期はＳＫ108・112・118・119・124・132などがある。それらは埋土より瓦片が出土し、中でもＳＫ112は瓦が重なり合う程であった。それらに混じって須恵器杯11が下層より出土した。他の遺物として、須恵器10・12・13や灰釉陶器14・15が出土した。杯10がＳＫ124下層で皿14が上層より出土し、蓋12がＳＫ118下層、蓋13がＳＫ133中層、浄瓶の頸部15がＳＫ119下層で出土した。勝川廃寺に関連する遺構は十分に解明できなかった。

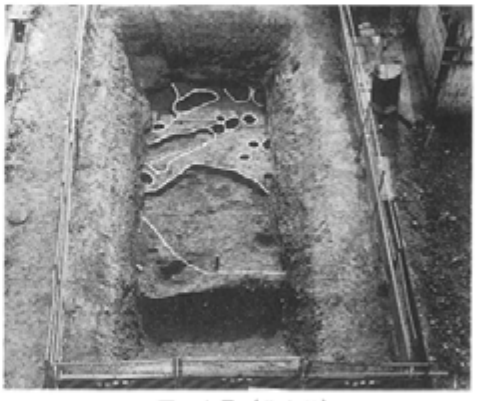
B区　勝川Ⅰ期の遺構にＳＤ01があげられる。その溝は幅1.6m、深40cm程であり、鳥居松段丘縁辺に伴行して東西にのびている。溝の下層や底面より多量の土器（第3図3～8）が重なり合う程に出土した。6と8は



A区　全景（東より）



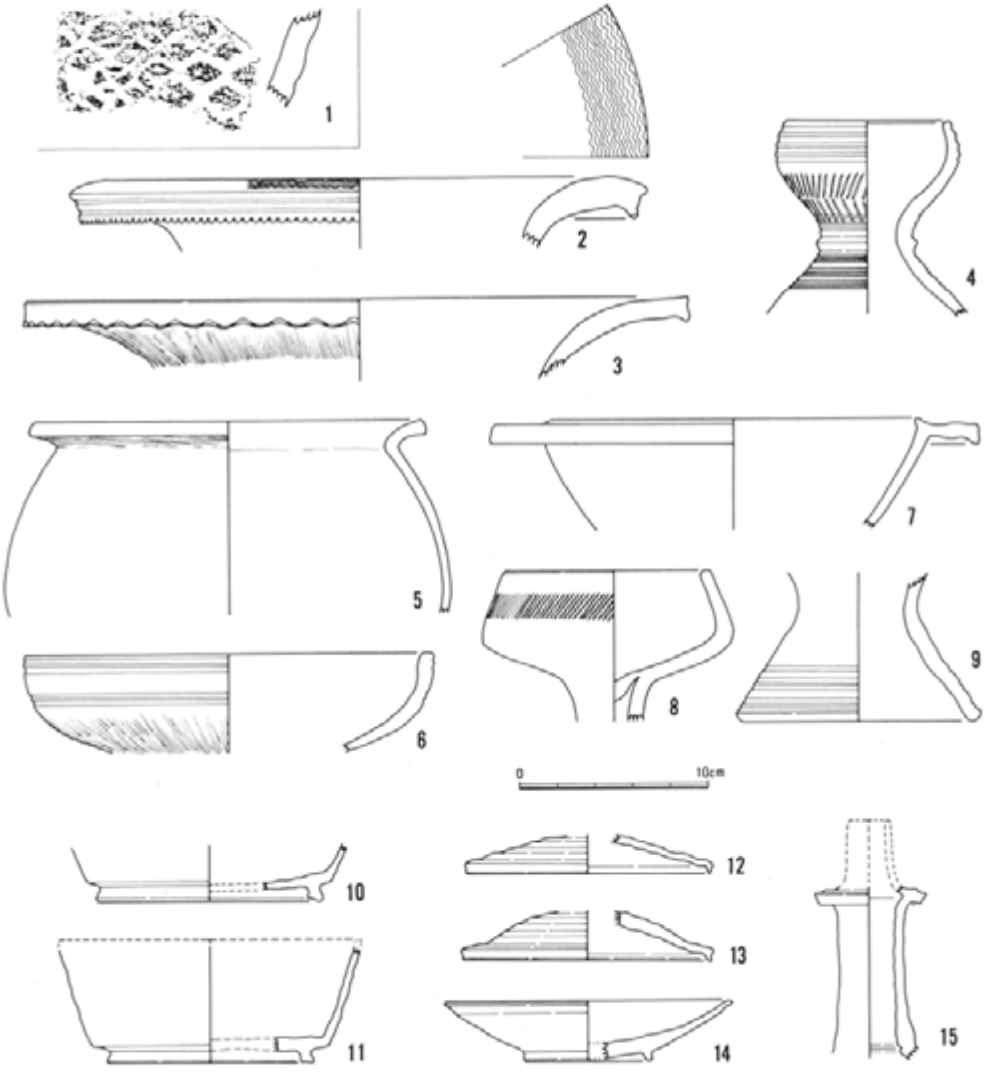
B区　全景（西より）



C区　全景（北より）

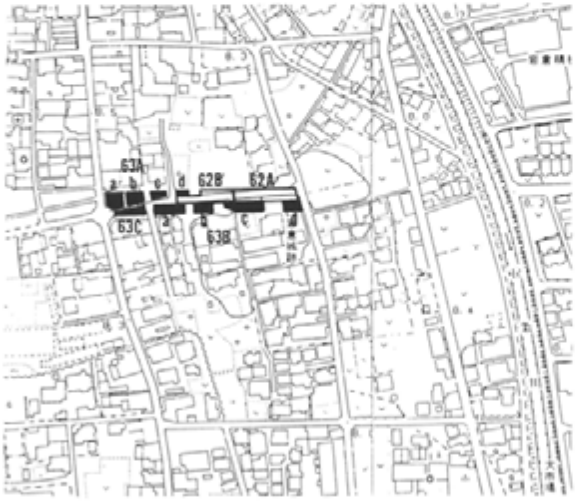
同一個体である。壺３・高杯６・８は凹線文を施している。甕４・高杯５～７などがあり器種では甕が最も多く出土した。時期は高蔵期頃と考えられる。縄文時代早期の押型文土器１が、段丘下にあたる南壁付近の堆積中から出土した。

C区　勝川Ⅰ期の遺構が多くあげられる。ＳＫ01は長2.8m、深30cm程の大きさで、埋土より多くの土器が出土した。時期は高蔵期頃と考えられる。他の遺構は規模が小さく、遺物もほとんど出土していない。　（神谷友和・野口哲也）



第４図　出土遺物（１のみ1/2、他は1/4）

岩倉城遺跡



第１図　岩倉城遺跡調査区位置図

調査の経過　岩倉城遺跡は、戦国時代の岩倉城跡を中心とする遺跡で、岩倉市下本町字城址付近に所在する。岩倉城は、五条川中流域右岸の幅約250m、標高約10mの南北にのびる自然堤防上に立地する。発掘調査は、県道萩原・多気線が城跡中央を東西に横切るため、事前調査として実施した。昭和62年１月に開始、昨年度は760㎡、本年度は1470㎡の調査面積であったが、周辺は民家が建ち並び、上水道・ガス管の維持、生活道路確保のため調査区は寸断されたものになった。本年度の調査では、Ａ区で多量の円筒埴輪を出土した幅４ｍ、深さ10～30cmの溝ＳＤ01の検出により一辺20m以上の方墳の存在を確認し、Ｂ区では岩倉城の内堀と考えられる幅６ｍ、深さ2.5mの溝ＳＤ03を検出した。遺構を確認できなかった時期もあるが弥生時代から戦国時代の土器等が出土し、Ⅰ期：弥生時代、Ⅱ期：古墳時代、Ⅲ期：奈良時代、Ⅳ期：平安時代、Ⅴ期：鎌倉・室町時代、Ⅵ期：戦国時代という岩倉城遺跡の時期区分を想定した。

調査の概要

Ⅰ期　Ad区において、弥生時代後期の竪穴住居を２棟検出した。


ＢＣ区　ＳＤ03遺物出土状態


Ｃ区　全景

Ⅱ期　Ad区において、昨年度検出した方墳の周溝ＳＤ01の続きを確認した。多数の円筒埴輪片と若干の須恵器片が出土したことから、６世紀初頭頃の古墳と考えられる。

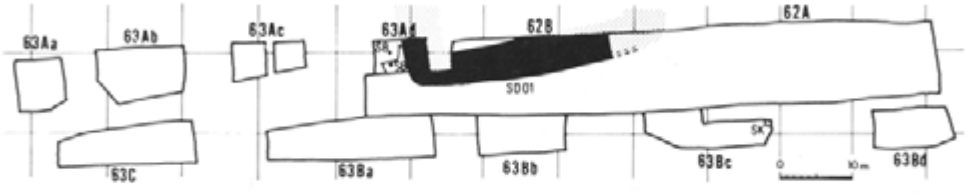
Ⅲ期　Bc区において南北にのびる溝ＳＤ02を１条検出した。

Ⅳ期　Ⅴ期　明瞭な遺構は確認できなかった。

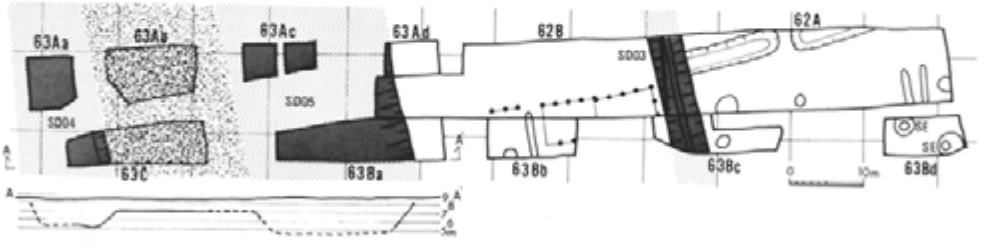
Ⅵ期　Bc区において、昨年度検出した内堀らしい溝ＳＤ03の南延長部分を確認した。土師質皿、瀬戸・美濃系陶器を中心とする土器・陶磁器類のほか、箸・折敷・曲物などの木製品や呪符木簡・獅子頭など珍しい遺物が出土した。またAa区・Ab区・Ｃ区の所見から南北にのびる幅10m、深さ３ｍの溝ＳＤ04、Ac区・Ad区・Ba区の所見からＳＤ04に並行する幅23m、深さ４ｍ以上の溝ＳＤ05を検出した。ＳＤ04、ＳＤ05共に遺物量は少ないが、窖窯から大窯Ⅱ期にかけての瀬戸・美濃系陶器が出土した。ＳＤ04から千体仏の一体らしい木彫地蔵菩薩像が出土した。ＳＤ04とＳＤ05に挟まれた部分は本丸上と比べると低く、現地表下1.2mから下は有機物（植物の根）の疎密により灰、黒色の砂質シルトが互層をなして自然堆積状況を示しており、岩倉城の時代にも依然として湿地であったことが推測され、したがってＳＤ04と05とその両者に挟まれた部分は常に滞水し幅50mの外堀を形成していたと考えられる。

まとめ

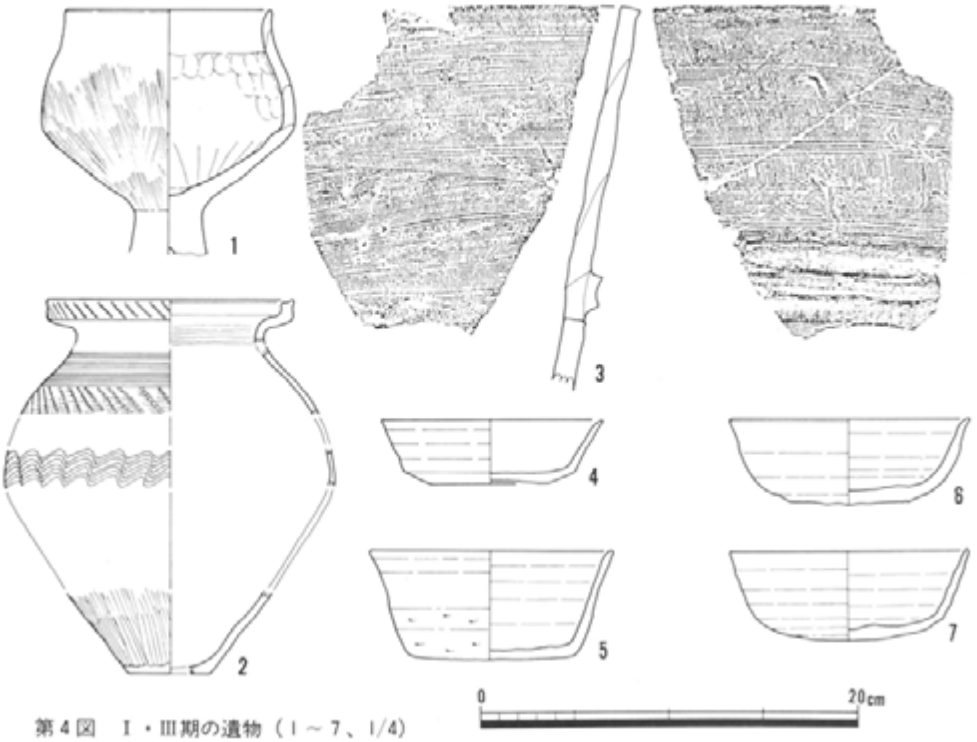
民家が調査区に接近していることと異常に多い雨のため外堀のＳＤ05は溝底を確認できなかったが、外堀の構造・規模が推定できたことは今年度の最大の成果といえる。また昨年度につづいてＳＤ03から出土した呪符木簡や獅子頭、ＳＤ04から出土した地蔵菩薩像などは当時の人々の精神生活をうかがうことができる貴重な資料といえる。　（松原隆治）



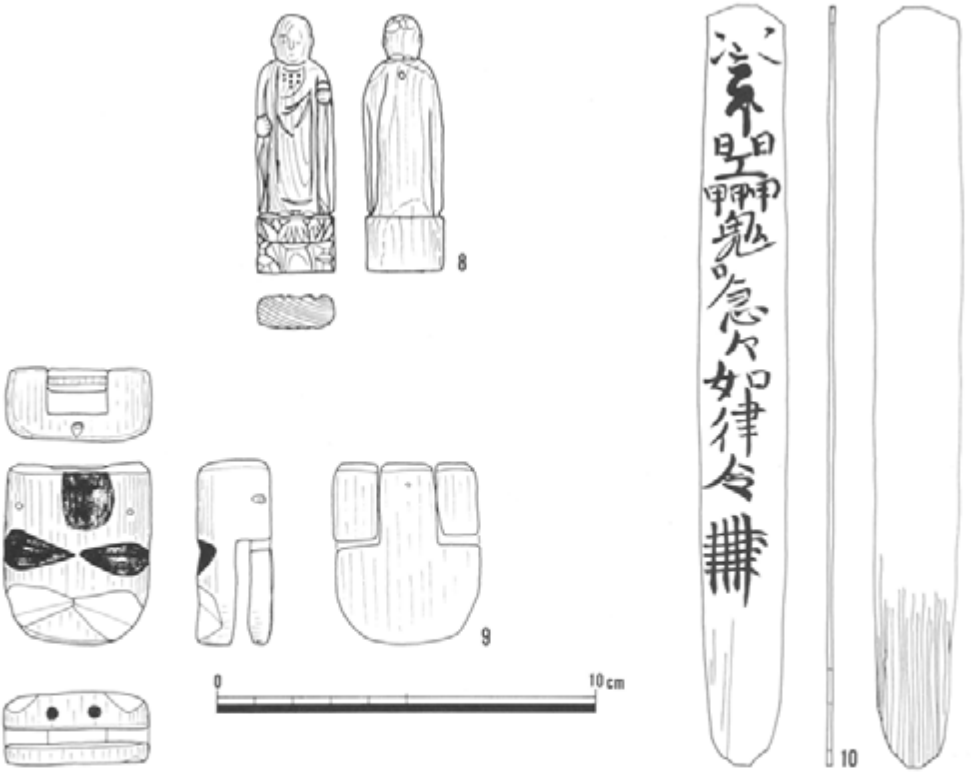
第２図　Ⅰ・Ⅱ期の遺構



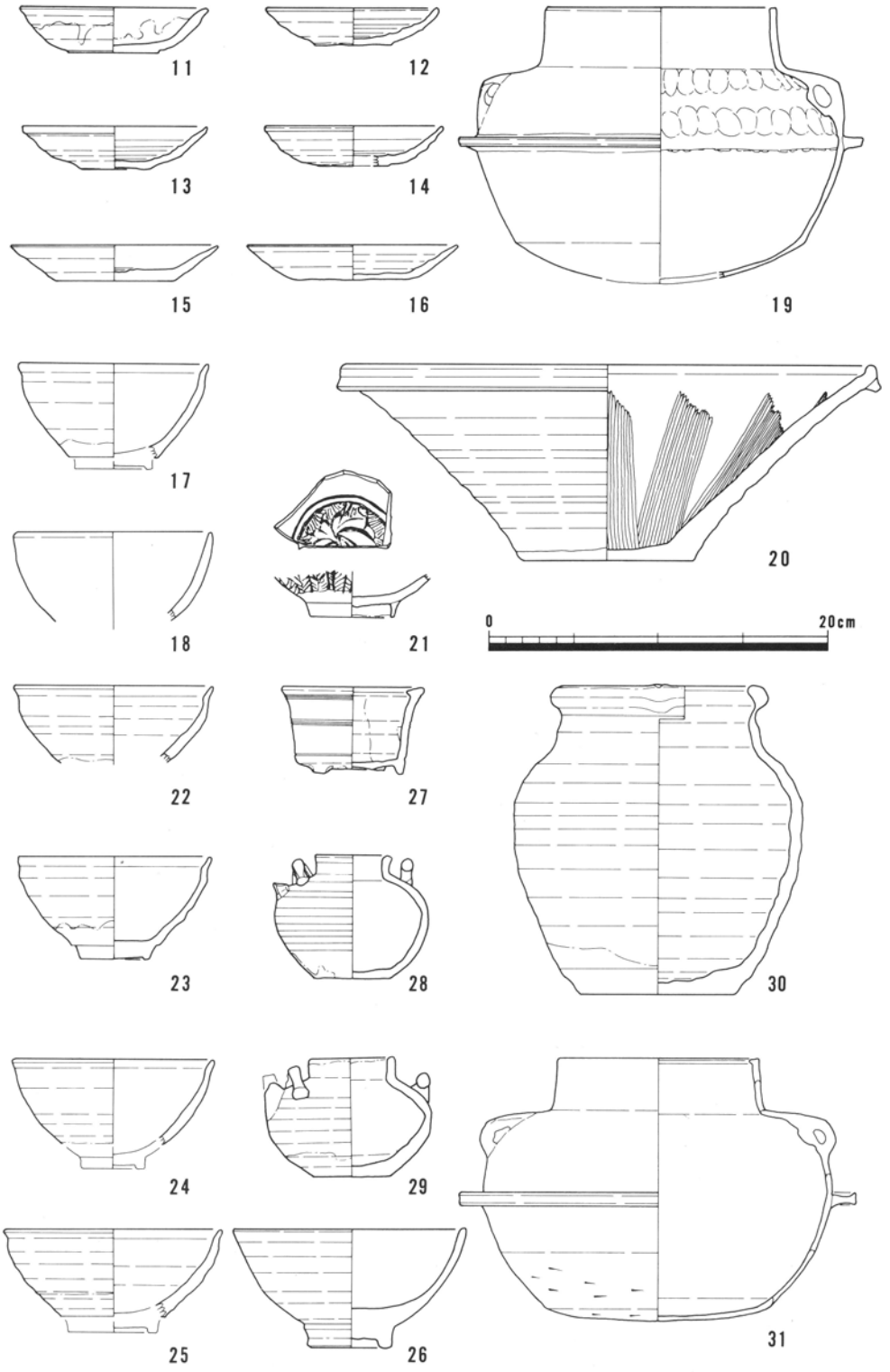
第３図　Ⅵ期の遺構



第４図　Ⅰ・Ⅲ期の遺物（１～７、1/4）



第５図　Ⅵ期の遺物（８～10、1/2）



第6図　Ⅵ期の遺物（11～21：外堀出土、22～31：内堀出土，いずれも¼）

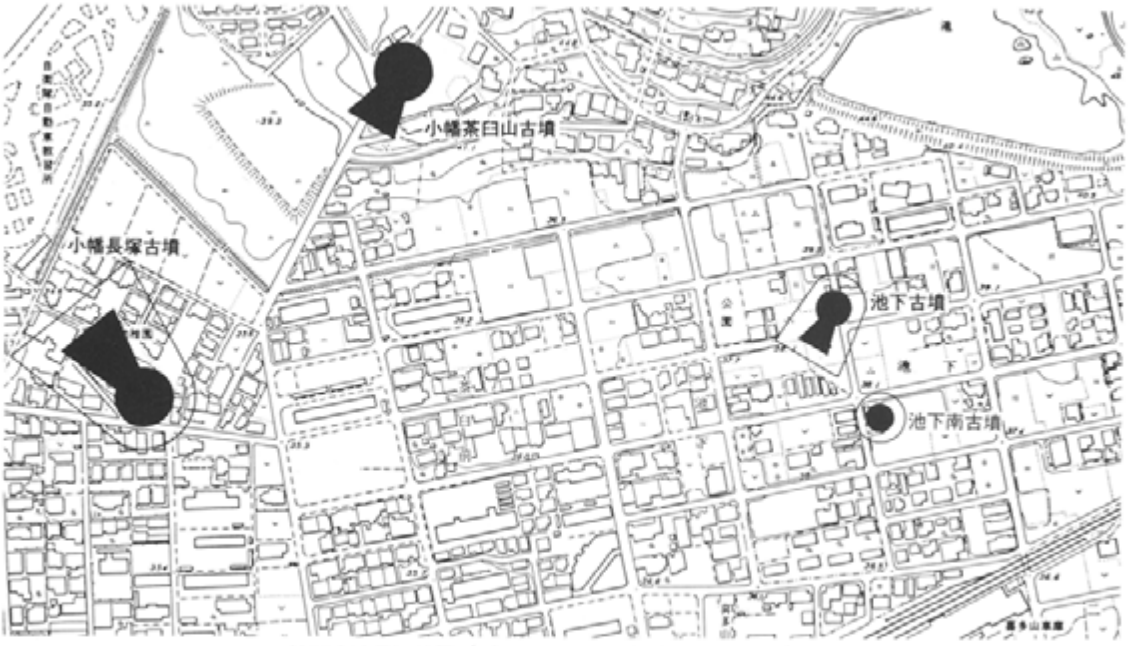
池下古墳

名古屋市守山区小幡地内に所在する池下古墳は、近接する小幡茶臼山古墳・小幡長塚古墳の３基の前方後円墳を中核として、周辺の小円墳をも含めて小幡古墳群を形成している。古墳群は庄内川と矢田川にはさまれた小幡台地（熱田面）と呼ばれる洪積台地上に立地する。池下古墳は墳丘長約40ｍの小型の前方後円墳で、後円部はすでに破壊されて前方部のみ残存する。出土遺物から５世紀末葉の築造と考えられ、外部施設として周濠が存在し、埴輪が使用されていることも知られている。

池下古墳前方部とその南に位置する池下南古墳が名古屋環状２号線建設予定地内に所在するため事前調査が必要となり、そのため今年度は池下古墳東周濠の一部と池下南古墳（調査面積1,675㎡）の調査を実施した。　　（赤塚次郎）



池下南古墳検出状況



池下古墳周辺地図（1/3000　名古屋市都市計画基本図）

加美（かみ）遺跡

加美遺跡は、碧海台地の東縁部に所在する。調査開始時点の地目は、畑地で、標高は12mをはかる。調査は、県道碧海桜井停車場～中島線建設に伴うもので2500㎡におよんだ。

遺構

加美遺跡より検出した遺構は、大きく３つの時期に区分できる。年代順にⅠ期（弥生時代中期）・Ⅱ期（古墳時代～平安時代）・Ⅲ期（室町時代～安土・桃山時代）と呼称する。

Ⅰ期の遺構は、台地東縁部のみに分布する。方形周溝墓２基を検出し、調査区が墓域として利用されていたことが考えられる。

Ⅱ期の遺構は、分布範囲も調査区西端部分を除くほぼ全域にまで広がる。竪穴住居15軒のほか、多数の土坑等が見られ、調査区は、居住域として利用されていたことが考えられる。検出された竪穴住居は一辺４～５m程度の大きさが一般的である。

Ⅲ期の遺構は調査区の全域を占める。検出したのは居住域で、全面に溝による地割が設定された様子をうかがうことができ、この中には堀立柱建物が見られる空間や火葬施設が見られる空間などが存在する。

堀立柱建物は13棟確認している。いずれも２×２間ないし３×４間程度であるが、中には溝により囲まれたものも見られる。なお火葬施設はＳＤ08・11・31により囲まれた空間に限って分布し、確実なもので４基見られる。共通の特色は、①埋土中に灰・骨片・炭化材片・焼土塊などを含む。②壁面（ないし床面）は被熱している。③骨片の出土状況は、散在



検出遺構



方形周溝墓



竪穴住居

的である。④骨片は全て細片化している。⑤出土遺物は乏しい。などをあげることができるが、壁面（ないし床面）の被熱状況から、強く被熱し、くり返し使用されたと考えられるもの（火葬施設A）と、あまり被熱せず一回のみ使用されたと考えられるものもの（火葬施設B）に分類できる。加美遺跡では前者が3基、後者が1基確認されており、SD08・11・31により囲まれた空間の特殊性を考えさせる。

遺物

出土遺物について時期別に述べる

Ⅰ期：方形周溝墓周溝中より弥生土器を若干得ている。量は少ない。

Ⅱ期：主に竪穴住居埋土より須恵器・土師器・灰釉陶器などを得ている。

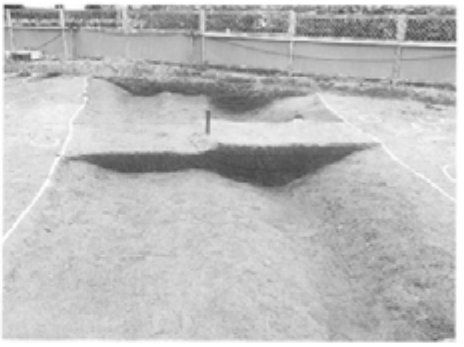
Ⅲ期：主に溝・土坑中より、灰釉系陶器・施釉陶器・土師器などを得ている他、若干の貿易陶磁も見られる。

なお、帰属時期が不明確な物として、鉄製品（刀子など）・銭貨などが見られる。

まとめ

加美遺跡は検出された遺構から、中世後半期の集落遺跡として性格付けることができる。そして、方格地割り・火葬施設等の存在からここに一定の計画性を見出すことができ、有力階層の関与を考えることができる。しかしこの類の遺跡は、従来当地域において調査事例に乏しく、遺跡の明確な社会的位置付けは困難で、今後同様の事例が増加した段階で比較資料として再検討を試みねばならない。

（池本正明）



溝



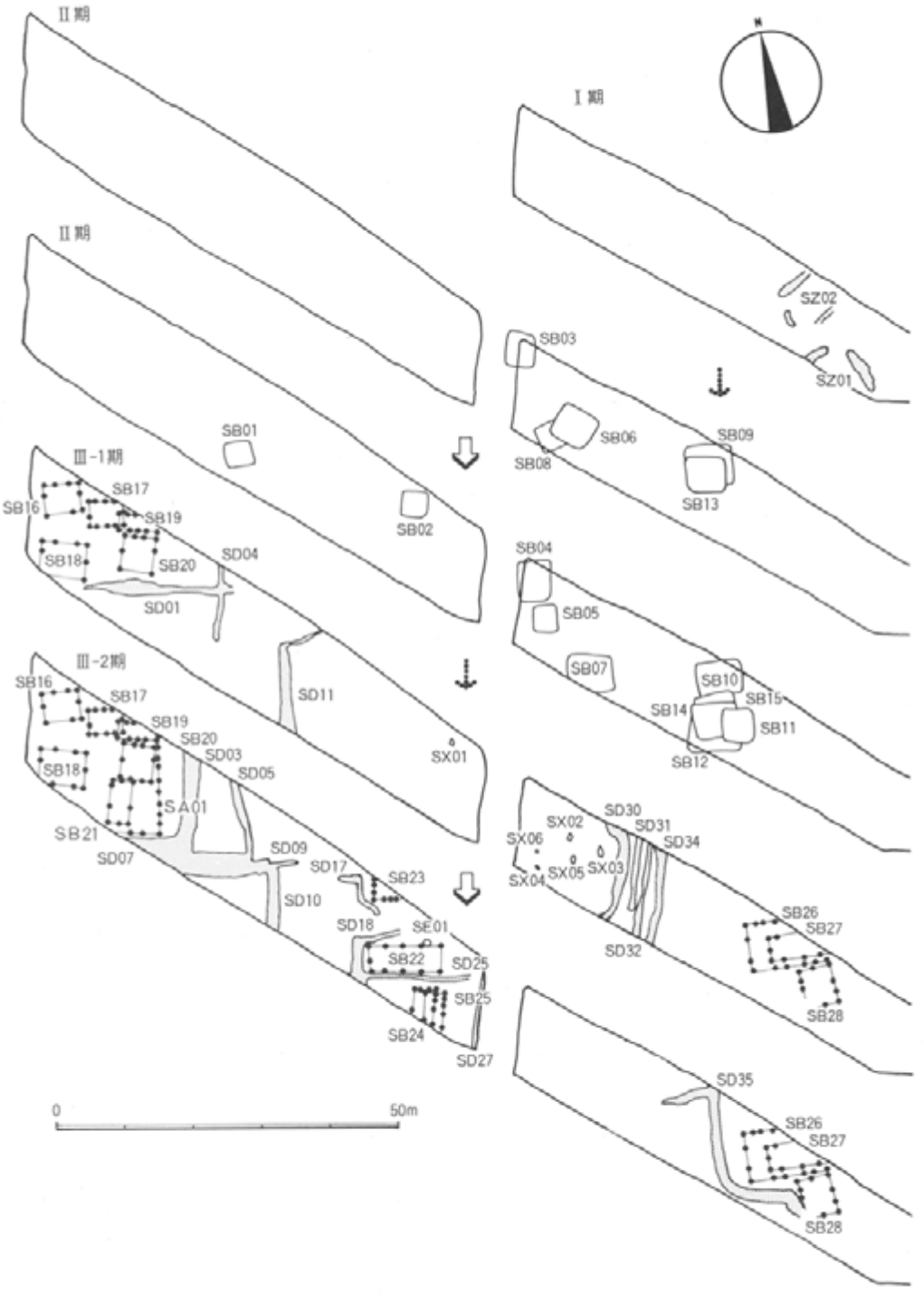
掘立柱建物



火葬施設A



火葬施設B

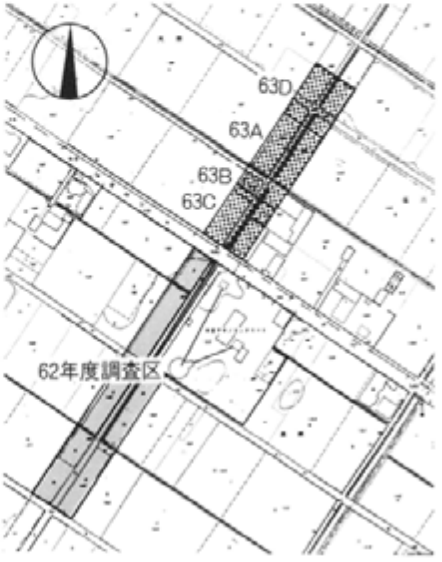

II期
II期
III-1期
III-2期
I期
N
SB01
SB02
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SD04
SD01
SD11
SX01
SB21
SA01
SD07
SD09
SD17
SB23
SD10
SD18
SE01
SB22
SD25
SB25
SB24
SD27
SD03
SD05
SZ02
SZ01
SB03
SB06
SB08
SB09
SB13
SB04
SB05
SB07
SB10
SB15
SB14
SB11
SB12
SD30
SD31
SD34
SX02
SX06
SX04
SX05
SX03
SD32
SB26
SB27
SB28
SD35
SB26
SB27
SB28
0
50m

第1図　主要遺構の変遷

岡島遺跡

調査の経過

岡島遺跡は、矢作古川左岸の自然堤防上に立地する、弥生時代中期を中心とした遺跡である。付近を矢作古川のほか広田川などが流れており、これらの河川やその支流が、頻繁にその流路を変えて流れ、非常に不安定な場所であった事が想定される。昨年度の調査では、弥生時代岡島遺跡の西端に当たると思われる部分の調査を行い、遺構は希薄であったが、環濠の可能性も考えられる大溝（ＳＤ01）を検出し、多量の土器や木製品などが出度した。今年度は、国道23号線をはさんだ昨年度の調査区の北側をＡ～Ｄ区に分割して調査を行った。



第１図　調査区位置図（1/5000）

調査の概要

層序は基本的には昨年度と同じであるが、今年度は昨年度第１、第２とした遺構面の間で新たに遺構面を検出した。このため今年度は遺構面の名称を変更し、先に調査の完了したＡ・Ｂ区を中心として調査概要を述べることにする。

上面　昨年度の第２遺構面に相当する。遺構は十数条の溝と土坑を数基検出し、大半はＢ区で検出した。Ｂ区では、ほぼ平行で南北方向に走る10条ほどの溝を検出した。また、これらの溝と直行する、東西に長い同方向の大型土坑を数基検出した。遺構内より出土した遺物の量は極めて少なく皆無に近い状態である。このため上面及び各個別の遺構の時期決定は困難であるが、昨年度の状況より中世に属し、沖積低地の再開発によるものと考えられる。

中面　今年度新たに検出された遺構面である。遺構は竪穴住居４軒、土坑十数基、溝数条自然河道などを検出した。Ａ区北東角で遺構が集中して検出され、Ｂ区では希薄であった。竪穴住居は、遺構が密なため重複が激しく、全体を知ることをできるものが無いが、ほぼ同規模の方形プランである。住居内より高蔵期併行の土器がまとまって出土している。Ａ区北隅より調査区西半で自然河道を検出し、調査区の大部分を占める。

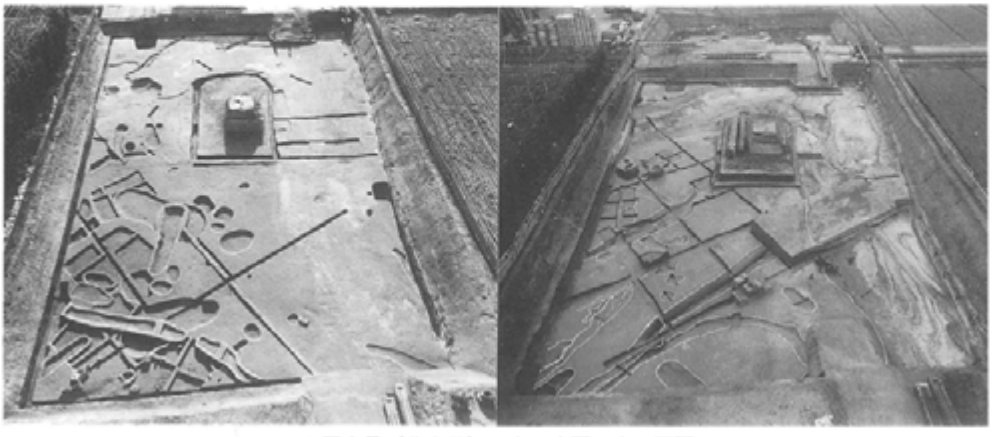
下面　昨年度の第１遺構面に相当する。中面より下面への掘削途中、青灰色砂質シルト層

中で土器などを若干含む黒褐色有機質土の広がりを検出した。遺跡全体に広がるものではなく局所的であり、また高低差も見られた。人間の生活活動に起因が求められるものであるが、明確な落ち込みが見られず他所から流れ込んだ2次堆積によるものと考えられる。遺構はA区では数条の溝と数基の土坑などを検出した。地形は北東に向かって高くなり、溝は自然河道に流れ込んでいた。B区では中面の遺構下で新たに自然河道を検出した。遺構は自然河道のみである。A区では検出途中に古井期及び瓜郷期併行の土器が主に出土しており、尾張地方からの搬入と思われるものなども出土している。遺構内の土器はほとんど瓜郷期併行のものである。調査区南隅の河肩で土坑内より古井期併行の壺胴下半部が倒立した状態で出土した。B区では新たに検出した旧河道内より古井期併行の土器がかなりまとまって出土した。昨年度は古井期併行の遺構が大部分であり瓜郷期併行の遺構は大溝（SD01）のみであったのに対し、今年度検出した遺構は大部分が瓜郷期併行であり古井期併行のものは少数であった。

まとめ

今年度の調査ではA区中面で検出した高蔵期併行の竪穴住居と、昨年度検出した遺跡の西端に当たると考えられる大溝（SD01）から、従来国道23号線よりも南部とされていた岡島遺跡の範囲が、国道をこえて北東に広がるということを確認し、A区下面の地形も北東に向かって高くなっていることより、むしろこの方向に遺跡の中心があった可能性が高くなった。また、当時非常に不安定な状態であったことが想定されるこの地において、生活跡である竪穴住居を検出し、短距離であっても地点が変わると様相を異にすることが判明した。河道の動きなどによって、短時間の間に生活域の幾度か移動があったことが想定される。以上が今年度までの岡島遺跡の調査結果であり、今後、岡島遺跡を広範囲に捕えて行く上での一助となろう。

（野口哲也）



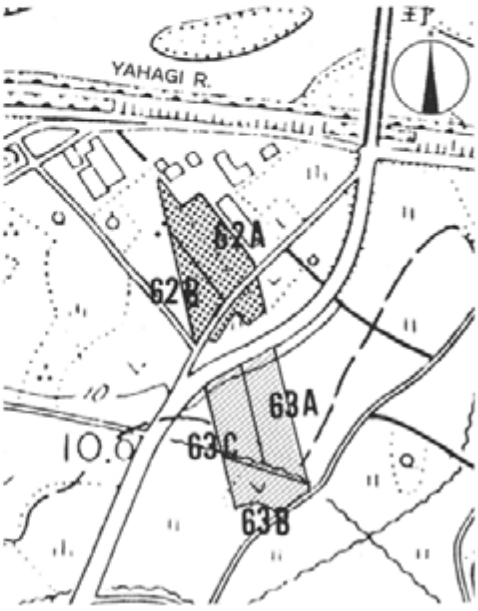
A区全景（北より）　左：中面、右：下面

志貴野遺跡

調査の経過

志貴野遺跡は、矢作川（古川）右岸の洪積台地縁辺部に立地している。古墳・平安時代を中心とする集落遺跡で、前年度の調査において多数の竪穴住居と掘立柱建物を検出した。また、同年度の試掘調査の結果、遺跡の範囲は南西に下降する台地末端まで広がることが確認された。

本年度は、現況で旧地形に従って棚田様に耕地が展開する台地縁辺の緩斜面をA～C区に3分割して調査を実施した。以下その成果について記述する。遺構・遺物の時期区分は前年度の「年報」に従い、I期：古墳時代後期、II期：平安時代とする。



第1図　志貴野遺跡調査区位置図（1/5000）

調査の概要

遺構は、標高7.5m以上の平坦面に限って認められた。これは後述する自然地形（開析谷）の制約を受けたものと推定される。

A・C区　A区を中心に竪穴住居・掘立柱建物柱穴・井戸等を検出した。SB01は隅丸方形（4.4×3.3m）を呈し、検出面からの掘り込みは25cmである。床面の周囲には幅20cm程度の周溝を有している。掘立柱建物柱穴は、2ヶ所に集中的な分布が認められたが、前年度調査区に比して密集度は低く、諸条件（埋土・形状・柱通り）を満たす明確な建物は認定し得なかった。SE01は掘り方径1.1m、井筒径84cm、検出面からの深さ2.9mを測る。井筒は基底部に板材を円形に打ち込んだ後、井戸側専用瓦（27×20cm）を積み上げて構築され、現況で7段が確認された。SE01（近世）を除き他の遺構は全てII期に属する。

B区　SB01は1×2間の建物で、内部に方形の掘り込み（1.8×2.8m、深さ10cm）がある。柱穴は不整円形で、径30～40cm、深さ30cmを測る。II期に属する。

開析谷　北東から南西方向に台地端部を緩やかに開析する谷である。底部での比高差はA－B区間50mで1.8mを測り、調査区内での最大幅は約40mである。埋土は概ね3層に分かれ、底部には湧水を示す沈鉄と砂の互層が認められた。また、層序とほぼ対応して上位から、

II期以降→II期→I・II期に位置付けられる多量の遺物が出土した。

まとめ

本年度は志貴野遺跡の外縁部の調査を実施した。遺構は稀薄であったが、自然地形に制約された古代集落の住環境の一端を明確にし得た。遺物は灰釉陶を中心とするII期に質・量共に瞠目に値するものが認められ、当該期に本遺跡の盛期を見出すことができよう。特に円面硯（2）・風字硯、陰刻文緑釉陶等の出土は本遺跡の性格を考える上で注目される。

（福岡晃彦）



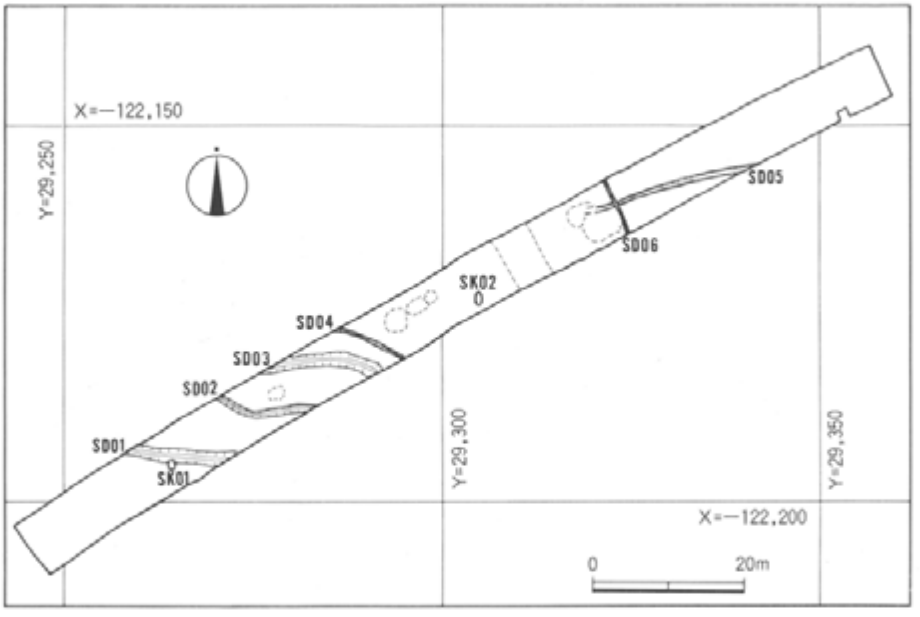
第2図　遺構全体図（1/700）

杉山端城跡

国道151号線新城バイパスの建設工事の事前調査として、杉山端城址に近接する地区の発掘調査を行なう。端城は、豊川右岸の河岸段丘中位面の奥部に立地し、盛土・溝による方形区画を伴う中世の居館跡が想定されている。昭和61・62年度に国道301号線を隔てた杉山遺跡で鎌倉時代から室町時代にかけての屋敷地と推定される遺構群が検出された。今回の調査では、中世・近世の溝、土坑が確認され、最も南に位置するＳＤ01は、灰釉系陶器（山茶椀）等の出土遺物から13世紀代の時期で、端城の推定区画の北辺に平行することから、何らかの関連が推測される。しかし、全般に遺構は希薄で、中世居館跡に確実に伴う遺構は確認できなかった。なお、ＳＤ02、03は中世末から近世初期、ＳＤ04～06・ＳＫ01・02は近世以降の時期で、いずれも耕作等に伴う遺構である。　　（酒井俊彦）



第１図　調査区全景（北東より）



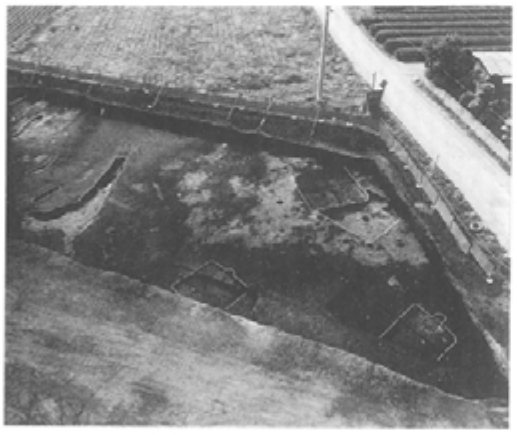
第２図　遺構全体図（1/1000）

諏訪遺跡

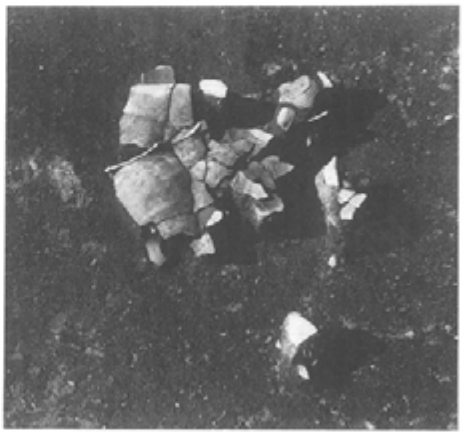
昨年度に続き、遺跡南部のA区西半の調査を行なう。地形的には、A1区は豊川支流野田川に臨む下位段丘上に、A2区は野田川河谷の緩斜面に位置する。遺構検出は、A1区では黒色土（黒ボク）下の黄褐色土面で、A2区は基盤の砂礫土面で行なう。その結果、奈良時代後半から平安時代初期（8C後半～9C）の竪穴住居5棟、中世（13～14C）の溝1条・土坑1基、時期不明の溝6条、自然河道1条が検出された。SB01の床面上から9世紀代（K－14号窯式併行期）の灰釉陶器、須恵器蓋杯、土師器甕、製塩土器等が一括出土した。東三河地域の、平安時代初期の集落遺跡の土器組成を示す資料と考えられる。A2区SD03・SK02はほぼ同時期で、少量の山茶椀片が検出された。A2区の基盤より上位の土層は、水田造成によって形成されており、中世初期に開発された耕地に伴う遺構と考えられる。また、自然河道は水田造成より前に流れていた野田川に平行する小河川の痕跡で、基盤面の凹地状の流路に、明黄白色粗砂が0.2～0.5mほど堆積している。埋土中より、弥生土器が少量検出された。（酒井俊彦）



第1図　遺構全体図（1/800）



第2図　A1区全景（東より）



第3図　SB01　遺物出土状態

麻生田大橋遺跡（あそうだおおはし）

調査の経過

東三河を貫流する豊川の右岸には、西から稲荷山貝塚・樫王遺跡・五貫森貝塚・大蚊里貝塚・麻生田遺跡・水神平遺跡と縄文時代晩期中葉から弥生時代初頭にかけての遺跡が帯状に分布している。麻生田大橋遺跡は、豊川中流域の低位段丘上（標高10m）に立地し、市道北側に位置する麻生田当貝津遺跡（縄文時代中期後葉から晩期後葉）と合わせて麻生田遺跡と総称されている。本遺跡は、豊川市教育委員会により、昭和52年度から11次にわたり、のべ4000㎡の発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土器棺109基をはじめ、弥生時代中期後半期方形周溝墓、古代から中世・近世にかけての竪穴住居・溝状遺構・土坑・掘立柱建物・井戸等が検出されている。

今回の調査は、県道東三河環状線工事に伴う事前調査として実施されたものである。

調査の概要

調査区の基本層序は、耕作土→黒色土（いわゆる黒ボクー遺物包含層）→黄褐色土である。調査区東側では黒色土が取り去られ、基盤である礫層が露出している。

今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代初期（Ⅰ期）、中世（Ⅱ期）、近世（Ⅲ期）の3時期に大別できる。以下、Ⅰ期の遺構、遺物を中心に、その概略を述べる。

Ⅰ期　土器棺61基、土坑5基(性格不明)が検出された。土器



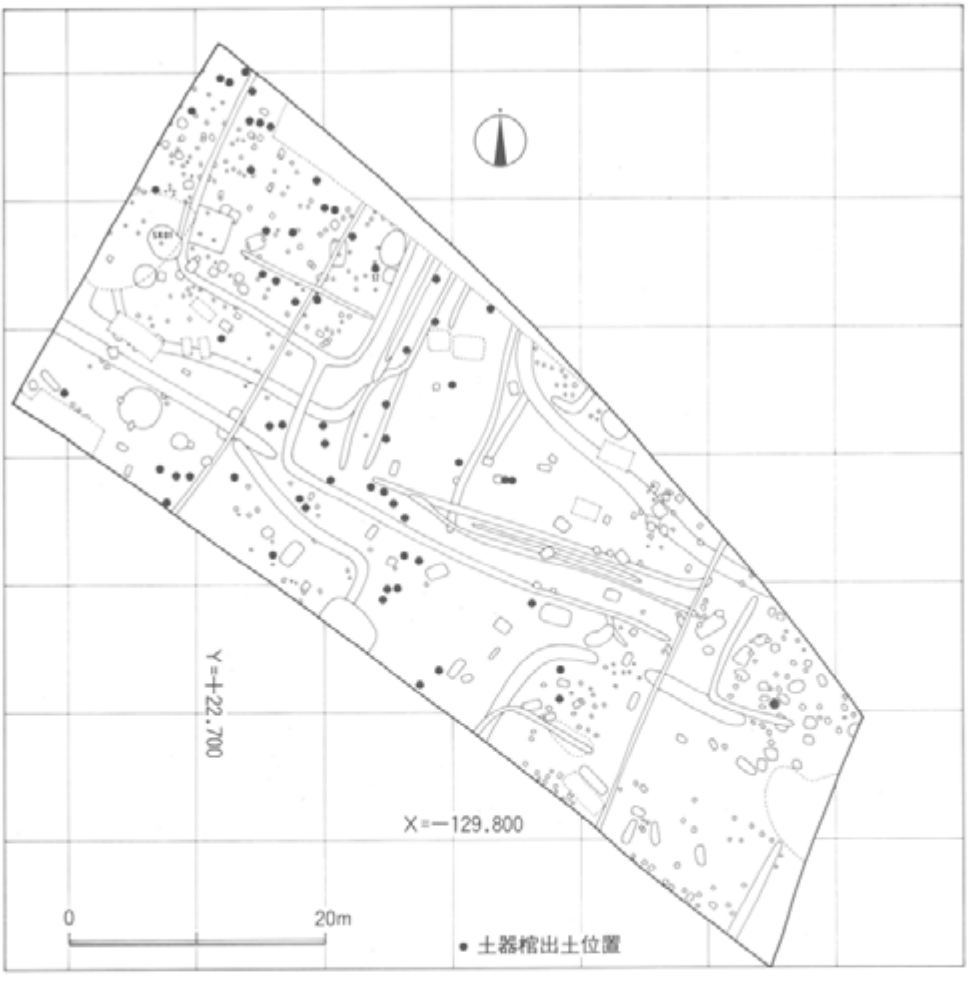
第1図　調査区位置図（1/5000）



全景（西から）



全景（東から）



第２図　遺構配置図（1/600）

棺は地表下20～30cmの黒色土上面で検出されたものが多いため、耕作等による破壊がはげしく、原状をとどめるものは少ない。また、調査区の西半に集中して分布する傾向にある。土器棺に使用された土器は、突帯文系・条痕文系に属するもので、五貫森式（第３図１）、馬見塚式（２）、樫王式（５）、水神平式〔古いタイプのものと口端に刻みを持ち羽状の条痕が器面全体に施される新しいタイプのもの（６）がある。〕の各時期にわたっている。埋葬状態は、横位のものが大部分で、斜位（５例）。立位（２例）のものが少例ずつ存在している。また、埋葬形態においては、単棺が基本となるが、甕の口を２つ合わせた合わせ口棺を含め、鉢や甕の底部などで蓋をしたものが全体の４分の１にあたる15例検出された。

縄文土器以外の遺物としては、石斧・石鏃・磨石・敲石・石皿・凹石・石棒・石剣等の石器類や、土偶（２点）、土製装飾品、玉類等が出土した。とくに、打製石斧・磨製石斧の出土量が多く、未製品を含め両方で500点を越える。しかし、近世の暗渠状の溝や包含層中から出土したもので、確実にＩ期の遺構に伴って検出されたものはない。

II・III期　溝状遺構19条・掘立柱建物（室町時代）・井戸（III期）・土坑多数が検出された。遺物としては、灰釉陶器・灰釉系陶器・陶磁器・土師器（甕、鍋、皿等）などがある。土坑の中には、土師皿６枚と銅銭６枚が検出されたもの、大・中・小３種類の大きさの土師皿が百数十枚検出されたもの（II期）、灰・骨片を含む焼土の中に、常滑窯産の甕・鉢、瀬戸窯産の盤、おろし皿、硯、土師質の皿、甕、羽釜、鍋等が検出されたもの（III期・ＳＫ01）等がある。



土器棺17　出土状態

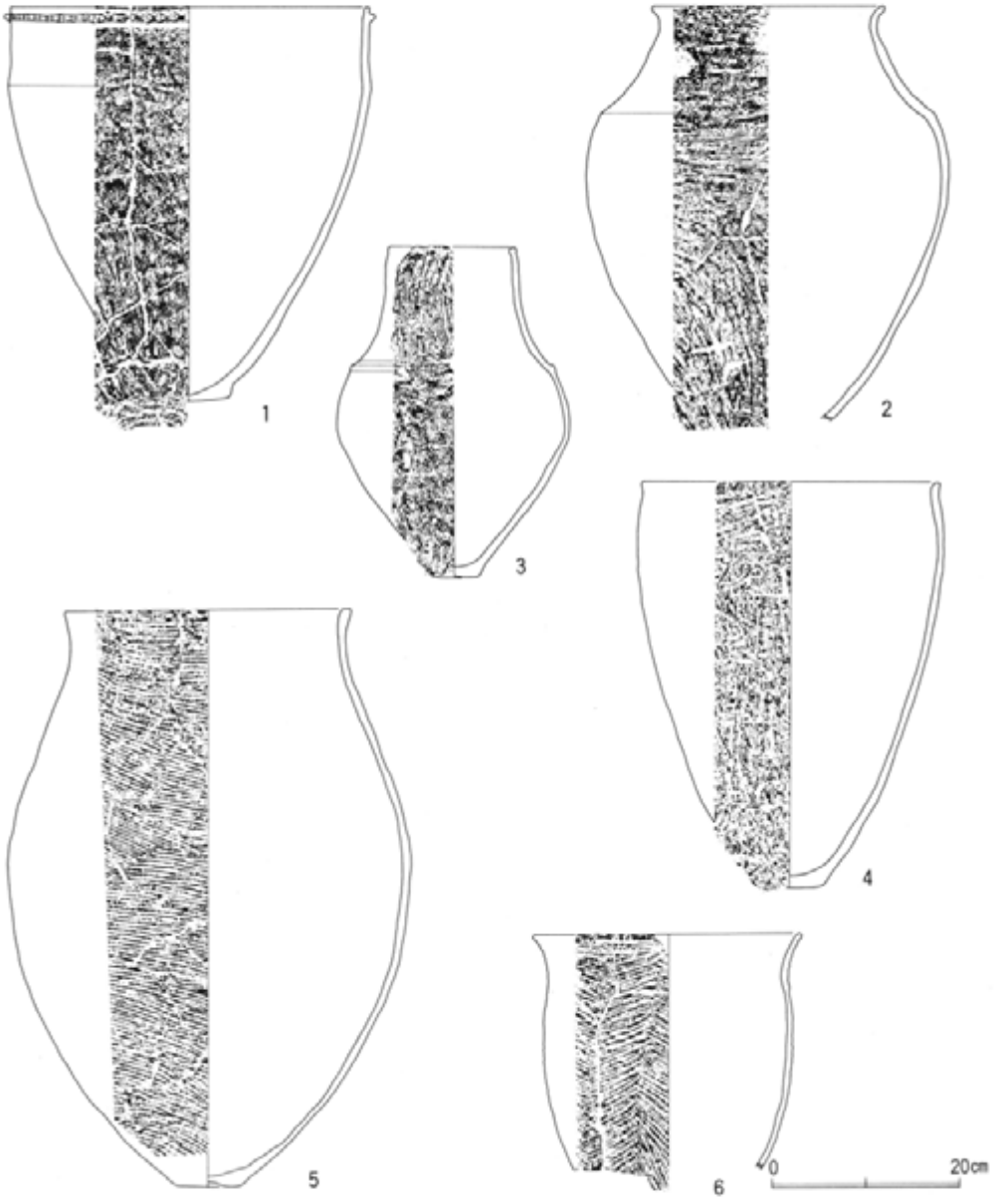


ＳＫ01　遺物出土状態

まとめ

本遺跡は、五貫森式土器から水神平式・岩滑式土器に至る土器編年の上で貴重な資料を提供する。今後、合わせ口棺の検討による土器組成の問題、土器の器形、器種、調整技法の問題等を解明するなかで、東三河における縄文時代晩期後葉から弥生時代にかけての土器編年を体系づける必要がある。

さらに、本遺跡は、縄文時代晩期後葉から弥生時代中期後半期まで、土器棺、方形周溝墓を主体とする墓域として存在することが確実であるが、土棺器と同じ遺物包含層中から多量の打製、磨製石斧を検出する事実を考慮に入れると、単に墓域としてとらえるには、問題をのこしている。今後の調査で、竪穴住居等の生活跡の検出を期待するとともに、遺跡自体の性格の解明を再検討する必要がある。（安井俊則）



第３図　縄文土器（1/8）

下山古墳



第1図　遺跡位置図（1/5000）

幡豆郡幡豆町大字西幡豆と大字東幡豆の境に、北から南へ延びて海岸に迫る標高60mほどの丘陵がある。本墳はこの丘陵から東へ派生する一支丘の頂部（標高38.5m）に所在する。眼下には三河湾が一望される。地籍は愛知県幡豆群幡豆町大字東幡豆字下山17－11ほかに所属する。本墳およびその周辺は、昭和20年代に畑地の造成を目的とした開墾をうけ、古墳の形状は著しく損なわれていた。

発掘調査の結果、遺存状態は必ずしも良好ではないが、南々東方向（E58°S）に開口する横穴式石室を内部主体とする径15mほどの円墳であることが知られた。

墳丘　支丘陵の頂部を利用されて築造されており、石室の西方7.5mで周溝の一部が検出され径15mほどの円墳と推察された。

石室　天井部、羨道部は亡失し、側壁上部の損壊も著しいが、玄室床面は比較的良好に遺存していた。石室は地山面を穿った方形の土坑内に構築されている。石室の平面形は、羨道部と玄室部とが区別されない「無袖式」のもので、両側壁は弧状に幾分張り出し「胴張り形」を呈す。羨道部と玄室とは、側壁の構成上においても区別されず、床面に段差を設けることでこれを区別し、いわゆる「竪穴系横口式」の形態をなす。玄室長4.05m、羨道部長（現存）0.6mをはかる。床面は二面認められた。第一次面は河原石の敷石で玄室内のほぼ全域に、第二次面は角礫を混えた敷石で玄室の南半にみられる。左壁沿いに組み合せ式石棺（長1.0m、幅0.6m）が存する。

出土遺物　遺物は、全て玄室内よりの出土である。その内訳は、耳環1、管玉1、ガラス小玉5、鉄刀2、鍔片2、鏃1、鉄鏃18以上、弓飾金具3、刀子5、「刀子鞘金具」1、素環鏡板付轡2組　不明鉄器片4、須恵器（平瓶1、提瓶1、直口壺1、高杯1、杯蓋1、杯身3、壺・甕類片20）、土師器（椀1）である。

これらの遺物（須恵器・鉄鏃の形式）及び石室の構造からみて、本墳は7世紀前半代の築造になるものと推察される。

（北村和宏）



遠景（北方より）



墳丘と石室（南より）



調査前（西より）



横穴式石室（第二次面）



左：組み合わせ式石棺（奥壁より）



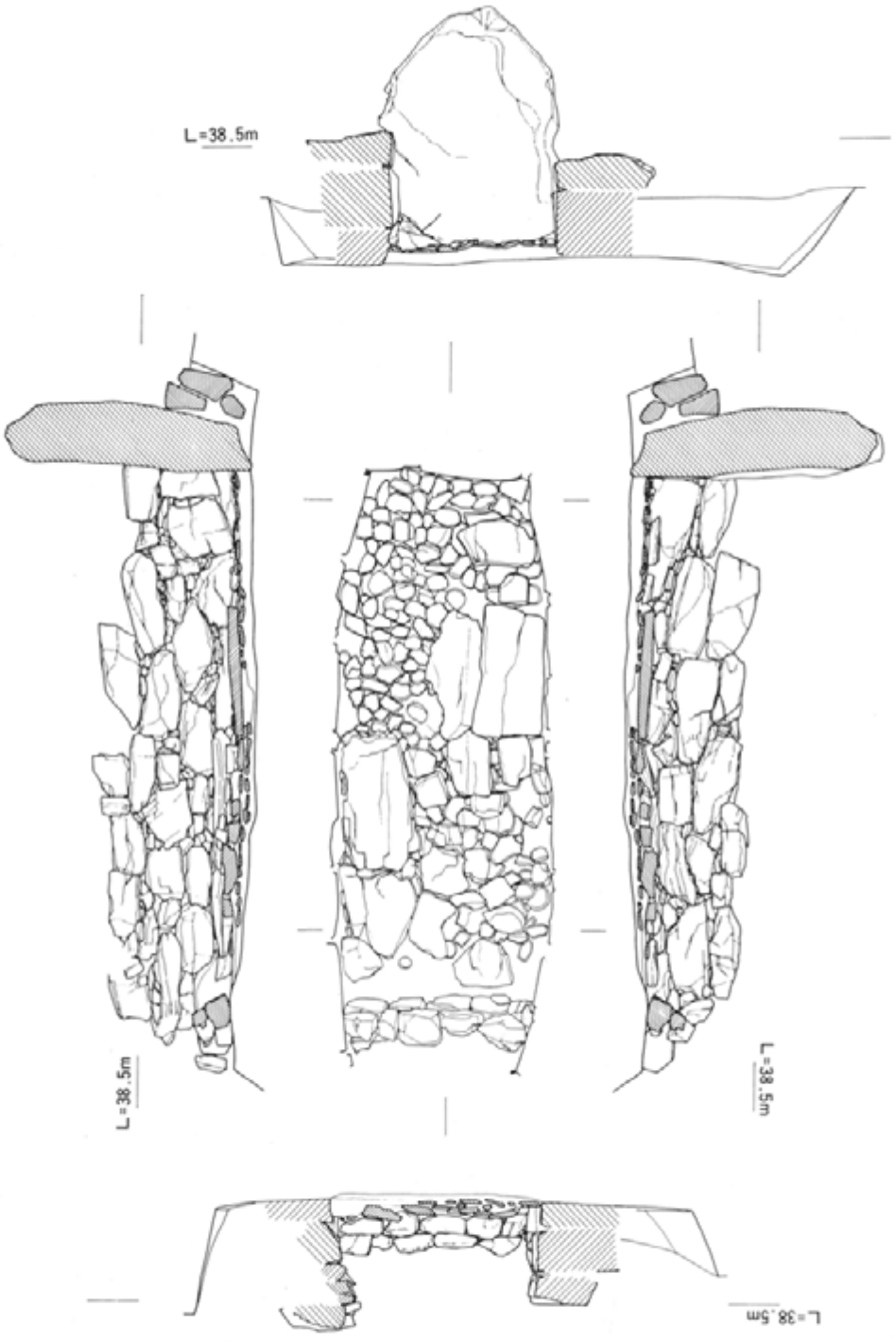
横穴式石室（第一次面）



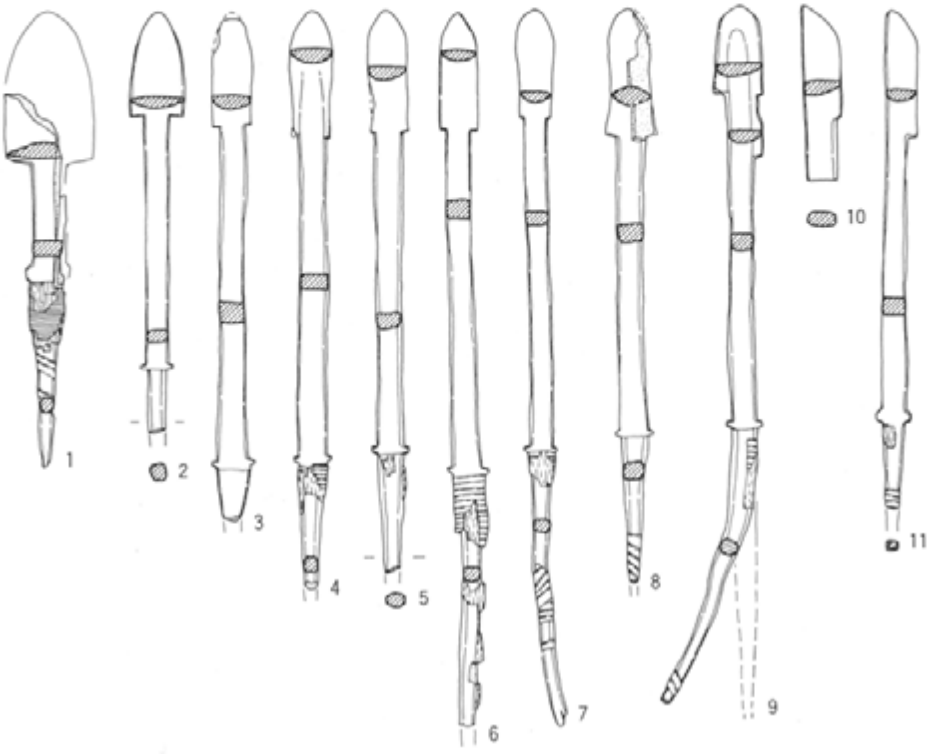
遺物の出土状態



石室の掘り方と基底石



第２図　石室実測図



鉄鏃実測図（½）



出土遺物（須恵器・土師器）

＊高杯の器高14.4cm

松崎貝塚遺跡

調査の経過

松崎貝塚遺跡の所在する知多半島基部の伊勢湾岸には、半島内でも有数の海岸平地が展開している。この海岸平地には、内陸の海蝕崖から西へ第１・第２及び第３砂堆に分類される砂堆列が海岸線に並行している。本遺跡はこの内最大規模の第３砂堆北端に立地している。本遺跡の発掘調査は、昭和51年に東海市教育委員会により、西外縁部にあたる旧海岸線付近を中心に実施された。その結果、古墳時代後期から平安時代末に及ぶ古代製塩遺跡であることが明確化した。今回の調査は、遺跡のほぼ中央を縦断する形で調査区を設定し実施した。



第１図　調査区位置図（1/2500）

調査の概要

基盤（黄灰色細砂）は調査区の北からほぼ中央までは標高2.5ｍの水平面を保ち、それ以南は漸次降下し、南端では１ｍを測る。北半部では平均50cmの遺物包含層の堆積が認められ、断面観察から数次にわたる製塩に関連した「産業廃棄物層」であることが看取された。遺物の大半は破砕した製塩土器（知多４・５類）である。また、調査区ほぼ中央で、基盤直上に形成された貝塚（層）が検出され、古墳時代後期の須恵器・土師器、製塩土器（知多１～３類）、鉄製品および獣骨など一括性の高い遺物が出土した。南半部は異時期の遺物の混在、青灰色粘土・粗砂の堆積等から古代の汀線付近と推定され、明確な遺構は認められない。

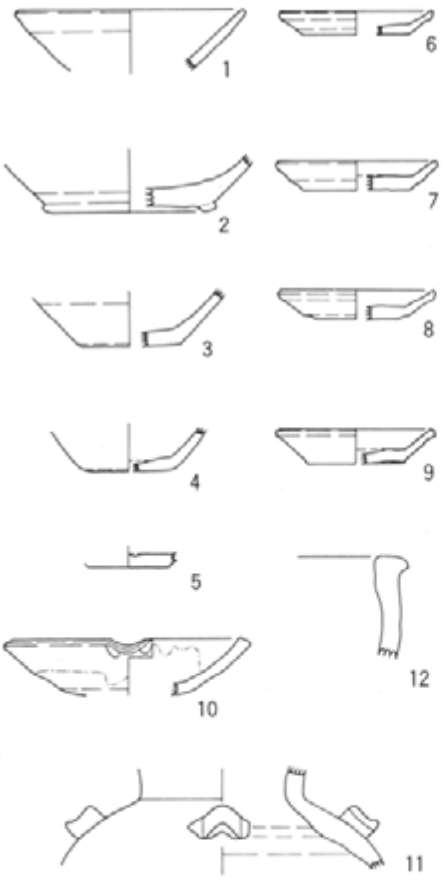
まとめ

古代土器製塩に関しては、その遺跡立地の性格上、得られる情報が少なく、生産過程は未だ明確でない。また、海浜集落の空間利用、社会体制内での位置付け、流通経路等、残された課題は多い。「知多」に限れば、土器編年の再検討、地域間の交流の問題等が挙げられる。「知多」と中央を結ぶ「塩の道」を多角的に捉え、辿り直す時期に来ている。　（福岡晃彦）

小島（おじま）遺跡



調査前風景



出土遺物（1/4）

小島遺跡は沖積低地に所在する残存丘陵の南側斜面に所在している。今回の調査区は，この斜面低部付近にあたる。

調査区は現在畑地として利用されている。畑の耕作土を掘り下げると、赤褐色を呈する搬入土を見ることができ、この場所が土砂搬入作業により、従来水田だったものを畑地へと転換されている様子を見ることができた。なお、遺構は旧水田の耕作土下で検出できるが、遺物は搬入土中より見られるものが大半である。ただし、これらは12～13世紀を中心とする時期に比較的まとまっており、若干の注意を必要とする。なお、この土層は、調査区北方に所在する民家裏を掘削した時の廃土を搬入したもので、今回出土している遺物の多くは当初この場所に所在していたことが推定できる。従って、小島遺跡の主要部分はすでに消失していることが推定でき、今回検出している遺構はその外縁部に位置したものであろう。

小島遺跡の西南方向数十mには、矢作古川河床で、砂層中より二次堆積で多量の遺物が採集されており、矢作古川河床遺跡として知られるが、小島遺跡は、この実体であった可能性が高い。

（池本正明）

試　掘　調　査

西尾地区

国道23号バイパス線予定地内の安藤川と家武町地内に挟まれた地域で、岡島遺跡の範囲外について遺跡の存在及び範囲確認を行った。

江原遺跡・岡島B遺跡（T.T.1～9）

表土中より平安時代～鎌倉時代の遺物細片を若干見たのみで、遺構の存在は確認できなかった。

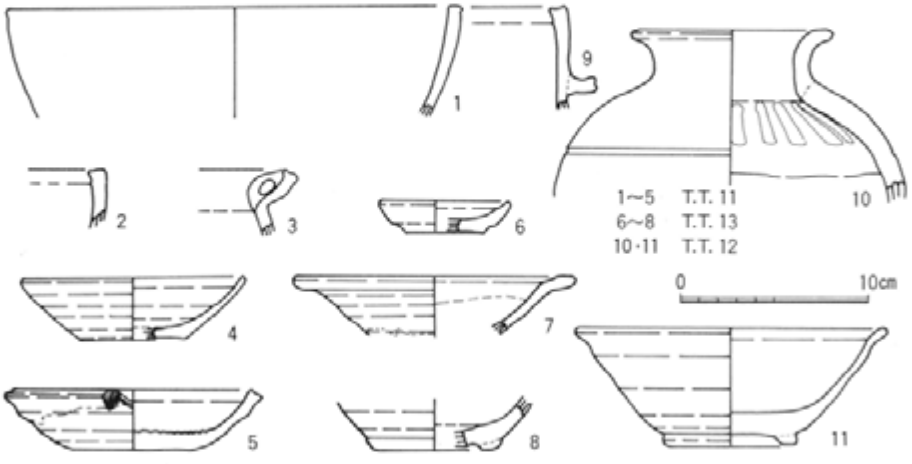
室遺跡（T.T.10～16）

沖積低地の微高地上において包含層の存在を確認。溝・土坑などの遺構も検出した他、平安時代末期～室町時代の遺物を多量に見ることができた。1～3・9は土師器鍋・釜類。4・6はロクロ成形の土師器皿。5・7は施釉陶器で、8・11・12は灰釉系陶器、10は三脇壺である。なお、室遺跡南方には『室城』が存在し、年代的一致から関連が注目される。

（池本正明）



第1図　試掘地点



第2図　室遺跡出土遺物

調査研究

朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体

渡　辺　　誠*

(1)　はじめに

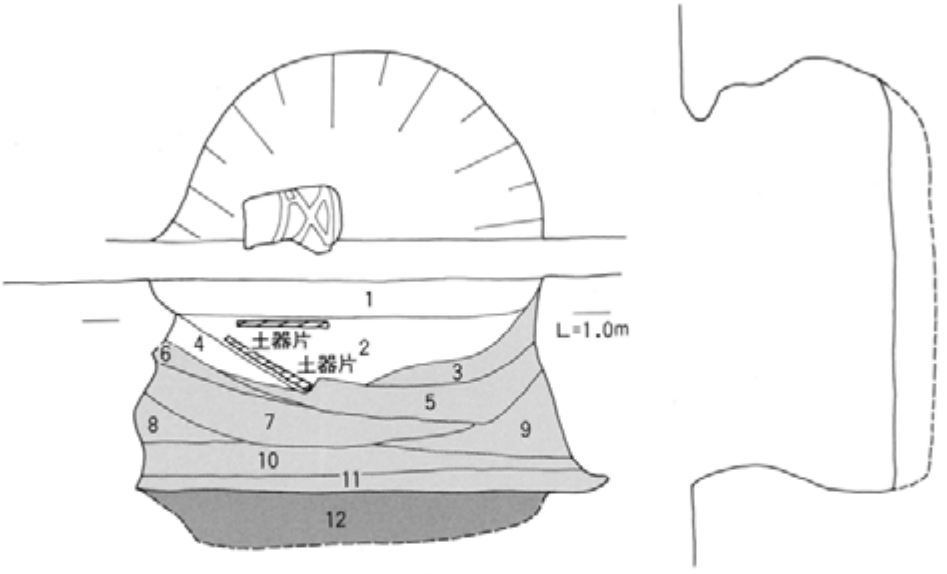
愛知県埋蔵文化財センターより調査の機会を与えられた、同県西春日井郡清洲町所在朝日遺跡の縄文時代貯蔵穴出土植物遺体は、すでに採取されていた資料を名古屋大学考古学研究室へ搬入の上水洗選別作業を行い、検討を加えたものである。

(2)　出土状態

1988年８月に朝日遺跡の63A'区において、旧河道の斜面に縄文時代の貯蔵穴２基が発掘された。現海水準の１ｍ未満の低位にあることが重要である。

２基のうち１基（ＳＫ01）には植物遺体はみられなかったが、他の１基（ＳＫ02）にはドングリ類が検出された。このＳＫ02は径１～1.2m、深さ5.5mの円形で、資料はその北半部分より採取されている（第１図）。

青灰色シルト層に掘り込まれたこの貯蔵穴内の層序は、次のとおりである。



第１図　貯蔵穴（SK02）実測図

＊　名古屋大学文学部助教授

第１・２層：黒色粘質シルト（土器廃棄壙塀埋土）

第３・４層：青灰色粘質シルトブロック混じり黒色粘質シルト（崩土または埋立土掘り残しか？）

第５層：暗灰色粘質シルト（ドングリ少）

第６層：暗灰色粘質シルト、やや砂（ドングリ少）

第７層：暗灰色微砂土（ドングリ混）

第８・９層：３と同じ、崩土（ドングリ混）

第10層：灰色粘質シルト（ドングリ混）

第11層：青灰色粘質シルト、整地層か？（ドングリ混）

第12層：褐色砂の中に青灰色粘質シルト層が浸透して界面不明瞭（浸透層）

これらは、第１・２層、第３～11層、および第12層の３群に大別される。

このうち12層は地山であり、第１・２層は廃棄壙としての転用部分である。すなわち第３～11層が本来の貯蔵穴としての層序を示しているのであり、ドングリ類もこれらの層からのみ検出されている。

なお第１・２層より出土した土器は、底部のみを欠くバケツ形深鉢であり、縄文時代後期前葉に属する典型的な関東地方の堀之内Ⅱ式土器である。貯蔵穴の年代を明確に示すとともに、文化史的にもきわめて興味深い資料である。

(3) 資料のリスト

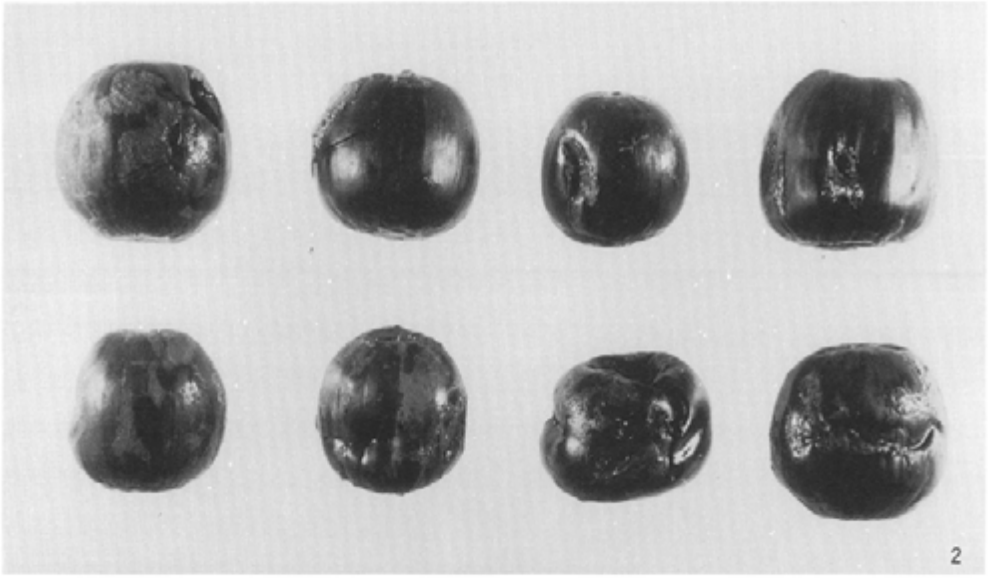
搬入された資料は土のままであり、その量と層序との関係は第１表に示すとおりである。量は第10・11層が多く、第５・７層もやや多い。ドングリ類の検出量もほぼ同一傾向を示している。

水洗選別で検出された資料の内訳は、第２表に示すとおりである。大部分はドングリ類であるが、他に少量の微細種子などが含まれている。ただしこれらの微細種子は低地遺跡

資料番号	注記					備考
1	朝日遺跡	63A' VIA 17i	SK02	第５層	880825	コンテナ２箱
2	〃	〃	〃	第６層	〃	〃 １箱
3	〃	〃	〃	第７層	〃	〃 ２箱
4	〃	〃	〃	第８層	〃	〃 １箱
5	〃	〃	〃	第９層	〃	〃 １箱
6	〃	〃	〃	第10層	〃	〃 ３箱
7	〃	〃	〃	第11層	〃	〃 ４箱

第１表　搬入資料一覧表





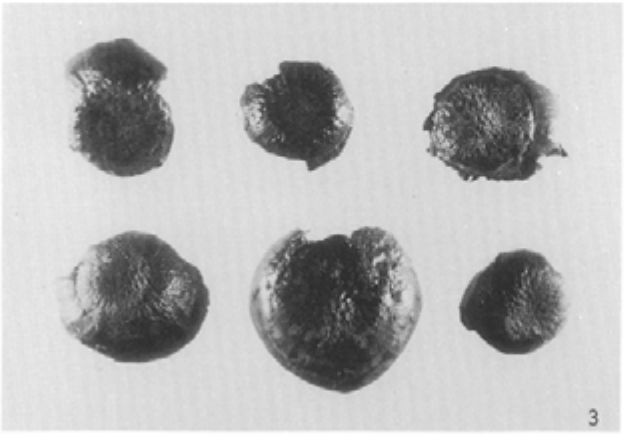




写真1　ドングリ類（実大）　1：上面観、2：側面観、3：へそ、4：子葉.

にあっては混入の危険性が高く、本遺跡でもしばしば冠水しているためその危険性が高く、検討対象に含めないことにした。また炭化材は細片のみで、土器も細片１片のみである。

(4) ドングリ類の検討

ドングリ類は子葉がほとんど残っていないため、若干の種皮が水づけ状態で辛うじて形状を保っているにすぎない。このため明確にサイズを測定することは不可能であるが、すべて球形で大型の種類のみであり、高さ・径とも2.0㎝前後のものがもっとも多い(写真１－１・２)。このサイズは、ブナ科コナラ属コナラ亜属のクヌギ (Quercus acutissima C ARR)、あるいはアベマキ (Quercus variabilis BLUME) などであると考えられる。

これらはほとんど実だけを採集していたとみられ、殻斗はまったく検出されていない。

なお子葉（同４）と幼果も、ごく少量検出された。

これらの個体数の算定には、へその部分（同３）を用い、２分の１以上残っている場合についてのみ算定した。その結果は第３表に示すとおりである。総数322個体である。

しかしこれとは別に、久保和士氏等の努力によって多数検出された頂端の花被（写真２）によると2641個体となり、へそによる個体数の８倍以上となる。この差は低地における貯蔵穴の機能を理解するうえできわめて重要視されるので、項を改めて検討することとする。

(5) 低地貯蔵穴の機能

そもそも本遺跡例のような低湿地における貯蔵穴の機能はアク抜きにあるのではなく、乾燥させず短期貯蔵する点にある。堅果類を長期保存するためには、よく乾燥させた上で

資料番号＼遺物名	ドングリ類				微細種子	炭化材	土器破片
	種皮	花被	子葉	幼果			
1	○	○			○	○	
2	○	○			○	○	
3	○	○			○	○	
4	○	○			○	○	
5	○	○			○	○	
6	○	○	○		○	○	○
7	○	○		○	○	○	

第２表　遺物一覧表

資料番号＼部位	へ　そ	花　被
1	7	86
2	5	19
3	22	86
4	47	38
5	14	71
6	177	865
7	50	1476
計	322	2641

第３表　ドングリ類数量表

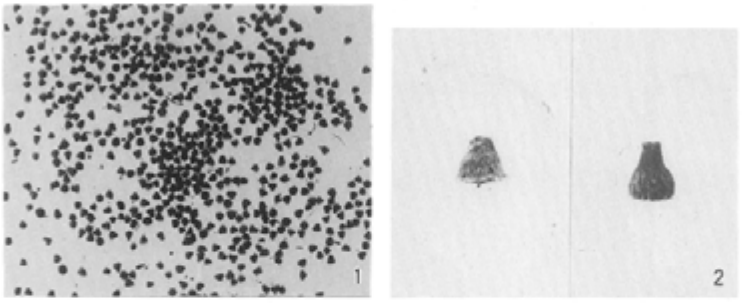


写真2　ドングリ類の花被　　1：実大、2：10倍大

屋根裏などに貯蔵するのであるが、そのかわり皮むきやアク抜きの手間が倍加する。そのため秋に採集したものをその冬に食べる場合には、湿気のあるところに乾燥させずに生貯蔵するのである。その作業は毎冬繰り返されるのであり、本貯蔵穴例のようにヘそと花被との間に8倍以上もの差があるということは、模式的に記せば、へそは最終時点での取り残し、花被は貯蔵された全量を示しているとみなし、使用回数を示していると理解することができる。

ドングリ類については、アク抜きの有無や方法の差異などを中心に、第4表のように4類に分類される。そして本遺跡例はアク抜きの必要なA類のみである。

ドングリ類のアクは水溶性のタンニンであるが、その質と量に差異があるらしく、A・B類とC類とでは若干アク抜きの方法に違いがある。その理由は食べ方にも関係があり、A・B類は粒のままの場合には丹念な煮沸と水さらしを何度も繰り返さなければアク抜きができない。しかし製粉さえすれば水さらしだけでもアク抜きができる。

これに対してC類の場合は、製粉の有無にかかわらず水さらしだけでもアク抜きができる、という違いがある。縄文時代前期以降の石皿などの製粉用具の発達は、これらのことと深い関係があるとみなされる。(渡辺1987)。

民俗分類	属		種(出土例のみ)	森林帯
A．クヌギ類 製粉または加熱処理＋水さらし	コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 (東北日本) (韓国)
B．ナラ類 製粉または加熱処理＋水さらし			ミズナラ コナラ	
C．カシ類 水さらしのみ		アカガシ亜属	アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 (西南日本) (韓国南海岸)
D．シイ類など			イチイガシ ツブラジイ・スダジイ	
	シイノキ属			
	マテバシイ属		マテバシイ	

第4表　ドングリ類の分類

本貯蔵穴例は縄文時代後期に属すのであるから、すでに製粉用具は十分に発達した段階である。したがってアク抜きにどの方法が使われたかという問題に関しては、今後の本遺跡における石皿・磨石などの製粉用具の研究に期待したい。

(6) 本貯蔵穴の意義

本遺跡例のような良好な状態で発掘された縄文時代の貯蔵穴は、東海地方においては晩期に属す東海市トゝメキ遺跡（渡辺1988）に次ぐものである。ドングリの種類もほぼ同じである。これによって縄文時代の生活の実態が明らかになるばかりでなく、弥生時代の研究にも寄与するところが少なくない。

ドングリ類はごく近年まで救慌食料として重要な役割を果たしていたことからも明らかなように、低生産力段階の弥生時代の初期稲作の発展を、背後から大きく支えていたことが十分に考えられる。初期稲作の第１次波及地帯の東限に位置する濃尾平野における縄文時代から弥生時代への移行過程は、土器論ばかりに固執せず、生業活動それ自体に即してさらに研究を深める必要があるのと考えられる。

また本遺跡の調査自体の問題としても、新たな課題が提起されることになった。従来断片的に出土していた縄文時代資料はやはり集落址の存在を示唆していたのであり、貯蔵穴が確認された以上、住居址などの検出が重要な調査目標の一つとして登場してきたといえるであろう。

引用文献目録

渡辺　誠、1987：縄文時代の植物質食料・ドングリ類。考古学ジャーナル、279. 24～27頁。東京。
――　、1988：貯蔵穴出土の大型植物遺体。トゝメキ遺跡，22～25頁。東海。

謝　辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏、資料整理にご協力頂いた名古屋大学文学研究科前期課程学生の久保和士氏、同文学部学生の鈴木　元・梶　昌樹氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。

古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷

森　勇一・伊藤隆彦

Ⅰ．はじめに

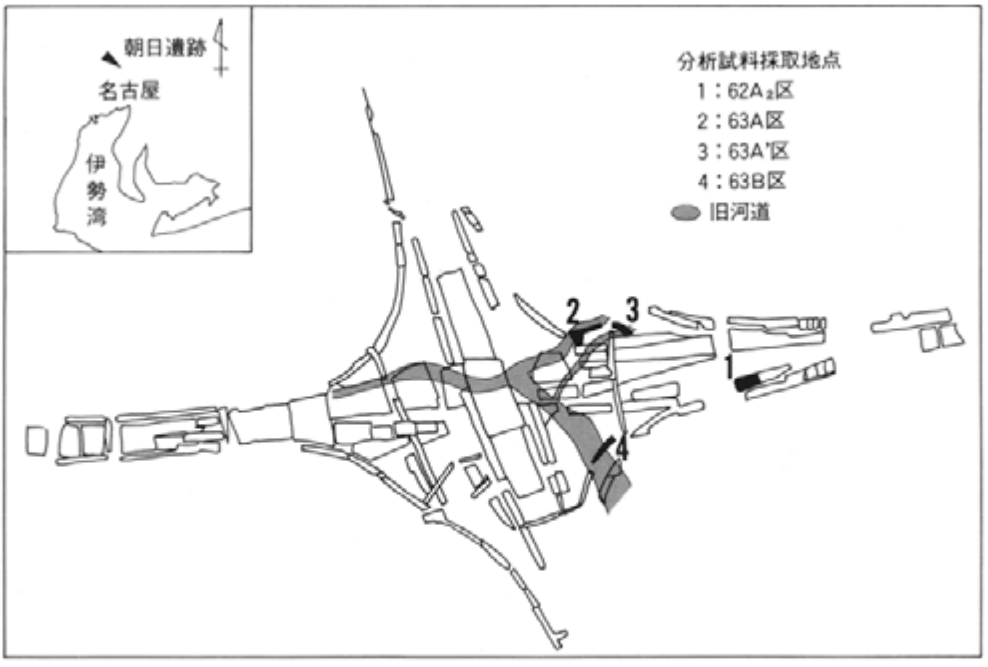
愛知県朝日遺跡において、珪藻遺骸及び昆虫遺体の分析を行い、古環境の復元を試みたのでその概要をここに報告する。

珪藻は、珪酸質の被殻を有し堆積物中によく保存されること、種によって明瞭な住みわけがみられることなどから、遺跡周辺の水域環境の復元に重要な役割を果たす。一方、昆虫は、生物の中で最も多い種類数を誇り、あらゆる環境に住みわけている。また、死後の移動が少ないことなどから、遺跡周辺の狭い地域の古環境の復元には有効である。

そこで今回、これらの分析をあわせて行い、さらに大型植物遺体の検出も行って、より詳細な環境復元に努めた。

Ⅱ．試料の採取と分析方法

試料の採取地点を第１図に示す。



第１図　遺跡位置図及び分析試料採取地点

1．珪　藻

分析試料は、地層断面から5㎝または2.5㎝ごとの連続試料として採取した。層準と柱状図は第2図に示すとおりである。

試料の分析にあたって、乾燥重量1gをトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。岩片除去ののち、水洗を4～5回繰り返しながら、同時に比重選別を行った。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し各試料とも200個の珪藻殻を同定した。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。

2．昆虫

層序の明確な地層断面からできるだけ多くの試料を採取し、主にブロック割り法によって昆虫遺体を検出した。また、同時に大型植物遺体も検出した。昆虫遺体の同定は、おもに筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で比較しながら行った。

Ⅲ．分析結果

同定した珪藻遺骸のリストを第1表に、その生態値の百分率と出現頻度等を第2図に示した。出現した珪藻は41属181種（15変種・1品種及び未同定種7種を含む）計5333個体である。昆虫遺体の同定結果を第2表に示した。総点数（節片または破片数）9000点以上に及び、詳細な種の検討を行っていないものも多い。科以上のレベルまで同定できたもの16科1619点、そのうち属まで同定できたもの7属109点、種まで同定できたもの43種459点である。

次に各時期の出現傾向について簡単に述べる。

縄文時代中期（珪藻分析試料No.1～3）

出現珪藻の大部分が中塩性ないし真塩性種で占められる。汽水性の*Melosira* sp.-A、*Achnanthes haukiana*、*Auriscus caelatus*、及び内湾ないし沿岸海域に広く分布する*Thalassiosira* spp.を多産した。

縄文時代中・後期（同No.4）

珪藻遺骸の含有数はきわめて乏しい。*Synedra ulua*、*Navicula radiosa*などの破片をわずかに産した。

昆虫遺体では、小型のゲンゴロウ科、ガムシ科およびミズスマシ科に属する水生昆虫を多産した。これらの多くは止水域を好んで生息する。また、湿地や池沼に生息するネクイ

ハムシ類が多く見つかった。その中に、現在までの同定基準によるとアシボソネクイハムシに同定される種が検出された。野尻湖昆虫グループ（1985）によれば、本種は長野県小谷村を西・南限とし、亜寒帯～冷温帯に分布するとされている。この他に、食葉性昆虫群（コガネムシ科）を多産する。

縄文時代後期（同No.5～7）

Cymbella turgidula、*Cocconeis placentula* var.*euglypta*、*Rhopalodia gibberula*、*Synedra ulna*などの好アルカリ～pH不定性、水流不定～流水性で付着生の種群が多く検出された。

弥生時代中期以前？（同No.8～9、10～12）

好アルカリ～pH不定性の*S.ulna*、*Hantzchia amphioxys*、*Diploneis ovalis*などが比較的多く出現した。その他に、No.11の試料から汽水性種の*Melosira* sp.-A（約48%）、及びNo.12の試料からは好酸性・嫌塩性の*Eunotia pectinalis* var. *undulata*、*E. praerupta*、*Pinnularia gibba*、*Cymbella aspera*などの種群が多く検出された。試料ごとに出現珪藻を異にし、群集組成の変化がとらえにくい。

弥生時代中期（同No.13、14～17）

No.13の試料中より好止水性・浮遊生種の*Melosira ambiguа*が47%の高率で検出された。また、No.14～17の試料では、好流水性～水流不定性の*Neidium iridis*、*Pinnularia gibba*、*P. microstauron*、*Amphora ovalis* var. *libyca*などの種群が多く出現した。好酸性～pH不定性の*Pinnularia*属の出現頻度も高い。

検出された昆虫遺体数が非常に少ない中で、食糞性のエンマコガネ属が目だつ。大型植物遺体では、クマナヤギ、オナモミ、イネ、ヒョウタンなどの種子が検出されている。

弥生時代後期（同No.18～21）

好酸性～pH不定性、水流不定性種の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*E. praerupta* var. *bidens*、*Pinnularia microstauron*、*P. viridis*、及び好流水性～水流不定性種の*A. ovalis* var. *libyca*、*Meridion circulare*などが多く出現した。

検出された昆虫遺体数は少ない。水生昆虫として、清流を好んで生息するモンキマメゲンゴロウが2点見つかった。また、最も多く検出されたのはマメコガネなどの食葉性昆虫である。

弥生時代後期～古墳時代（同No.22～26）

E. pectinalis var. *minor*、*E. lunaris*、*E. flexuosa*、*E. praerupta*をはじめ好酸性・水流不定性で付着生の*Eunotia*属の種群が高率で出現した。弥生時代後期同様*M. circulare*も多く検出された。

第1表　朝日遺跡産珪藻遺骸のリスト

	species	pH	CURR	FCOL	CI	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	TOTAL
1	*Achnanthes brevipes*	Alph	?	Epip	Meha	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
2	*Achnanthes clevei*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6	·	·	·	·	·	·	·	·	6
3	*Achnanthes coarctata*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	2	3	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	8
4	*Achnanthes exigua*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
5	*Achnanthes hauckiana*				Meha	31	18	23	1	·	·	9	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	82
6	*Achnanthes inflata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	1	1	2	1	·	·	1	2	·	·	·	·	1	·	·	12
7	*Achnanthes lanceolata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	2	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	7	·	6	2	·	11	·	1	·	5	·	·	·	37
8	*Achnanthes lanceolata* var. *rostrata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
9	*Achnanthes linearis*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	4	3	·	·	·	1	·	·	1	·	1	7	1	·	21
10	*Actinella brasiliensis*	Acph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	2	1	1	1	·	3	·	9	8	10	51	48	20	8	13	279
11	*Amphora holsatica*	Alph	?	Epip	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
12	*Amphora normanii*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	1	·	·	6	3	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	12
13	*Amphora ovalis* var. *libyca*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	4	·	1	1	·	1	·	·	6	10	26	16	9	3	6	4	15	12	15	2	6	2	·	3	2	6	6	4	160
14	*Amphora veneta*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5
15	*Anomoeoneis serians*	Acph	Liph	Bent	Haph	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
16	*Asterionella formosa*	Alph	Libi	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
17	*Auricula caelatus*				Euha	4	10	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	18
18	*Bacillaria paradoxa*	Ind	Ind	Bent	Meha	·	3	·	1	14	9	2	·	·	·	·	·	·	4	2	2	7	·	1	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	49
19	*Caloneis amphisbaena* fo. *subsalina*				Euha	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
20	*Caloneis bacillum*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	3	4	1	·	·	4	·	·	·	·	1	3	3	·	1	·	·	1	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	23
21	*Caloneis formosa*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	1	4
22	*Caloneis silicula*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	4	1	3	1	·	1	·	2	4	·	1	·	·	·	·	2	·	·	21
23	*Ceratoneis arcus*	Alph	R-ph	Epip	Ind	·	·	·	·	3	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	2	12
24	*Cocconeis diminuta*	Albi	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	2
25	*Cocconeis disculus*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
26	*Cocconeis placentula*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	1	3	·	13	2	1	·	·	·	2	·	·	·	·	2	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	26
27	*Cocconeis placentula* var. *euglypta*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	12	12	6	12	4	5	·	·	·	2	3	1	1	2	2	·	1	·	·	·	·	1	·	1	·	8	2	7	82
28	*Cocconeis scutellum*				Meha	2	3	9	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	15
29	*Cyclotella kützingiana*	Alph	Liph	Plan	Ind	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	2	·	·	·	·	·	·	5
30	*Cyclotella meneghiniana*	Alph	Ind	Plan	Haph	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6	9	1	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	17
31	*Cyclotella stylorum*				Euha	5	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5
32	*Cymatopleura solea*	Albi	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
33	*Cymbella affinis*	Achi	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	6	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	10
34	*Cymbella aspera*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	1	1	1	1	·	1	4	10	·	·	1	2	1	4	1	1	1	1	1	1	6	1	1	2	1	1	4	·	49
35	*Cymbella cuspidata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	2	·	·	3
36	*Cymbella gracilis*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	3	1	·	·	·	·	1	·	4	·	·	·	·	1	2	14
37	*Cymbella minuta*	Ind	R-ph	Epip	Ind	·	·	·	·	3	4	2	·	·	2	·	·	·	3	9	5	1	7	3	6	·	2	1	3	·	2	·	·	1	7	2	6	69
38	*Cymbella naviculiformis*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	2	6	3	2	1	1	·	·	2	·	·	1	·	2	·	22
39	*Cymbella sinuata*	Ind	Libi	Epip	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	1	5
40	*Cymbella tumida*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	2	2	5	6	1	1	·	1	·	6	6	5	·	5	2	·	·	·	·	·	·	2	·	·	7	2	2	2	57
41	*Cymbella turgidula*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	8	17	19	8	·	1	·	·	·	4	·	·	2	4	2	4	·	2	1	3	·	1	·	·	3	11	1	6	97
42	*Diatoma hiemale*	Alph	R-ph	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
43	*Diatoma vulgare*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
44	*Dimeregramma minor*				Euha	2	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5
45	*Diploneis ovalis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	1	2	·	4	2	3	10	7	20	·	·	2	1	·	2	1	1	·	·	·	·	2	·	·	·	1	·	1	60
46	*Diploneis pseudovalis*	Alph	Ind	Bent	Meha	1	·	·	14	11	8	·	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	38
47	*Diploneis puella*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
48	*Diploneis smithii*	Alph	Ind	Epip	Meha	·	·	2	·	2	4	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	9
49	*Epithemia turgida*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	1	·	1	·	1	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
50	*Epithemia zebra*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	1	·	2	7	6	4	5	7	2	4	·	1	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	11	3	4	1	61
51	*Eunotia diodon*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	4	·	1	·	·	3	·	·	10
52	*Eunotia flexuosa*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	3	·	3	1	·	3	5	·	6	·	3	25	2	6	6	·	6	5	14	16	106
53	*Eunotia formica*	Acph	Liph	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	1	1	·	·	·	1	·	·	1	·	·	1	·	·	·	·	6
54	*Eunotia lunaris*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	2	·	·	1	·	·	·	1	2	·	·	·	9	3	2	5	11	11	9	11	2	1	·	·	·	·	·	70
55	*Eunotia monodon*	Acph	Liph	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
56	*Eunotia pectinalis*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	1	1	4	1	2	·	8	2	·	4	1	1	3	6	5	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	43
57	*Eunotia pectinalis* var. *minor*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	1	·	·	2	2	4	·	1	·	·	·	2	6	11	2	7	30	9	6	17	19	20	37	46	18	18	20	1	9	11	4	303
58	*Eunotia pectinalis* var. *undulata*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	1	·	2	2	·	2	1	2	41	·	·	·	4	2	4	3	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	1	·	1	68
59	*Eunotia praerupta*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	2	·	·	·	3	1	·	10	·	5	·	1	2	·	1	·	·	2	2	5	9	2	1	·	2	·	·	·	48
60	*Eunotia praerupta* var. *bidens*	Achi	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	7	22	2	·	1	1	·	14	5	11	7	12	17	2	·	1	1	·	2	·	·	106
61	*Eunotia robusta*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	1	·	1	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7
62	*Eunotia serra*	Ind	R-ph	Plan	Meha	·	·	·	·	·	3	4	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	8
63	*Frugilaria bicapitata*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
64	*Frugilaria construens*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	7	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	1	·	1	·	4	·	·	·	2	·	·	19
65	*Frugilaria pinnata*	Acph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
66	*Frugilaria* sp. -1				Euha	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
67	*Frugilaria virescens*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
68	*Frustulia rhomboides*	Acph	Liph	Epip	Hpho	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1	1	10
69	*Frustulia vulgaris*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	2	1	·	·	·	·	·	·	1	2	·	1	1	1	·	3	3	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	16
70	*Gomphonema augur*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
71	*Gomphonema acuminatum*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	·	1	·	·	·	3	3	·	·	3	·	·	·	3	·	·	·	16
72	*Gomphonema acuminatum* var. *coronata*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2	·	2	·	2	3	6	1	·	1	6	7	9	43
73	*Gomphonema acuminatum* var. *turris*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	1	12	6	·	·	·	·	1	·	3	1	5	3	7	6	7	6	4	7	71
74	*Gomphonema angustatum*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7	·	4	·	9	·	5	2	·	·	·	·	·	·	·	27
75	*Gomphonema augur* var. *gautieri*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5	2	9	·	7	1	25
76	*Gomphonema clevei*	Alph	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6	2	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	10
77	*Gomphonema constrictum*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	11	·	2	1	·	1	·	·	·	·	·	1	4	1	2	4	6	7	2	43
78	*Gomphonema gracile*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	·	1	·	·	·	1	·	·	5	·	1	·	·	1	2	·	3	17
79	*Gomphonema intricatum*	Alph	Libi	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	4	3	2	·	·	·	3	·	1	3	3	·	4	1	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1	26
80	*Gomphonema intricatum* var. *vibrio*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	7	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7
81	*Gomphonema longiceps*	Ind	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1
82	*Gomphonema parvulum*	Ind	R-ph	Epip	Ind	·	·	·	·	11	·	·	2	·	1	·	·	·	6	3	3	3	15	13	12	18	27	17	32	22	8	12	1	2	4	3	3	218
83	*Gomphonema* sp. -1	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	3	8	3	18	9	2	1	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	46
84	*Gomphonema* sp. -2	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
85	*Gomphonema sphaerophorum*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	6	1	·	5	3	2	1	21
86	*Gomphonema subtile*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
87	*Gramatophora oceanica*				Euha	7	3	8	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	18
88	*Gyrosigma acuminatum*	Acbi	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
89	*Hantzschia amphioxys*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	6	12	13	6	7	16	2	15	·	4	8	3	11	1	1	4	2	1	·	1	·	1	3	2	1	·	1	·	·	121
90	*Hantzschia amphioxys* var. *vivax*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
91	*Melosira ambigua*	Ind	Liph	Plan	Ind	·	·	·	·	1	2	1	·	1	·	1	1	47	2	3	4	6	·	4	·	·	3	1	1	·	32	3	1	2	3	19	11	149
92	*Melosira distans*	Ind	Liph	Plan	Ind	1	·	·	·	1	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2	3	2	2	6	2	23
93	*Melosira granulata*	Alph	Liph	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	3
94	*Melosira islandica*	Ind	Ind	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6	·	·	·	6
95	*Melosira* sp. -A				Euha	56	36	51	·	·	·	·	·	·	40	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	183
96	*Melosira undulata*	Alph	Libi	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
97	*Melosira varians*	Alph	Ind	Plan	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	3	·	·	·	·	1	3	·	·	·	·	4	·	·	·	·	13
98	*Meridion circulare*	Alph	R-ph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	5	·	·	·	13	1	6	16	15	17	1	3	·	·	·	·	·	·	·	·	77

	species	pH	CURR	ECOL	CI	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	TOTAL
99	*Nitzschia granulata*				Euha	3	12	6	·	·	·	·	·	·	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	35
100	*Nitzschia punctata*				Euha	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
101	*Navicula americana*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7	1	4	3	1	1	·	·	·	·	·	2	1	1	22
102	*Navicula bacillum*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4	·	·	·	1	3	·	1	·	4	1	1	1	·	·	1	7	2	3	29
103	*Navicula contenta*	Alph	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	2	·	1	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	10
104	*Navicula cryptocephala*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	4	1	·	·	·	·	·	·	1	3	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	12
105	*Navicula cuspidata*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	1	6
106	*Navicula elginensis*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	·	·	9	2	2	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	4	2	·	2	6	5	2	2	·	·	·	·	·	·	·	4	42
107	*Navicula elginensis* var. *neglecta*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	·	1	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
108	*Navicula elginensis* var. *cuneata*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	·	5	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	8
109	*Navicula hasta*	Alph	Liph	Bent	Ind	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	1	1	4
110	*Navicula hungarica*	Albi	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
111	*Navicula marina*				Euha	6	2	3	·	·	·	·	·	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	15
112	*Navicula muticuloides*	Alph	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
113	*Navicula mutica*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	3	4	1	2	6	4	·	·	·	1	·	·	2	1	4	·	·	2	·	2	1	2	·	·	·	·	·	·	35
114	*Navicula peregrina*				Euha	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
115	*Navicula pupula*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	1	·	·	1	1	·	·	·	·	·	6	4	3	1	6	9	3	8	4	14	10	3	·	3	1	1	8	88
116	*Navicula pupula* var. *rectangulata*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	·	·	·	·	·	·	·	3
117	*Navicula pusilla*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
118	*Navicula radiosa*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	2	4	7	2	·	·	·	·	·	·	2	2	12	8	·	6	3	3	4	3	1	·	2	1	·	4	8	2	·	76
119	*Navicula* sp.	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
120	*Navicula tokyoensis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
121	*Navicula viridula*	Alph	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
122	*Neidium affine*	Ind	Libi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	3	2	2	1	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	14
123	*Neidium affine* var. *longiceps*	Ind	Liph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1
124	*Neidium bisulcatum*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	1	·	·	·	2	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	7
125	*Neidium hitchcockii*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
126	*Neidium iridis*	Ind	Liph	Bent	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	12	7	4	11	3	10	18	10	7	2	2	2	2	2	1	1	4	5	12	117
127	*Neidium productum*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
128	*Nitzschia cocconeiformis*				Euha	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
129	*Nitzschia granulata*				Euha	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
130	*Nitzschia linearis*	Alph	R-bi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
131	*Nitzschia obtusa*	Alph	?	Bent	Meha	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
132	*Nitzschia palea*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
133	*Nitzschia parvula*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	2
134	*Nitzschia scalaris*				Euha	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
135	*Nitzschia sinuata*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
136	*Nitzschia tryblionella*	?	?	Bent	?	·	1	1	·	1	1	1	·	1	·	·	·	·	2	2	·	2	·	1	1	2	2	2	·	·	·	·	·	·	·	·	1	21
137	*Opephora martyi*	Acbi	Liph	Bent	Ind	1	2	4	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7
138	*Pinnularia acrosphaeria*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	1	·	·	3
139	*Pinnularia appendiculata*	Acph	?	?	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2
140	*Pinnularia borealis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	2	·	2	·	2	6	·	·	·	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1	1	1	19
141	*Pinnularia braunii*	Acph	Ind	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1
142	*Pinnularia brevicostata*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	·	·	·	1	·	·	2	4	·	·	·	·	·	·	1	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	1	·	12
143	*Pinnularia dactylus*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	3	·	·	·	·	·	·	1	3	·	·	·	·	·	·	1	·	·	9
144	*Pinnularia divergentissima*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
145	*Pinnularia gibba*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	1	1	4	2	1	9	1	17	·	14	17	6	12	5	7	3	4	6	4	2	2	1	4	·	2	1	·	2	128
146	*Pinnularia hemiptera*	Acph	Libi	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
147	*Pinnularia interrupta*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	2	7	5	3	4	2	4	·	2	4	5	·	·	1	2	1	·	·	·	1	45
148	*Pinnularia leptosoma*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	3	·	1	1	·	·	1	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	9
149	*Pinnularia major*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	2	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
150	*Pinnularia microstauron*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	2	5	2	·	·	2	·	·	·	5	5	13	16	3	17	14	7	6	10	1	2	3	2	1	5	4	4	7	126
151	*Pinnularia molaris*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
152	*Pinnularia nobilis*	Acph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2	·	·	·	·	·	·	·	3
153	*Pinnularia nodosa*	Ind	R-ph	Bent	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	1	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	6
154	*Pinnularia subcapitata*	Ind	Libi	Bent	Ind	·	·	·	·	9	1	·	·	4	·	·	·	·	·	3	1	·	·	2	3	·	·	3	3	1	1	·	·	·	1	4	1	37
155	*Pinnularia viridis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	1	1	2	7	2	·	2	·	10	·	4	1	7	6	·	8	18	11	1	4	1	3	2	·	1	1	2	4	4	103
156	*Plagiogramma* sp.				Euha	1	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	4
157	*Rhoicosphenia curvata*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	3
158	*Rhopalodia gibba*	Alph	Ind	Epip	Haph	·	·	·	·	·	2	2	·	·	·	·	2	·	1	1	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	20	1	3	2	37
159	*Rhopalodia gibberula*	Alph	Ind	Epip	Meha	1	·	3	·	13	19	30	2	·	6	2	4	·	1	1	3	1	·	·	3	1	2	·	·	·	·	·	·	·	5	1	·	4	102
160	*Rhopalodia musculus*	Alph	Ind	Epip	Haph	3	3	·	·	4	1	7	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	21
161	*Stauroneis acuta*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	3	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	6
162	*Stauroneis anceps*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1	1	1	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	8
163	*Stauroneis arabarae*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	3	·	·	·	·	·	·	·	·	4
164	*Stauroneis lauenburgiana*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	2	2	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	7
165	*Stauroneis parvula*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	2
166	*Stauroneis phoenicenteron*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	8	5	·	2	6	6	7	5	18	10	4	7	·	·	1	·	6	·	1	6	15	110
167	*Surirella angusta*	Alph	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	3	3	·	1	·	1	1	·	·	·	·	·	·	11
168	*Surirella gracilis*	Ind	Ind	Bent	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
169	*Surirella ovata*	Alph	Ind	Bent	Haph	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	2	·	2	·	1	3	1	1	·	·	·	·	1	·	13
170	*Surirella robusta*	Ind	Libi	Bent	Hpho	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
171	*Surirella tenera*	?	?	Bent	?	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	1
172	*Synedra pulchella*	Albi	?	Epip	Meha	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2
173	*Synedra rumpens*	Ind	Liph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	6
174	*Synedra ulna*	Alph	Ind	Epip	Ind	·	1	1	7	14	22	31	31	29	31	4	·	·	29	26	34	25	22	9	5	5	·	3	6	12	10	4	1	14	27	8	7	418
175	*Synedra vaucheriae*	Alph	R-ph	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
176	*Tabellaria fenestrata*	Acph	Ind	Epip	Hpho	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	1	·	·	·	·	·	·	2	·	·	20	·	·	4	6	29	14	79
177	*Tabellaria flocculosa*	Ind	Ind	Epip	Ind	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	12	·	·	2	1	2	·	17
178	*Terpsinoe americana*				Euha	1	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
179	*Thalassionema nitzschioides*				Euha	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
180	*Thalassiosira* spp.				Euha	8	10	8	·	·	·	·	·	·	·	3	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	29
181	*Thalassiosira bramaputrae*				Euha	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
			TOTAL			15	16	12	24	20	20	20	12	10	13	8	4	1	9	10	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	523

生態値凡例

pH (pH spectra)

Albi : Alkalibiontic forms (真アルカリ性種)
Alph : Alkaliphilous forms (好アルカリ性種)
Ind : Indifferent forms (不定性種)
Acph : Acidophilous forms (好酸性種)
Acbi : Acidobiontic forms (真酸性種)
? : Unknown (不明種)

水流性 (Current spectra)

Libi : Limnobiontic forms (真止水性種)
Liph : Limnophilous forms (好止水性種)
Ind : Indifferent forms (不定性種)
R-ph : Rheophilous forms (好流水性種)
R-bi : Rheobiontic forms (真流水性種)
? : Unknown (不明種)

生態性 (Ecology)

Bent : Benthonic forms (底生種)
Epip : Epiphytic forms (付着生種)
Plan : Planktonic forms (浮遊生種)
? : Unknown (不明種)

塩分 (Halobion spectra)

Euhl : Euhalobous forms (真塩性種)
Meha : Mesohalobous forms (中塩性種)
Haph : Halophilous forms (好塩性種)
Ind : Indifferent forms (不定性種)
Hpho : Halophobous forms (嫌塩性種)
? : Unknown (不明種)

第２表　朝日遺跡産の昆虫遺体分析結果

生態		和名	学名	63A区	63A'区			63B区	
				縄文中・後期	弥生中期	弥生後期	一古墳	古墳	中世
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	DYTISCIDAE	13		1	27	10	45
		ヒメゲンゴロウ亜科	COLYMBETINAE	12					
		モンキマメゲンゴロウ	*Platambus pictipennis*			W-2			
		キベリクロヒメゲンゴロウ	*Ilybius apicalis*	W-11 P-2	W-1		W-4	W-1	W-3 P-1 H-1 F-1
		ヒメゲンゴロウ	*Rhantus pulverosus*					W-1	
		オオイチモンジシマゲンゴロウ	*Hydaticus pacificus*					W-2	
		コシマゲンゴロウ	*Hydaticus grammicus*		W-2		W-1	W-1	
		マルガタゲンゴロウ	*Graphoderus adamsii*					W-1	
		ゲンゴロウ	*Cybister japonicus*				W-1	W-10 P-1	W-2 F-1
		クロゲンゴロウ	*Cybister brevis*						W-1
		ゲンゴロウモドキ属	*Dytiscus* spp.	1			7	1	
		ミズスマシ属	*Gyrinus* spp.	9			2		1
		ミズスマシ	*Gyrinus japonicus*				W-2		W-2
		コミズスマシ？	*Gyrinus curtus*	W-2 P-1					W-5
		オオミズスマシ	*Dineutus orientalis*	W-12 P-3	W-1		W-3		W-5 F-2
	食植性	ガムシ科	HYDROPHILIDAE	4			3	3	27
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus*	P-1			W-1	W-1 P-2 L-4	P-1 H-1 F-1
		ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes*						W-10 P-1
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum*	W-5	W-1	W-2	W-55 P-5	W-5	W-10
		マメガムシ	*Regimbartia attenuata*					W-1	W-6
		トゲバゴマフガムシ	*Berosus lewisius*		W-1				
湿地性	食植性	ネクイハムシ亜科	DONACIINAE	25					30
		キイロネクイハムシ	*Macroplea japana*						W-4
		ガガブタネクイハムシ	*Donacia lenzi*	W-2					W-17 P-3
		イネネクイハムシ	*Donacia provosti*						W-9 H-2
		ツヤネクイハムシ	*Donacia nitidior*						W-1
		アシボソネクイハムシ	*Donacia gracilipes*	P-3					
		フトネクイハムシ？	*Donacia fukiensis*	W-1					
地表性	食糞・食屍性	マグソコガネ亜科	APHODIINAE		1				
		ダイコクコガネ亜科	SCARABAEINAE	1			1		
		エンマコガネ属	*Onthophagus* spp.	10	13		17	4	
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atripennis*						P-1
		クロマルエンマコガネ	*Onthophagus ater*				P-1		
		ヒメエンマムシ	*Margarinotus woymarni*	W-2					
		シデムシ科	SILPHIDAE					1	
		オオヒラタシデムシ	*Eusilpha japonica*				P-1	P-2	
		ヤマトモンシデムシ？	*Nicrophorus japonicus*	P-1					
		コカブトムシ	*Eophileurus chinensis*			W-1	W-4 P-1 L-1		
	食肉性	ゴミムシ科	HARPALIDAE	20	7	4	139	13	13
		トックリゴミムシ属	*Lachnocrepis* spp.				5	1	
		アオゴミムシ属	*Chlaenius* spp.				1	1	
		オオヒョウタンゴミムシ	*Scarites sulcatus*	H-2					
		オサムシ科	CARABIDAE				5	4	
		ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE				5	1	1
		ハンミョウ	*Cicindela chinensis*		F-1				
		サビキコリ	*Agrypnus binodulus*				P-4	P-1	
陸生	食植性	デオキノコムシ科	SCAPHIDIIDAE			1	1		
		デオキノコムシ属	*Scaphidium* sp.					1	
		タマムシ	*Chrysochroa fulgidissima*	W-1 F-1					
		コメツキムシ科	ELATERIDAE	37		2	18	6	4
		ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	11		1	5	2	3
		アカガネサルハムシ	*Acrothinium gaschkevitchii*	W-2			W-6		
		ゾウムシ科	CURCULIONIDAE					2	
		オオカツオゾウムシ	*Lixus divaricatus*						W-2
		コガネムシ科	SCARABAEIDAE	316	6	11	133	53	20
		ヒメカンショコガネ	*Apogonia amida*	W-3 P-1 H-1 A-4			W-1		
		スジコガネ亜科	RUTELINAE				1	3	1
		サクラコガネ属	*Anomala* spp.	3		2	2	4	24
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea*	W-2	W-1		W-1 F-3		W-1
		コガネムシ	*Mimela splendens*	W-4 F-1	W-1		W-3		
		マメコガネ	*Popillia japonica*	W-11 P-1 H-1 L-4 F-1	F-1	W-4 P-3 H-1 B-1		P-1 L-1	W-1
		コアオハナムグリ	*Oxycetonia jucunda*	W-6 A-3 L-1 F-4		P-1 A-1 F-1	W-3 S-1 L-2	W-3 P-1 A-1 L-1 F-4	W-1 L-1
		カナブン	*Rhomborrhina japonica*	W-1 H-1 S-1 F-2		F-1 L-1			
		カブトムシ	*Allomyrina dichotoma*				L-2		
		ノコギリクワガタ	*Prosopocoilus inclinatus*				H-1	H-1	
		コクワガタ	*Macrodorcas rectus*	W-1					
		半翅目	HEMIPTERA	1				2	
		不明及び未同定の甲虫目ほか		2705	116	212	2891	651	1744

＊　種まで同定できたものについては検出部位を示した。
W：前翅　P：前胸背板　H：頭部　S：小楯板　T：胸部
A：腹部　L：脚部　B：一体分　F：破片

昆虫の種数は多く、特に水生昆虫を多種・多産するが、ネクイハムシ類は1点も検出されていない。また、コガネムシ科、ハムシ科などの食葉性昆虫を多産した。

古墳時代（同No.27～29）

*Actinella brasiliensis*がきわめて高率で検出された。*A. brasiliensis*は、GRUNOWによってブラジルから記載され、主に亜熱帯または熱帯産で、泥炭の堆積による酸性水域に出現するものとされている。日本ではSKVRTZOW（1936）による長野県木崎湖・滋賀県琵琶湖からの報告のほか、KOBAYASI（1968）は、本種の生態的特性に関して腐植性の池沼を好む種類であると報告し、長田・南雲（1983）は、新潟県郡殿ノ池（水温23—23.5℃、pH;6.3、塩分濃度0‰、電気伝導度85μMHO）、田中・中島（1983）は群馬県尾瀬沼より本種を報告している。他に、好酸性・水流不定性種の*E. pectinalis* var. *minor*などの*Eunotia*属の種群が随伴する。

昆虫の種数は比較的多い。ネクイハムシ以外の水生昆虫を多産し、中でも大型で食肉性のゲンゴロウが目だつ。コガネムシ科食葉性昆虫群、訪花性のコアオハナムグリが多い。

中　世（同No.30～32）

池沼や湖岸の沈水・挺水植物に付着して生活する*Tabellaria fenestrata*や*Synedra ulna*、及び止水域の偶発性プランクトンとして出現することが多い*Melosira ambigua*、*M. distans*などが多く検出された。古墳時代に引きつづき、*A. brasiliensis*の出現率も高い。

科以上のレベルまで同定できた昆虫遺体数の3分の2以上を水生昆虫が占める。中でも、多数検出されたネクイハムシ類の中にキイロネクイハムシが4点含まれていることは特筆される。キイロネクイハムシは成虫時代も水中で生活するため水域環境の変化に敏感で、現在、日本では絶滅したともいわれている。この時期には多数生息していたものと思われる。

大型植物遺体ではヒシを多産する。

Ⅳ．古環境の変遷

珪藻遺骸群集及び昆虫遺体の分析結果をもとに、それぞれの時期について古環境の推定を行った。

1．縄文時代中期（62A区）

珪藻分析により、海水の影響を強く受けた沿岸域、砂泥質の干潟などの汽水環境が復元される。分析試料の20cm下位により、3790±90y.B.P.（Gak-13519：木片）の絶対年代が得られた。いわゆる沖積上部砂層の最上部にあたる。

2．縄文時代中・後期（62B区）

アシボソネクイハムシ、ガガブタネクイハムシの出現により、現在よりもやや冷涼な気候のもとに、泥炭（木本質泥炭）が静かに堆積するような比較的閉鎖された湿原域が広がっていたと考えられる。また、湿地には水生植物が茂り、周りには樹木が生い茂っていた。

泥炭層中から、4620±90y.B.P.(Gak—13397）をはじめ、計7点の4000年代を示す測定結果が得られた。この値は埋積浅谷の生成時期を考えるうえで重要である。

3．縄文時代後期（63A'区　SX01）

珪藻分析では流水性で、かつ付着生の種群が多く、小河川的な傾向を示す。分析試料は縄文時代後期の遺構（ドングリピット）埋土の最下層から採取したものである。ドングリピット上位の地層中から縄文時代後期の土器片が出土した。

4．弥生時代中期以前？（63A'区）

№11の試料（青灰色シルト）から約48%の汽水～海水性の珪藻遺骸を産した。青灰色シルトの生成年代及びその堆積環境については検討を要するところである。

5．弥生時代中期（63A'区　SD01）

珪藻分析により、流れのゆるやかな小河川ないし溝が推定される。昆虫及び大型植物遺体から、溝の周りは開けた環境にあったと考えられ、また、食糞性の昆虫を多産したことからゴミ捨て場的な溝であった可能性も考えられる。

6．弥生時代後期（63A'区　SD01）

珪藻分析及びモンキマメゲンゴロウの出現により、流れの速い清流がそそぎ込む小河川的な水域が復元される。弥生時代中期に比べ流水的傾向が顕著になり、溝の周りの植生もやや豊かになったと考えられる。

7．弥生時代後期－古墳時代（63A'区　SD01）

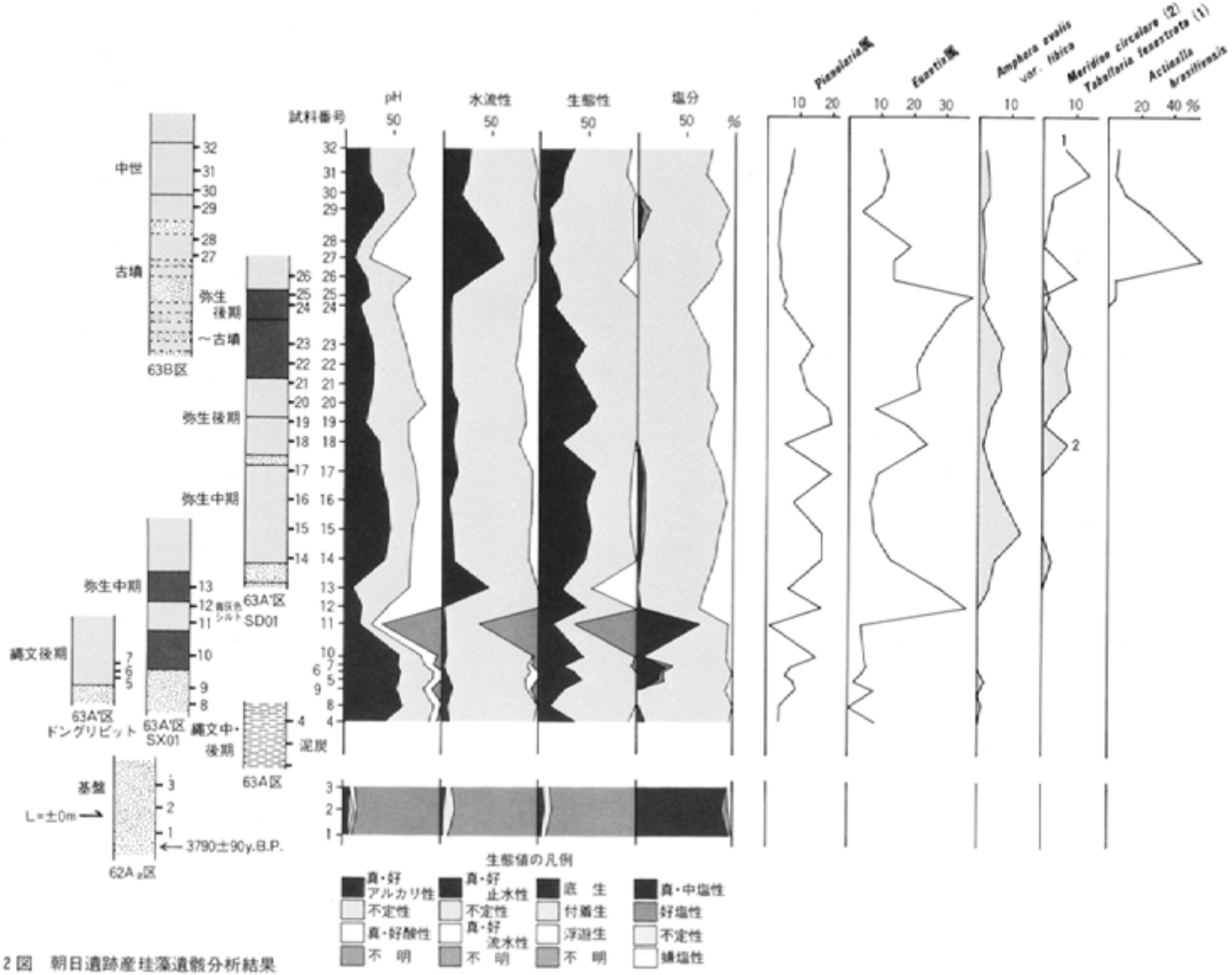
湿原域を好む*Eunotia*属の種群が多数検出されたことから、弥生時代後期に比べ、流水の流れ込みは少なくなり沼沢地化傾向へ変化したことが推定される。多種類の食葉性昆虫の出現から溝の周りの植生はさらに豊かになったと推定される。

8．古墳時代（63B区）

珪藻分析により湿地的な環境が復元されるが、安定した止水域ではなく、しばしば流水の流れ込みを受けていた。検出された昆虫の種数は非常に多く、周りには多くの植物が茂る自然度の高い環境が存在したことが考えられる。

9．中世（63B区）

キイロネクイハムシ、ガガブタネクイハムシの出現から、自然度の高い水域が推定される。珪藻分析でも浮遊生の種群が多く検出され、安定した止水域が広がっていて、ヒシな



第2図　朝日遺跡産珪藻遺骸分析結果

どの浮葉植物、挺水植物が繁茂していた様子が伺える。

Ⅴ．おわりに

珪藻分析では分析試料数が少なく、海生珪藻の分類・同定も十分ではない。また、昆虫遺体の同定作業はまだ緒についたばかりの状態である。そのため、今回報告した朝日遺跡における古環境の変遷は、その予察的段階であると考える。今後、分析試料数をふやすとともに、さらに精度の高い研究を継続していかなければならないと思う。

研究を進めるにあたり、大阪市立自然史博物館の宮武頼夫氏には館所蔵のネクイハムシ現生標本の借用及び有益な助言をいただいた。名古屋大学海津正倫・東京大学鹿島薫両博士には、古地理復元にあたって討論いただいた。また、分析試料の採取については愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人・宮腰健司両氏、昆虫・珪藻分析の抽出作業には服部恵子・中村明実両名をはじめ、多くの方々のお世話になった。これらの方々に心よりお礼申し上げる。

文　献

愛知県教育委員会　「朝日遺跡Ⅰ（本文篇１）」　1982　1-275.

安藤一男　「珪藻群集からみた埼玉県見沼低地の古環境の変遷と完新世最高海水準」『第四紀研究』 **25** 1986　165-176.

安藤一男・和田　信・高野　司　「珪藻群集からみた埼玉県荒川低地の古環境の検討」『第四紀研究』 **26** 1987　111-127.

Cholnoky, B. J.　Die Ökologie der Diatomeen Binnengewassern, Cramer, Germany. 1968 699p.

Foged, N.　On the Diatom flora of some Funen lakes. *Fol. Limnol. Scandinavica*, 1954 **6** 76*p.*

春沢圭太郎　「堺にいる動物の見わけかた２」　青少年自然科学講座　(財)堺市科学教育振興会　1987　18*p.*

Hendey, N. I.　An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters. Part Ⅴ : *Bacillariophyceae(diatom).* Her Majesty's Stationary office, London, 1964 317*p.*

日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌　「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」　『古文化財の自然科学的研究』　古文化財編集委員会編　同朋舎　1984　411-429.

Hustedt, F.　Bacillariophyta, Die Susswasser Flora Mitteleuropas, **10**　G. Fischer. Jena 1930 466*p.*

———Systimatische und Okologische Untersuchungen uder die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition.　*Arch. Hydrobiol, Suppl,* **15** 1937-1938 131-177.

———Die kieselalgen Deutschland, Osterreichs und der Schweiz unter Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete.　*Kryptogamen-Flora von Deutschland, Teil* 1～　3 *Leipzig, W. Deutschland.* 1927-1966 920p., 845p., 816p.

鹿島　薫　「沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷」『地理学評論』　59　1986　383-403.

———「珪藻分析から復原された浜名湖の完新世における古環境変遷」　*Clastic Sediments (Jour. Res. Gr. Clas. Sed. Japan,)* No. **5** 1988 95-107.

Kobayasi, H.　A Survey of Fresh Water Diatoms in the Vicinity of Tokyo. *Journ. Bot. Japan,* **20**, 1968 93-122.

小杉正人　「珪藻の古生態学上の基礎的問題」　*Diatom* **2** 1986 169-174.

———「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」　『第四紀研究』　27　1988　1-20.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.　Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, Pascher *A.Süsswasser flora von*

Mitteleuropa, 1986・1988 876*p*.,596*p*.
森　忍　「濃尾平野沖積層のケイソウ群集」『瑞浪市化石博物館研究報告』*no*. **8** 1981 127-138.
森　勇一　「愛知県勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石」『愛知県埋蔵文化財センター年報(昭和62年度)』　1988　118-137.
森本　桂ほか　『原色日本甲虫図鑑（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ)』　保育社　1986
長田敬五・南雲　保　「新潟県、郡殿ノ池および男池のケイソウ」『日本歯科大学紀要』 **12** 1983 203-238.
中根猛彦ほか　『学研中高生図鑑　昆虫Ⅱ・甲虫』　学習研究社　1975
———『原色日本昆虫図鑑（上）・（下)』　保育社　1975
野尻湖珪藻グループ　「野尻湖層の珪藻遺骸群集」『地質学論集』 **19** 1980 75-100
———「第８次野尻湖発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集」『地団研専報』 **27** 1984 63-82.
———「第９次野尻湖発掘および第４回陸上発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集」『地団研専報』 32 1987 57-71.
野尻湖昆虫グループ　「野尻湖発掘（1978－1982）で産出した昆虫化石」『地団研専報』 **27** 1984 137-156.
———『アトラス・日本のネクイハムシ』　1985　182p.
———「第９次野尻湖発掘および第４回陸上発掘で産出した昆虫化石」『地団研専報』 **32** 1987 117-136.
———『昆虫化石ハンドブック』　ニューサイエンス社　1988　126p.
Patrick, R. and C. W. Reimer, The Diatoms of the United States. *Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia*, no. **13** Philadelphia. 1966, 1975 688p. ,213p.
Schoeman, F. R. , A Systematical and Ecological Study of the Diatom Flora of Lesotho with special Reference to the water quality, Pretoria, South Africa. 1973 355p.
Skvortzow,B.W.　Diatoms from Biwa Lake, Honshu Island, Nippon. *Philip. Jour. Sci.*, **61** (2) 253-296.
多度団研珪藻グループ　「三重県北勢地域の奄芸層群上部から産した珪藻化石と古環境」『瑞浪市化石博物館研究報告』　no.**15**　1988　39-56.
田中宏之・中島啓治　「尾瀬沼の珪藻―二ツ岳降下軽石層以後の珪藻群集―」『群馬県立歴史博物館紀要』 4　1983　1-28.

Plate I

1. *Cyclotella stylorum* Brightwell
2. *Thalassiosira bramaputrae* (Ehr.) Hakanton & Locker
3. *Cyclotella striata* (Kütz.) Grunow
4. *Auliscus caelatus* Bailey
5. *Melosira* sp.-A
6. *Melosira* sp.-A
7. *Melosira ambigua* (Grun.) O. Müller
8. *Melosira ambigua* (Grun.) O. Muller
9. *Melosira varians* Agardh
10. *Meridion circulare* var. *constricta* (Ralfs) V. Heurck
11. *Meridion circulare* Agardh
12. *Achnanthes delicatula* (Kütz.) Grunow
13. *Achnanthes haukiana* (Kütz.) Grunow
14. *Achnanthes lanceolata* Brebisson
15. *Diploneis smithii* (Bréb.) Cleve
16. *Cocconeis plancentula* (Ehrenberg)
17. *Cocconeis plancentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve
18. *Rhaphoneis surirella* (Ehr.) Grunow
19. *Glyphodesmis* sp.
20. *Achnanthes inflata* Kützing
21. *Tabellaria fenestrata* (Lyngb.) Kützing
22. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kützing

Plate I

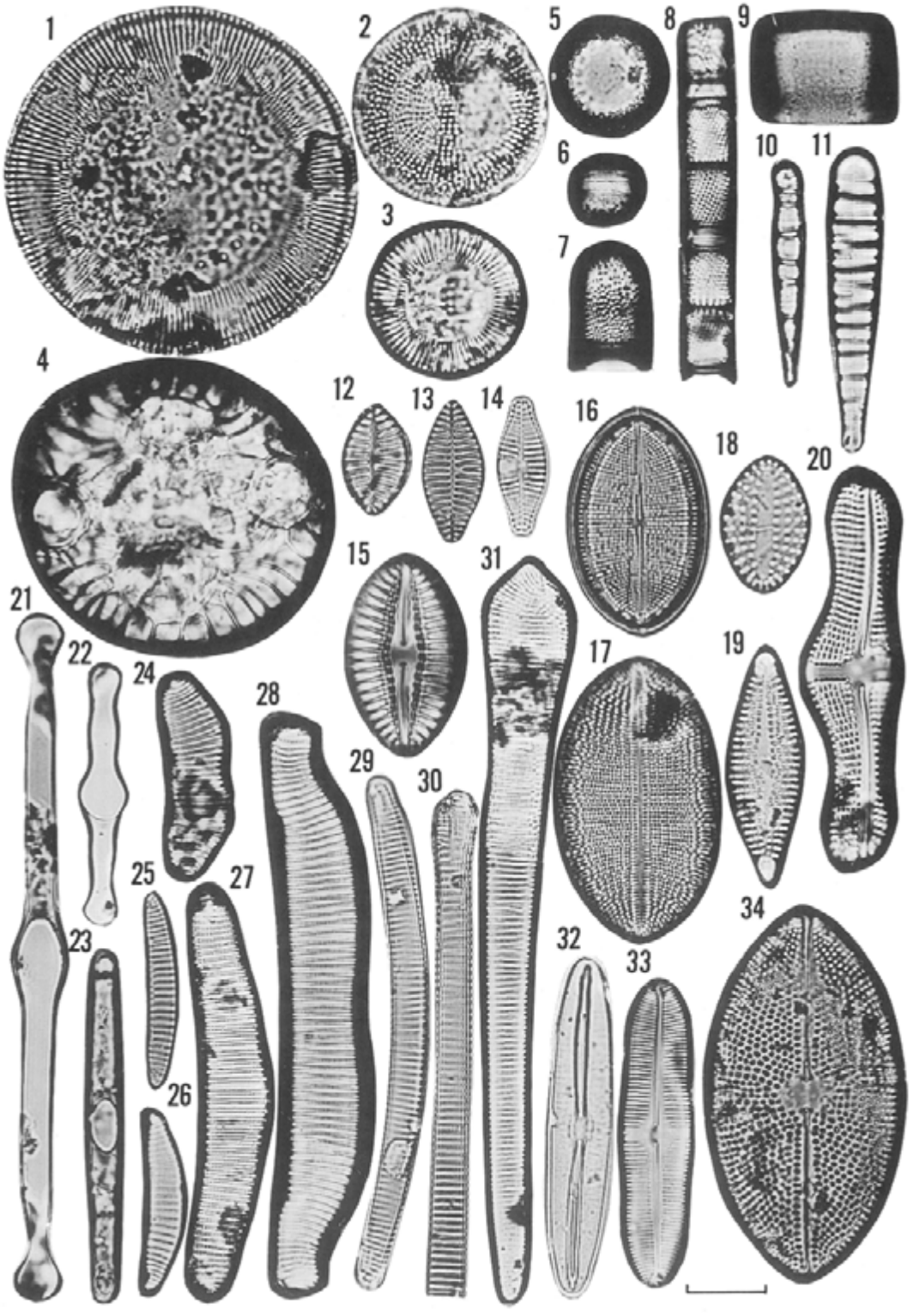

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

Plate II

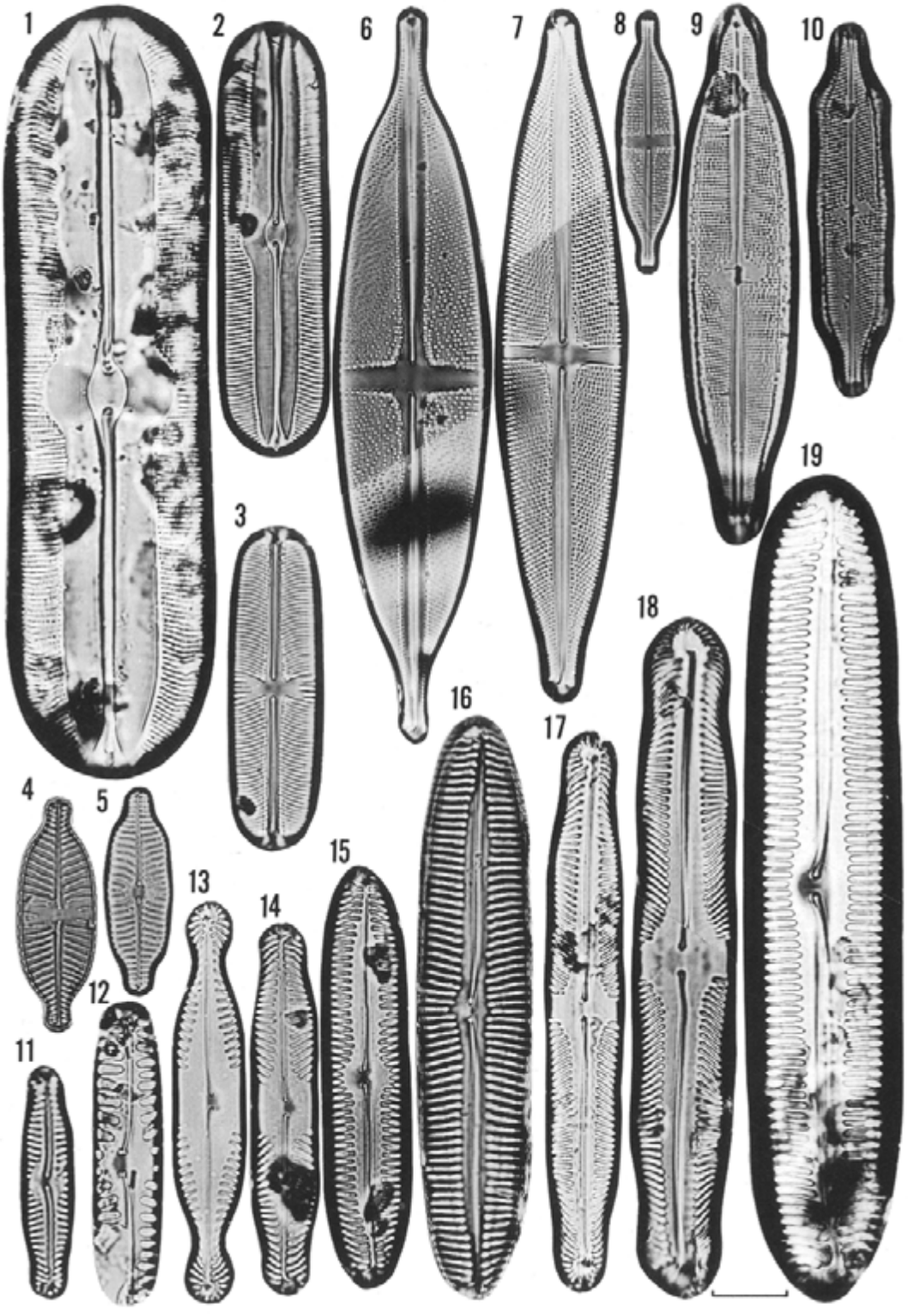


Plate III

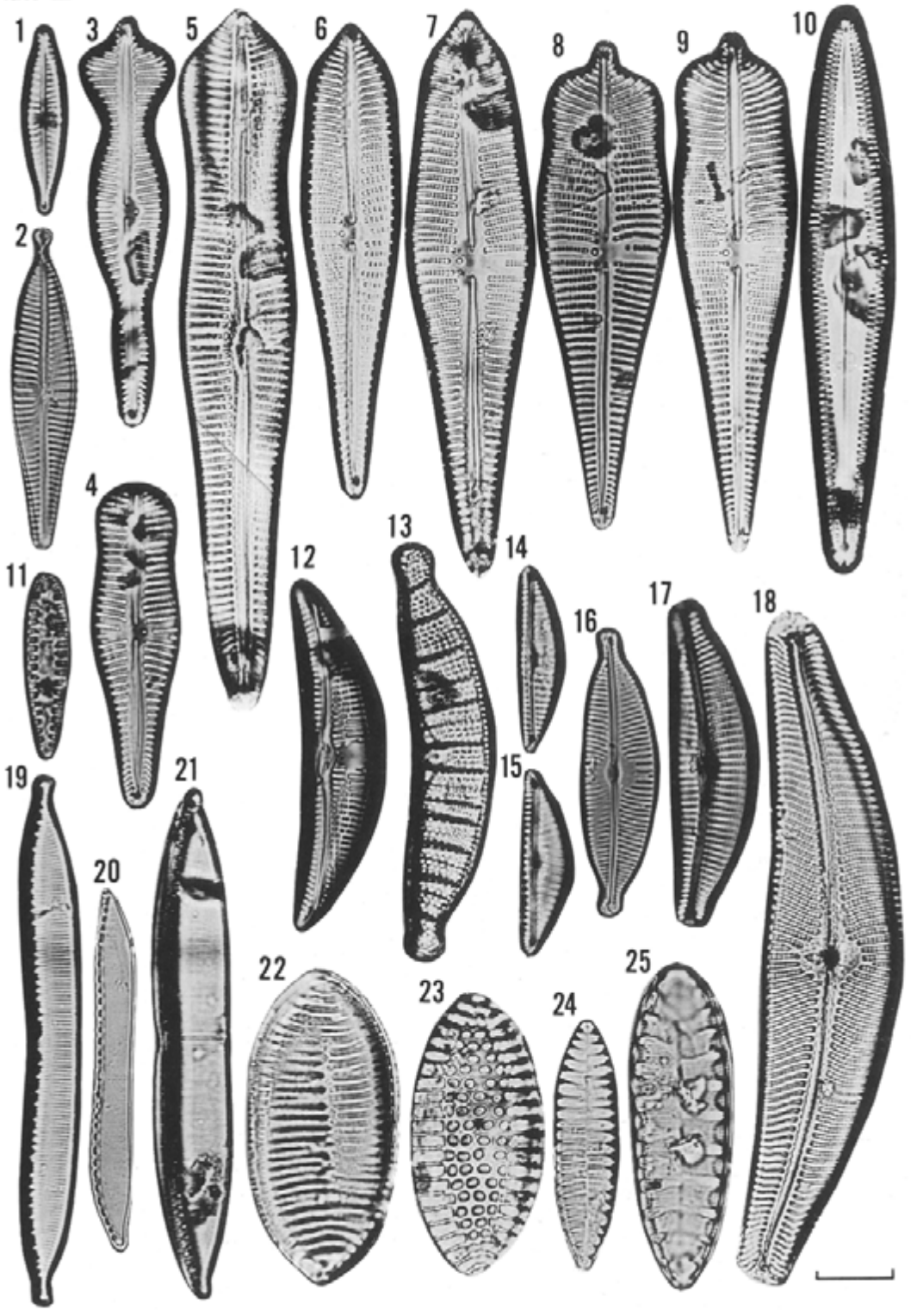
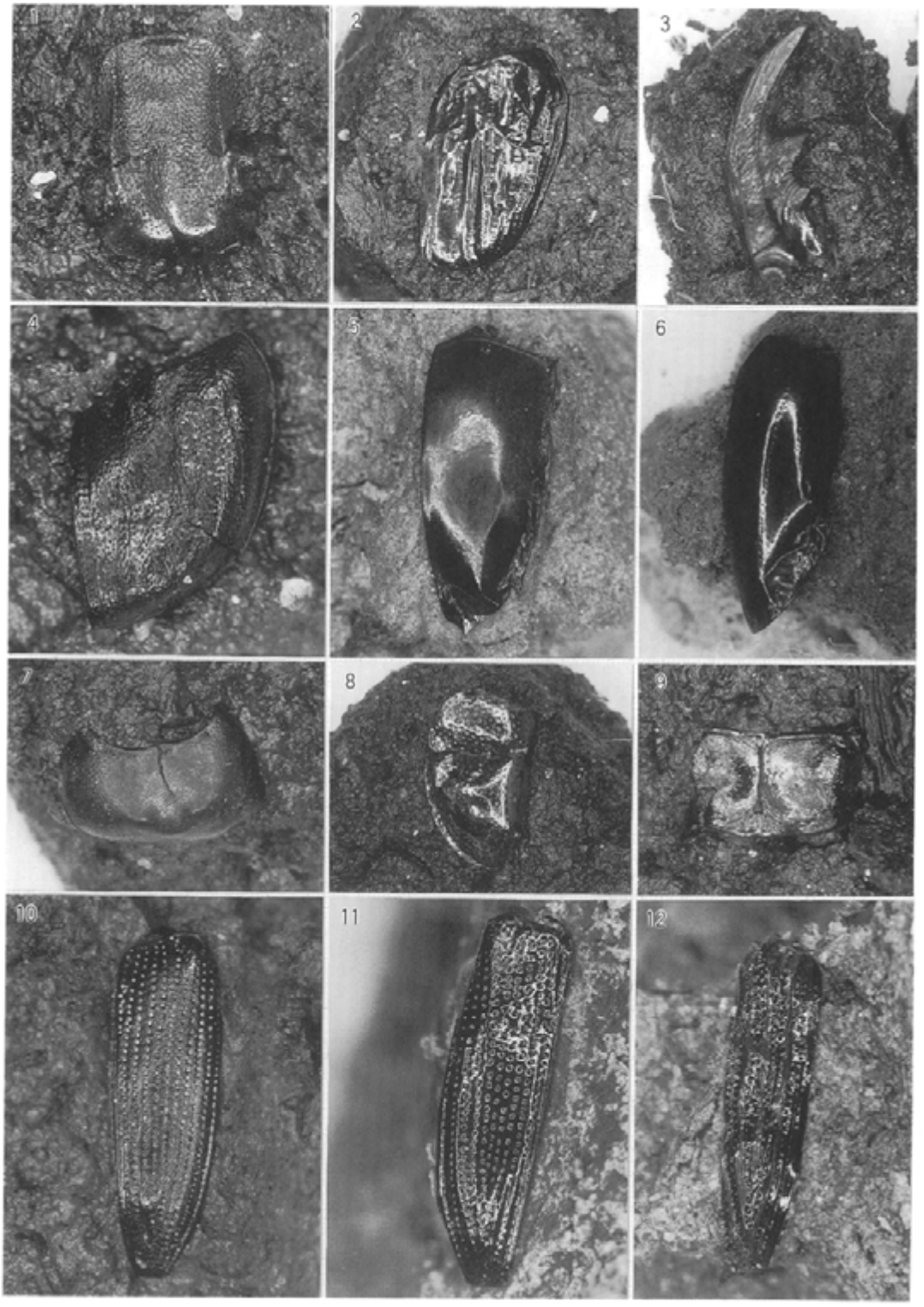


Plate Ⅳ



23. *Gramatophora oceanica* (Ehr.) Grunow
24. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow
25. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kütz.) Rabenhorst
26. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kütz.) Rabenhorst
27. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* Ralfs
28. *Eunotia praerupta* Ehrenberg
29. *Eunotia lunaris* (Ehr.) Grunow
30. *Eunotia flexuosa* Kützing
31. *Actinella brasiliensis* Grunow
32. *Frustulia vulgaris* Thwaites
33. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve
34. *Navicula marina* Ralfs

(スケールは10μm)

Plate II

1. *Navicula americana* Ehrenberg
2. *Navicula americana* Ehrenberg
3. *Navicula pupula* var. *rectangularis* (Greg.) Grunow
4. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs
5. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick
6. *Stauroneis alabamae* Heiden
7. *Stauroneis phoenicenteron* Ehrenberg
8. *Stauroneis lauenburgiana* Hustedt
9. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer
10. *Neidium affine* var. *amphirhynchus* (Ehr.) Cleve
11. *Pinnularia subcapitata* Gregory
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg
13. *Pinnularia braunii* (Grun.) Cleve
14. *Pinnularia interrupta* W. Smith
15. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve
16. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg
17. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
18. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
19. *Pinnularia brevicostata* Cleve

(スケールは10μm)

Plate III

1. *Gomphonema parvulum* Kützing
2. *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg
3. *Gomphonema acuminatum* var. *coronata* (Ehr.) W.Smith
4. *Gomphonema constrictum* Ehrenberg
5. *Gomphonema augur* var. *turris* (Ehr.) Lange-Bertalot
6. *Gomphonema augur* var. *turris* (Ehr.) Lange-Bertalot
7. *Gomphonema augur* var. *turris* (Ehr.) Lange-Bertalot
8. *Gomphonema augur* var. *gautieri* V. Heurck
9. *Gomphonema augur* var. *gautieri* V. Heurck
10. *Gomphonema* sp.-1
11. *Opephora martyi* Héribaud
12. *Amphora ovalis* var. *libyca* (Ehr.) Cleve
13. *Epithemia zebra* (Ehr.) Kützing
14. *Cymbella minuta* Rabenhorst
15. *Cymbella minuta* Rabenhorst
16. *Cymbella naviculiformis* Auerswald
17. *Cymbella turgidula* Grunow
18. *Cymbella tumida* (Brébisson) V. Heurck
19. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
20. *Nitzschia obtusa* W. Smith
21. *Nitzschia* sp.
22. *Nitzschia tryblionella* Hantzsch
23. *Nitzschia granulata* Grunow
24. *Surirella angusta* Kützing
25. *Surirella ovata* Kützing

(スケールは10μm)

Plate IV

1. カナブン　*Rhomborrhina japonica* Hope
   頭部　5.2mm　縄文時代中・後期
2. マメコガネ　*Popillia japonica* Newmann
   右鞘翅　5.4mm　縄文時代中・後期
3. オオヒョウタンゴミムシ　*Scarites sulcatus* Olivier
   左大顎　8.5mm　縄文時代中・後期
4. エンマコガネ属　*Onthophagus* sp.
   右鞘翅　4.8mm　古墳時代
5. オオミズスマシ　*Dineutus orientalis* (Modeer)
   右鞘翅　6.2mm　中世
6. ヒメガムシ　*Sternolophus rufipes* (Fabricius)
   右鞘翅　8.6mm　中世
7. エンマコガネ属　*Onthophagus* sp.
   前胸背板　幅4.5mm　中世
8. アカガネサルハムシ
   Acrothinium gaschkevitchii Motschulsky
   左鞘翅　4.2mm　縄文時代中・後期
9. アシボソネクイハムシ　*Donacia gracilipes* Jacoby
   前胸背板　幅1.6mm　縄文時代中・後期
10. ガガブタネクイハムシ　*Donacia lenzi* (Schonfeldt)
    右鞘翅　4.8mm　中世
11. イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire
    左鞘翅　4.2mm　中世
12. キイロネクイハムシ　*Macroplea japana* (Jacoby)
    左鞘翅　3.0mm　中世

木製農耕具の地域色とその変遷

—勝川遺跡出土資料を中心として—

樋上　昇

I

『年報　昭和62年度』に記したように、勝川遺跡62Ｆ区からは弥生時代中期から平安時代にかけての多くの木製品が出土している。が、昨年度の『年報』では、それらのうち、弥生時代中期末のほんの一部の資料しか紹介することができなかった。そこで小論では、まずⅡ章で現在整理の済んだもののうちから弥生時代中期末・弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代中期の３時期の資料について、農耕具を中心に紹介する。さらにⅢ章では、それらをもとに近畿・東海・北陸・関東の他の資料と比較検討し、農耕具の地域色とその変遷について考えてみたい。

II

遺構の概要

勝川遺跡62Ｆ区は鳥居松段丘の段丘崖と地蔵川に挟まれた沖積地に立地する。弥生時代中期末（高蔵期）には居住域と墓域は段丘上に営まれている。段丘下のこの地には第１図のように掘立柱建物群が立ち並び、地蔵川（ＮＲ01）から引いた水路（ＳＤ01）に掘り込んだ土坑（ＳＸ01）にはつくりかけの木製品を貯蔵し、加工を行う生産域となっていた。その後、地蔵川の氾濫でこれらの遺構は廃絶し、調査区東端の地蔵川北岸には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器と共に大量の木製品を投棄していた（ＳＸ05)。古墳時代中期（５世紀末頃）には、地蔵川の南に接して大型の前方後円墳が築かれた（勝川大塚古墳)。それに伴い、地蔵川の北岸には溝（あるいは周濠？）を掘り（ＳＸ03)、農耕具から武具に至るまで様々な木製品を廃棄していた。奈良時代には段丘上に寺院が建立され(勝川廃寺)、地蔵川からはそれに係わると見られる大量の墨書土器や人形・舟形などの祭祀具、そして馬鍬・大足などの農耕具が出土している。

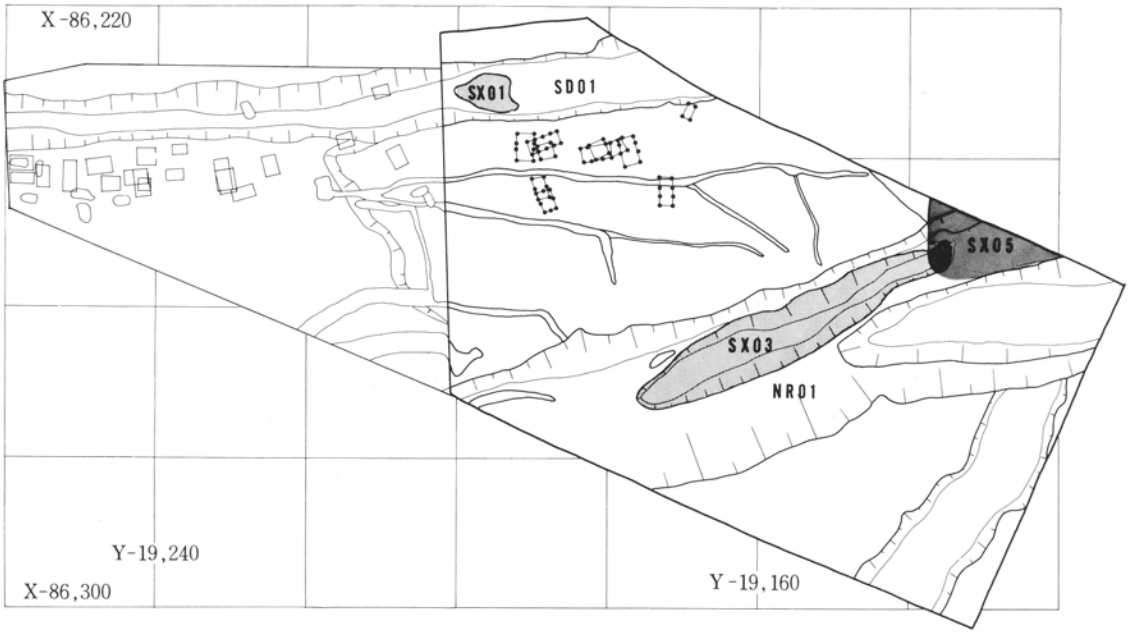
小論では、これらの遺構のうち、弥生時代中期末に属するＳＸ01・ＳＤ01、弥生時代後期～古墳時代前期のＳＸ05、古墳時代中期のＳＸ03から出土した木製品を紹介していく。

なお、樹種の鑑定はパリノ・サーヴェイによる。

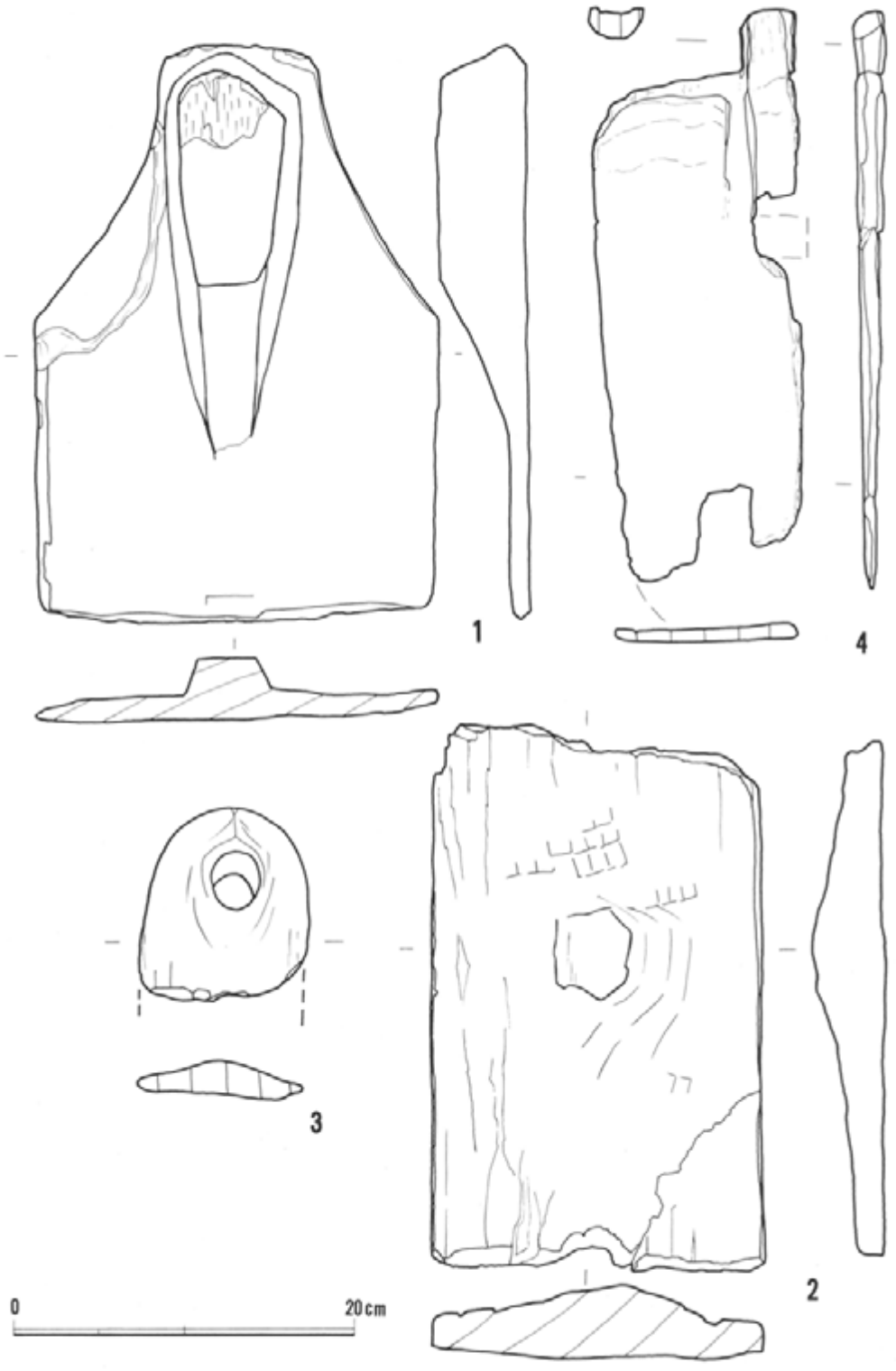
出土木製品

弥生時代中期末（第２・３図）

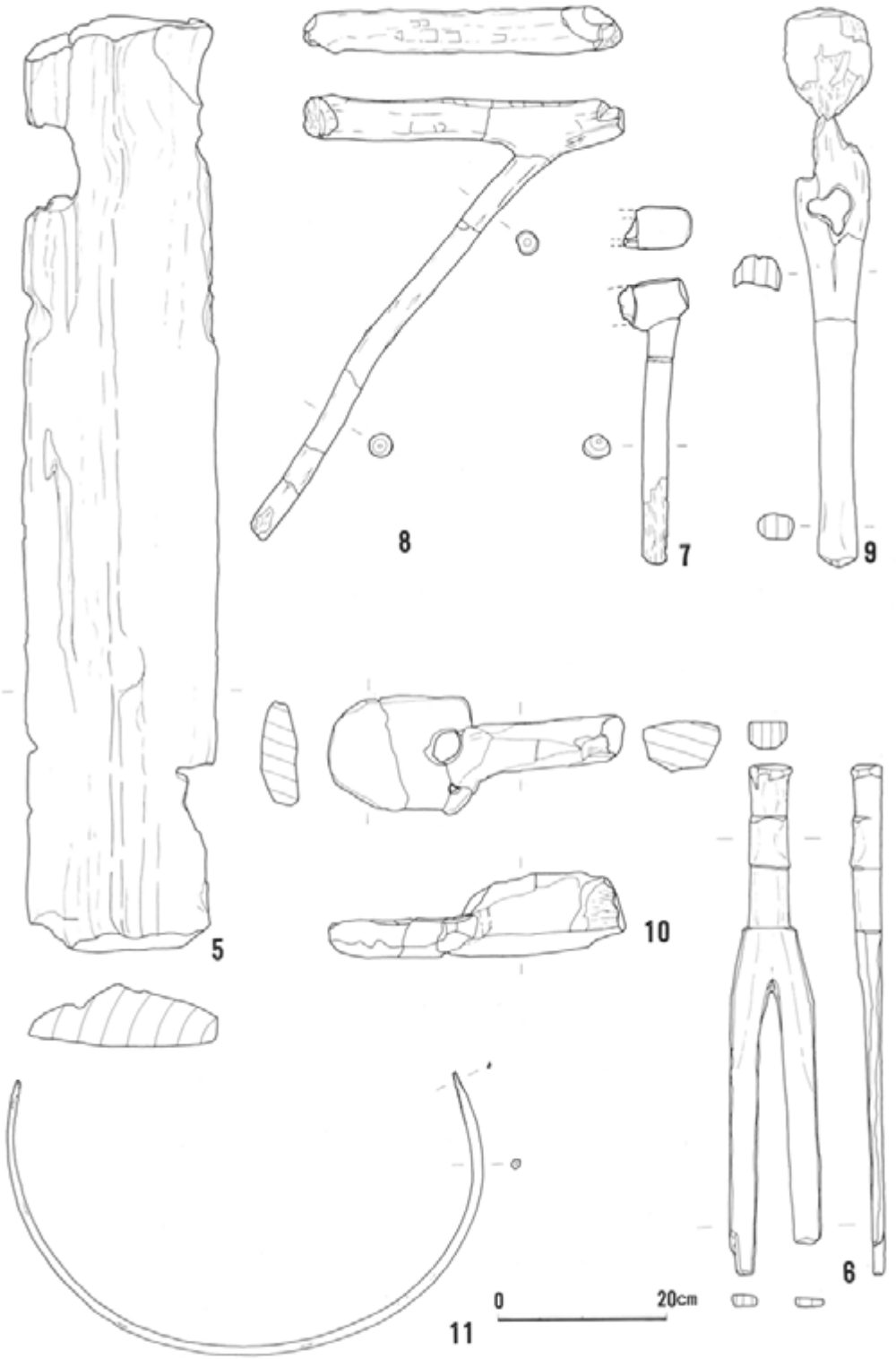
ＳＸ01・ＳＤ01から出土した木製品は、これらの遺構の性格上、その大半は未成品である。広鍬の身には２タイプがある。それぞれＡ類（１）、Ｂ類（２）とする。樹種はいずれもコナラ属（アカガシ亜科）である。Ａ類は他に２点見られる。また、広鍬用と思われるミカン割り材も出土している（５）。全長約120 cmあり、広鍬が２ないし３点とれる。（３）は狭鍬の身で、刃部は欠損している。木村有作氏が小型鍬と命名したものにあたる（木村1988）。樹種はコナラ属（コナラ亜科クヌギ節）。（４）は組合せ鋤の身である。直柄装着用の方形孔をもつ。樹種はコナラ属（アカガシ亜科）。（６）は町田章氏の分類にならい、膝柄[注1]を装着する股鍬という意味で、膝柄股鍬Ａと呼ぶことにする（町田1980）。着柄用の軸部には膝柄装着の際にズレや緩みをなくすための独特の段をつくりだし、軸部・刃部共に断面カマボコ形を呈する。樹種はコナラ属（コナラ亜属クヌギ節）である。横斧の柄には完成品（７）と未成品（８）が見られる。（７）はやや小型の柱状片刃石斧の柄で台部の下約５cmのところに１条溝が切られている[注2]。樹種はコナラ属（コナラ亜属クヌギ節）。（９）は縦斧の柄である樹種はコナラ属（コナラ亜属クヌギ節）。（10）は勺子の未成品で、身部に節穴があく。樹種はケヤキ。（11）はタモ枠の未成品と思われる。樹種はイヌガヤ類似種である。



第１図　勝川遺跡62Ｆ区遺構配置図



第２図　弥生時代中期末　ＳＸ01出土木製品



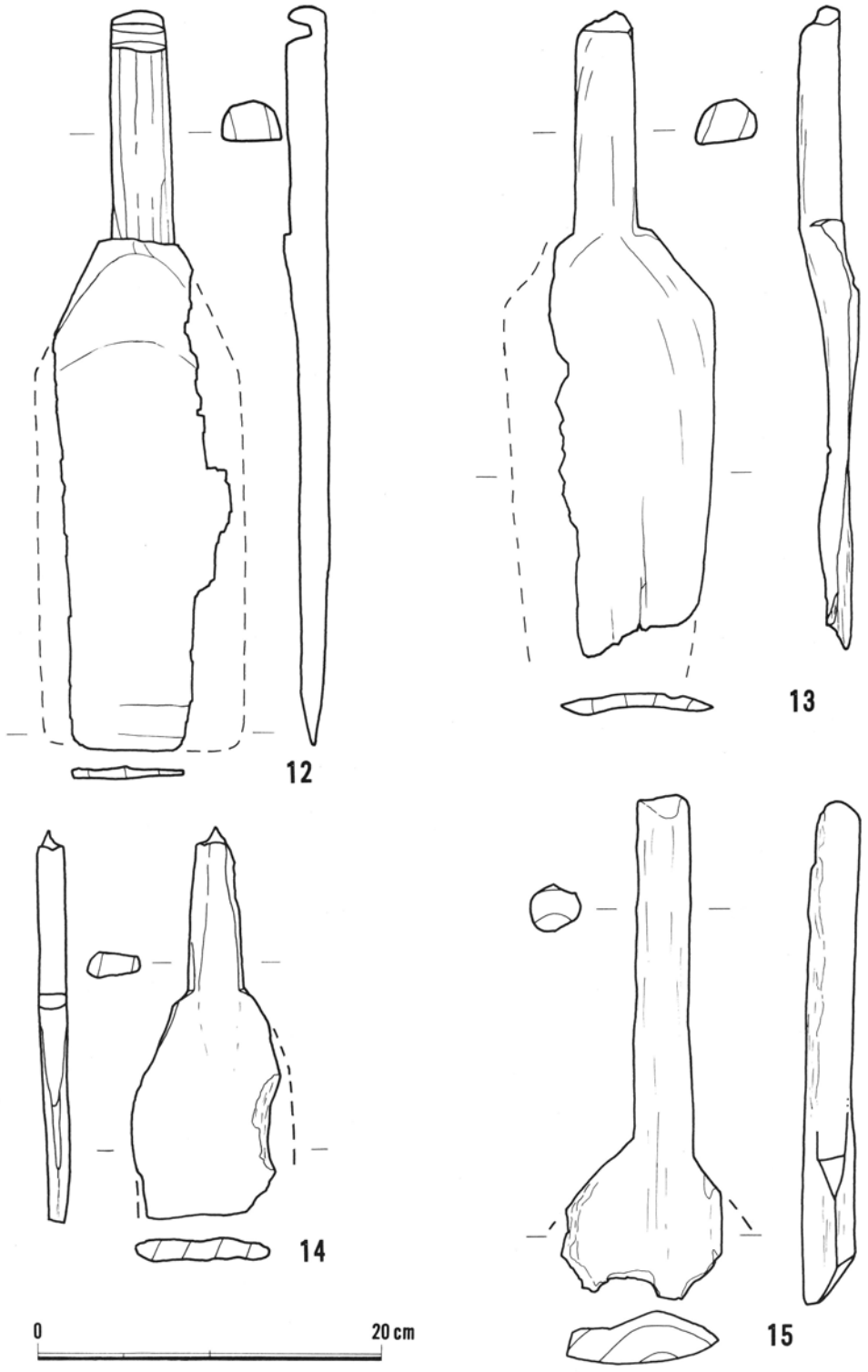
第3図　弥生時代中期末　SX01・SD01出土木製品（6～9・11はSX01、5・11はSD01出土）

弥生時代後期～古墳時代前期（第４～６図）

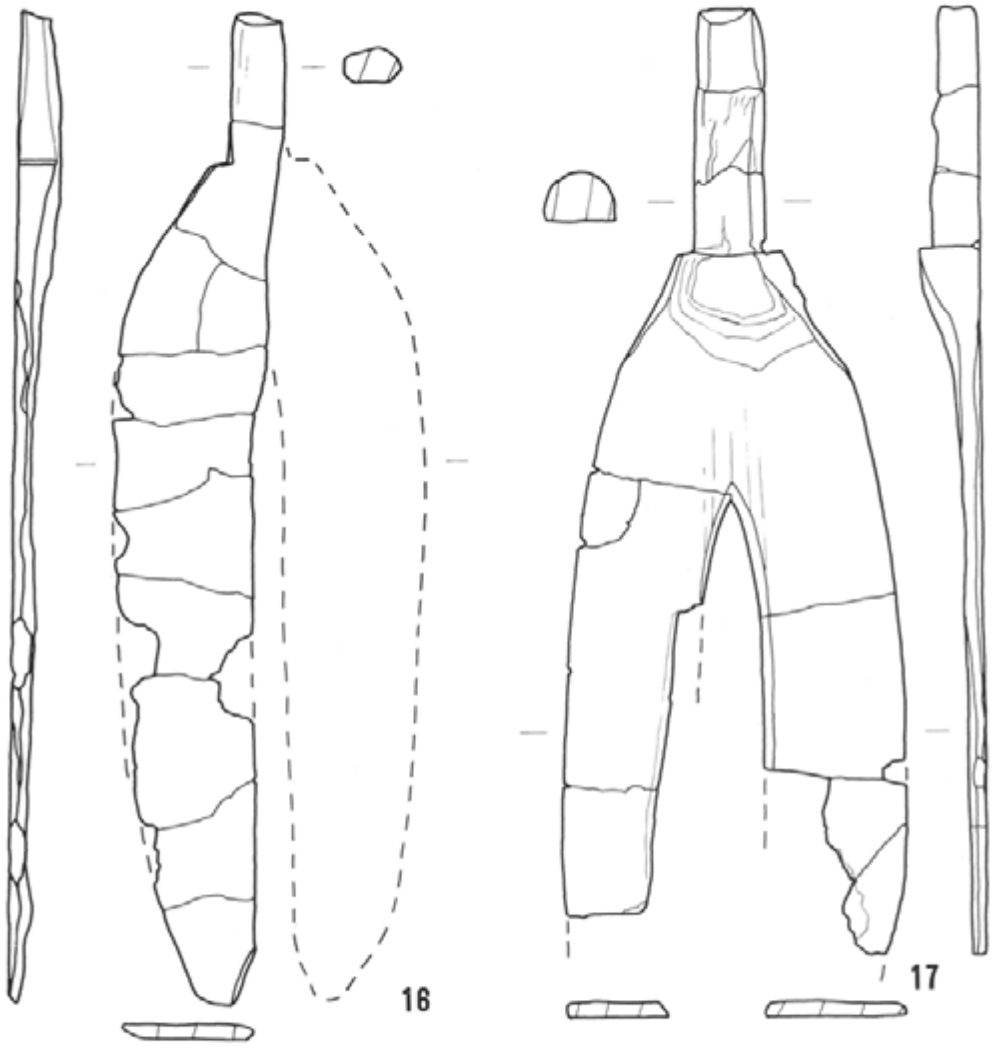
ＳＸ05からは主に農耕具が出土している。(18) は２連の広鍬Ａである。弥生時代中期のものに比べてひとまわり小さい。(12～15) は前面を平坦にして膝柄装着用の細工を施した、膝柄鍬Ａである（町田1980)。肩部はナデ肩で、刃部は後面を削り込んで薄く作る。うち、(12) は軸部の上端に膝柄緊縛用の溝を切る。(15) は軸部の断面が丸く、刃部も厚い。未成品の可能性が高い。(16・17) は膝柄股鍬Ａ。弥生時代中期の例と比べて刃部は幅が広く薄い。(17) の樹種はコナラ属（アカガシ亜属）である。(21) は斧あるいは鍬の膝柄の未成品である。樹種は斧や鍬の柄としては珍しく弾力のあるイヌガヤを用いている。(19) は一木鋤。身はほぼ完存しているが、おそらく、当初この倍の大きさはあったものを破損したためかここまで削り込んだのであろう。(20) は竪杵である。握部は極めて太く、きれいに面取りの跡が残っており、握部に向かってなだらかに細くなる。握部は１面のみに使用痕が認められる。樹種はコナラ属（アカガシ亜属)。

古墳時代中期（第７図）

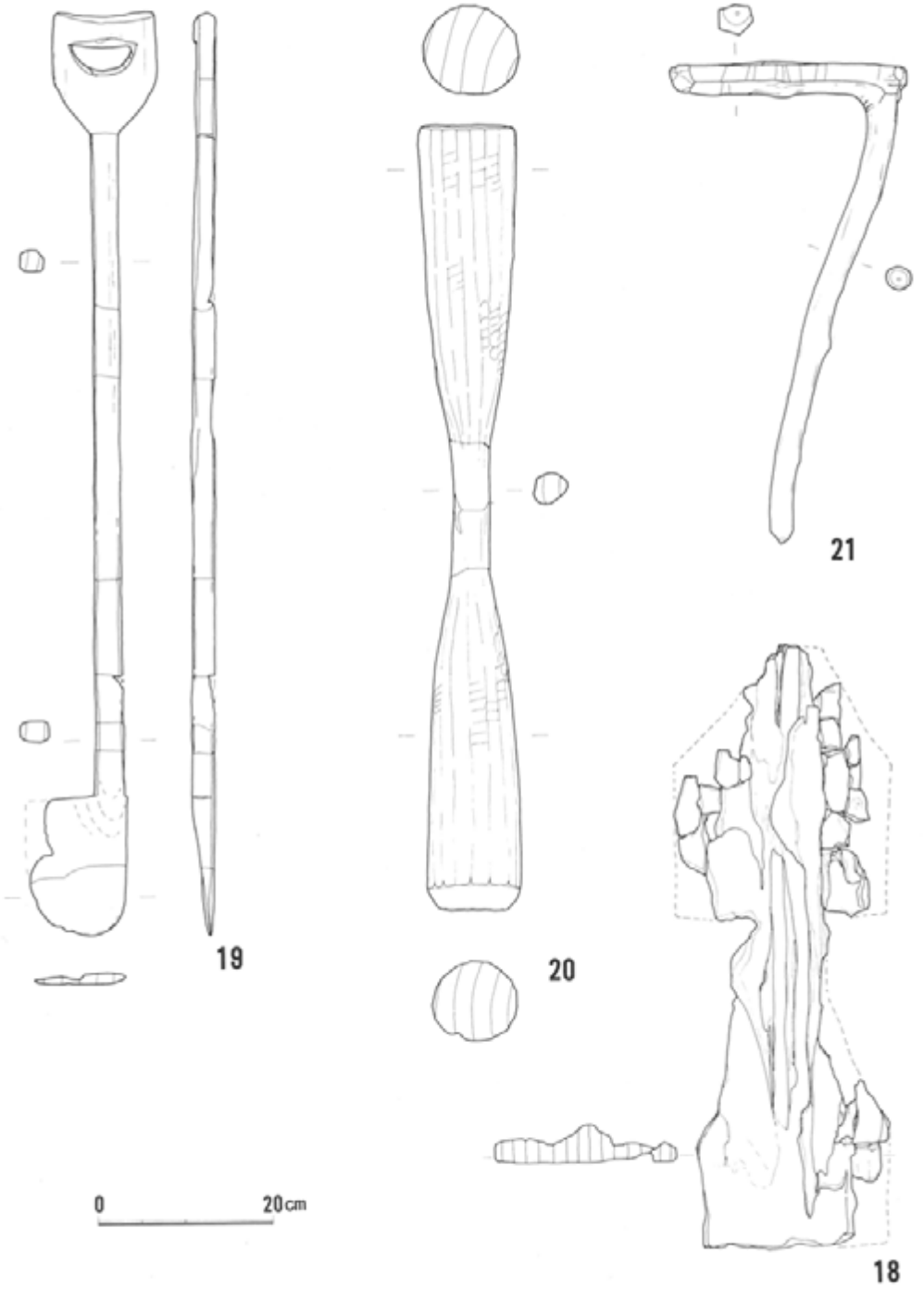
ＳＸ03からは楯・刀形など、武具や祭祀具も認められるが、ここではＳＸ05同様、農耕具についてのみ述べる。(22) は狭鍬である。前面の柄孔周辺の隆起は著しく厚く、後面の頭部に段をもつ。同様の類例は滋賀県妙楽寺遺跡に見られる（滋賀県教委1982)。柄がわずかに遺存しており、身に対して鈍角につく。いわゆる踏み鋤である。(23) は従来ナスビ形着柄鋤とされてきたもので、ここでは町田氏の分類により、膝柄鍬Ｂと呼ぶ。ナスビのヘタの部分にあたる笠形の突起（笠部）は著しく退化しており、逆に肩部は極度に発達している。笠部と肩部の間のくびれ部には膝柄緊縛の際の紐の圧痕が残っている。肩部から刃部の下端にかけて、Ｕ字型の鉄製刃先を装着するため、ななめに大きく削り込まれている。刃部の先端はわずかに二股に分かれているが、鉄刃がつくために機能とは無関係である。(24) は鍬の膝柄である。台部の前面を平坦につくり、鍬の軸部と組み合わせて紐で縛る。そのため、後面に紐かけ用の溝を切るのを特徴とする。(25) は従来丸鍬とされてきたもので、近年の黒崎氏の研究により、広鍬（あるいは横鍬）に装着される泥除けであることが確認された（黒崎1988)。頭部が欠損しているため、実際の装着方法については不明である。樹種はコナラ属（アカガシ亜属）である。



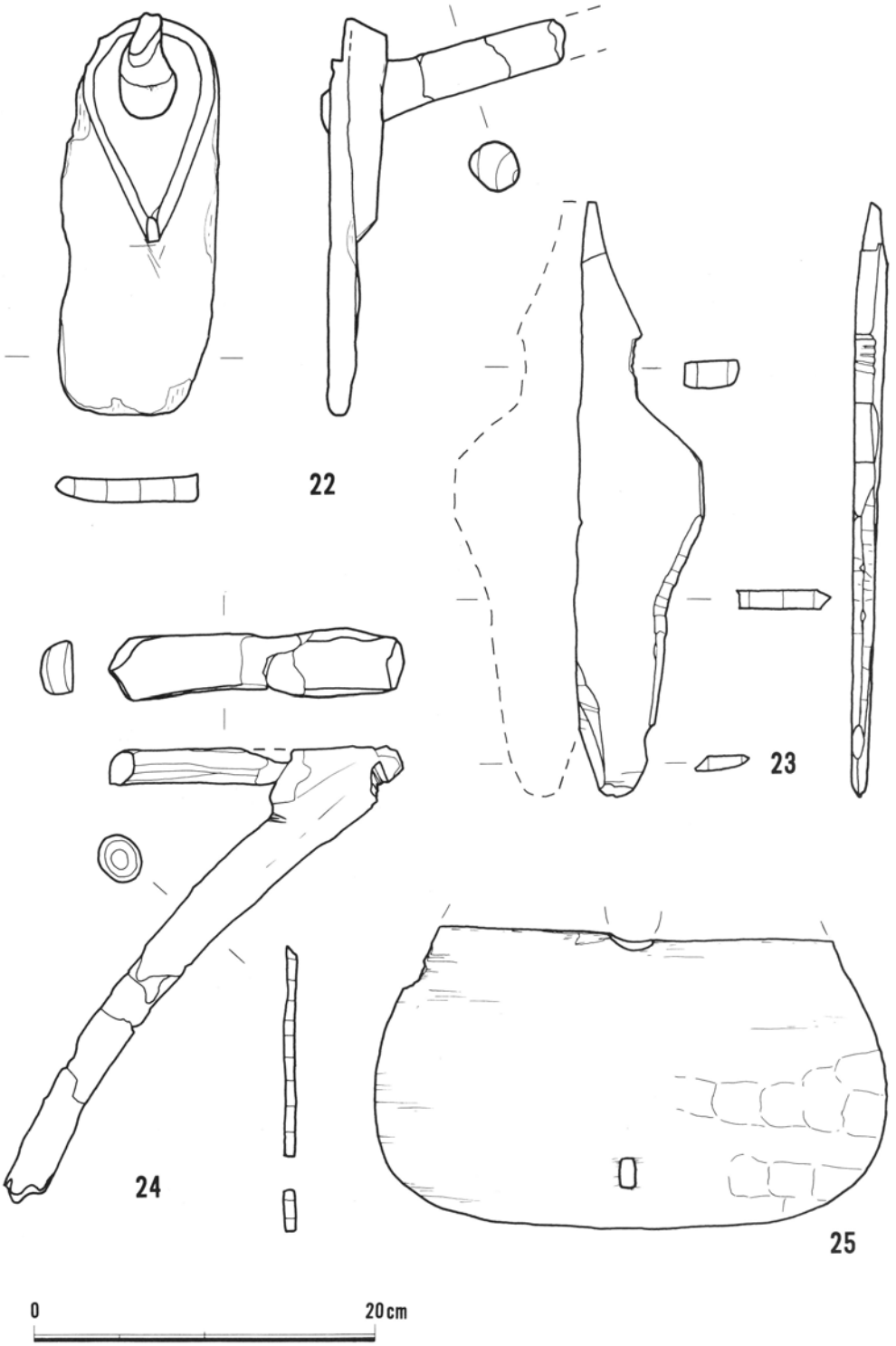
第4図　弥生時代後期～古墳時代前期　ＳＸ05出土木製品



第５図　弥生時代後期～古墳時代前期　ＳＸ05出土木製品



第６図　弥生時代後期～古墳時代前期　ＳＸ05出土木製品



第７図　古墳時代中期　ＳＸ05出土木製品

III

従来の研究

III章では、II章で紹介した勝川遺跡出土の木製農耕具を、近畿・東海・北陸・関東地方の他の遺跡の資料と比較し、農耕具の系譜と地域性について考えてみたい。その前に、小論に直接係わる範囲で先学の業績をまとめ、木製農耕具の研究の流れをつかむこととしたい。弥生時代の遺跡から出土する木製農耕具について、その形態から機能の推定を行う研究は1943年の唐古遺跡の調査報告に始まる（末永ほか1943)。このなかでは木製品の種類により樹種の使い分けが行われていることや、木製品をつくる際の木取りについてすでに述べられている。そしてその業績は1949・54年の登呂遺跡（日本考古学協会1949・54）や、1962年の山木遺跡（後藤1962）などに引き継がれていった。しかし、それらはいずれも現在の民俗例を用いて機能を想定する程度に留まっており、農耕具の持つ歴史的意義の解明にまでは及ばなかった。

その意味では1970年黒崎直氏によって初めて、農耕具の形態・組成・製作工程の変遷や所有の在り方から当時の社会の動向を解明する研究が開始されたと言ってよい(黒崎1970)。そしてこれが、その後の木製農耕具の研究の方向性を決定づけることになる。しかし、未だ資料不足のためか、農耕具の地域性については充分な認識がなされていない。

1975年、町田章氏は主として木製品の製作技術の解明を行った。さらに、九州と近畿の農耕具の違いについて触れ、農耕具に地域色のあることを認めた（町田1975)。

翌年、根木修氏は町田氏同様、木製農耕具の加工技術から論を進め、さらに細かく機能からの農耕具の分類とその機能の推定を行い、弥生時代の農耕具の変遷が湿田から乾田への水田耕作の変化と係わりがあると推定した（根木1976)。

同年、黒崎氏は初めて古墳時代の農耕具を扱い、特に古墳時代に特徴的に見られるナスビ形着柄鋤なる器種の変遷に着目した（黒崎1976)。黒崎氏は、弥生時代後期末から出現するこの農耕具の機能を、それまでの広鍬にかわる水田耕起具と推定し、5世紀中葉にこれに鉄刃が装着されることにより、水田耕起具から開墾土木具に変化したとする。そしてこの変化を低湿地耕作の完成から乾田耕作の普及と拡大へと結びつけて考えた。最後の結論はさておき、この農耕具の消長や機能については、その後の類例の増加により、書き改めねばならぬ点が多い。

1980年代に入ると木製農耕具の出土例は急増し、地域によってその形態にかなりの違いがあることが認識され始めた。

まず、1980年に、平城宮下層出土の古墳時代の木製農耕具を整理した町田氏は、それま

で又鍬・又鋤・ナスビ形二又鋤など様々な名称で呼ばれてきた器種のうち、着柄用の軸部を持つものを、その出土例から膝柄に装着される鍬であると結論づけた（町田1980）。そして軸部が笠形に広がり、ナスビのヘタのかたちを呈するものを膝柄股鍬Ｂ、それ以外を膝柄股鍬Ａとし、同様に従来、着柄鋤やフグシとされてきた例を膝柄鍬Ａ・膝柄鍬Ｂと命名した。次に、これらの農耕具の系譜や地域性についても触れた。まず、これまで膝柄股鍬Ａと膝柄股鍬Ｂは異なる器種と認識されてきたし、膝柄鍬Ａと膝柄鍬Ｂも異なる器種と認識されてきた。しかし、このそれぞれが同じ系譜に連なって、時期を追って変化することを解明した。そして膝柄股鍬Ｂ・膝柄鍬Ｂの分布が畿内・瀬戸内を中心としていることを明らかにし、膝柄股鍬Ｂが北部九州の股鍬と畿内・瀬戸内の膝柄股鍬Ａの合体によって発生したものと推定した。さらに、これを弥生時代前期からの農耕具の流れに含めて、この時期の農耕具の変化は中国で新たに開発された農法が九州に伝わり、九州から畿内へ流れた結果生じたものと結論づけた。この研究における町田氏の最大の業績は膝柄股鍬Ａ・Ｂと膝柄鍬Ａ・Ｂを同一の系譜に連なるとした点にある。しかし一方では、畿内以外の地域、特に東海以東におけるこれらの器種の地域色が充分に認識されていない。

1982年、山田昌久氏は日高遺跡出土の「着柄鋤・鍬」（町田氏の言う膝柄鍬Ａを鋤にも鍬にも使えるという理解からの命名である）の分布について論じている（山田1982）。それによると、「着柄鋤・鍬」は九州から山陰・近畿・東海・関東にかけて分布している。しかし九州のそれは日高遺跡のものと系譜が異なり、近畿では農耕具に占めるこの器種の割合が低いため、関東の「着柄鋤・鍬」については直接的には東海との関連性を強調している。

1983年には埋蔵文化財研究会で「木製農具について」と題する研究集会が開かれ、近畿以西の資料集成が行われた（埋蔵文化財研究会1983）。

1985年に黒崎氏は新たに農耕具の器種の分類を行い（黒崎1985）、ここで従来の「着柄すき」・「長柄すき」をそれぞれ「組み合わせすき」・「一木すき」と改称した。さらにすべての器種の機能の想定をした。しかし、地域差や時期差が明確に捉えられていないため、明らかに同一系譜に乗るものが、別の器種として扱われている例が見られる。その他、農耕具の変遷や地域性についても若干触れてはいるが、やや大雑把で一般論の域に留まっている。

1986年、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての木製農耕具が大量に出土している新保遺跡の報告書が刊行された。山田氏はここで、全国の木製農耕具の資料を集成し、それらを九州・近畿・東海・関東に分け、弥生時代草創期・前期・中期・後期・古墳時代の５時期にわたる農耕具の変遷を図示し、説明を加えている（山田1986）。各時期における農耕具の地域差の認識と地域間の交流の解明を目指していることはこれからも継承されるべき点である。しかしながら、このなかでは器種ごとのタテのつながりが捉えられていない。

また、九州・近畿・東海・関東という大きな枠にとどまり、そのなかのさらに細かな地域差にまで踏み込まれていない。弥生時代を4期に分けながら、古墳時代を1時期として扱うことも疑問である。

1988年の『考古学ジャーナル』は「弥生時代の木製品」を特集した（石野ほか1988）。

最後に、1988年の日本考古学協会静岡大会で黒崎氏は、これまで丸鍬とされてきたものが、実は蟻じゃくりやゲタのつく広鍬と組み合わさって泥除けとしての機能を果たすのだとした（黒崎1988）。そして、弥生時代農耕具変革の画期はまず諸手鍬の消滅する中期後半、次いで農耕具の鉄器化とナスビ形農耕具の出現する後期とした。

山田氏は、東海以東の木製農耕具出土遺跡の一覧表と共に極めて細かい器種の分類案を提示している（山田1988）。しかし、この分類にはその所属時期が示されていない。そして、同一器種を果たしてここまで細かく分ける必要があるのか否かも疑問である。

以上のこれまでの研究史を問題点を提示しつつ、かいつまんで紹介してきた。次章ではこれらの研究を継承しつつも、これまで充分検討がなされてこなかった農耕具の系譜と地域色の把握をその分布と時間的推移から見ていく。小論では検討の対象とする器種として、前章で分類した広鍬Aと町田氏の分類による膝柄股鍬A・B、膝柄鍬A・Bを扱う。それには、広鍬Aは弥生時代中期に近畿から関東にかけての広い地域に分布すること・膝柄股鍬・膝柄鍬は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて全国的に、定量的に見られること・時期や地域によりその形態の違いが比較的明瞭に現われることが理由としてあげられる。検討する地域は近畿・東海・北陸・関東の4地域で、弥生時代中期から古墳時代後期以降にかけて見ていくこととする。

広鍬A・膝柄股鍬・膝柄鍬の分布の変遷

1．弥生時代中期～後期の広鍬A（第8図）　従来、近畿で弥生時代中期の広鍬の代表とされてきたものである。近畿から関東にかけて11遺跡での類例がある。なお、小論で三重県は伊勢を東海、伊賀は近畿として扱う。

近畿では、大阪府の池上（1～4、大阪文化財センター1974・76）・亀井（5、大阪文化財センター1983b）・瓜生堂（6、瓜生堂遺跡調査会1982）・恩智（7～10、瓜生堂遺跡調査会1980）の4遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡（11、末永ほか1943）、東海では、三重県納所遺跡（12、三重県教委1980）、愛知県朝日（13～15、愛知県埋文センター1987）・勝川（16－18、愛知県埋文センター1988）・神明社南[追3]の3遺跡、関東は、千葉県浜野川遺跡（19・20、千葉市教委1988）、群馬県の新保遺跡（22・23、群馬県教委1986）である。うち、勝川遺跡（18）と新保遺跡（22・23）の弥生時代後期の例を除けば、すべて弥生時代中期

に属する。一部完成品を含むが、多くは未成品である。形態は柄孔のまわりの隆起を厚く明確につくりだすもの（16など）と、あまり明瞭な隆起を持たないもの（1など）の2タイプに大きく分かれる。前者は東海以東に、後者は近畿に多く分布する。また、東海以東の例は、近畿のそれに対して、若干大型化する傾向が認められる点も指摘できよう。さらに、近畿の広鏃は東海以東のものと比較して頭部の幅がわずかに広い。しかし、大局的に見ればこれらも同一形態の範疇で捉えられよう。また、製作技法のうえでも、2連ないし3連につくりだしたものを切り離すという点で共通性が見られる。

2．腸柄股鏃　次に、腸柄股鏃の分布とその時間的推移を見る。町田章氏の分類に従い、その形態がナスビ形をとる例を腸柄股鏃B、そうでないものを腸柄股鏃Aとする(町田1980)。また、小論では二股の類例のみを扱うこととする。そして、時間軸は弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代前期の2時期に分ける。

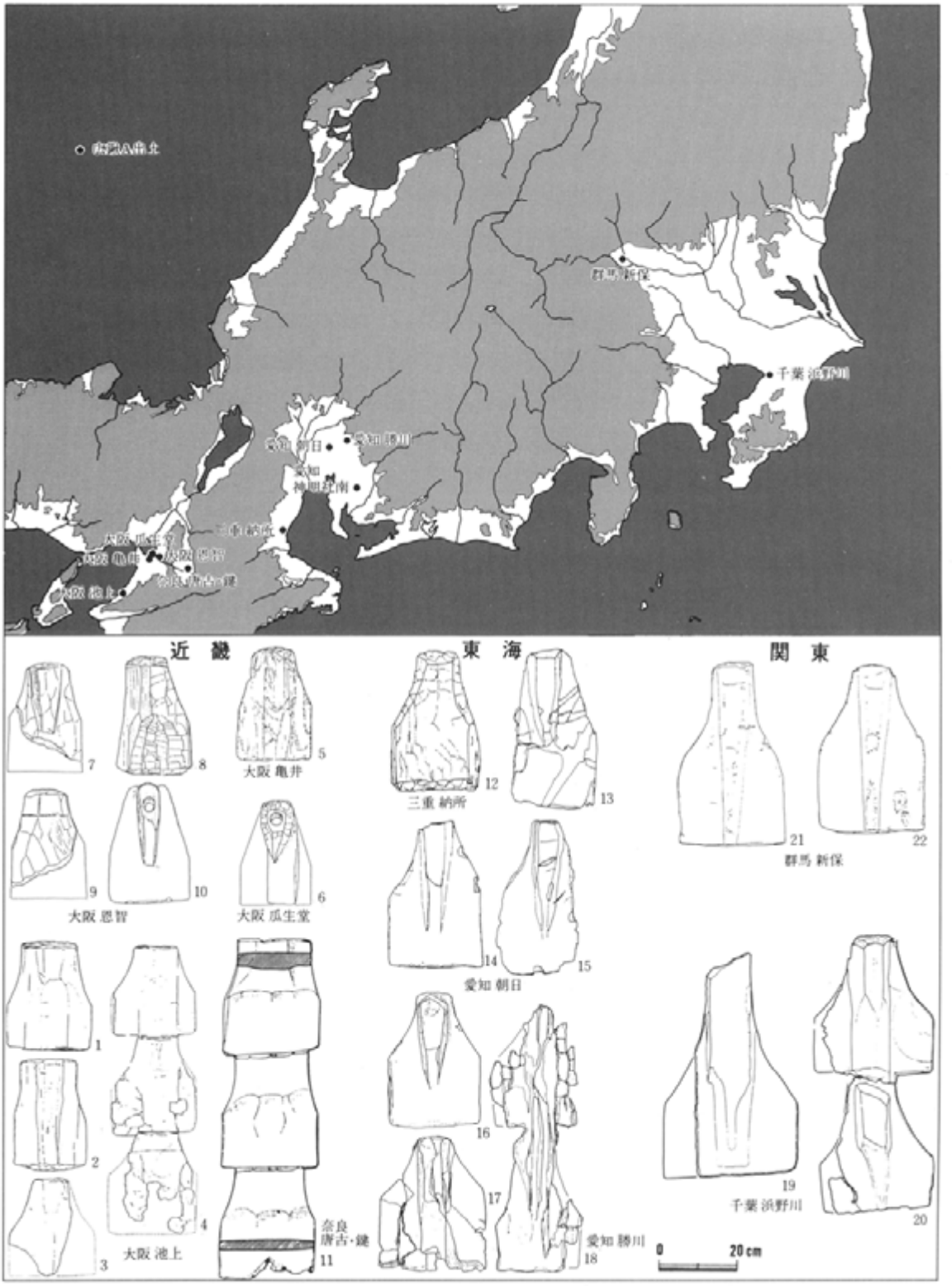
（1）弥生時代中期（第9図）　いずれも腸柄股鏃Aで、近畿から東海にかけて14遺跡の類例が確認されている。近畿では、大阪府の池上（1・2）・四ツ池（3、第2阪和国道内遺跡調査会1970）・亀井（4）・巨摩（5、大阪府教委1982）・瓜生堂（6～8）・東奈良（9、東奈良遺跡調査会1979）の6遺跡、兵庫県では玉津田中（10、兵庫県埋文調査事務所1986）・原田西[注4]の2遺跡、京都府は鶏冠井（11・12、向日市教委1983）・中久世（13、京都市埋文研究所1986）の2遺跡、東海は、三重県納所遺跡（14・15）、愛知県勝川（16）・岡島[注5]（17）の2遺跡、静岡県梶子遺跡（18、浜松市遺跡調査会1983）である。

弥生時代中期の腸柄股鏃Aには広鏃A同様大きな地域的差異は認められない。共通する特徴を述べると、軸部と刃部は断面カマボコ形を呈し、前面（使用者から見て）[注6]を平坦に作り、肩部から刃部にかけて後面を先端に向かって削り込む。肩部はナデ肩、刃部は厚みがあり、1、2の例を除けば幅狭で長い。

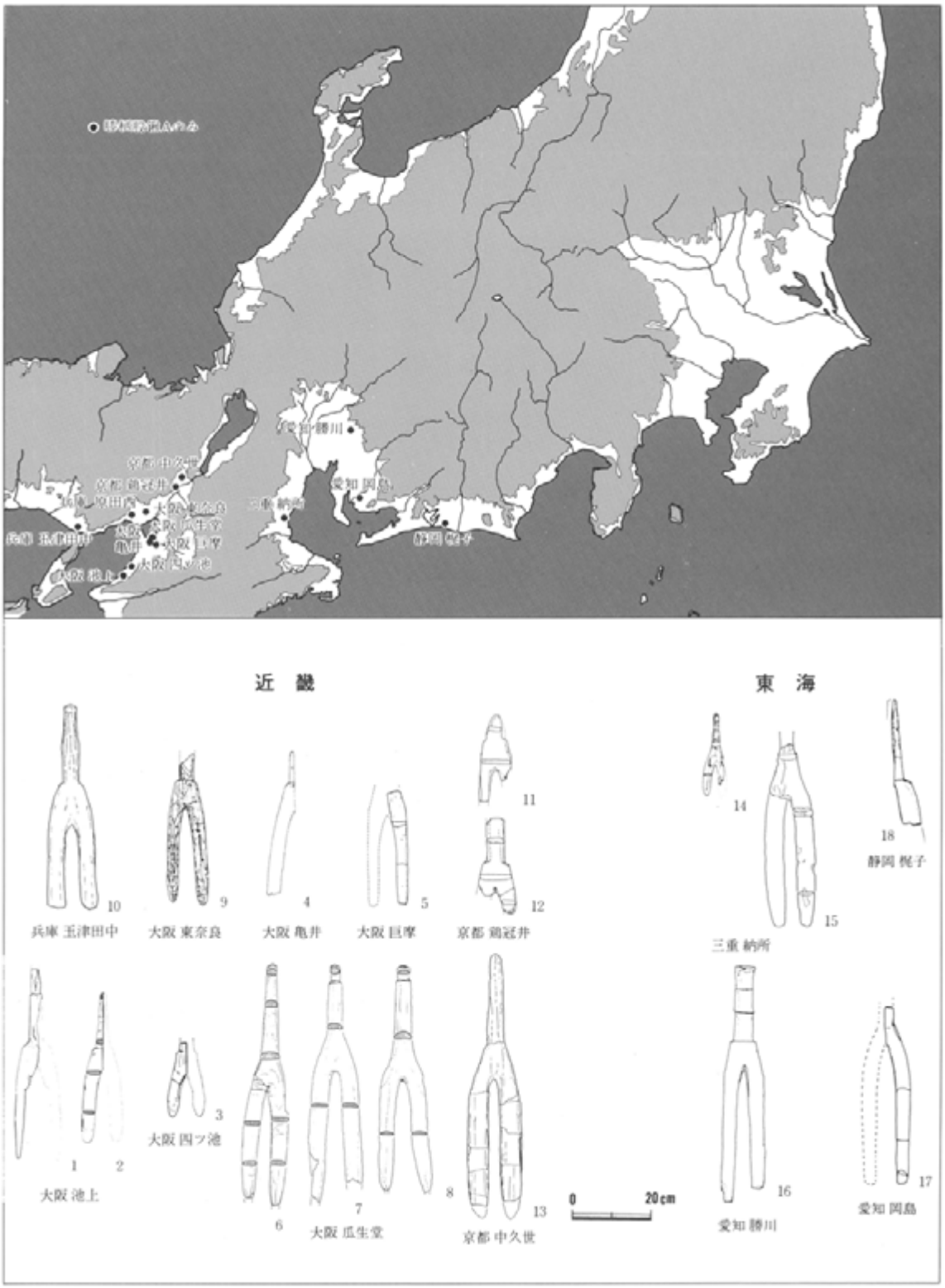
ただ、軸部の後面の形態に若干の地域差が認められる。すなわち、近畿の例では、軸部がずんどうで、頭部付近に腸柄装着用の段や突起を持つのに対し、東海の納所（14）・勝川遺跡（16）例は軸部のほぼ中央に一段明瞭な突起をつくりだす。この特徴は、後に述べる朝日遺跡の腸柄鏃A（第11図9・10）の軸部にも同様に認められ、腸柄装着の際、使用時にズレを防ぐための東海地方独自の工夫と見ることができよう[注7]。

以上、部分的には東海の独自色は認められるが、全体としては近畿の影響下にあると見られる点で広鏃Aと共通する。

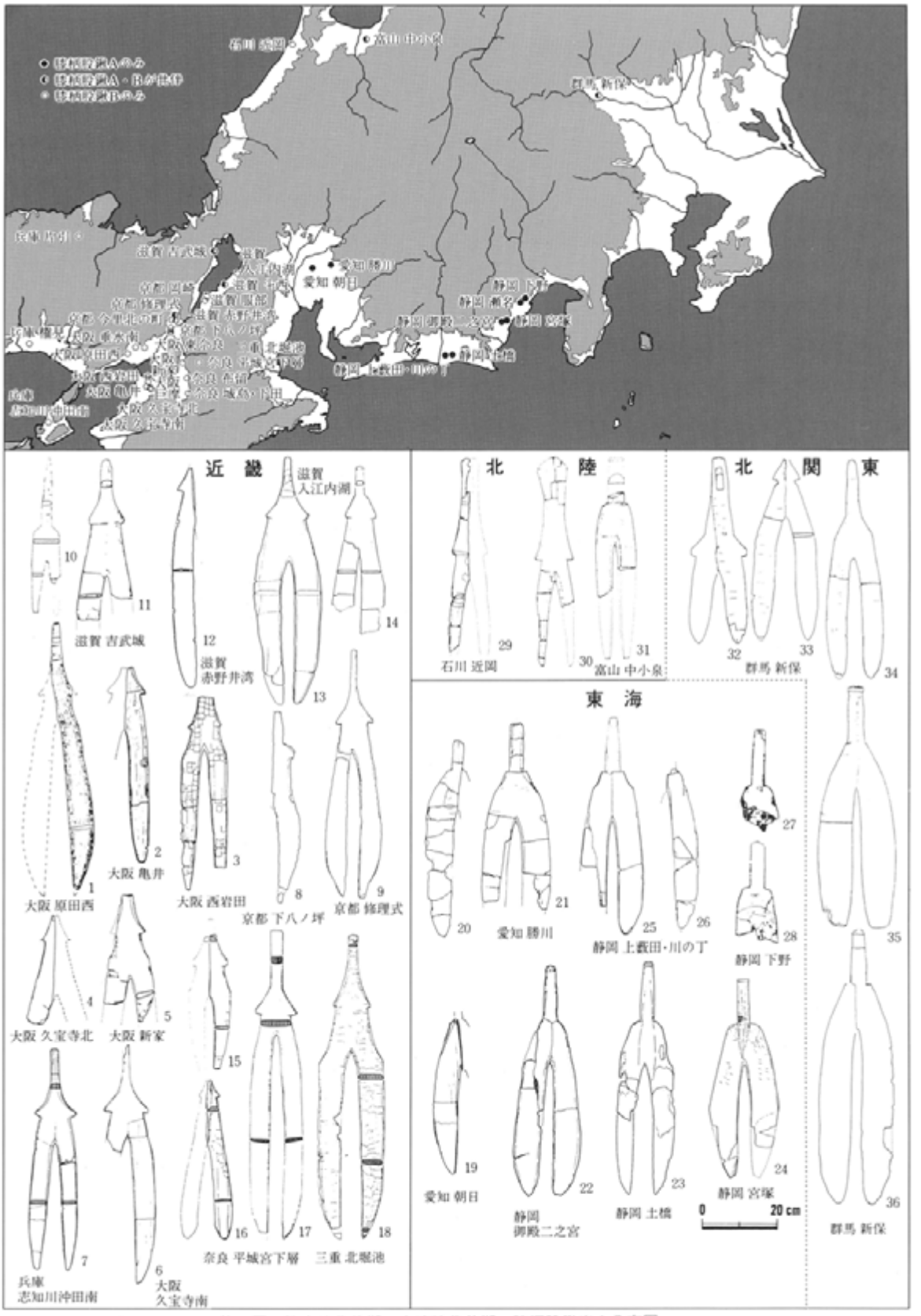
（2）弥生時代後期～古墳時代前期（第10図）　近畿を中心に北陸から北関東にかけて腸柄股鏃B（ナスビ形）の出現が認められる。近畿では現在26遺跡出土例が有り、京都府岡



第8図　弥生時代中期～後期　広鍬A出土分布図



第9図　弥生時代中期　膝柄股鍬出土分布図



第10図　弥生時代後期～古墳時代前期　朝鮮半島系磨製石器出土分布図

崎遺跡（埋蔵文化財研究会1983）、滋賀県吉武城遺跡（10、滋賀県教委1987ｂ）・斗西遺跡（能登川町教委1988）の３例を除けばいずれも膝柄股鍬Ｂとなる。一方、東海は近畿と異なり、依然として膝柄股鍬Ａのみ９遺跡で出土し、膝柄股鍬Ｂは一例も認められない。また、北陸・関東では膝柄股鍬Ａ・Ｂが共伴する。膝柄股鍬Ｂは、軸部には膝柄装着の際、使用時にズレを防ぐためにナスビのヘタ状の笠部をつくりだし、その上下の部分を紐で緊縛する形態をとる。

この時期、近畿の膝柄股鍬Ｂは軸部・刃部を含め、全体に偏平化の傾向を見せ、前・後面の区別はほとんどつかなくなる。そして、弥生時代中期の膝柄股鍬Ａと比較して、刃部の幅広化傾向を示す。

東海の膝柄股鍬Ａは、軸部こそ断面カマボコ形を呈するが、刃部は近畿同様、薄く幅広につくられる。

北陸の石川県近岡遺跡（29、石川県埋文センター1986）・富山県中小泉遺跡（30、上市町教委1984）の膝柄股鍬Ｂは、膝柄股鍬とは名ばかりで軸部に方形の柄孔を有して直柄装着用につくられており、笠部の機能はすでに形骸化している。

北関東の群馬県新保遺跡では、東海の系譜を引く膝柄股鍬Ａが主体を占めるが、膝柄股鍬Ｂも３点見られる。うち１点は軸部に方形柄孔を有する点で北陸の影響が認められる。

以上、弥生時代中期には近畿から東海にかけてほぼ同一の形態をとる膝柄股鍬Ａが分布していたが、弥生時代後期に至ると近畿は膝柄股鍬Ｂに変わる。それに対し、東海は刃部の幅広化など近畿の影響を受けながらもナスビ形の形態をとらず、膝柄股鍬Ａを依然として保持する。関東は概ね東海の影響下にあり、膝柄股鍬Ａがその主流を占めつつも、北陸からの膝柄股鍬Ｂの流入も認められる。三重県北堀池遺跡が膝柄股鍬Ｂのみであることから、近畿と東海は伊勢湾あたりで分かれるようである。また、北陸の膝柄股鍬Ｂは方形柄孔を有する点では、弥生時代中期の北部九州の二股鍬や三股鍬との共通性を見い出し得る。しかし現在のところ、これら二地域を結ぶ山陰で方形柄孔を有する股鍬の類例が見られないため、その系譜については明らかでない。

古墳時代中期以降、後期に至るまで、近畿では膝柄股鍬Ｂの出土例が確認されている。一方、東海では、当該期の木製品出土遺跡の調査例が少なく、膝柄股鍬の出土例は現在のところ知られていない。そのため近畿のように、膝柄股鍬Ａから膝柄股鍬Ｂへ変化するのか、あるいは膝柄股鍬Ａがさらに続くのかは不明である。

３・膝柄鍬　器種の分類については膝柄股鍬同様、ナスビ形を膝柄鍬Ｂ、そうでないものを膝柄鍬Ａとする。時期区分は弥生時代中期・弥生時代後期から古墳時代前期・古墳時

代中期・古墳時代後期以降の4期に分け、その形態の変化と分布の変遷を見ていくこととする。

（1）弥生時代中期（第11図）　近畿から関東にかけて9遺跡の類例が知られる。大阪府は池上（1～3）・鬼虎川（4～7、東大阪市文化財協会1987）・巨摩の3遺跡、京都府は鶏冠井（8）・中久世の2遺跡、愛知県朝日（9・10）・篠東（11・12、小坂井町教委1960）の2遺跡、静岡県梶子遺跡（13）、千葉県は浜野川遺跡（14）である。軸部の頭に突起を設ける工夫は、池上・鬼虎川・篠東・浜野川遺跡を通じて見られる。刃部の幅は狭く、肩の張りは小さくて丸い。刃部の平面はしゃもじ形を呈する。広鍬A・膝柄股鍬A同様、この時期は地域差が少なく、近畿から関東にかけて一つの地域圏を形成すると見てよかろう。

（2）弥生時代後期～古墳時代前期（第12図）　弥生時代後期には膝柄股鍬同様、近畿から北陸にかけて膝柄鍬Aから膝柄鍬Bに移り変わり、そのなかで北陸は独自色を持つ。一方、東海から関東にかけては依然として膝柄鍬Aが残り、近畿と大きく分かれる。

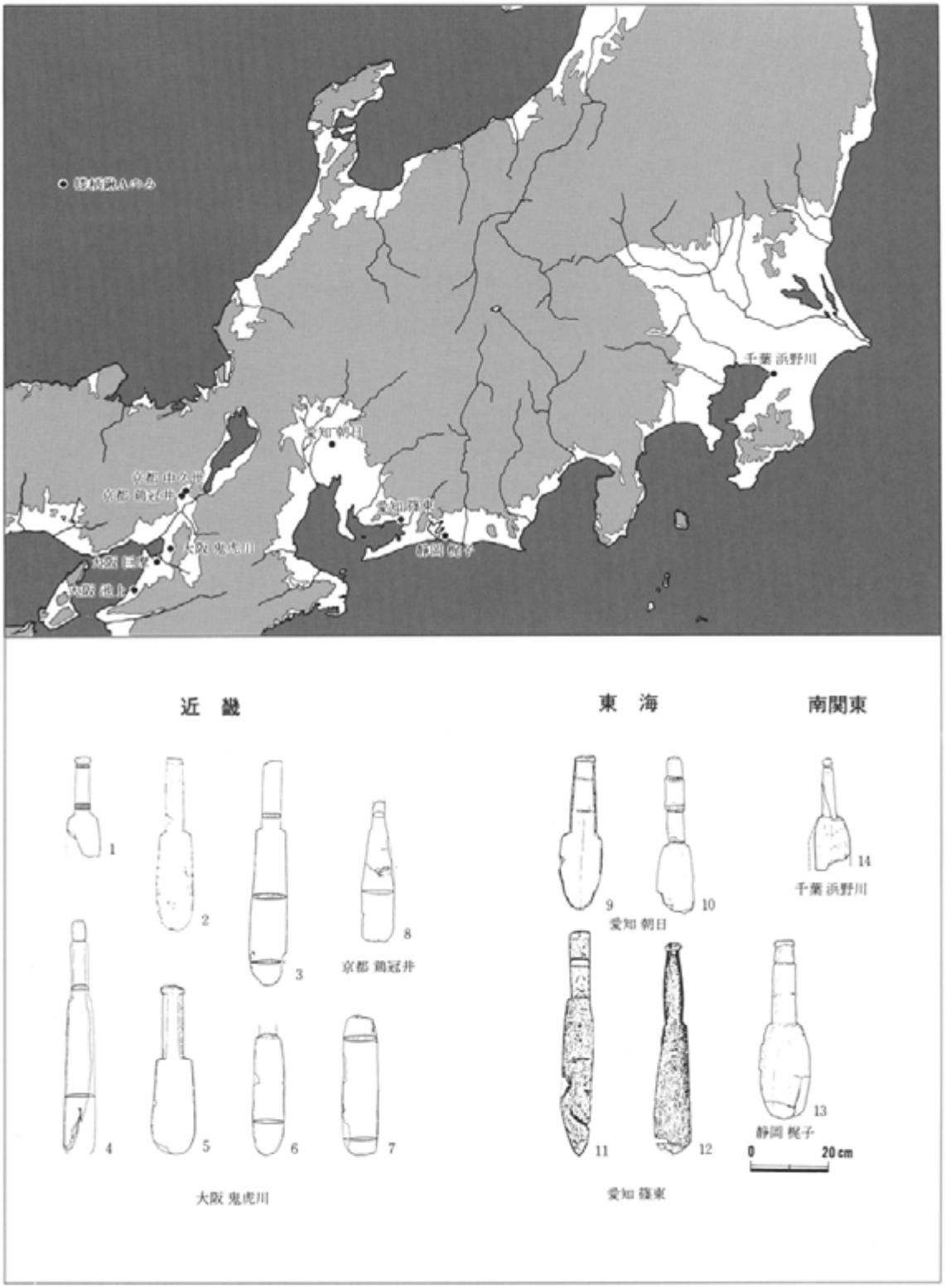
近畿の膝柄鍬Bはいくつかのタイプに分かれるが、概して刃部は長く、刃幅は若干広がる。

東海や関東の膝柄鍬Aの形態は弥生時代中期に比べて若干大型化し、肩部はナデ肩で、刃部はやや長くて幅広になり、その平面は長楕円形をなす。軸部に膝柄緊縛用の切れ込みを入れる例も見受けられる。

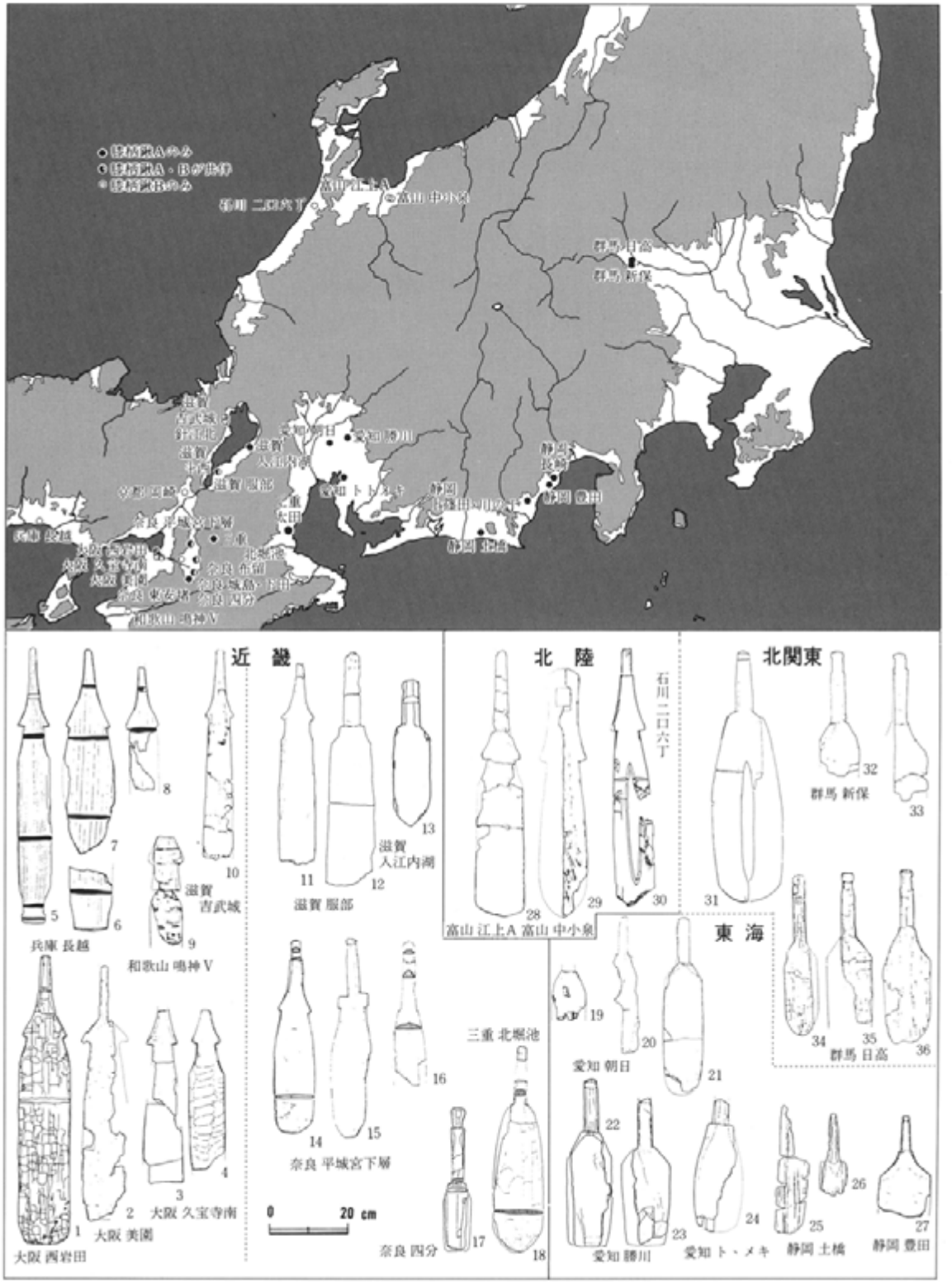
北陸では3タイプの膝柄鍬Bが見られる。まず一つは江上A遺跡（28、上市町教委1984）のもので、近畿のそれと共通する形態をとる。次に、中小泉遺跡の方形柄孔を有する例（29）は、同遺跡の膝柄股鍬Bと同じ範疇で理解できる。最後の、刃部にスリットを入れる二口六丁遺跡の例（30）は、現時点では他地域にその起源を求めることができない。しかし、弥生時代中期の山陰の膝柄鍬Bに見られる刃部の三角形のスカシにその系譜を求めることができるかも知れない（第15図）。

群馬県新保遺跡の膝柄鍬Aに1例、刃部にスリットを入れたものが認められ（31）、膝柄股鍬同様、関東には東海以外にも北陸的な要素を見い出すことができる。

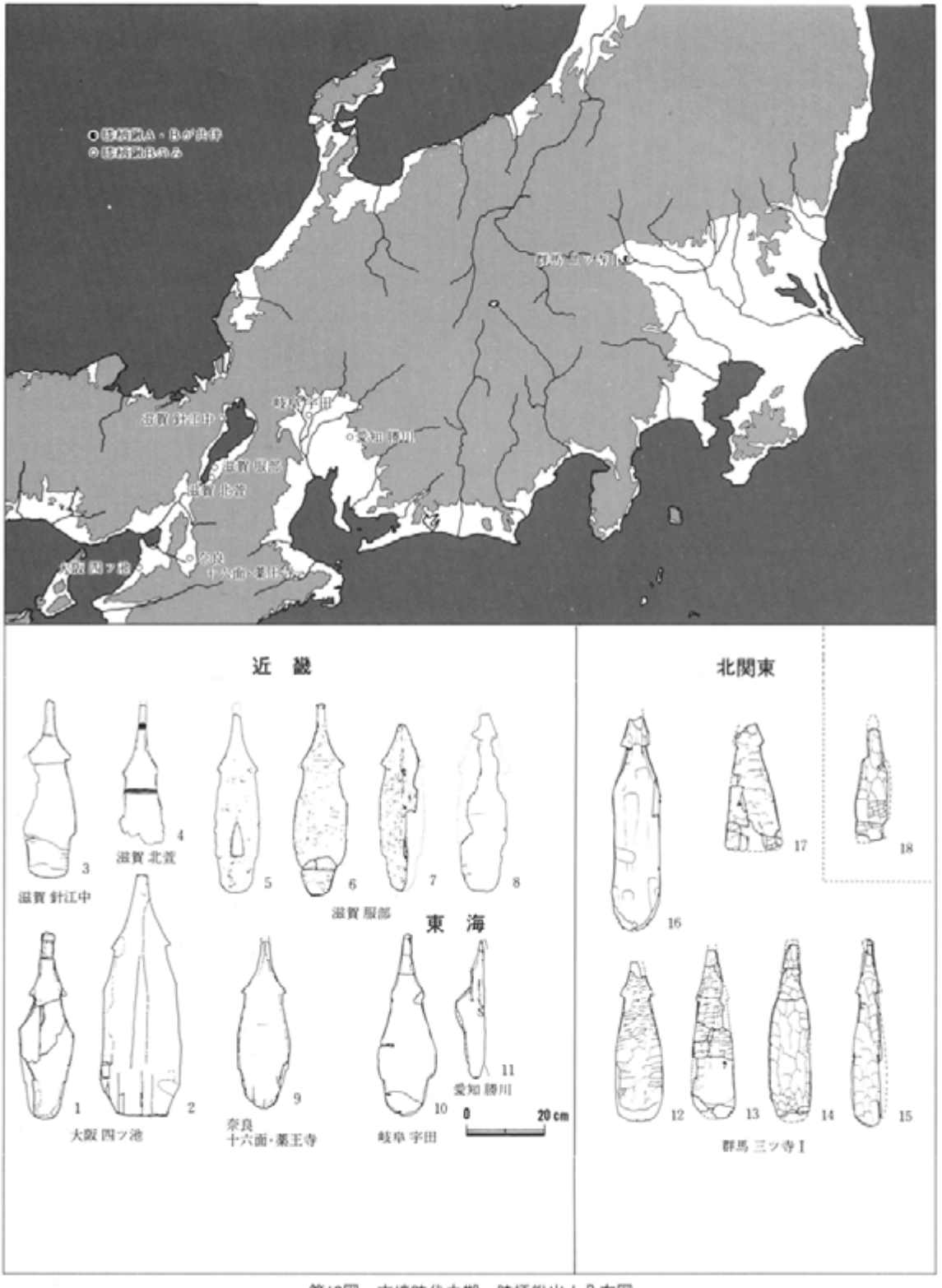
次に膝柄鍬Aと膝柄鍬Bの分布を詳しく見てみると、前述のように、膝柄鍬Aは東海から関東にかけて、膝柄鍬Bは近畿から北陸にかけて分布しているが、兵庫県から大阪府・京都府、そして滋賀県の湖西にかけての地域が膝柄鍬Bのみであるのに対して、奈良県から滋賀県の湖東では膝柄鍬A・Bの共伴する遺跡が目につく。また、奈良県四分遺跡（17、弥生時代後期、奈文研1978）・三重県北堀池遺跡（18、古墳時代前期、三重県教委1981）・滋賀県入江内湖遺跡（13、古墳時代前期、米原町教委1988）では膝柄鍬Aしか見られない。膝柄鍬A・Bが共伴する遺跡のうち、奈良県の平城宮下層遺跡（奈文研14～16、1981



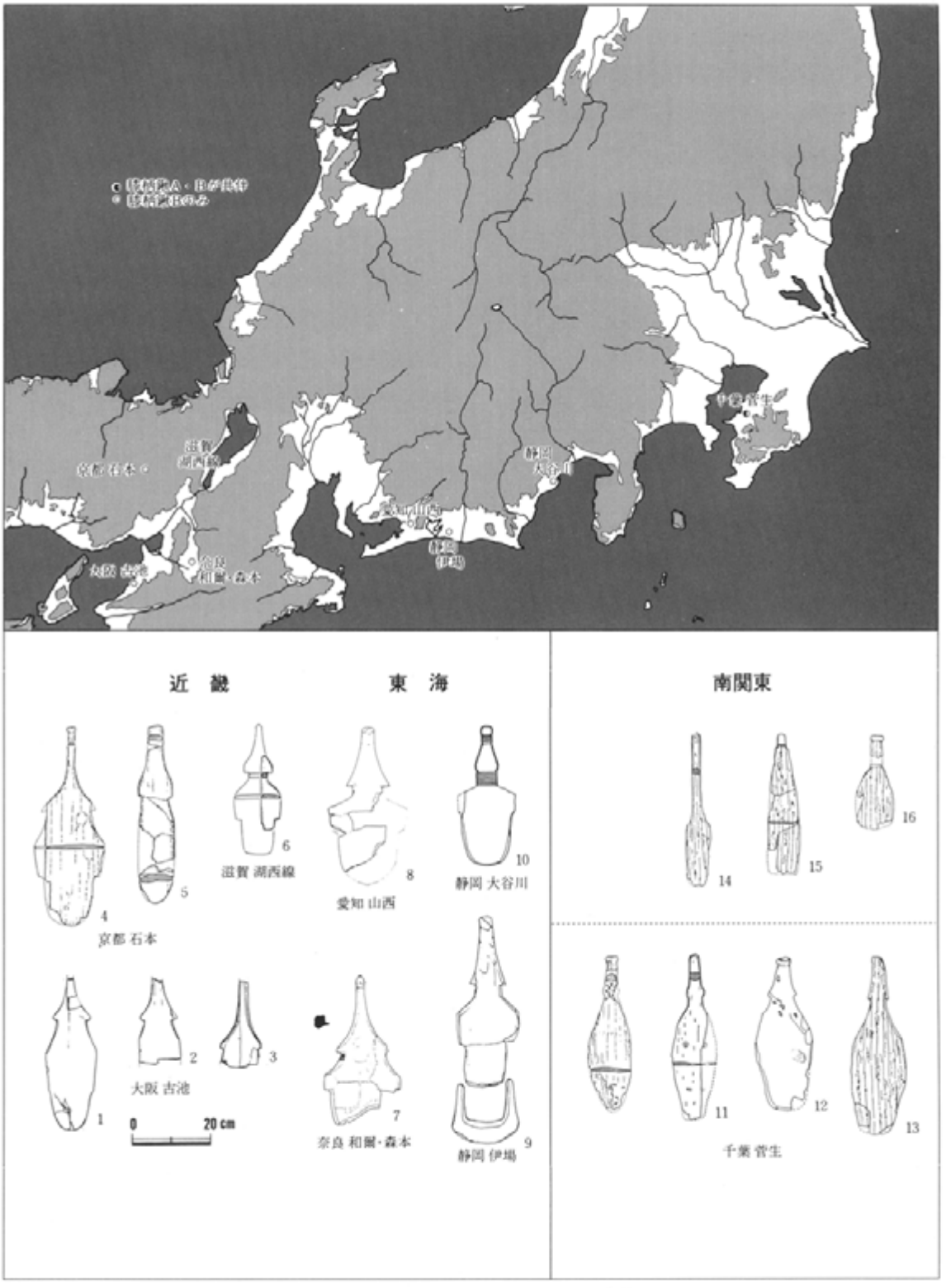
第11図　弥生時代中期　膝柄鍬出土分布図



第12図　弥生時代後期－古墳時代前期　膝柄鏃出土分布図



第13図　古墳時代中期　腰柄鏃出土分布図



第14図　古墳時代後期　膝柄鍬出土分布図

・83・86）・布留遺跡[注8]・城島遺跡下田地区[注9]・滋賀県斗西遺跡は古墳時代前期、滋賀県服部遺跡[注10]（11・12）は弥生時代末から古墳時代初頭である。そして服部遺跡の膝柄鍬A（11）の刃部の形態は膝柄鍬B（12）のそれとほぼ共通する。斗西遺跡を除けば、これらの遺跡はいずれも膝柄股鍬Bのみで膝柄股鍬Aは見られず、膝柄股鍬Bと膝柄鍬Bの分布の広がりには若干のズレを生じている。

（3）古墳時代中期（第13図）　弥生時代後期～古墳時代前期の段階では、近畿と東海が相対峙するかたちとなっていたが、古墳時代中期に至って状況が一変する。膝柄鍬BにU字形の鉄刃が装着されるようになると共に、東海の岐阜県宇田遺跡（10、岐阜市教委1975）や愛知県勝川遺跡（11）で膝柄鍬Bが出現し、東海から膝柄鍬Aを駆逐していく。そして、膝柄鍬Bは規格化されたU字形鍬先に合わせたためか、近畿から東海にかけてほぼ同一形態をとるようになる。一方、膝柄鍬Aは群馬県の三ツ寺Ⅰ遺跡（18、群馬県教委1988）に膝柄鍬B（12～17）と共伴して見られるが、数量的には膝柄鍬Bをかなり下回る。ただし、三ツ寺Ⅰ遺跡の膝柄鍬BにはU字形鍬先を装着する細工は認められないため、膝柄鍬Bに鉄刃をつけるのは東海までのようである。

（4）古墳時代後期以降（第14図）　古墳時代後期に至ると、関東の千葉県菅生遺跡（11～17、大場ほか1980）の膝柄鍬B（11～14）にU字形鍬先の装着例が認められるようになるが、依然として膝柄鍬A（15～17）も共伴し、しかも興味深いことには膝柄鍬Aには鉄刃装着の痕跡は見られないのである。この時期、近畿から東海にかけての膝柄鍬Bは、笠部に退化傾向が認められ、それに比して肩部が著しく発達し、刃部は幅広で、全体に上下にひしゃげたようなかたちとなる。

7世紀以降、近畿では膝柄鍬Bの出土例はなくなるが、東海では静岡県の伊場（9、浜松市遺跡調査会1975）・大谷川（10、静岡県埋文研究所1987）の2遺跡などが見られる。それらの形態は、古墳時代後期に見られた傾向がさらに進んだものになる。そして8世紀以降、膝柄鍬Bはその姿を消していくようである。

各地域での器種組成の変遷

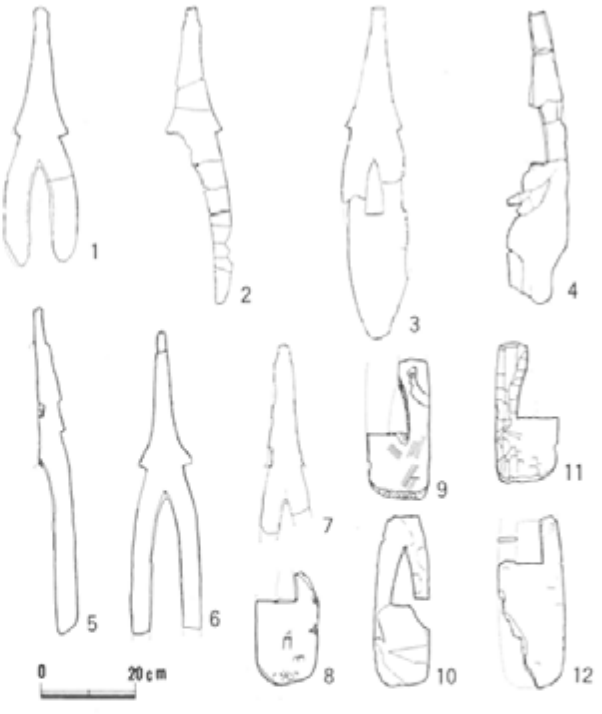
前章では広鍬A・膝柄股鍬・膝柄鍬それぞれの分布の変遷を各時期ごとに追って見てきた。そこで本章では、近畿・東海・北陸・関東の4地域で、各地域ごとにそれらの器種組成の変化を、弥生時代中期・後期・古墳時代前期・中期・後期以降の5時期に分け、編年案（第17～19図）を示してそのタテの流れを追うこととしたい。

1．近畿（第17図）　弥生時代中期には広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが見られる。広

鏃Aは恩智遺跡のII～III期の例を初現として唐古・鍵遺跡のIV期まで、河内・和泉・大和地域に中期を通じて見られる。膝柄股鏃Aは鶏冠井遺跡のI～II期を初例として、やはり中期を通じて摂津・河内・和泉・山城地域に分布する。膝柄鏃Aはやはり鶏冠井遺跡のI～II期を初めとして、中期と通じて河内・和泉・山城の地域で見られる。

弥生時代後期に至ると、まず広鏃Aが消滅する。そして、膝柄股鏃Aも岡崎・吉武城・斗西遺跡の例を除けばその姿を消し、膝柄股鏃Bに移行する。その分布範囲は、西は播磨の権見遺跡（兵庫県社会文化協会1972）や但馬の片引遺跡（埋蔵文化財研究会1983）で、東は近江の服部遺跡や伊賀の北堀池遺跡である。膝柄鏃Aも播磨・河内・山城といった地域では膝柄鏃Bに取って替られる。この時期の膝柄鏃Bは形態上概ね4タイプに分けられる。註10。一方、大和や近江では依然として膝柄鏃Bが根強く残り、古墳時代前期でもなお、平城宮下層・布留・城島・服部・斗西遺跡では膝柄鏃A・Bが共伴する。そして大量の膝柄股鏃Bが出土した北堀池遺跡には膝柄鏃Aしか見られない。このように、膝柄股鏃と膝柄鏃ではナスビ形への移行が地域によって若干ずれる現象が見られる。しかし、近畿での膝柄股鏃B・膝柄鏃Bの出現期としての画期はこの時期に設定できよう。

古墳時代中期の5世紀後半頃、膝柄鏃BにU字形の鉄刃が装着されるようになり、それと共に膝柄鏃Aがようやく姿を消す。近畿での次なる画期がここに設定できる。U字形鏃先の出現により、前段階で4類に分けられた膝柄鏃Bはそのなかの III類に鉄刃のつくタイプにほぼ規格化される。また、服部遺跡には1例、刃部に三角形のスカシを持つものがあり（第13図5、滋賀県教委1984）、山陰の弥生時代中期の膝柄鏃B（第15図）に酷似することから、その関係が注目される。一方、膝柄股鏃Bは弥生時代後期からの流れで刃部の幅広化傾向を一層強める。また、数量的にまとまって見られるのはこの時



第15図　弥生時代中期山陰の膝柄股鏃B・膝柄鏃B（1～4 鳥取目久美遺跡、5－12　島根西川津遺跡出土）

期までである。

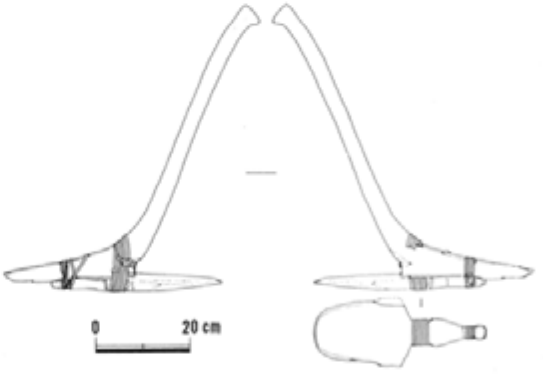
古墳時代後期には、膝柄股鍬Bは近畿の中央部でほとんどその姿を消し、周辺地域である丹波の石本遺跡（京都府埋文センター1987）などでわずかに確認されるのみである。膝柄鍬Bも数量的に減少するようである。形態は、肩部が著しく発達し、刃部に幅広化の傾向が認められる。そしてそれ以後、これらの器種はこの地方から完全に姿を消すのである。

2．東海（第18図）　次に、東海の状況を見る。弥生時代中期の木製農耕具出土遺跡は東海西部に多く見られる。まず、広鍬Aは朝日・勝川・神明社南遺跡の3例が現在確認されている。膝柄股鍬Aの初現は弥生時代中期中葉段階に確認される。岡島遺跡の例がそれである。次いで中期後半には勝川遺跡が加わる。膝柄鍬Aは朝日遺跡で中期後半に見られる。いずれも形態上、近畿のものと大差はないが、中期後半段階の膝柄股鍬A・膝柄鍬Aの軸部にはこの地域特有の工夫が見られる。

弥生時代後期から古墳時代前期には、まず広鍬Aは2連の状態の未成品が勝川遺跡で出土している。膝柄股鍬Aは近畿の膝柄股鍬Bの影響を受けて刃部が薄くかつ幅広くなる。しかし、数量的には減少するどころかむしろ増加し、特に東海東部での類例が目立つようになる。膝柄鍬Aも同様の分布を示す。形態的には弥生時代中期と比べてやや大型化する。この時期、近畿の直接の影響を離れて東海の農耕具は独自の道を歩み、さらに関東にまでその影響を及ぼしていく。しかしそれは新たな方向を模索するものではなく、弥生時代中期以来の伝統に固執することから生じた独自性といえよう。

古墳時代中期には大きな画期が訪れる。弥生時代中期以来の広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが姿を消し、かわってU字形鍬先を装着する膝柄鍬Bが出現する。この段階の膝柄鍬Bは宇田遺跡と勝川遺跡の2例が知られ、その形態は同時期の近畿のそれとほぼ共通する。時期は2例共にほぼ5世紀末頃で近畿ともさほど差はない。また、現在のところ膝柄股鍬Bの類例は見られない。

古墳時代後期には山西遺跡（豊川市教委1988）で、それ以降は伊場遺跡や大谷川遺跡で膝柄鍬Bの出土例が知られる。いずれも近畿の例同様、笠部が退化し、肩部が著しく発達する。大谷川遺跡の例では特に前者の傾向が顕著に認められる。そして、同遺跡例の膝柄



第16図　静岡・大谷川遺跡出土の膝柄鍬B

握部の端に特徴的に見られるかえり（第16図）は、現在の静岡地方の鍬の「かなぐり」と呼ばれるものと共通し（静岡市立登呂博物館1983）、現代に続く地域色の成立という点では極めて興味深いものである。

3．北陸（第18図）　北陸での膝柄股鍬・膝柄鍬の類例は、弥生時代後期から古墳時代前期にしか確認できない。まず、膝柄股鍬Aは、中小泉遺跡に類例が見られる。その形態は近畿・東海の弥生時代中期の例に近似する。そして、同じく中小泉遺跡や近岡遺跡では膝柄股鍬Bが出土している。その軸部には方形柄孔があり、すでにナスビ形の笠部の本来の機能は喪失している。二股鍬に方形柄孔を穿つ例は弥生時代中期の北部九州で多く認められており、それらとの関係が注目される。一方、膝柄鍬Bには3タイプある。一つは江上A遺跡の例で、近畿の膝柄鍬Bに類する。次は、刃部にスリットを入れる二口六丁遺跡の例である。弥生時代中期の山陰には刃部に三角形のスカシを入れる膝柄鍬Bが一般的に見られるため、このタイプは山陰との関連で考えていく必要があろう。最後に膝柄股鍬B同様、方形柄孔を持つ例が中小泉遺跡に見られる。それと関連して、江上A遺跡には方形柄孔を有する膝柄鍬Aとも言うべき狭鍬が存在する。この例のみを見れば他の狭鍬と何ら違いはないのであるが、中小泉遺跡の膝柄鍬Bはまさにこれのヴァリエーションであり、前記2例の膝柄股鍬Bも同じ系譜で考えられることから、この江上A遺跡の狭鍬はやはり膝柄鍬Aとするべきであろうか。以上列記したもののうち、軸部に方形柄孔を有する膝柄股鍬Bと刃部にスリットの入る膝柄鍬Bは、それぞれ北関東の古墳時代前期の膝柄股鍬B・膝柄鍬Aに受け継がれていく。

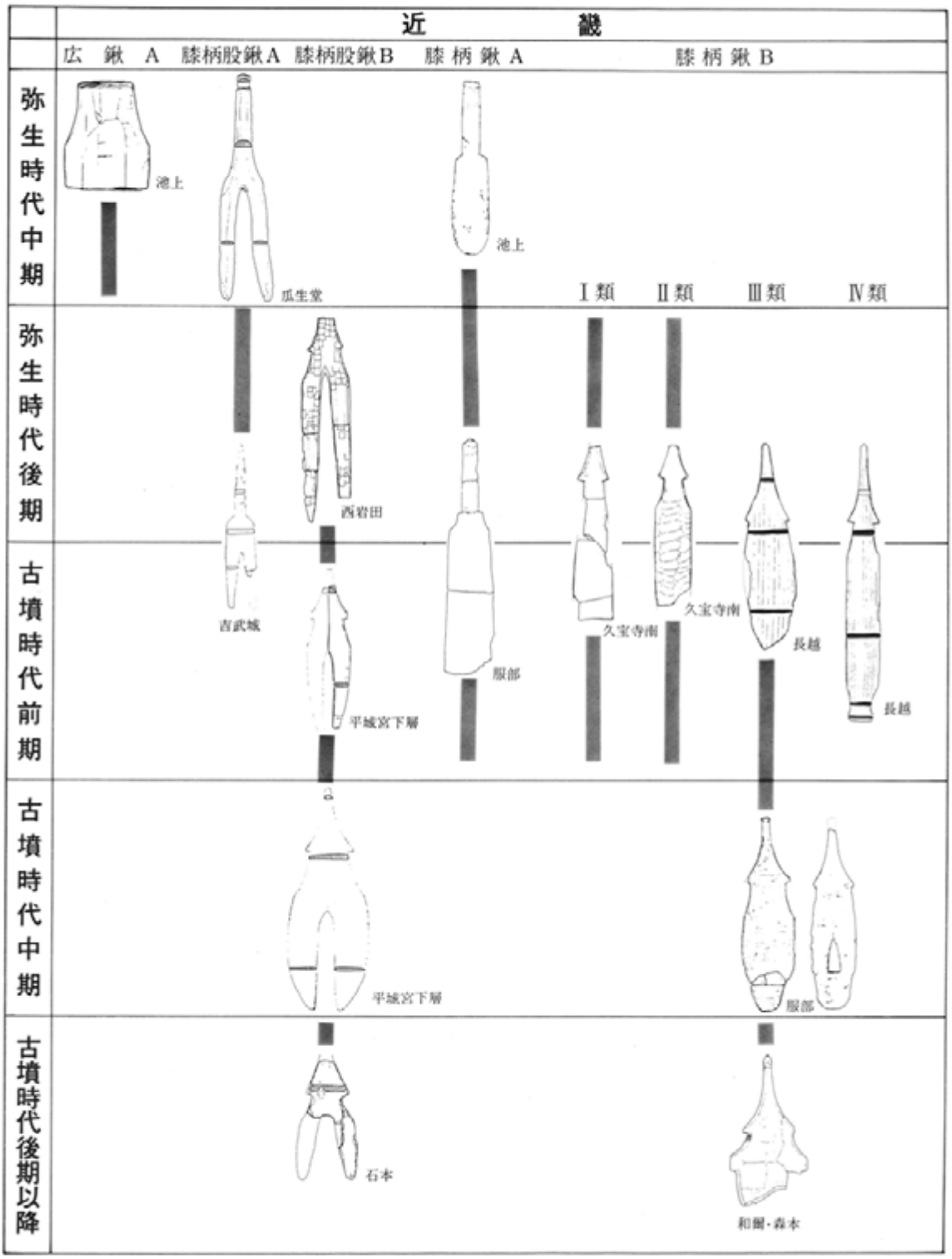
4．関東（第19図）　弥生時代中期は浜野川遺跡の中期後半例が知られる。ここでは広鍬A・膝柄鍬A出土している。形態は近畿・東海のものと大差はない。

弥生時代後期には新保遺跡で広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aが、日高遺跡では膝柄鍬Aが出土している。それらはいずれも東海のものと共通する特徴を持つ。

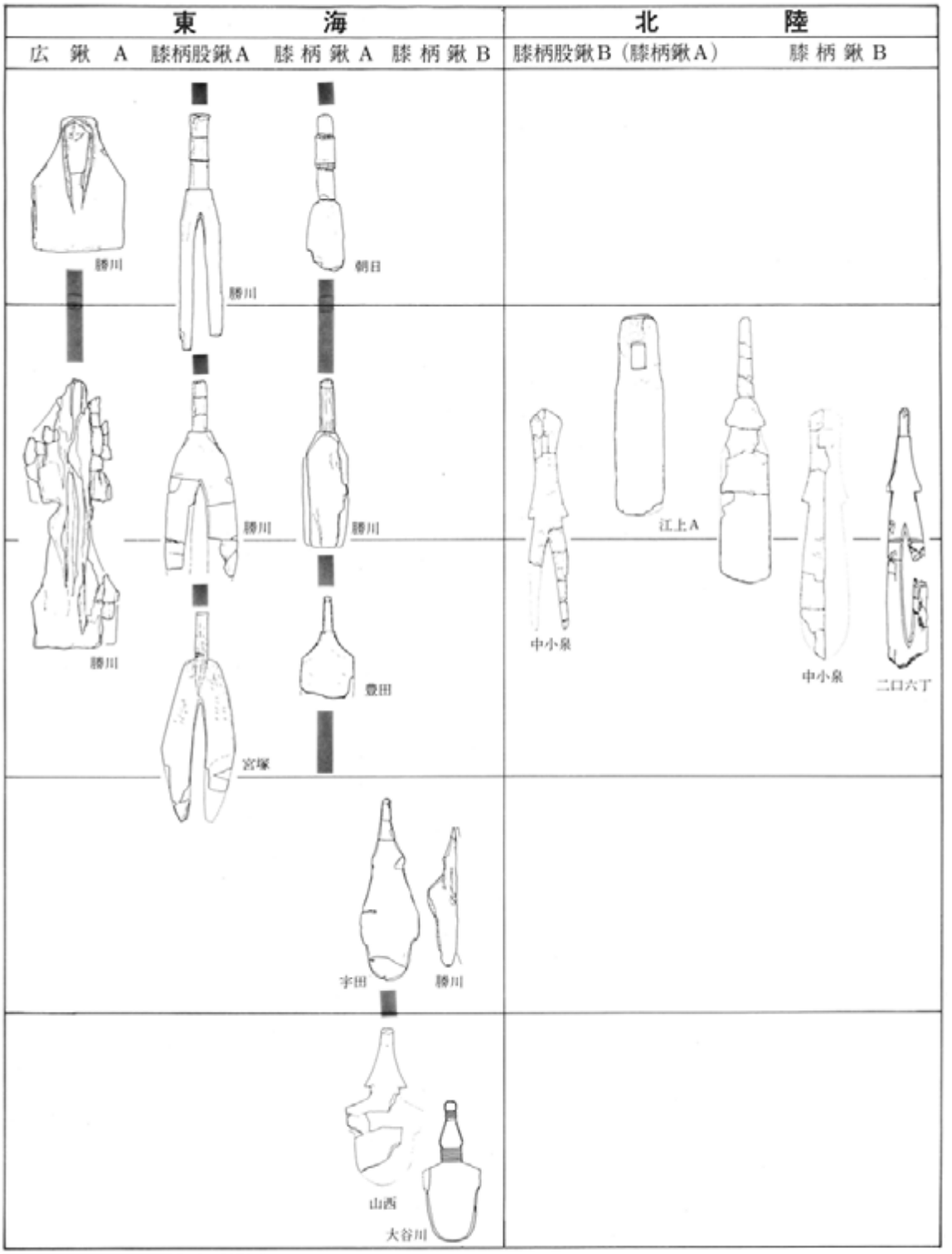
古墳時代前期には広鍬Aがなくなり、新たに膝柄股鍬Bが加わる。新保遺跡には膝柄鍬Aの刃部にスリットを入れる例や、膝柄股鍬Bの中に軸部に方形柄孔を持つ例があることから、膝柄鍬A・膝柄股鍬Bには北陸にその系譜をたどれる一群が見られる。

古墳時代中期に至ると膝柄股鍬A・膝柄股鍬Bが姿を消し、膝柄鍬Bが現われる。膝柄鍬BにはU字形鍬先の装着例は確認されていない。

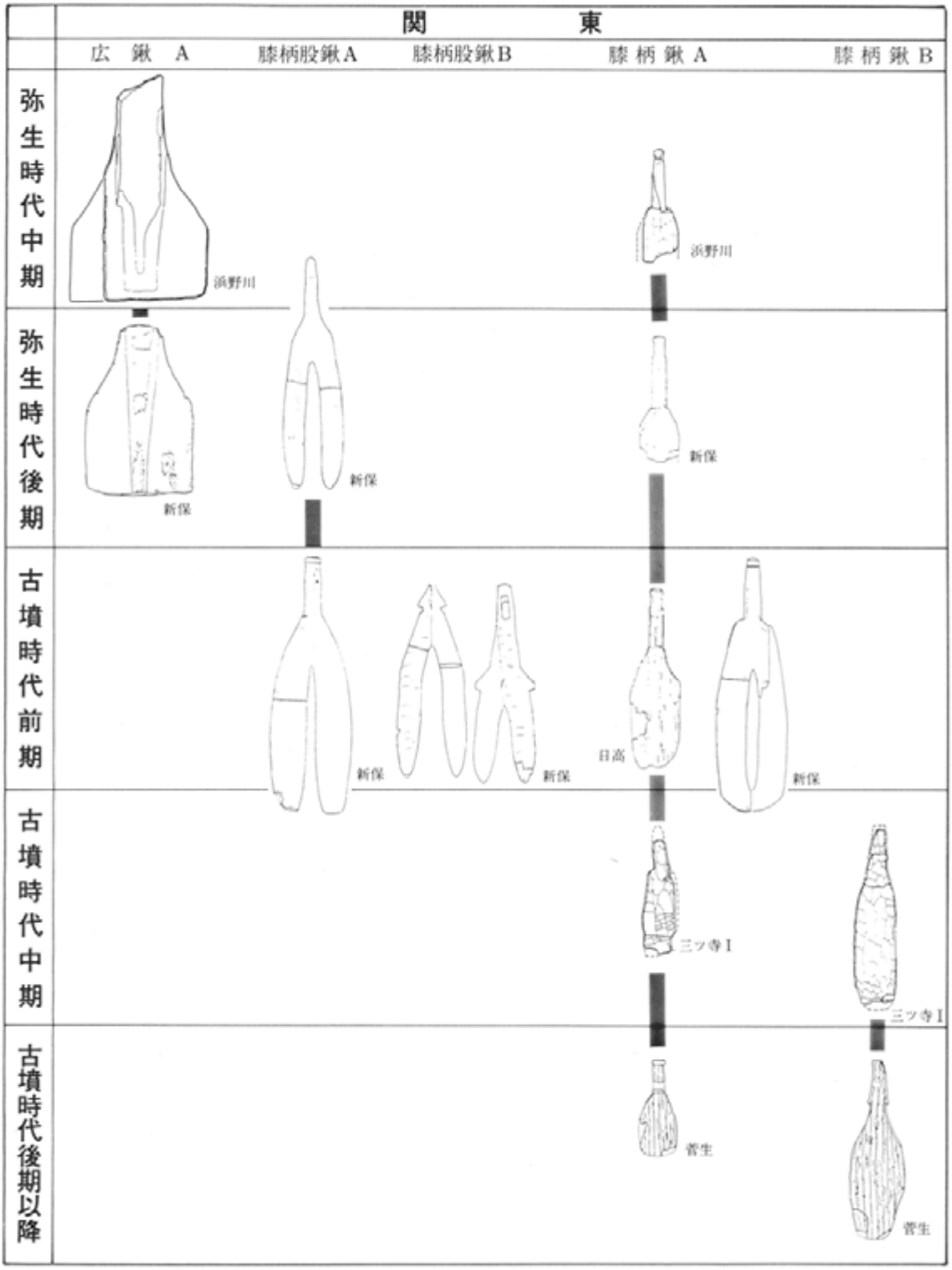
古墳時代後期になって、菅生遺跡の膝柄鍬Bにようやく U字形鍬先を装着する例が見られるようになる。が、一方で膝柄鍬Aもこの時期まで残る。



第17図　広鍬、膝柄股鍬・膝柄鍬　編年試案(1)



第18図　広鏃、膝柄股鏃・膝柄鏃　編年試案(2)



第19図　広鍬、膝柄股鍬・膝柄鍬　編年試案(3)

まとめ

以上検討してきたことをまとめると、次のようになる。

（1）弥生時代中期の段階では、広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬には近畿・東海・関東で共通する形態のものが見られる。

（2）弥生時代後期になると、近畿・東海・北陸の3地域に大きく分化する。即ち、近畿では広鍬Aが消え、膝柄股鍬Aは膝柄股鍬Bに、膝柄鍬Aは膝柄鍬Bに移行する。それに対して東海では弥生時代中期以来の伝統を強く維持して、広鍬A・膝柄股鍬A・膝柄鍬Aはその形を変えつつもこの時期まで残る。北陸は近畿・九州・山陰などの影響で独特の農耕具を形成する。そして関東は東海の強い影響下に置かれながらも北陸的な様相もわずかに認められるようになる。この傾向は古墳時代前期まで続く。

（3）古墳時代中期にはU字形鍬先の出現によって東海に膝柄鍬Bが流入し、再び近畿と東海に共通する器種が認められるようになる。一方、関東にも膝柄鍬Bは現れるが依然として膝柄鍬Aが残り、しかもそのいずれにもU字形鍬先のつく形跡は見られない。

（4）古墳時代後期にも近畿・東海でほぼ同じ状況が見られる。関東でもようやく膝柄鍬BにU字形鍬先が装着されるようになるが、未だ膝柄鍬Aも残り、かつ膝柄鍬Aには鉄刃はつかない。

以上、小論を書くにあたって、佐原真先生には文章から図版の作成に至るまで懇切なる御指導をいただいた。また、上原真人、赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司の諸氏には多くの有益な御教示を得た。最後に、資料の実見や収集には下記の方々の御配慮を得たことを感謝します。浅生悦生・池本正明・岩田かおり・内田律雄・岡本茂史・金子裕之・神谷友和・木村有作・楠元哲夫・清水真一・楯真美子・立松彰・藤田和裕・朴美子・増田安生・宮原晋一・宮村典雄・山内紀嗣・山崎秀二・山口譲治・吉村和昭（敬称略・50音順）

註

1．枝の分岐部を利用した、くの字型に屈曲した柄。knee-shaftからの訳語である（佐原1977、P.62）。
2．同じ部分に小孔を穿つ例は大阪府鬼虎川遺跡（東大阪市文化財協会1987）・長崎県里田原遺跡などに見られる。里田原遺跡については長崎県教育庁文化課藤田和裕氏の御教示を得た。
3．知立市教育委員会岡本茂史氏の御厚意で実見させていただいた。
4．奈良国立文化財研究所上原真人氏の御教示による。
5．愛知県埋蔵文化財センター池本正明氏に資料の提供をしていただいた。
6．（佐原1977、P.64）の用語に従う。
7．朝日遺跡の膝柄鍬Aについてはすでに木村有作氏が指摘している（木村1988、P.91）。
8．埋蔵文化財天理教調査団山内紀嗣氏の御厚意で実見させていただいた。
9．桜井市教育委員会清水真一氏の御教示による。
10．守山市立埋蔵文化財センター山崎秀二氏の御厚意で実見させていただいた。

11．弥生時代後期－古墳時代前期の近畿の膝柄鍬Bは次の4類に分けられる。

Ⅰ類　刃部は上下に長い。刃幅は笠部直下が最も狭く、下端に向かってハの字型に広がり、下端が最も幅広くなる。大阪府久宝寺南遺跡（第12図3、大阪文化財センター1987）・美園遺跡（第12図2、大阪府教委1985a）、奈良県城島遺跡下田地区、京都府岡崎遺跡、滋賀県吉武城遺跡（第12図10、滋賀県教委1987a）などの例がこれにあたる。

Ⅱ類　Ⅰ類同様、刃部は上下に長い。笠部直下にくびれを持ち、くびれ部と刃部の境の肩部に明確な稜を設ける。刃幅は肩部から刃部下端までほぼ同じで真っ直ぐ伸びる。類例は大阪府の西岩田遺跡（第12図1、大阪文化財センター1983a）・久宝寺南遺跡（第12図4、大阪文化財センター1987）、和歌山県の鳴神Ⅴ遺跡（第12図9、和歌山県教委1984）、奈良県東安堵遺跡（橿考研1983）・布留遺跡、滋賀県針江北遺跡・服部遺跡（第12図11）などに見られる。

Ⅲ類　刃部の平面はほぼ長楕円形を呈する。刃部の最大幅はⅠ・Ⅱ類と異なり、ほぼ中央に位置し、刃部下端は丸くおさまる。兵庫県長越遺跡（第12図7、兵庫県教委1978）、奈良県平城宮下層遺跡（第12図14、奈文研1986）にその類例が見られる。

Ⅳ類　笠部から刃部上半にかけてはⅡ類とほぼ同様の形態をとるが、刃部下端付近で内側に切れ込むようにくびれる。これは方形で両端を折り曲げた鉄刃を装着するための細工と見られる。現在のところ、兵庫県長越遺跡での2例（第12図5・6）しか見られない。

以上のように分類できるが、本文とは直接関連性を持たないために註でこれを記した。

なお、第9図10・13・18、第10図22、第11図13、第12図27、第13図9は写真からのトレースのため、縮尺や細部の形態については実際と異なる可能性があることを附記しておく。

参考文献

石野博信ほか
1988「特集・弥生時代の木製品」『月刊考古学ジャーナル』6月号
大場磐雄・乙益重隆編
1980『上総菅生遺跡』
木村有作1988「木製農耕具について」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ
黒崎直　1970「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』16－3
1976「古墳時代の農耕具」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報　第28冊
1985「くわとすき」佐原真・金関恕編『弥生文化の研究　5』道具と技術Ⅰ
1988「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」日本考古学協会設立40周年記念シンポジューム『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』
後藤守一編
1962『伊豆／山木遺跡　弥生時代木製品の研究』
佐原真　1977「石斧論」松崎寿和先生退官記念事業会編『考古論集』
末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎
1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊
根木修　1976「木製農耕具の意義」『考古学研究』22－4
町田章　1975「木工技術の展開」佐原真・金関恕編『古代史発掘　4』稲作の始まり
1980「ＳＤ6030出土の木製品の検討」
「古墳時代農耕具の問題点」『平城宮発掘調査報告Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第39冊
松崎俊郎1986「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』
山田昌久1982「木工技術の変化と特徴的な着柄鋤・鍬について」群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『日高遺跡』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
1986「くわとすきの来た道」群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅰ弥生・古墳時代大溝編』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
1988「東日本における稲作技術の展開と画期」日本考古学協会設立40周年記念シンポジューム『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』
愛知県教育委員会
1982『朝日遺跡』

(財)愛知県埋蔵文化財センター
1987 「朝日遺跡」 『年報 昭和61年度』
1988 「勝川遺跡」 『年報 昭和62年度』
石川県立埋蔵文化財センター
1986 『近岡遺跡』
猪名川流域原田下水処理場遺跡調査団
1981 『原田西遺跡（大阪府域）』
磐田市教育委員会
1981 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
瓜生堂遺跡調査会
1980 『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』
1982 『瓜生堂遺跡Ⅲ』
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
1982 『巨摩・瓜生堂』
1985 a『美園』
1985 b『新家（その１）』
1987 『久宝寺北（その１～３）』
(財)大阪文化財センター
1974 『池上遺跡 木器編』第１分冊
1976 『池上遺跡 木器編』第２分冊
1983 a『西岩田』
1983 b『亀井』
1984 『亀井遺跡Ⅱ』
1987 『久宝寺南（その２）』
金沢市教育委員会
1983 『金沢市二口六丁遺跡』 金沢市文化財紀要32
上市町教育委員会
1984 『北陸自動車遺跡発掘調査報告―上市町木製品総括編―』
菊川町教育委員会
1986 『耳川遺跡（Ⅱ）』菊川町埋蔵文化財報告書第６集
(財)京都市埋蔵文化財研究所編
1986 『平安京跡発掘資料選（二）』
京都府埋蔵文化財調査研究センター
1987 『石本遺跡』 京都府遺跡調査報告書第８冊
岐阜市教育委員会
1975 『宇田遺跡発掘調査報告書』
群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
1982 『日高遺跡』 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
1986 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
1988 『三ツ寺Ⅰ遺跡 古墳時代居館の調査』 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第８集
小坂井町教育委員会
1960 『篠束 第１次調査報告』
湖西線関係遺跡調査団
1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
1982 「彦根市妙楽寺遺跡」 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ―１』
1983 「針江中遺跡」 『国道161号線バイパス関連調査概要（昭和57年度）３』
1985 「針江北遺跡」 『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和59年度）５』
1986 「赤野井湾遺跡」 『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

1987 a「吉武城遺跡」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要　国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和61年度）7』
1987 b「御倉・北萱地区」『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要2』
1987 c「赤野井湾遺跡」『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書2』
滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会
1984『服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ―志願守山氏服部町所在―』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
1987『大谷川Ⅱ（遺構編）』　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第11集
1988『長崎遺跡』　昭和62年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査概報
静岡市教育委員会
1982『駿河・豊田遺跡―静岡市外局建設予定地内遺跡発掘調査の報告―』
静岡市立登呂博物館
1983　特別展『静岡の鍬』図録
1988　特別展『静岡・清水平野の弥生時代』図録
島根県教育委員会
1988『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』
清水市教育委員会
1985『下野遺跡』　国道1号線静清バイパス（清水地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
第2阪和国道内遺跡調査会
1970『池上・四ツ池遺跡13』
千葉市教育委員会・㈶千葉県文化財センター
1988『千葉市浜野川遺跡群（低湿地における遺跡確認調査）』
東海市教育委員会
1988『ト、メキ遺跡』
豊川市教育委員会
1988『山西遺跡』
長岡京跡発掘調査事務所・長岡京市教育委員会
1985「長岡京跡左京第53次（7ANMSB地区）調査概要―左京六条二坊五・十二町、下八ノ坪・久我畷―」『長岡京市文化財調査報告書第14冊』
長岡京市教育委員会
1982「長岡京跡右京第75次（7ANIKC―3地区）調査概要」『長岡京市文化財調査報告書第9冊』
奈良県立橿原考古学研究所編
1982「十六面・薬王寺遺跡」『奈良県遺跡調査概報　1981年度』
1983『和爾・森本遺跡』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊
1983『東安堵遺跡』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
1985『大和を掘る』　1984年度発掘調査速報展
1988『石舞台から藤ノ木古墳』　橿原考古学研究所50周年記念特別展
奈良国立文化財研究所
1978「藤原宮西方官衙地域の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊
1980『平城宮発掘調査報告Ⅹ』　奈良国立文化財研究所学報第39冊
1983「第1次朝集殿推定地の調査　第146次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
1986「推定第1次朝堂院東朝集殿地区の調査　第171次」『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
日本考古学協会編
1949『登呂』前編
1954『登呂』本編
能登川町教育委員会
1988『斗西遺跡』　能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
浜松市遺跡調査会

1975 『伊場遺跡第６・７次発掘調査概報』
1983 『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅳ次発掘調査概要』
浜松市教育委員会
1978 『伊場遺跡遺物編１』　伊場遺跡発掘調査報告書第３冊
東大阪市文化財協会
1987 『鬼虎川の木質遺物―第７次発掘調査報告書第４冊―』
東奈良遺跡調査会
1979 『東奈良　発掘調査概報』Ⅰ
兵庫県社会文化協会編
1972 『播磨・権現遺跡調査概報１』兵庫県文化財調査報告書第６冊
兵庫県教育委員会
1978 『播磨・長越遺跡―昭和49・50年度調査報告書―』　兵庫県文化財調査報告書第12冊
兵庫県文化協会
1987 『淡路・志知川沖田南遺跡』　兵庫県文化財調査報告書第40冊
兵庫県埋蔵文化財調査事務所
1986 『弥生人のムラと暮らし―弥生時代の兵庫』　兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録No.３
袋井市教育委員会
1985 『土橋遺跡―基礎資料編―』　一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書
藤枝市教育委員会
1981ａ「宮塚遺跡」『国道１号線藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　第４冊』
1981ｂ「上藪田・川の丁遺跡」『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　第６冊』
埋蔵文化財研究会
1983 『木製農具について』　第14回研究集会資料
米原町教育委員会
1987 『入江内湖遺跡発掘調査報告書―米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査―』　米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ
1988 『入江内湖遺跡発掘調査報告書（行司町地区）発掘調査報告書―滋賀県文化産業交流会館建設に伴う発掘調査―』　米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ
三重県教育委員会
1980 『納所遺跡―遺構と遺物―』
1981 『北堀池遺跡調査報告』第１分冊
向日市教育委員会
1981 「長岡京跡修理式第１次（７ANBSS―１地区）分布調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告―第７集―』
1983 「長岡京跡左京第82次（７ANEIS地区）－左京二条二坊一町・鶏冠井遺跡第２次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書―第10集―』
米子市教育委員会
1986 『目久美遺跡』
焼津市歴史民俗資料館
1988 特別展『日本農耕文化の黎明』図録
和歌山県教育委員会
1984 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査

三の丸遺跡出土の奈良・平安時代土器

—尾張の集落址における様相—

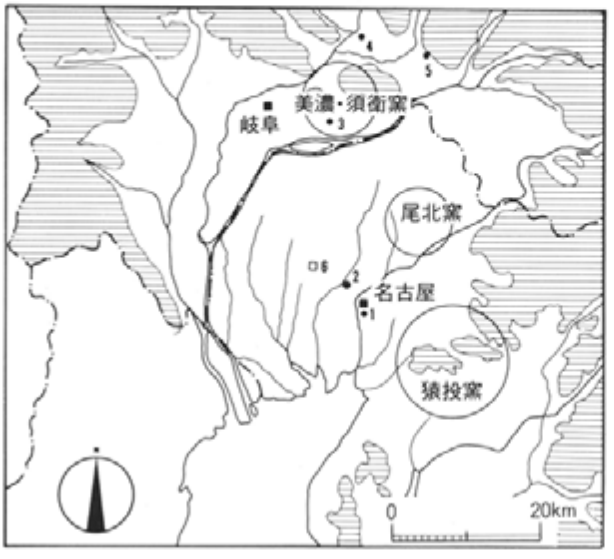
城ヶ谷　和　広

I　はじめに

三の丸遺跡は近世において名古屋城三の丸内の武家屋敷地となっていたところで、下面には弥生～中世の遺構がある。今回調査された62E、63A～E区は三の丸西南角の御園門の内側にあり、地理的には熱田台地の西端に立地している。古代においては、掘立柱建物1棟、竪穴住居数十軒が発見され[1]、この付近にかなりの規模の集落が展開していたことが想定される。

今までの調査例をふり返ってみると、名古屋市内でいくつか竪穴住居を検出した遺跡はある[2]が、いずれも都心ということで、調査面積も狭く詳細を検討するのは難しかった。尾張全体を見てみても当該期の良好な集落址の報告例はほとんどなく、近くでは美濃の山間部に近い岐阜県富加町東山浦遺跡[3]・関市重竹遺跡[4]・各務原市三井遺跡[5]などが知られるのみである。

古代の尾張国には猿投山西南麓古窯址群（以下、猿投窯とする。）・尾北古窯址群（以下、尾北窯とする。）といった窯業の一大中心地があり、その研究も進んでいるが、一方では集落址の調査例に乏しく、その様相ははっきりしなかった。今回調査された三の丸遺跡では、遺物の量が特に豊富とは言えないが、遺構に伴なう遺物群がいくつか見つかっており、8～10世紀における古代集落址の土器を考えるにあたり、一つの手がかりとなるであろう。



第Ⅰ図　遺跡位置図
1 三の丸遺跡
2 清洲城下町遺跡
3 三井遺跡
4 重竹遺跡
5 東山浦遺跡
6 尾張国府推定地

そこで本論では三の丸遺跡の奈良・平安時代の住居址・土坑出土遺物を中心として、尾張における集落址での土器のあり方について検討を加えてみたいと思う。

II　各時期の様相

遺構のあり方から時期を１期（８世紀前葉～中葉）、２期（８世紀後葉～９世紀前葉）、３期（９世紀中葉～10世紀前葉）に分けるものとする。

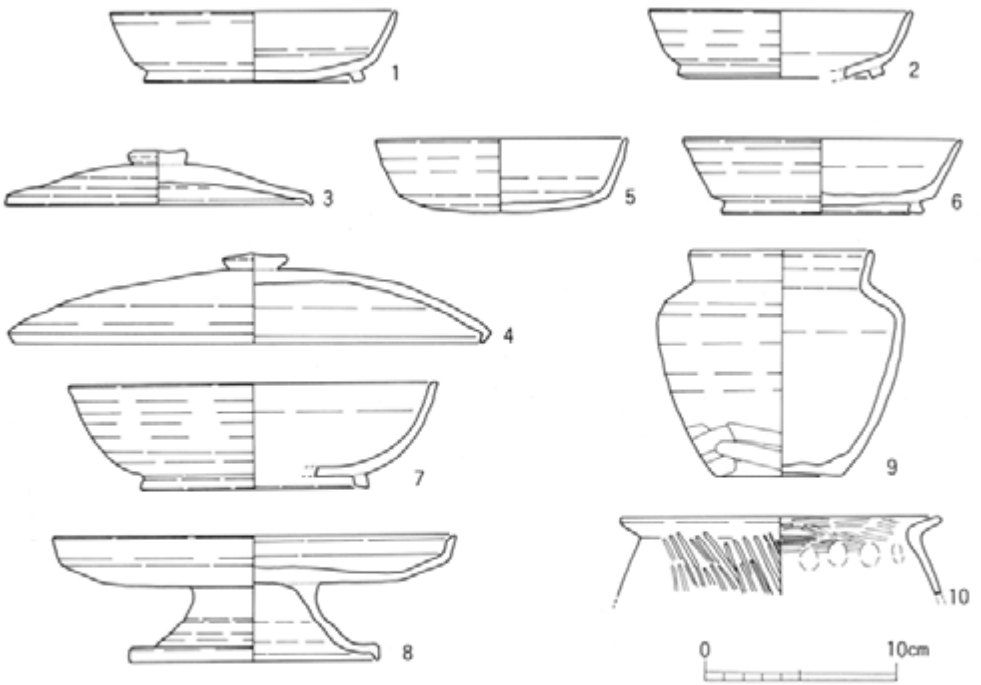
１期（８世紀前葉～中葉）〔第２図〕

この時期の特色は古墳時代の伝統をひくものが残るが新しく登場した器種と入れ替るときで、両者が混在して見られる。器種的には最も豊富で、供膳形態に見られる器種分化も激しい。生産地に対応させればＣ－２号窯期～ＮＮ－32号窯期[6]にあたる。

三の丸遺跡ではＤ区SB11・SB37、Ａ区SB114等があげられるが、いずれも遺物の量が少なく検討が難しいので、清洲城下町遺跡62Ｅ区SB07出土土器[7]を加えて検討することにする。清洲城下町遺跡SB07は一辺約７ｍの方形の竪穴住居で、覆土中より大量の須恵器・土師器が検出されている。

１期の遺物として、須恵器杯蓋・杯Ａ[8]・杯Ｂ・椀Ａ・椀Ｂ・盤Ｂ・盤Ｃ・高杯・平瓶・長頸瓶・横瓶・短頸壺・甕・甑・甌、土師器甕などがある。

杯蓋（第２図－３・４）は天井部1/2を回転ヘラケズリするもので、口縁端部はややまっ



第２図　三の丸遺跡出土土器(1)・清州城下町遺跡出土土器（1・2三の丸遺跡D区SB37　3～10城下町遺跡62E区SB07）

すぐのびるものである。杯ＢⅠ～ＢⅣに対応するものと思われる。無台杯身である杯Ａ（第２図－５）は底部を回転ヘラケズリするもので、口径によりＡⅠ（口径13.6cm×器高4.0cm、以下同様に表記する。）・ＡⅡ（12.4×4.0）に分かれる。有台杯身である杯Ｂ（第２図－６）は底部を回転ヘラケズリするもので、腰の出はあまりはっきりしないものが多い。また底部が高台よりも下へ突出するタイプ（第２図－２）も若干見られる。杯Ｂは口径によりＢⅠ（19.2×6.4）・ＢⅡ$_1$（17.0×7.4）・ＢⅡ$_2$（17.4　×6.4）・ＢⅢ（16.0×5.8）・ＢⅣ（14.9×3.9）・ＢⅤ（13.3×3.9）・ＢⅥ（11.7×3.9）に分けられる。無台の椀である椀Ａは底部に回転糸切り痕跡を残すものである。有台椀である椀Ｂ（第２図－７）は体部が丸味をもつものである。７世紀代より残るものとして高杯・鼈などがあるが、これ以降には見られない。土師器は甕のみが存する。口頸部はくの字状に短かく開くもので、体部はあらいハケメを施す。口縁部は内面ヨコ方向ハケメ、外面ヨコナデで調整する。

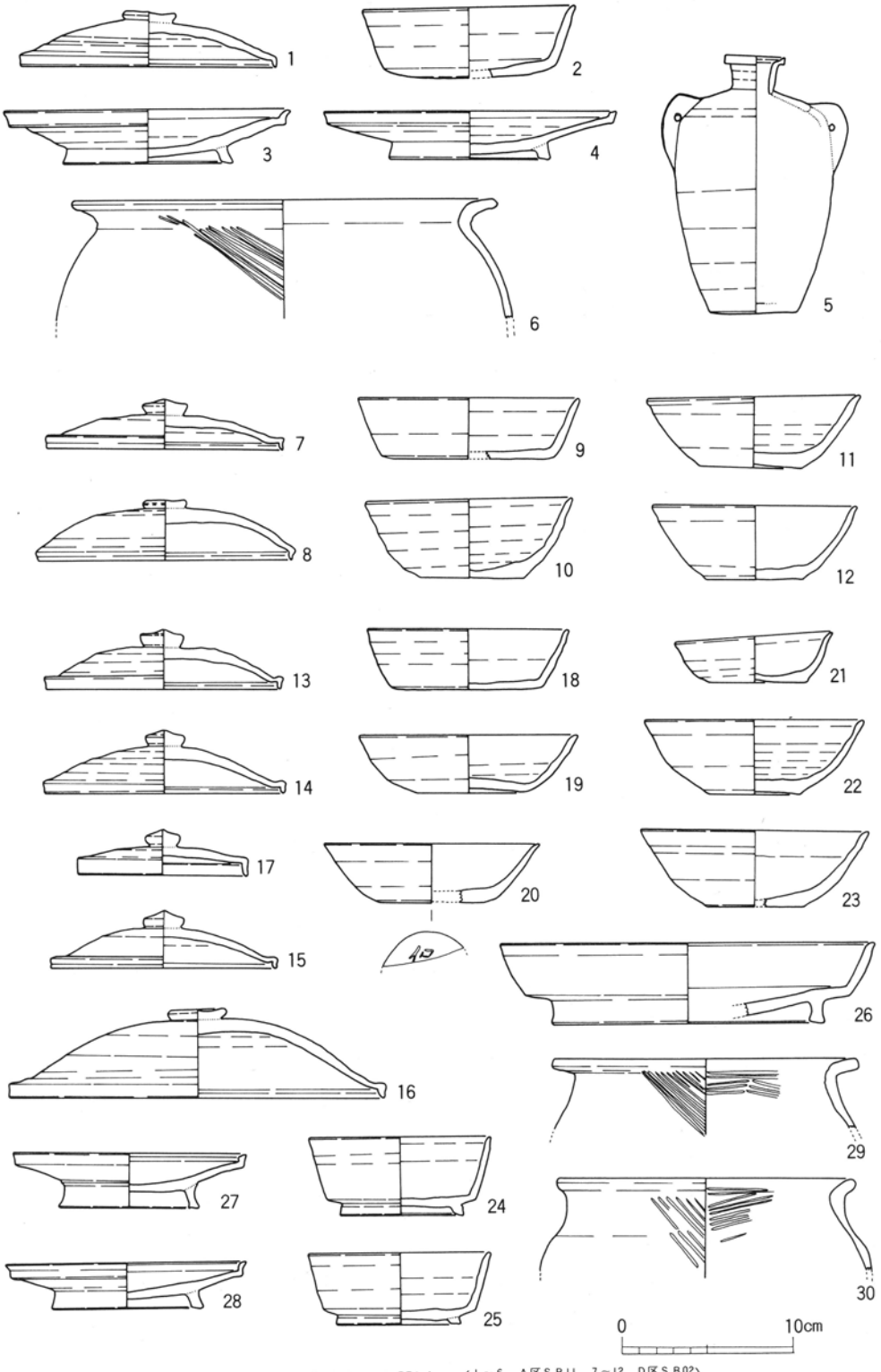
２期（８世紀後葉～９世紀前葉）〔第３図〕

この時期になると器種が減少し、器種分化も少なくなり、１～２種類の法量に集約されてくる。生産地に対応させれば０－10号窯期・IG－78号窯期にあたる。

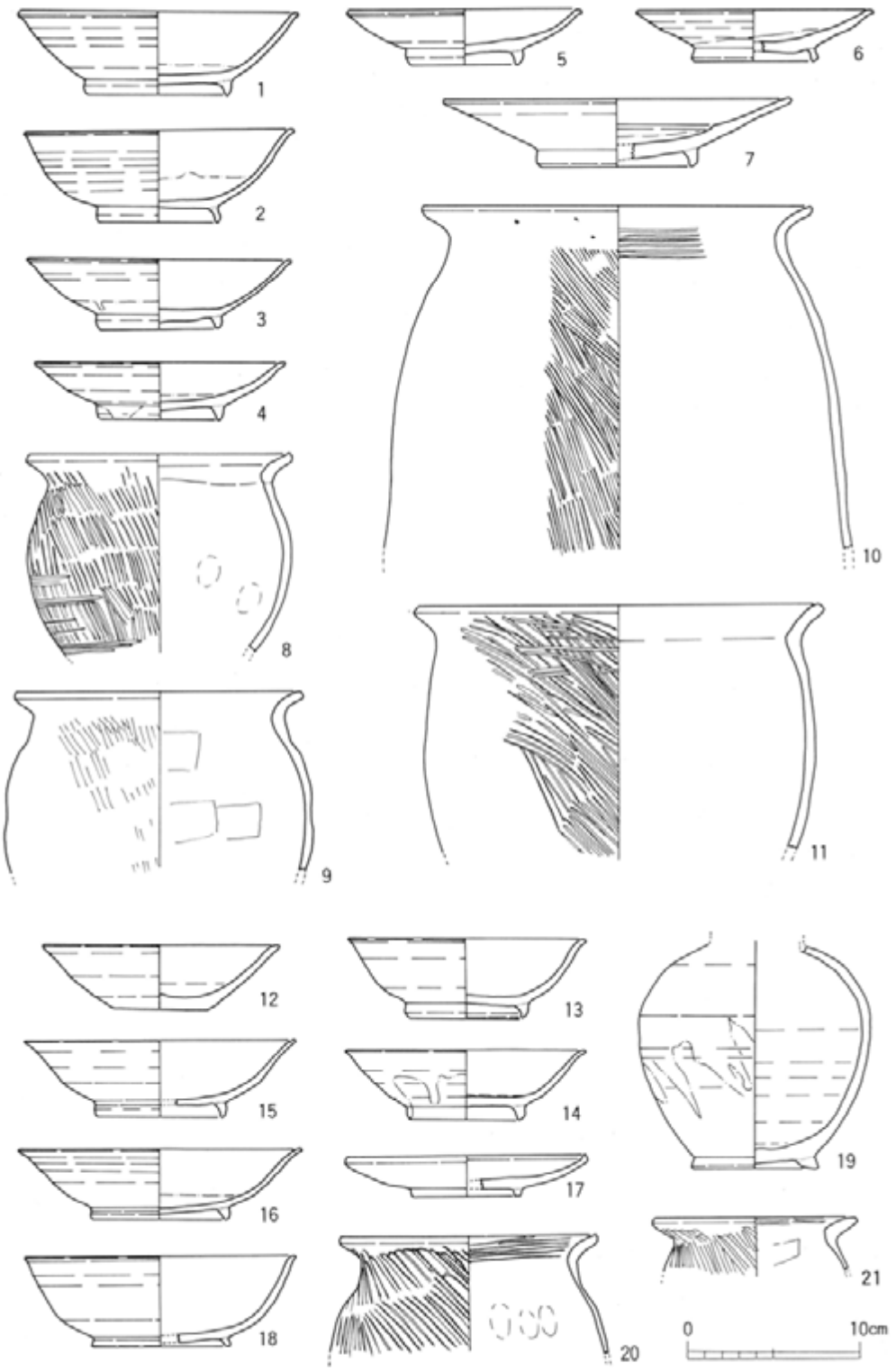
この時期の遺物として、三の丸Ａ区SB11、Ｄ区SB02・SK166出土遺物がある。SB11は一辺５ｍの方形の竪穴住居で、中央部覆土中よりほぼ同一レベルで完形に近い土器群が出土している（第３図－１～６）。SB02は一辺4.5ｍ×６ｍの竪穴住居で床面上よりほぼ完形の杯類（第３図－７～12）が出土した。SK166は径1.8ｍの円形の土坑であるが、埋土の状態より、一時期に投棄されたと考えうる土器群が出土している。（第３図－13～30）

２期の遺物として、杯蓋・杯Ａ・杯Ｂ・椀Ａ・椀Ｂ・盤Ｂ・すり鉢・長頸瓶・双耳瓶・短頸壺・甕、土師器甕などがある。

杯蓋は天井部に回転ヘラケズリによる稜がついているものが多く、１期のようななめらかさはない。口縁端部は屈曲が強くなる。口径は14.5cmを中心とするもので、杯Ｂの他、杯Ａ等への対応もあるものと思われる。杯Ａは底部に回転糸切り痕を残すものもあるが、ほとんどのものは回転ヘラケズリにより平底にしあげ、腰に稜をつける。口径によりＡⅠ（12.7×4.3）・ＡⅡ（9.5×3.2）に分かれる。杯Ｂは量的に減少し、口径も３種類になる。杯ＢⅠ（22.0×7.4）は口縁端部になめに平坦面をつくるもので、やや高めの高台がつく。杯ＢⅡ（口径約15cm）はⅠ期とあまり変わらない。杯ＢⅢは腰に明瞭な稜をもつもので、内底面は工具等により平坦になでられているものと思われる。椀Ａは器高が少し高くなる。椀Ｂは図示しえなかったが、Ⅰ期と違い口径が小さく、椀Ａに高台を付した器形である。盤Ｂは口縁端部を屈曲させるようになり、口径によりＢⅠ（17.2×3.0）・ＢⅡ（14.0×3.0）に分かれる。土師器甕は口縁部が少し短かくなり、大きく開くようになる。調整等はあま



第3図　三の丸遺跡出土土器(2)　(1～6　A区SB11、7～12　D区SB02、13～30　D区SK166)



第4図　三の丸遺跡出土土器(3)　（1～11　A区SK807、12～21　A区SB104）

り変わらない。

3期（9世紀中葉～10世紀前葉）〔第4図〕

この時期になると須恵器はほとんど見られなくなり、供膳形態を中心として灰釉陶器が増加する。生産地に対応させればK—14号窯期・K—90号窯期にあたる。

この時期にあたるものとして三の丸A区SB104・SK807などがあげられる。SB104は北壁中央にカマドをもつ一辺5mの方形の竪穴住居である。住居址内の土坑と床面上よりほぼ同時期の土器群が出土している（第4図—1～11）。SK807は径1.5mほどの円形の土坑で埋土の状況より短期間に埋ったものと思われる（第4図—12～21）。

器種としては須恵器杯蓋・杯A・椀A・椀B・すり鉢・横瓶・短頸壺・甕・灰釉陶器椀・皿・長頸瓶・平瓶・土師器甕などがある。

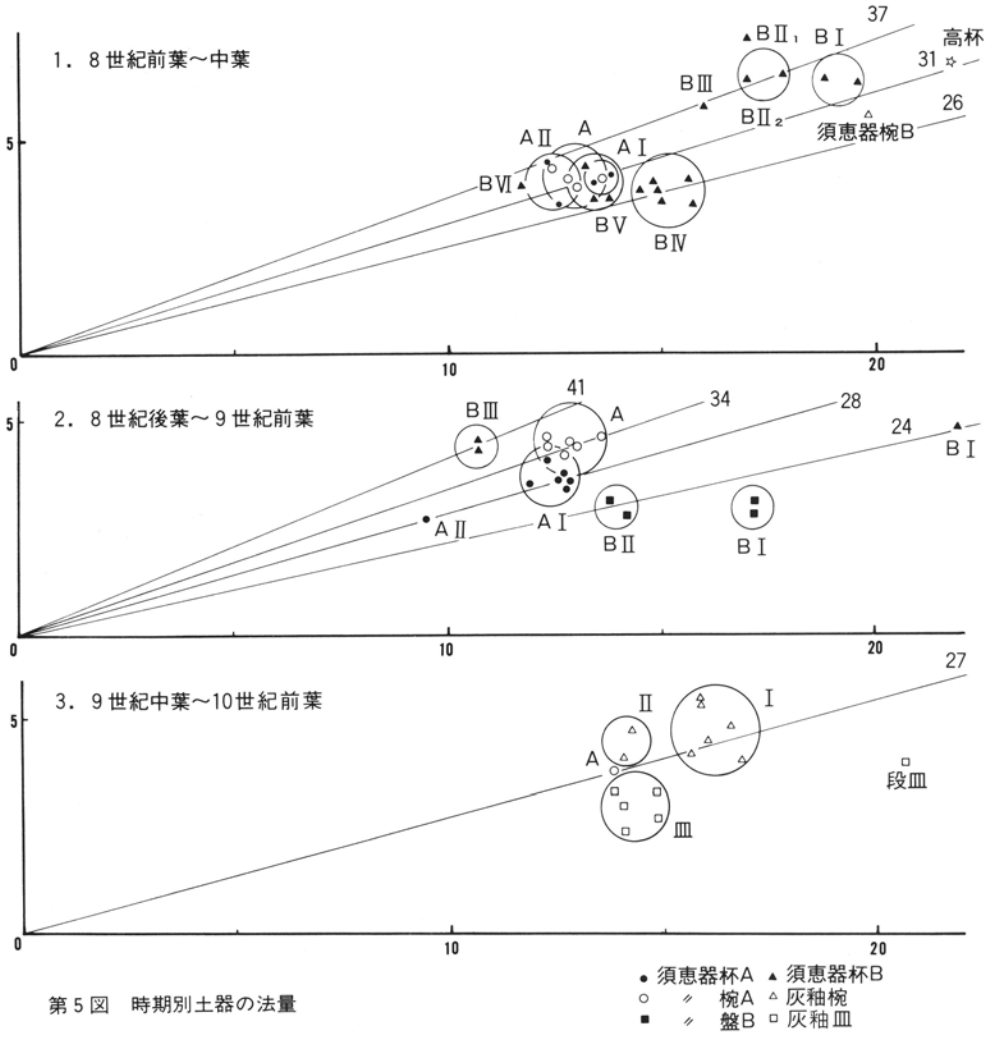
須恵器杯蓋・杯A・椀Bは2期とあまり変化はない。椀Aは口径がやや大きくなる。灰釉陶器椀は体部内・外面に灰釉をハケヌリするものと内面のみ施釉するものが見られる。口径によりI（16.0×4.5）・II（14.1×4.5）に分けられる。無釉の椀（第4図—18）は体部をヘラミガキ調整し、ていねいに作られている。灰釉陶器皿は、体部がまっすぐ伸びるもの（第4図—5・6）や口縁端部を上に折りまげるもの（第4図—17）、いわゆる段皿タイプ（第4図—7）などがある。灰釉陶器長頸瓶は口頸部を欠いているが肩に灰釉をハケヌリしている。土師器甕は口頸部が少し厚味をもち長くなる。調整については1・2期と変化はない。

III　出土土器の検討

以上、各時期にわたり出土土器の様相を述べてきたが、それぞれの時期により特色が見られた。この章ではそれらをはっきりさせるためにi）法量、ii）器種構成という2つの視点から当該期の土器を検討してみたい。

i）法量について

法量については、飛鳥・平城宮出土土器の分析をおこなった西弘海氏が規格性をもった器種分化が「律令的土器様式」の特徴であることを指摘している（西1982）。筆者も飛鳥・平城宮出土土器と猿投窯出土須恵器の法量の規格性に言及したことがあった（城ヶ谷1984）。詳細はそちらを参照していただくことにして、簡単に生産地の様相を述べると、全体的な流れとして、猿投窯では飛鳥・平城京出土土器と同様に7世紀後半より供膳形態に器種分化がおこり、8世紀前半には最もバラエティに富むようになるが、8世紀中葉以降器種が減少するようになる。9世紀についてもこの傾向は続き、9世紀中葉より須恵器にかわって灰釉陶器が中心となってくる。また器種分化に見られる特徴として次の5つを挙げた。



第5図　時期別土器の法量

①無台杯身は基本的に径高指数に沿って分化する。

②有台杯身は基本的に器高に沿って分化する。

③無台杯身の生産の中心は約12cmである。

④有台杯身の生産の中心は約15cmである。

⑤各時期について法量が大きく変更されることはない。

以上、筆者は主として7・8世紀の分析をおこなったが、斉藤孝正氏によれば8・9世紀についても①～⑤は基本的に認められるという（斉藤1987）。

次に三の丸遺跡について見てみると下のようなことがいえる。

1）杯Aは8～9世紀前葉は2つの口径で、径高指数に沿って分化する。

2）無台形態（杯A・椀A）の口径の中心は12～13cmである。

3）杯Bは8世紀前葉～中葉では6つの口径で、8世紀後葉～9世紀前葉になると3つ

時期	8C前～中	8C後～9C前	9C中～10C前
器種	個体数（%）	個体数（%）	個体数（%）
須恵器杯蓋	7.5（26）	8.5（30）	0.1（0.6）
〃 杯A	3.1（11）	4.0（14）	0.3（2）
〃 杯B	11.2（39）	2.4（8）	−
〃 椀A	0.7（2）	6.2（22）	1.1（6）
〃 椀B	0.7（2）	+	+
灰釉陶器椀	−	−	5.7（32）
〃 皿	−	−	2.8（16）
須恵器盤B	0.2（0.7）	2.4（8）	+
〃 盤C	0.9（3）	−	−
〃 高杯	+	−	−
供膳具小計	24.3（83.7）	23.5（82.0）	10.0（56.6）
須恵器鉢	+	+	0.2（1）
調理具小計	0（0）	0（0）	0.2（1）
須恵器 平瓶	+	+	+
灰釉陶器 長頸瓶	0.3（1）	0.4（1）	0.2（1）
須恵器横瓶	0.7（2）	+	0.2（1）
〃 壺・（蓋）	0.8（3）	0.5（2）	0.3（2）
〃 甕	0.3（1）	+	+
その他	硯 +	双耳瓶1.0（4）	−
貯蔵具小計	2.1（7）	1.9（7）	0.7（4）
須恵器甑	0.3（1）	−	−
土師器甕	1.8（6）	3.5（12）	6.9（39）
煮炊具小計	2.1（7）	3.5（12）	6.9（39）
計	28.5（97.7）	28.5（101）	17.8（100.6）

表1　器種構成（口縁部計測法による。）

の口径になり、器種が減少している。

4）杯Bは基本的に器高に沿って器種分化する。

5）杯Bの口径の中心は約15cmである。

6）盤Bは器高に沿って器種分化する。

7）灰釉陶器椀は9世紀中葉～10世紀前葉では2法量である。

8）灰釉陶器皿は9世紀中葉～10世紀前葉では1法量である。（段皿を除く）

1）・2）については猿投窯における①・③にほぼ対応するものである。4）・5）については猿投窯における②・④によく対応している。8世紀前葉～中葉において杯Bは口径の大きなもの（BI・BII$_2$）は器高約6.4cm、口径15cm以下のもの（BIV・BV・BVI）は器高約3.9cmで、それぞれそろっている。ただし、8世紀後葉以降は数量的に減少し確認することは難しい。7）・8）について、猿投窯・美濃窯における法量がこの時期では椀で3～4種、皿で1～2種であることから[9]、生産地よりは若干器種が少ないことがわかる。

第5図の法量の表を猿投窯のものと比較してみると、器種分化としては猿投窯の方が豊富である。特に口径の大きなものが集落では少ないようである。三の丸遺跡では5間×3間の堀立柱建物や緑釉陶器、墨書土器、円面硯なども出土しており、その性格づけは難しいが、大きく見れば平均的な集落としての器種分化のモデルとなるものであろう。その意味では猿投窯の生産品はより公的な意味を持つものも多いと言えよう。

ii）器種構成について

表1は各時期の代表的な遺構出土遺物の数を口縁部計測法により数えたものである。口

縁部はないが、存在を確認できるものについては＋で表した。この表から言えることは次のようなことである。

1）供膳具は８世紀～９世紀前葉では全体の80%以上を占める。

2）供膳具では８世紀前葉～中葉にかけては有台形態（杯Ｂ）が中心であったが、８世紀後葉になると無台形態（杯Ａ・椀Ａ）が中心となる。

3）９世紀中葉になると供膳具の主体は灰釉陶器椀・皿となり、須恵器は若干これに加わるのみとなる。

4）調理具は各時期を通じて１%以内である。

5）貯蔵具は各時期を通じてほぼ５%前後である。

6）煮炊具は７%～39%で変動がある。

7）須恵器と土師器の関係では、各時期を通じて供膳具・調理具・貯蔵具はすべて須恵器（灰釉陶器も含めて）が占めるのに対し、土師器は煮炊具の甕のみである。

1）・2）・3）について、出土遺物はほとんど杯蓋・杯身を中心とする供膳具で占められる。供膳具のなかでも、８世紀前葉～中葉では杯Ｂを中心とし、杯蓋、杯Ａが加わる。８世紀後葉になると杯Ｂが減少し、杯Ａ・椀Ａが主体となり、これに杯Ｂ・杯蓋・盤Ｂ[10]が加わる。９世紀中葉になり灰釉陶器の生産が本格化すると、供膳具はほとんど灰釉陶器に移り変り、須恵器と灰釉陶器の比率は１：６ほどになる。5）について貯蔵具では、長頸瓶・横瓶・壺・甕等が、ほぼ一定の割合で見られる。これらの形を見てみると細部は変化する点はあるが、大きく見れば何ら変化のない器種といえる。6）について、８世紀～９世紀前葉については土師器甕はほぼ10%前後の比率であったが、９世紀中葉～10世紀前葉にかけて39%になる。この数値の評価については比較資料も少ないため保留しておきたい。7)について、土師器は甕のみしか見られなかった。甑でさえも須恵器でつくられる場合が多く、この地域で須恵器が卓抜することの証明であろう。土師器の供膳具が見られない点[11]は平城京を始めとし、他地域と比較すると特異な感がある。このような状況は美濃の東山浦遺跡、重竹遺跡、三井遺跡でも同様である。恐らく、尾張・美濃全体に当てはまることであろう。猿投窯、尾北窯、美濃須衛窯といった巨大な生産地を持った地域の特殊性と言うべきであろうか。

Ⅳ　まとめ

本論は三の丸遺跡出土土器を中心として、尾張の一集落に見られる土器の様相を検討したものであった。今、住居内での食器構成を考えてみると、８世紀前葉～中葉ではおそらく銘名器であろう蓋付の有台杯身数個体に無台杯身・高杯などが加わる。しかも、この有

台杯身は大きさにバラエティがある。ところが8世紀後葉になると、口径12～13cmの無台椀・杯が中心となり、これに有台杯・杯蓋・盤が伴なうようになる。9世紀中葉では、口径が同じくらいの灰釉陶器椀・皿が主体で須恵器杯蓋・無台杯身などが若干伴なうのである。調理具・貯蔵具では、各時期とも、すり鉢・長頸瓶・壺・甕が少し見られる。煮炊具では土師器甕が各時期に数個伴なうものと思われる。

三の丸遺跡出土遺物の検討により、集落での土器のあり方をある程度把握できたが、はたしてこれが尾張全体へ普遍的に妥当しうるものかどうかは確証できない。また、時期区分についても、もう少し検討する必要も感じられる。その他、種々の問題もあるが、今回はとりあえず事実を指摘し、踏み台をつくることのみにとどめ、尾張全体での資料の整備を待って再び論じてみたいと思う。　　(1989．1．25)

〔謝辞〕
本稿を草するにあたり、名古屋大学楢崎彰一先生、同斉藤孝正氏、名古屋市見晴台考古資料館本村有作氏には種々の御教示を頂いた。末尾ながら記して謝意を表する次第です。

註

(1)「三の丸遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報―昭和63年度―』1989
(2)例えば伊勢山中学校遺跡（名古屋市教育委員会『伊勢山中学校遺跡』II 1985)では竪穴住居5軒、竪三蔵遺跡（名古屋市教育委員会『第III次竪三蔵遺跡発掘調査概要報告書』1986）では6軒の竪穴住居が見つかっている。
(3)富加町教育委員会『東山浦遺跡』1978
(4)関市教育委員会『重竹遺跡―その2―』1981、『重竹遺跡―その3―』1984
(5)各務原市教育委員会『三井遺跡・六軒遺跡』1981
(6)基本的な編年観は楢崎他1983に従った。
(7)「清洲城下町遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報―昭和62年度―』1988、13～14頁。
(8)器種分類の基本として、供膳形態で無台のものをA、有台のものをB、脚付のものをCとした。供膳形態以外のものについては通有の器種名を付した。
(9)斉藤1986による。
(10)盤Bは文献などの例に見られる「後盤（シタヒキ）」的な用途も考えられるが、内面を観察すると全体的に磨滅しており、皿のような容器としての使用を考えた方が妥当であろう。
(11)春日井市勝川遺跡で土師器杯が見られるが量的にわずかであり、評価は難しい。今後類例の増加を待って検討してみたい。

引用・参考文献

イ　池本正明　1987　「大渕遺跡III期に見る平安時代の土器」『愛知県埋蔵文化財センター年報―昭和61年度―』105～112頁。
ウ　宇野隆夫　1988　「越中の国府・荘園・村落―食器の構成にみる国家と民衆―」『高井悌三郎先生喜寿記念論文集』565～597頁。
サ　斉藤孝正　1986　「灰釉陶器の研究I―岐阜県・愛知県下の集落址出土例の分析―」『名古屋大学文学部論集』XCV　131～172頁。
――――　1987　「猿投窯IV期における須恵器生産の様相―杯類・椀類・盤類の変遷に関する予察―」『名古屋大学文学部論集』XCVIII　113～147頁。
シ　城ヶ谷和広1984　「七，八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察―法量の問題を中心に―」『考古学雑誌』70－2　9～37頁。
ナ　楢崎彰一他1983　『愛知県古窯址群分布調査報告』III
ニ　西弘　海　1982　「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論文集』447～471頁。

年輪年代法による清洲城下町遺跡・勝川遺跡出土木製品の年代測定について

光谷　拓実*

Ⅰ．はじめに

近年、数多くの研究法が考古学の研究分野に広く採用されるようになり、遺跡、遺構、遺物から引き出せる情報量が従来に比べて格段に増えた。これらの各種研究法は、物理学、化学、数学、地学、生物学などの発展によるところが大である。しかし、ここで注意しなければならないのは、抽出し得た多くの情報が今から何年前のことを示すものであるのか、このことが不明瞭のままであれば貴重な情報も無意味なものとなってしまう。考古学は遺跡、遺構、遺物の年代を明らかにすることがあらゆる調査研究の基本にあるからである。この年代を決定する方法の一つに年輪年代測定法（デンドロクロノロジー）がある。この測定法は、今世紀初頭にアメリカで確立され、わが国においてもここ数年来ようやく実用の運びとなり、考古学に関連したものばかりでなく、建築史、美術史、地質学の分野にも応用し、成果を上げている。

年輪年代測定法とは、樹木の年輪変動パターンを解析することによって、年代未知の試料に刻まれている年輪の形成年代を誤差なく確定し、試料に関連する各種事象の年代を１年単位で推定できる優れた方法である。

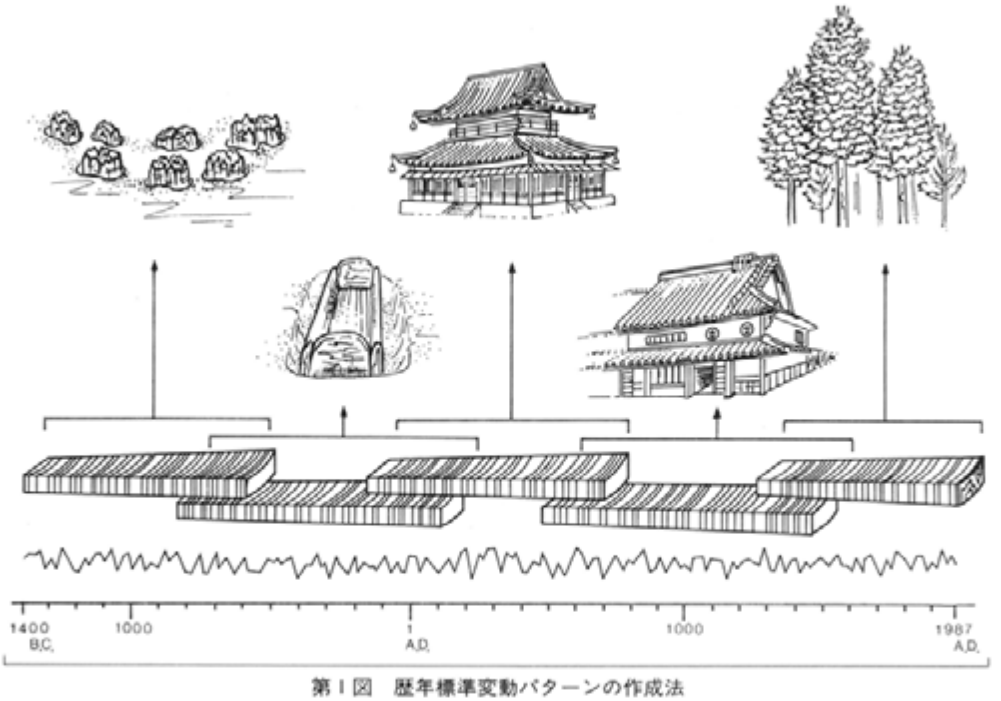
年輪年代測定法の基本は、まず暦年の確定している標準パターン（暦年標準パターンという）の作成にある。現在、わが国においてはヒノキ、サワラ、アスナロ、ヒノキアスナロ、スギ、コウヤマキの６樹種について暦年標準パターンの作成作業を進めている。なかでもヒノキの暦年標準パターンの作成が最も進展していて、現在から紀元前206年までの約2200年間が完成している。この年代確定範囲内においては年代を知りたい試料に約100年以上の年輪があれば、１年単位の年代測定が可能である。

愛知県下においては、清洲城下町遺跡、勝川遺跡から多量の木質遺物が出土している。今回は、これらの中からヒノキ材の曲物容器類や折敷等を16点選出し、上記のヒノキの暦年標準パターンを用いて試料の年輪年代を求めた概略を報告する。

＊　奈良国立文化財研究所主任研究官

II．原　理

普通、温帯に産する樹木には、１年を１単位とする生長輪、すなわち年輪をみることができる。この年輪の幅は、樹種、樹齢、立地条件、気象条件、病害虫の発生、結実などによって、年ごとに差異が生じる。なかでも気象条件（特に温度、水、日照）の影響は、広い地域に渡って、それぞれの樹木の持つ生物学的特性とかかわりながらも、すべての樹木の年輪幅の変動という形で記録される。つまり、同年代に一定の地域のなかで生育した樹木であれば、年輪変動パターンはほぼ同じものになる。したがって、この年輪変動パターンを手がかりにすれば、同年代に形成された年輪かどうか判定することができるはずである。この同年代に形成された多数の樹木の年輪幅の測定値（以下、年輪データと略称）を総合し、平均すると標準になる年輪変動パターン（以下、暦年標準変動パターンと略称）が作成できる。このように伐採年代の明らかな現生木から始まって、古建築部材、遺跡出土木材などから多量の年輪データを収集し、同じ年輪変動パターンを持つ部分を順次照合してその部分で重ねあわせていくと、長期にわたる暦年標準変動パターンが得られる。こうした一連の年輪変動パターンの照合作業は、クロスデーティング（crossdating）と呼ばれている。第１図には以上のことを模式的に示した。つぎに年代不明の木材、例えば遺跡出土木材を取り上げ、その年輪幅を測定して、試料の年輪変動パターンを作成し、暦年標準変動パターンのなかでこの試料変動パターンと合致する部分を探し求めれば、暦年標準



第１図　歴年標準変動パターンの作成法

変動パターンの暦年を試料の変動パターンにあてることができる。したがって、この研究においては、暦年標準変動パターンの作成が第一段階の、そして不可欠の作業となる。

Ⅲ．試料と方法

年代測定用試料には、清洲城下町遺跡出土のヒノキ材の曲物容器（主に底板）を７点、折敷断片を７点、勝川遺跡出土の曲物容器（底板）を２点の総数16点選定した。これの木取りは、いずれも柾目である。年輪幅の計測は専用の読取器を使用し、柾目面から直接測定した。計測した年輪データは直ちにコンピュータに入力し、年輪変動パターングラフの作成や暦年標準変動パターンと上記16点との年輪変動パターンとの照合作業に備えた。

１．コンピュータによる年輪変動パターンの照合

年輪変動パターンの照合には相互相関分析手法を用いることとした。

まず最初に２つの年輪データを相互に比較する前のデータ処理に標準化(standarzization)の問題がある。樹木の年輪幅は同一年度に形成されたものでも樹齢や生育環境条件などの違いに応じて個体間で差が生じる。この個体の特長が特に強い試料であれば他の試料との対比が困難になることが予想される。したがって、それを避けるために年輪データを補正し、個体的特長を除去しなければならない。この標準化処理には、欧米では多項式、指数式、移動平均、スペライン関数などの傾向線をあてはめて行っている。ここではこの標準化処理に５年移動平均法を用いることとした。今もとの年輪データをｘ(ｉ)（ｉ＝１，２，……，Ｎ）(但し、ｉ＝１は、中心部から樹皮部に向けての１番目の年輪データであり、ｉ＝Ｎは最外の年輪データを表わす）とすると、具体的な標準化処理は次式によって行った。

$$Z(i)=5x(i+2)\Big/\{x(i)+x(i+1)+x(i+2)+x(i+3)+x(i+4)\}\times 100(\%) \quad (1)$$

すなわち、Ｚ(ｉ)はｘ(ｉ+2)つまり３番目の測定値とその前後２年間を含む５年間の平均値と百分比である。この方法はどんな複雑な年輪変動パターンをしていようと同じ操作で処理できる特色を持っている。つぎに、上式で求めた値は正規化するため自然対数に変換した。２つの試料の間の年輪変動パターンの類似度は、この対数変換した値を用いて次式で定義される相関係数ｒによって測定した。

$$r=\sum_i x_i\cdot y_i-N\bar{x}\cdot\bar{y}\Big/\sqrt{\left(\sum_i x_i^2-N\cdot\bar{x}^2\right)\cdot\left(\sum_i y_i^2-N\cdot\bar{y}^2\right)} \quad (2)$$

ここで、x_i、y_iはさきの標準化処理によって求めた値の対数変換した値であり、ｘ、ｙは、x_i、y_iのそれぞれの平均値、Ｎはデータ点数である。この式を用いると、２つの試料の年輪データが一直線上に並べばｒ＝１またはｒ＝－１となる。一方、年輪データが直線上からはずれてばらつくにしたがって、ｒは０に近づく。ついで(2)式で求めた相関関係ｒの有意性の判定は、次のｔ分布検定で行った。(2)式の相関係数ｒと組の数Ｎから

$$t_0 = |r| \sqrt{(N-2/(1-r_2)} \quad (3)$$

で求めたt_0は自由度（N－2）のt分布に従うことから、帰無仮説を検定するのにt分布表より適当な有意水準αにおけるtの限界値$t\alpha$を求め、これを基準にして、$t_0 > t\alpha$であればその有意水準で帰無仮説は棄却され、相関があるという対立仮説の選択が行われる。

ここで(3)式によって得られたt_0（以下t値とする。）は、この値が大きければ大きいほど2つの試料の年輪変動パターンの類似度は高いことを示す。

以下、ここではこの検討にあたり自由度はすべて60以上であるので、t値と危険率0.1%のt値＝3.5とを比較して相関の有無を検討した。

2．清洲城下町遺跡出土木製品14点相互のパターン照合および勝川遺跡出土木製品2点相互のパターン照合

現生ヒノキの検討によると同一採取地の異個体間の年輪データの間には高い相関関係のあることが判明している[1)]。同一遺跡から出土する木製品は同じ産地からのものが多いであろうから、試料1点ごとの年輪変動パターンをいきなり暦年標準パターンと照合していくよりも、同一遺跡から選定した多数の試料から、相関のよいグループを選別し、これらの年輪データを総合し、平均したものと暦年標準パターンとを照合していく方が暦年を確定する上で有利に働くと考えた。今回測定対象とした木製品の年代は不明なものばかりである。したがって、試料間相互の年輪変動パターンの照合は、一方の年輪データ（年輪数の多い方）を基本にし、他方の年輪データを一層ずつずらしながら、その度ごとの相関係数rを求め、つぎにt分布検定を行って、$t \geqq 3.5$になる箇所をすべて検出し、そのなかでも最大のt値に着目することとした。しかし、最大のt値が3.5以下の場合はそのなかで最大のt値を示した重複位置を1ヶ所検出することとした。このとき、最大のt値が3.5－5.0あたりの値を示す双方の年輪変動パターンは、目視でもって年輪変動パターングラフを見比べた場合に正しく重複しているかどうか決定しがたい場合が往々にしてある。したがって、試料相互間の類似度が$3.5 \leqq t < 5.0$ものについては、他の組み合わせにおいても同じ年代位置で重複しているかどうかを詳細に検討した。また重複している部分の年輪データが100より少ないと間違った年代位置で最大のt値を示す傾向があるため、およそ100年分以上の重複部分があるかどうかも調べた。

試料相互間のパターン照合で正しく重複していることが確認できた試料については、重複位置で年輪データを総平均したものを作成して平均変動パターンとし、次にこれと暦年標準パターンとを照合し、暦年の確定していない平均変動パターンに暦年を確定する方法を採用した。

Ⅳ．結　果

	試料No.	(年輪数)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1	折敷断片	(128)	4.6	3.6*	3.9*	3.4*	3.3*	3.2*	4.1*	3.8*	3.5*	3.6*	2.6*	3.8*	2.7*
2	〃	(205)		7.9	10.4	4.2	7.4	7.8	7.6	5.1	3.4*	2.5*	2.9*	3.4*	3.2*
3	〃	(131)			14.4	4.9	6.6	5.6	4.9	2.9*	3.9*	3.5*	3.4*	3.1*	3.4*
4	曲物(底)	(201)				5.4	6.9	6.0	6.8	4.6	4.3*	3.0*	3.8*	3.4*	3.5*
5	折敷断片	(118)					5.8	6.4	6.0	4.0*	4.4*	2.9*	3.4*	3.0*	2.9*
6	〃	(107)						4.8	5.2	5.2	4.2*	4.0*	3.4*	3.0*	3.5*
7	曲物(底)	(405)							10.7	10.2	6.2	6.1	8.4	4.2*	3.4*
8	折敷断片	(208)								6.6	3.6*	4.5	3.1*	4.0*	3.3*
9	曲物(底)	(420)									4.8	5.7	6.7	4.4	3.4*
10	〃	(485)										3.9*	9.8	5.8	6.8
11	折敷断片	(123)											5.6	2.9*	5.0*
12	曲物(身)断片	(250)												4.3	3.6*
13	〃 (底) 〃	(190)													6.6
14	〃 (身) 〃	(313)													−

表1　清洲城下町遺跡出土木製品14点相互間の類似度(t値)

1．清洲城下町遺跡の出土木製品14点の年輪年代

選定した木製品14点の計測年輪数およびt分布検定の結果は表1に示した通りである。これを見ると、最多年輪数を計測したのは試料No.10の485年輪、最少年輪数は試料No.6の107年輪であった。表中の数値は最大のt値を示したときの値である。このなかでt値の右肩の＊印は、両者が最終的に重複していないと判定された組み合わせであったことを示す。

この結果をみると、90通りの組み合わせのうち41組において正しく重複していることを確認した。つぎに、これら14点の年輪データを正しい重複位置のもとで総平均して902年分の平均変動パターンを作成した。これと木曽系ヒノキで作成した暦年標準パターン（1009年～1987年）との照合によって、両者は1009年から1591年のところで重複していることが判明した。このときのt値は9.9と高い値を示した。これにより902年分の平均変動パターンは690年から1591年までの年輪であることが確認できた。これによって、試料No.1～14の木製品に刻まれている年輪年代が確定した。表2には試料No.1～14の残存最外年輪測定年代を示した。

2．勝川遺跡出土木製品2点の年輪年代

曲物容器の底板2点の計測年輪数はNo.1―484年輪、No.2―227年輪であった。No.1とNo.2の年輪変動パターンの照合は、No.1の後端189年分の年輪変動パターンとNo.2の先端189年分の年輪変動パターンとが一致した。このときのt値は5.1であった。その結果、No.2の年輪がNo.1より38年分ほど新しい年輪を含んでいることが明らかになり、両者の年輪

データをこの重複位置で平均し、522年分の年輪変動パターンを作成した。これら2点の木製品は土器等の遺物から奈良～平安時代にかけての遺構から出土しているとの発掘所見からヒノキの暦年標準変動パターン（206B.C.－1987A.D.）の年輪データをすべて使用するのではなく、主に平城宮跡出土の木製品で作成した暦年標準変動パターン（206B.C.～845A.D.）を構成している年輪データを用いて年輪変動パターンの照合を行った。その結果、522年分の年輪年代値は261～782年であることが判明した。このときのt値は12.1というきわめて高い数値を検出した。これより、No.1の残存最外年輪測定年代は744年、No.2が782年であることが判明した。なお、第2図には試No.1の年輪変動パターングラフ（上）と暦年標準変動パターングラフ（下）の一部を示した。

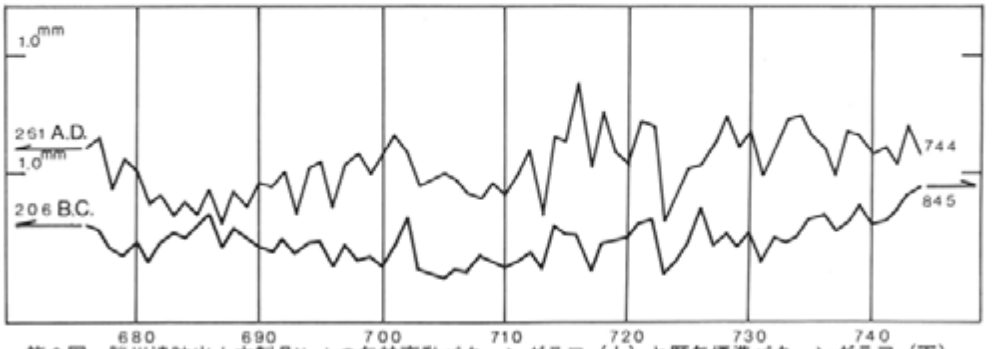
試料No.	遺構番号	残存最外年輪測定年代
1	IKJ 59C-D SD05	1591
2	IKJ 59D SK23	1529
3	IAW 59D SD11	1514
4	〃	1512
5	〃	1503
6	〃	1492
7	IKJ 60F SD03	1466
8	IAW 59B SE04	1453
9	IAW 59B SK03	1443
10	IAW 59D SD11	1396
11	IKJ 59C-D SD05	1330
12	IKJ 59C-D SD06	1282
13	IKJ 59C-D SD05	1072
14	IAW 59B SK02	1002

表2　木製品14点の残存最外年輪測定年代一覧表

Ⅴ．考　察

1．年輪年代測定法によって求めた年代値の解釈について

年輪年代測定法で対象とする試料には、さまざまな形状をしたものがある。形状によっては、原材の伐採年代よりも著しく古い年代が出る場合があるので注意を要する。そこで、試料の形状を大きくA、B、Cと3タイプに大別してそれぞれの年輪年代値の取り扱いについて説明する。



第2図　勝川遺跡出土木製品No.1の年輪変動パターングラフ（上）と歴年標準パターングラフ（下）

Aタイプとは、試料に樹皮、あるいは生育していた当時の最外年輪が残存している形状のものをいう。このタイプのものは、その最外年輪の暦年がその材の伐採年、あるいは枯死年に相当する。したがってAタイプは年輪年代測定法にとって最良の試料となるが、その事例は決して多くない。問題となるのは、試料がもともとの材木の外周にあたる部分を除去した形状のものである。この種の試料はBタイプとCタイプの2種類にわかれる。

Bタイプは、辺材部、すなわち樹木が生育していた当時には細胞が生理活動をしていた周辺年輪部分であるが、その一部が試料に残存しているものであれば、除去された部分を含めて辺材部に含まれる平均年輪数を算出しておけば、伐採年代に近い暦年をその試料材に当てることができる。参考までに、木曽系ヒノキ（樹齢約200～300年）100点から算出した辺材部に占める平均年輪数は53±17である。ところが、多くの試料のなかには、辺材部幅2.2cmで96層を数えたものもあるがある一方で、肥大生長が良好な試料には辺材部幅3.9cmでわずか23層しかないものもあるのでこの数値の取り扱いには注意を要する。

Cタイプと呼んでいるものは、辺材部が完全に除去されている試料であって、しかも辺材部に続く心材部をどれほど除去したものか判らない。したがって、試料に残る最外年輪の暦年にどれだけ除去した年輪数を加算すればよいのか不明である。つまり、このB、Cタイプの試料を対象とした時には、年輪年代測定法によって決定できた試料の最外年輪の暦年は、試料の伐採年とはまったく無関係であり、試料の最外年輪の暦年をもって年代推定の上限を示すにとどまる。この他に、原木を伐採跡、製品にするまでの寝かす期間や古材の転用などの点を考えると、遺跡、遺構、遺物の年代決定には、年輪年代測定法による暦年代をそのまま使うのではなく、土器等に代表される発掘資料の細かい検討あるいは遺跡を取り巻く歴史的な諸条件を勘案して総合的に年代推定を行う必要がある。

以上の点を考慮して、16点の年輪年代値を見ていただきたい。

2．清洲城下町遺跡・勝川遺跡出土木製品16点の年代推定について

年代測定を行った木製品16点のタイプは、辺材部が残っているかどうかを確認するため心材部と辺材部との間でみられる色調差に注意して肉眼的に観察したが、16点とも試料全体が同一色調である点や、こうした木製品は狂いが生じないようにあらかじめ辺材部分を除去するのが基本である点を考え合わせ、いずれもCタイプのものと判断した。

まず表2より残存最外年輪測定年代値について見ると、同一遺跡からの出土木製品でありながら、得られた年代値のバラツキは、ほぼ同時期の木製品だとする加工程度の差や原材のどの部分から木取りしたのかなどがその原因に考えられる。この他に木製品を作った時の年代差や何年間使用してから廃棄したものなのかなどの時間差も合わせて考えられる。よって、こうした木製品の年輪年代は遺構の作られた年代よりかなり古い年代を示し

ているとみてよかろう。このようにCタイプの試料から求めた年輪年代値をそのまま遺構が作られた年代にあてはめるにはかなり無理がある。

清洲城下町遺跡出土木製品14点の中で最も新しい年代を示したのは、試料No.1の1591年である。これはSD05から出土したものである。ちなみに、清洲城下町遺跡からは、昭和60年度調査において「天正十四」の紀年銘のある丸瓦が出土している。これは1586年にあたる。試料No.1の年輪年代値はこの年代に近い。試料No.1の原材伐採年はこの年代値からみて、1600年以降が推定できる。その他13点の年輪年代値も、清洲城下町遺跡の遺構変遷を考えるうえで貴重な定点を与えたことになる。

つぎに、勝川遺跡から出土した木製品2点の年輪年代値はNo.1—744年、No.2—782年であった。これらが出土した遺構の年代は奈良～平安時代という考古学上の解釈がなされている。この2点の示す年輪年代値から推して、木製品に仕上げる前の原材の伐採年は、800年を境にしてその前後が考えられる。今後、Aタイプの木製品の出土が待たれる。

Ⅵ．まとめ　愛知県下に所在する2遺跡から16点の木製品を選定し、年輪年代測定法を行った。その結果、清洲城下町遺跡から出土した木製品の年輪変動パターンは木曽系ヒノキで作成した暦年標準変動パターンとよく類似していることが判明した。さらに、勝川遺跡出土の木製品No.1の年輪変動パターンは平城宮跡出土の柱根類で作成した暦年標準パターンときわめてよく似ており、双方の産地が近いことを示唆するものである。このことは、当時の木製品の流通範囲を考える上で興味深い。今回は、16点の木製品すべてについてその残存最外年輪測定年代を求めることはできたが、Cタイプのため、遺構の作られた年代には直接結び付かなかった。しかし、遺構、遺物の年代を考察する上で貴重な年代情報を提供したことは確かである。

参考文献
1)　光谷拓実（1987）：わが国における年輪年代の確立とその応用（第1報）
—現生木のヒノキによる年輪変動パターンの特性検討—　木材学会誌、33(3)

五条川流域における「下呂石」の分布について

飴谷　一

I

本稿は、「尾張平野」の中央をほぼ南北に流れる五条川の流域に分布する弥生時代の遺跡から出土する「下呂石」の分布状況を整理し、その動き方（流通）について概観する。

一般に、「下呂石」とよばれている石は、岐阜県益田郡下呂町の東部に位置する湯ヶ峰から産出される「ガラス質黒雲母石英安山岩（湯ヶ峰デイサイト）」のうち、打製石器の石材として使われている岩石の俗称である。(1)

II

今日知られている「下呂石」の分布範囲は、飛騨地方を中心に、長野県の一部、美濃地方、伊勢湾沿岸と、南北に伸びて広がる。それはあたかも、西の奈良県二上山産のサヌカイト分布圏、東の長野県和田峠産の黒曜石分布圏の間の空白を埋めているかのようである。(2)

ところで、「下呂石」がこれらの地方の石器（打製石器）の石材として確実に認識されだしたのは昭和30年代後半からである。それ以前は、下呂を中心とした飛騨地方に特有な石器用石材であるという漠然とした認識はされていたものの、多くの場合は「サヌカイト」と鑑定され、畿内の二上山産のそれが搬入されたと理解されていた。(3)

また「下呂石」の産出地が湯ヶ峰であると同定された後も、各遺跡発掘調査報告書での名称の統一がなされず（例えば「下呂石」が黒雲母安山岩であったり、ハリ質安山岩であったりした）、石器の石材を知る上で混乱を招いていた。このようなことが起きた要因の1つには、発掘調査担当者の石器用石材についての認識不足があったことは否めない。このような状況を顧みて、最近では石原哲弥氏を中心とする高山考古学研究会により、「下呂石」という名称の統一が呼びかけられている。(4)また、蛍光X線分析による石器の石材の産地同定も近年盛んになり、「下呂石」に関してもデータを蓄積しつつある。(5)

さて、本稿でとり上げる「下呂石」の動き（流通）に関する研究はあまり進んでいない。これは、石器用石材としての「下呂石」に関して地域間の共通認識がようやく生まれたことを考慮すればやむを得ない点ではある。一方では、最近石原哲弥氏が、飛騨地方を中心に、旧石器時代から弥生時代にかけての各遺跡から出土する石器用石材である「下呂石」と他の石材との割合を出し、それらの頻度による地域分布の相違、ひいては「下呂石」に

よる文化圏をも導き出そうと精力的な研究をすすめており、「下呂石」の研究で他をリードしている。[6]しかし、各時代毎の遺跡からの出土状況(どのような形で石器用石材である「下呂石」が出土したか)、明確な時代区分をした上での分布の相違については未整理のようである。今後の成果が期待される。

他方、石黒立人氏が「弥生時代の美濃地方とその特質」という論文の中で、遺跡の分布(配置)を知る手掛りとして、湯ヶ峰から美濃・尾張地方に至る搬送ルートの想定をしており興味深い。[7]

尾張地方については、これらに類する研究はなされていないようである。

「下呂石」に関しては、自然化学分野の成果とも相まって、この地方の研究者の間にも共通した認識が、徐々にではあるが、広がりつつある。それと共にその分布範囲も明らかにされてきている。研究材料がようやく揃ってきた感がある。

III

特定の地域でしか産出されない「石」が、そこから遠く離れた幾多の遺跡から出土することは、考古学ではままよくあることであり、その「石」が移動したものとして解される。さらにそれが人工遺物artifactとして出土するならば、「道具として利用するための材料」として各遺跡(集落)へ運びこまれたと考えられる。

つまり、幾多の集落で「ある道具(この場合の人工遺物)」を生活の中にとり入れた場合、それにかかわる「材料(例えば「下呂石」)」は、それを利用する集落間で共有されるべき「価値」となり、それに対する人々の共通した価値意識のもとで、「流通」という人間の意図的行為による「移動」という現象が起きたと理解されるのである。ところが「流通」は「価値の交換」を前提とする行為であるので、それが集落間相互の政治的力か、経済的力か、宗教的力か、いずれの力関係により行なわれたかを考慮しなければならない。

M.サーリンズによれば、「交換」のパターンとしては、「相互性」と「再分配」の二つに大別されるという。[8]

考古学的にここまで検証することは容易ではない。しかし考古学者が「ものの移動」を考える場合常に「A⇄B」の可逆的な移動の可能性を念頭に置かなければならない。そのことは、それぞれの環境状況により遺存状態の良し悪しが決定される出土遺物だけでは、「A→B」という一方的な図式のみで集落間関係を導き出す恐れがあり、誤った社会構造をつくり出しかねないからである。

Ⅳ

五条川は、尾張平野の中央部をほぼ南北に流れ、庄内川に合流する河川である。現在は犬山市の郷瀬川と入鹿池を源としているが、かつては木曽川の大きな支流の一つとして存在していたらしい。[9]これを仮に「旧五条川」とよぶ。

旧五条川流域は自然堤防が良く発達しており、その上に多くの弥生時代の遺跡が分布している。しかし実際に調査された遺跡は少なく、しかも小規模な面積で調査を行なった例が多い。そのため、出土土器により遺跡の存続期間は追えるものの、遺跡の規模や様相が不明瞭であるものがほとんどで、遺跡の姿を知り得ることが可能なのは朝日遺跡ぐらいである。従って石器の出土の仕方（例えば石器製作の場を思わせる石器・石核・多量の石屑が集中しているような場合）がわかる遺跡もないのが実情である。このような点を考慮して①遺跡の立地条件、②「下呂石」の出土状況、③弥生時代の中でも「諸生産物・人間・情報が広範囲かつ活発に移動した[10]」中期に限定して遺跡のまとまりを押さえる。という3つの条件を設定し、旧五条川水系での「下呂石」の動きを把えていく。

「もの」が移動する、特に遠距離にわたる場合には、必ず拠点的中継地（集落）を要するが、旧五条川流域ではそのような拠点的な集落は、朝日遺跡以外では、確認されてはいない。一方、尾張平野では弥生時代前期後葉（西志賀期）に散発的なまとまりをみせていた遺跡が、中期前葉（朝日期）になると主要河川沿いにさらに小さなまとまりを形成し、中期中葉から後葉（貝田町期から高蔵期）にかけて、さほど大きな動態もなく継続していた、ということが遺跡の分布からよみとることができる。[11]（第2図）

このようにしてみると旧五条川流域には大口町と岩倉市付近に遺跡のまとまりがみられる。しかもそれを形成する遺跡はいずれも同じ時期に属している。これらが本来は1つの遺跡であったかどうかはわからないが、この地方の代表的拠点集落である朝日遺跡から北へ五条川沿いに辿っていくと約5－6㎞の間隔でこれらのまとまりが分布する。この距離は、「農耕民が日常的に行動する範囲であり、これ以上広がると経済活動が低下する」という地理学での成果があり[12]、また酒井龍一氏も「畿内の拠点集落が分布する際の一般的間隔と仮定」している[13]。この考え方にのっとり、五条川流域に分布する遺跡のまとまり（「群」とよぶ）を「下呂石」の移動（流通）に関しての拠点的中継地点（集落）として考えるものとする。

以上の点から、旧五条川流域の遺跡（群）を眺めると、北から、上野遺跡－大口町遺跡群（西浦遺跡、東樋田遺跡等）－岩倉市遺跡群（ノンベ遺跡、曽野遺跡等）－朝日遺跡とつながる。さらに上野遺跡の北、木曽川を辿った美濃加茂市には、「下呂石」の石核・石屑

・石器の多量の出土をみた牧野小山遺跡があり、また朝日遺跡の西には、「下呂石」の円礫が多く出土した阿弥陀寺遺跡がある。

上野遺跡では「下呂石」による打製石器の他、石核・石屑が多く見い出されている。円礫が広がる木曽川河川敷にも近く、遺跡[14]から出土する石核、或いは遠く朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡などでみられる円礫などもここを主要な中継地点として運ばれた可能性もある。

大口町、岩倉市の各遺跡群では、打製石器の多くが「下呂石」を使用していることから、ここでも多くの「下呂石」が石材として搬入されたと察するに難くない。

朝日遺跡では、周知の通り「下呂石」が多量に出土しており、打製石器の石材の6割を占めている。また「下呂石」の礫（多くは円礫）も多数出土している。

大口・岩倉地域の詳細は不明だが、牧野小山・上野・朝日・阿弥陀寺の各遺跡では多量の「下呂石」による（人工）遺物がみられることから、たくさんの「下呂石」が搬入されたに違いない。それは、牧野小山遺跡は木曽川と飛騨川の合流地点、上野遺跡は木曽川と旧五条川の合流地点で尾張平野の北の入口であり、朝日遺跡は、推察ではあるが、東の名古屋台地方面と西の伊勢方面との分岐点にあたるという、地理的、社会的要因があったからだと考えられる。江戸時代の主要街道や今日の商品流通の流れをみても、このような地点が1つの拠点もしくは重要な中継地点となっている場合が多い。「下呂石」がこのような中心的存在の遺跡で集約、ストックされていた可能性は十分にありうる。

尾張平野でみられる「下呂石」は、産出地湯ヶ峰より50～100 kmも離れて出土したものである。にもかかわらず、その出土率は非常に高い。[15] 湯ヶ峰付近の遺跡からこの地域の遺跡に至るまでの「下呂石」の出土率を比べていくと、原産地から緩かに漸減するカーブを描くことができる。C.レンフリューはこのようにあらわされる流通（交易）形態をDown-the-lineとよんでいる。[16]

しかし、朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡からは円礫となった「下呂石」が多く出土しているので、原産地（湯ヶ峰）より直接Down-the-line の方法でもちこまれたのではなく、恐らく、木曽川中流域に広く分布する河川敷を「2次的産地」として利用し、そこから大集落へ搬入された、と考えられる。その場合でも、この地域では「下呂石」が突然多く見られる遺跡はないので、「2次的産地」に近接した集落からDown-the-lineの方法で石材が動き、一旦大集落に集約された後、周辺の小集落へ、製品としてか、石材としてかは不明だが、分配されたと考えられる。

V

以上を要約すると

1「下呂石」は尾張平野でも打製石器の石材として普遍的に利用された

2「下呂石」の移動は拠点的中継集落を介して行なわれた

3「下呂石」は1つの大拠点集落に集約されることなく、各大拠点集落にほぼ均等に搬入された

注

(1) 岩田　修　1982　「下呂町に分布する湯ヶ峰デイサイト」　『岐阜県地学教育』18

(2) 岐阜県立博物館　1987　『濃飛の弥生時代』5頁参照

(3) 石原哲弥氏論文（後掲）参考

(4) 石原哲弥　1981　「下呂石を原材した石器の研究」『飛騨史学』第2巻

(5) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌　1978　「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定Ⅳ」『考古学と自然科学』11

(6) 石原哲弥　前掲
1984　「飛騨の下呂石」『歴史手帳』11巻1号

(7) 石黒立人　1988　「弥生時代の美濃地方とその特質」『マージナル』8　愛知考古学談話会

(8) M. サーリンズ　1983　『石器時代の経済学』（山内昶訳）法政大学出版

(9) 建設省中部地方建設局・庄内川工事事務所　1982　『庄内川流域史』

(10) 酒井龍一　1984　「弥生時代中期・濃内社会構成とセトルメントシステム」『文化財学報』3

(11) 愛知考古学談話会定例会（'88、10）にて北村和宏氏が濃尾平野の弥生時代遺跡の分布状況の変化について発表したものを利用させていただいた。

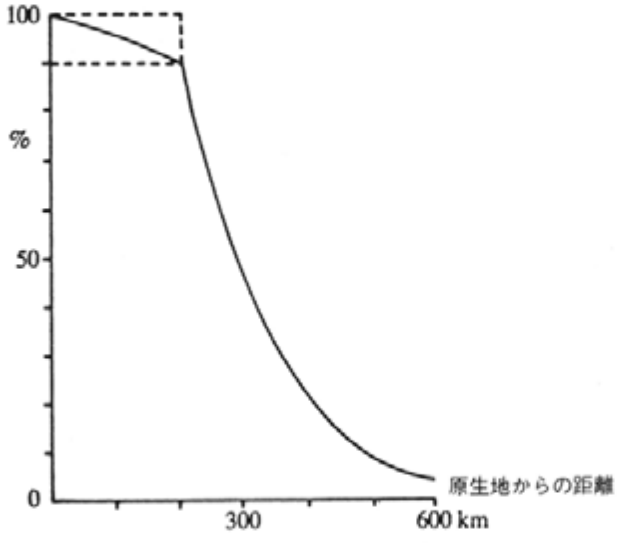
(12) 赤沢　威　1975　「先史学における解釈－現在でもって過去を説明する」『旧石器文化の研究』5

(13) 酒井龍一　前掲

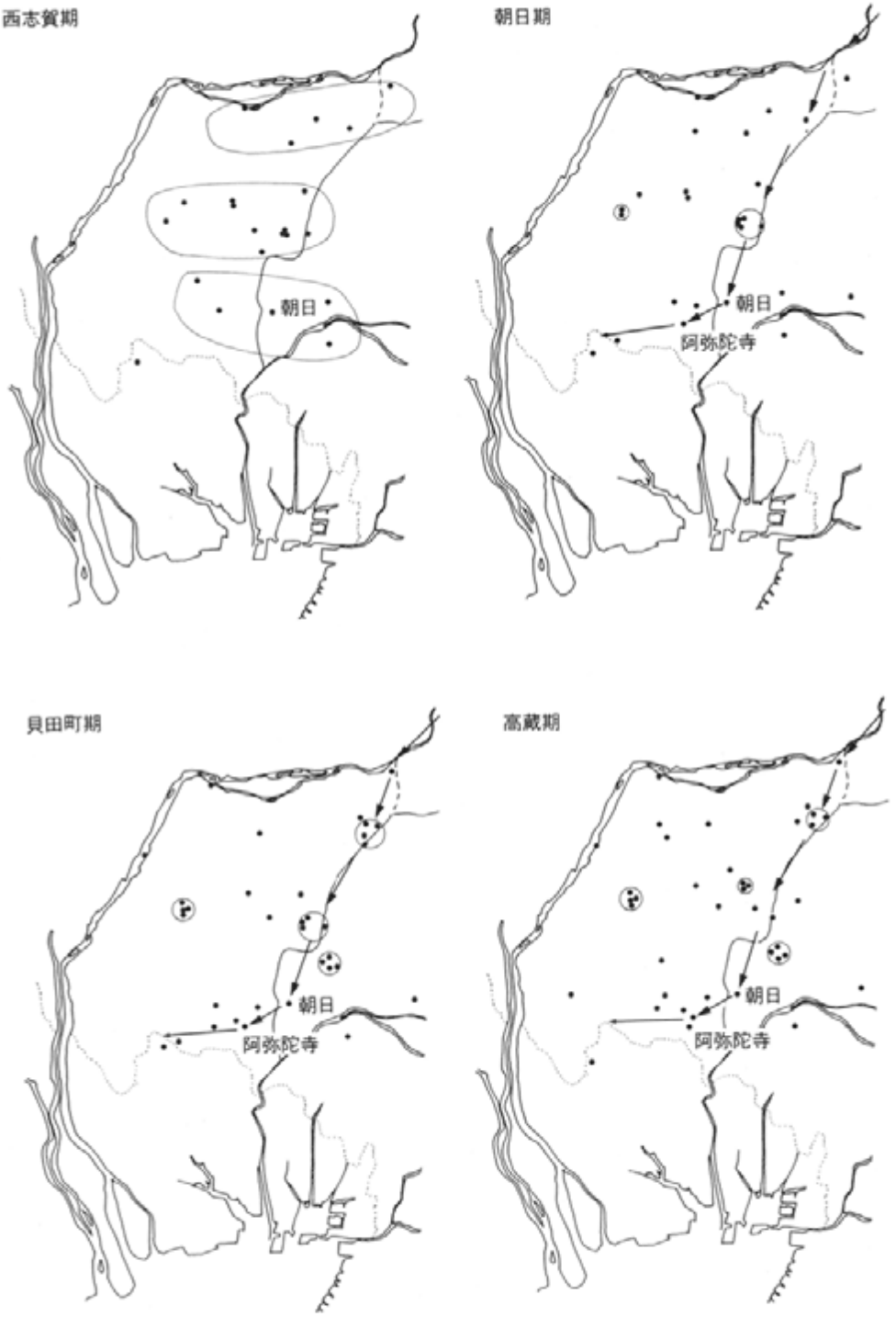
(14) 筆者が上野遺跡周辺を歩き回った知見による。

(15) 文献(2)参照

(16) Renfrew, C. 1975 『Trade as action at a distance :questions of integration and communication, *Ancient Civilization and Trade*』



第1図　Down-the-lineのモデル（文献(16)参照）



第２図　尾張平野弥生時代遺跡の時期別分布図（北村和宏の図に加筆）
〈矢印は「下呂石」の推定移動ルート〉

朝日遺跡出土の動物遺存体

宮腰　健司・佐藤　治

1．はじめに

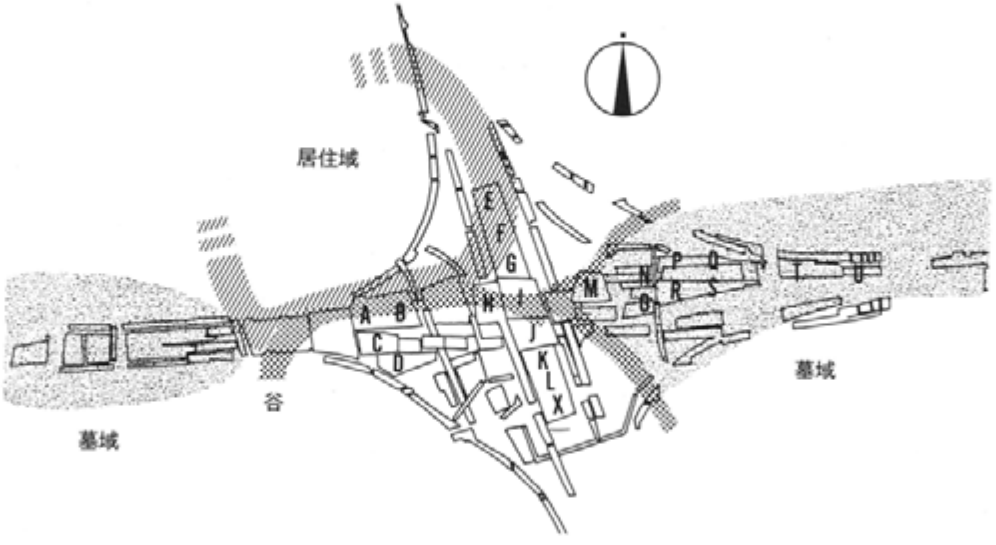
愛知県清洲町・名古屋市を中心として80万㎡に広がる朝日遺跡は、昭和56・60～63年度にかけて調査が実施され、多くの哺乳動物遺存体が出土している。そのうち昭和61年度調査分についての分析が終了したので、ここでその成果を報告したい。

各調査区の位置は第1図のとおりである。概要については、『愛知県埋蔵文化財センター年報　昭和61年度』を参照されたいが、出土遺存体2,539点のうち約半数を占める61ＡＢ区では、谷南岸に広範囲にある弥生時代中期の貝層より多くが出土し、次に点数の多い61Ｅ区・61ＫＬ区でも、溝に廃棄された弥生時代中期の貝層からの出土が多数を占めている。

（宮腰健司）

発掘区	出土点数	発掘区	出土点数
61ＡＢ	1165	61Ｉ	193
61Ｃ	98	61Ｊ	59
61Ｄ	61	61Ｋ	11
61Ｅ	366	61ＫＬ	348
61Ｆ	45	61Ｌ	2
61Ｇ	24	61Ｍ	13
61Ｈ	150	61Ｘ	4

第1表　動物遺存体の出土した調査区とその出土点数



第1図　昭和61年度調査区位置図（1：8000）

2．分析

A．全体の概要

同定できた動物の種は、哺乳類13種、爬虫類２種、両生類２種の他に、種の同定はできなかったが、魚類、鳥類も出土している。

動物遺存体の出土した発掘区とその出土点数を第１表に、各動物ごとの出土点数および推定最少個体数を第２表に、それぞれの占める割合を第２、３図に示す。総出土点数は2540点に及んだ。

イノシシとシカの骨は、ほとんどが骨髄食のために細かく破壊されている。不明とされている骨片のほとんどは、このようなイノシシもしくはシカの骨片であるといってよい。

B．イノシシ

最も多く出土する。一匹分がまとまって出土することはなく、頭骨や四肢骨はほとんどがバラバラに破壊されており、骨髄食のあとをうかがわせる。

部位別では上腕骨が120点と最も多く、以下下顎骨108点、脛骨80点と続く。推定最少個体数は、右下顎骨の66匹である。

44点出土した尺骨のうち、刺突具として用いられた形跡のあるものは４点のみであり、これはシカのそれと比べると非常に少ない。イノシシの尺骨は骨体が太いため、加工にはより手間がかかる。このために、これらの尺骨は骨髄食にまわされたのであろう。

右肩甲骨を使ったト骨が１点出土している。

C．ホンシュウジカ

イノシシについで多く出土する。イノシシと同様に、四肢骨は骨髄食のために破壊されている。

鹿角は全て、製品化のために加工を受けていた。シカの角は毎年自然に落下する。これを落角というが、50点の角座のうち12点が落角であった。

部位別では、角座（落角を除く）が38点で最も多く、以下上腕骨34点、大腿骨31点と続く。推定最少個体数は、左大腿骨の22匹であるが、角座でも20匹という値が出る。メスには角がないことを考慮すると、もう少し多く見積ってもよいであろう。

中手骨もしくは中足骨も多く出土しているが、ほとんどは製品化のための加工痕をもつ。加工痕もなく原型を保っていたのは１点のみであった。

17点出土した尺骨のうち、11点に加工痕が認められた。いずれも刺突具として用いられたものである。

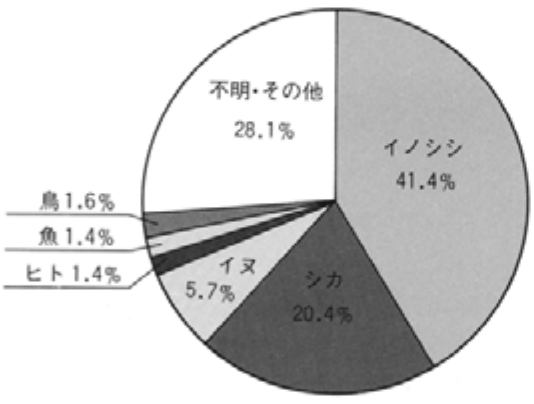
左骨甲骨を用いたト骨が１点出土している。

D．イヌ

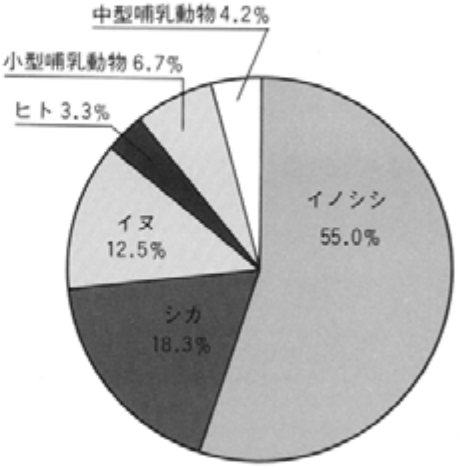
＊出土点数　＊＊推定最少個体数

	＊	＊＊
両生綱　AMPHIBIA		
カエル目　SALIENTIA	5	3
ヒキガエル　*Bufo bufo japonicus* (SCHLEGEL)	1	1
爬虫綱　REPTILIA		
ウミガメ科　Cheloniidae	1	1
ヘビ科　Colubridae	6	3
哺乳綱　MAMMALIA		
食虫目　INSECTIVORA		
ジネズミ　*Crocidura dsinezumi* (TEMMINCK)	1	1
コウベモグラ　*Mogera kobeae* (THOMAS)	4	2
霊長目　PRIMATES		
ニホンザル　*Macaca fuscata* (BLYTH)	1	1
齧歯目　RODENTIA		
ハタネズミ　*Microtus montebelli* (MILNE-EDWARDS)	3	3
アカネズミ　*Apodemus speciosus* (TEMMINCK)	2	2
食肉目　CARNIVORA		
オオカミ　*Canis lupus* (LINNAEUS)	2	1
タヌキ　*Nyctereutes procyonoides viverrinus* (TEMMINCK)	3	1
キツネ　*Vulpes vulpes japonica* (GRAY)	1	1
イタチ　*Mustela sibirica itatsi* (TEMMINCK)	2	2
イヌ　*Canis familiaris* (LINNAEUS)	144	15
偶蹄目　ARTIODACTYLA		
イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* (TEMMINCK)	1051	66
ホンシュウジカ　*Cervus nippon centralis* (KISHIDA)	517	22

第２表　朝日遺跡から出土した動物とその出土点数および推定最少個体数



第２図　朝日遺跡出土動物遺存体の比率



第３図　各動物の推定最少個体数の比率
不明は含まれない

イノシシやシカと違い、一匹分がまとまって出土することもある。加工痕や火熱をうけた形跡はみられない。

E．オオカミ

軸椎と大腿骨がそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも現生のイヌに比べてはるかに大きい。

F．ニホンザル

小臼歯1本、大臼歯3本を備えた右下顎骨が1点出土している。

G．中型哺乳動物

イタチの頭蓋の前半部が破壊されずに残っている。他にもキツネの左肩甲骨が1点、タヌキの橈骨、寛骨、脛骨が1点ずつ出土している。

H．小型哺乳動物

齧歯目は、アカネズミとハタネズミの2種が出土している。いずれも平野部に多いネズミで、ヒメネズミやスミスネズミのような山地に多いネズミは出土していない。また、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミといった、いわゆる家ネズミがまったく出土していないことも注目される。

コウベモグラの前顎骨1点、上腕骨2点が出土している。現在も西から東へと生息域を拡大しつつあるコウベモグラが、すでにこのころ濃尾平野に進入していたらしい。

I．ウミガメ

ウミガメのこうらの一部が見つかっている。アカウミガメもしくはアオウミガメのものとおもわれる。

J．その他

クジラと思われる大骨片が出土している。

3．考察

A．全体の概要

哺乳動物はイノシシとシカが大半を占め、イヌがそれに続き、イタチ、タヌキ、キツネ、ニホンザル、ネズミといった、中・小型哺乳動物がほんのわずか加わる。これら中・小型哺乳動物の骨には人の手の加わった様子はまったく見られない。偶然に紛れ込んだか、あるいは飼育していたイヌによって持ち込まれたとも考えられる。いずれにせよこれらの動物は食生活の中で重要な位置を占めていたとは考えられない。

このような傾向は同時代の他の遺跡と非常によく似ており、多種多様な動物を産出する縄文時代の遺跡とは大きく異なっているといえよう。

B．椎骨の出土点数について

第３表は、イノシシとシカの骨のうち主なものについて、部位別に出土数を示したものである。

イノシシの場合、胸椎と腰椎は一匹につきそれぞれ15個、６個ずつあるから、推定最少個体数66匹のイノシシの場合、相当たくさんの椎骨が見つかってもよさそうである。ところが実際は、胸椎と腰椎の出土点数は非常に少ない。これに対し、環椎（最も頭に近い椎骨）は、一匹につき１個しかないのに45点も出土している。

松井章氏（奈良国立文化財研究所）は、貝塚から見つかったイノシシ、シカの椎骨の数が他に比べて少ないことから、椎骨は狩りをした場所に捨ててきたのではないかということを講演で話されたことがあるが、朝日遺跡でも同様のことがいえそうである。骨髄もなく骨角器として利用されることも少ない椎骨は、肉を剝した後狩りをしたその場に捨てられ、切り取った肉や内臓は剝ぎ取った獲物の皮にくるんで持ち帰ったのだろう。切り離した頭には椎骨の１～２個がくっついていたこともあったであろうから、環椎と軸椎の多さも納得がいく。

	イノシシ	シ　カ	イ　ヌ
下顎骨	108	16	25
上腕骨	120	34	12
尺　骨	44	17	6
橈　骨	20	24	4
肩甲骨	86	24	11
大腿骨	50	31	6
脛　骨	80	30	17
環　椎	45	9	4
軸　椎	10	10	4
第3～7頸椎	4	19	8
胸　椎	25	6	5
腰　椎	16	9	5
仙　骨	3	1	0
椎骨　小計	103	54	26
総出土数	1051	517	144

第３表　イノシシ、シカ、イヌの主要な骨の出土点数

これはシカの場合にも当てはまり、イヌには当てはまらない。

Ｃ．イヌの第２小白歯について

イヌの下顎骨の中で、第２小白歯が生前に抜け落ちているものがいくつもあった。

哺乳類の永久歯は一度抜けると二度と生えてこない。顎の骨には歯の抜けた穴が残るが、しばらくすると骨が成長して穴は埋まってしまうので、歯が生前に抜けたのか死後抜けたのかは容易に判別できる。

25点出土した下顎骨のうち、第２小白歯の有無を確認できたものは12点で、そのうちの８点は、生前に第２小白歯が抜け落ちていた。当時の犬の食生活や、犬どうしの喧嘩あるいは疾病をその理由とすると、下顎第２小白歯だけが抜け落ちることは説明できない。ヒ

トの手によって抜歯が行われていた可能性について検討する必要があろう。これについては同様のことを直良信夫氏も指摘している。

4．おわりに

骨や角を加工してつくられた道具、いわゆる骨角器に比べると、ただ食べられそして捨てられただけの骨片はほとんど注目されることがない。山のように積まれたコンテナにぎっしり詰まった大量の骨を一つひとつ手にとって同定してみると、意外なところで新しい発見があった。しかし、今回ここに報告したのは現在までに分析をおえた約半分で、残りの半分にはいまやっと手をつけ始めたところである。この作業に約9ヵ月を費やして、現在やっと分析、整理方法のうちの一部が確立されつつあるという状態にある。

今回は不明とした大量の骨片をどう扱うのか、あるいは数個に割られた骨を数量的にどう扱うのかなど、問題点はたくさんある。イノシシの年齢推定や、魚類、鳥類の同定などもやってみれば必ず価値ある成果が得られるはずだが、実際には現生標本の不備などのために手つかずの状態にある。

動物遺存体の分析システムを確立し、いまだ眠っている多くの事実を少しでも多く明らかにしたいものである。

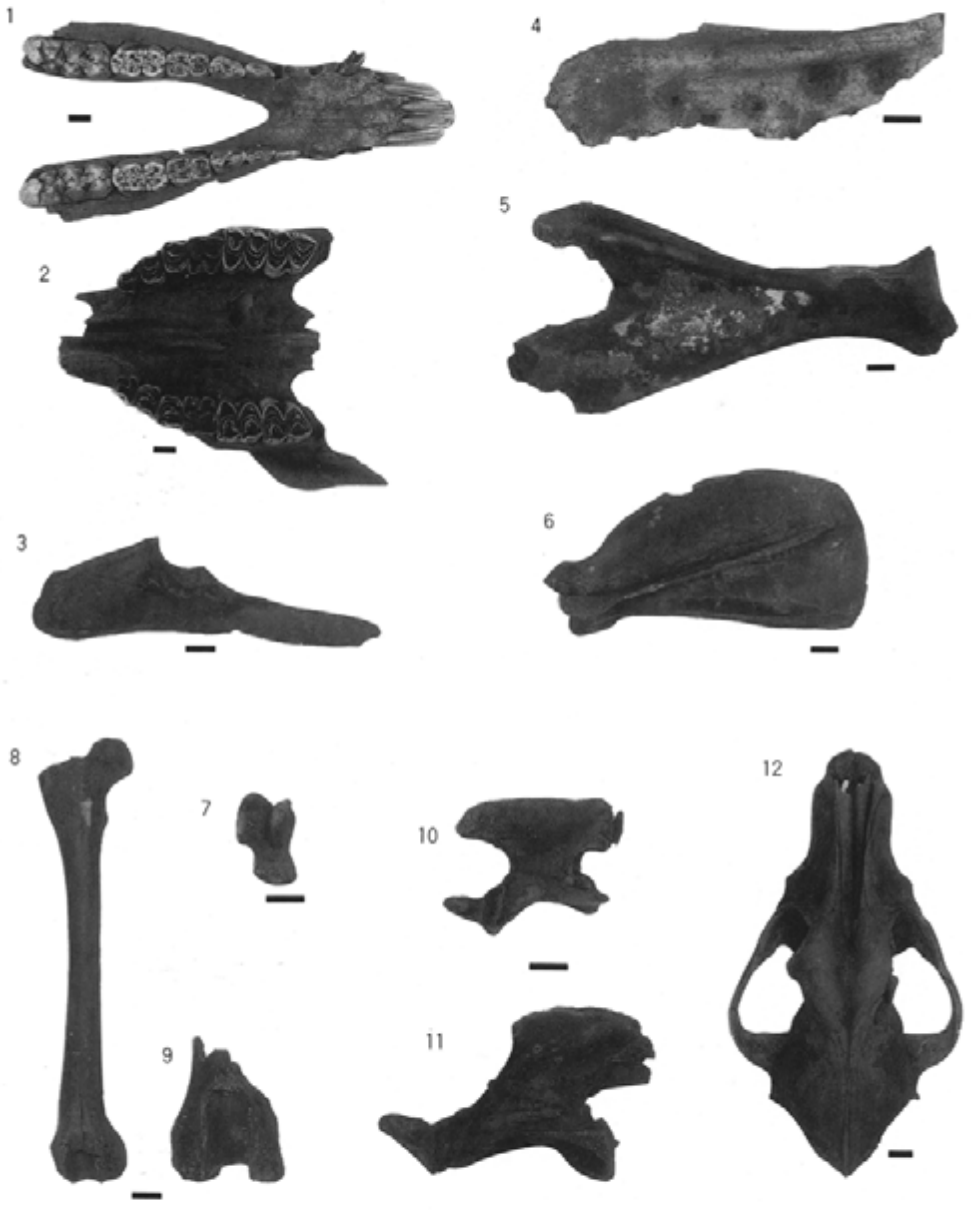
この研究を進めるにあたり、愛知教育大学の河村善也助教授には、貴重な現生標本を多数お借りした。記して謝意を表する。

（佐藤　治）

参考文献

金子　浩昌　『貝塚の獣骨の知識』　東京美術　1984
金子　浩昌・牛沢　百合子　「亀井遺跡出土の動物遺存体」　『亀井遺跡』
大阪文化財センター　1982
松井　章　「亀井遺跡（きり広げ部）出土の動物遺存体の分析」　『亀井（その2）』
大阪文化財センター　1986
宮崎　泰史　「亀井遺跡出土のイヌについて」　『亀井遺跡』
大阪文化財センター　1982
直良　信夫　『古代遺跡発掘の家畜遺体』　校倉書房　242-243　1973
渡辺　誠　「朝日遺跡61Ｂ区貝層のブロック・サンプリング」『愛知県埋蔵文化財センター年報　昭和61年度』1987
渡辺　誠・田中禎子　「朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告」『愛知県埋蔵文化財センター年報　昭和62年度』1988

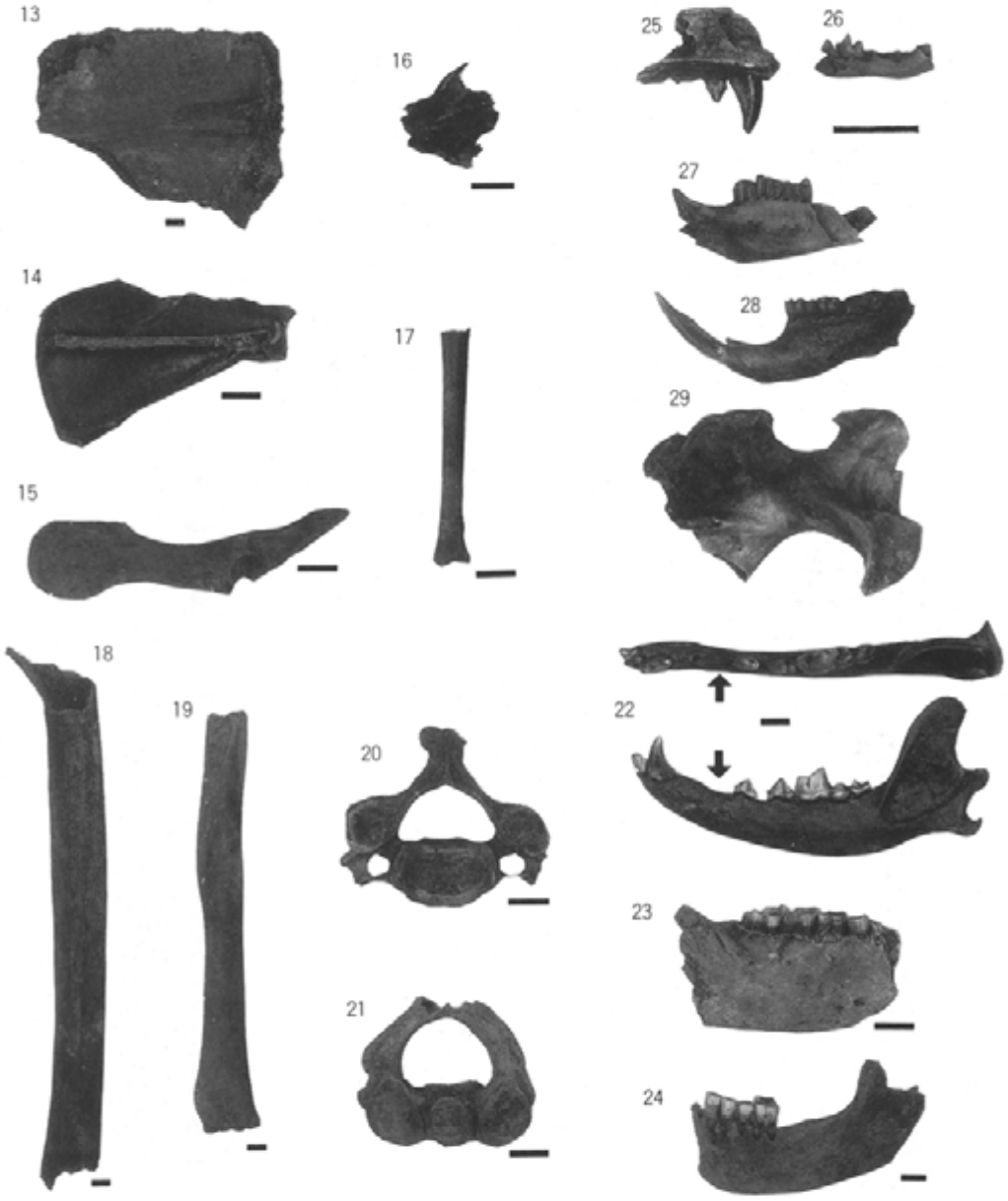
Plate I



1：イノシシ 下顎骨　2：シカ 上顎骨　3：シカ 右尺骨（刺突具）
4：イノシシ 右肩甲骨（ト骨）　5：シカ 右肩甲骨（ト骨）　6：イヌ 左肩甲骨
7：イヌ 右距骨　8：イヌ 右大腿骨　9：オオカミ 右大腿骨　10：イヌ 軸椎
11：オオカミ 軸椎　12：イヌ 頭骨
8と9，10と11は同縮尺

1 cm

Plate 2



13:ウミガメ こうら　14:キツネ 右肩甲骨　15:タヌキ 左寛骨　16:イタチ 頭骨
17:タヌキ 右橈骨　18:ヒト 右大腿骨　19:ヒト 左上腕骨　20:ヒト 頸椎　21:ヒト 軸椎
22:イヌ 左下顎骨　23:ニホンザル 右下顎骨　24:ヒト 左下顎骨
25:コウベモグラ 左上顎骨　26:ジネズミ 左下顎骨　27:ハタネズミ 右下顎骨
28:アカネズミ 右下顎骨　29:コウベモグラ 左上腕骨
13—24: ━ 1cm　25—29: ━ 5mm

清洲城下町遺跡出土の井戸桶に関する考察

鈴　木　正　貴

1

本稿では、朝日西遺跡・清洲城下町遺跡[1]から検出された井戸のうち、内部構造物に結桶[2]を用いたものを取り上げて分析する。

井戸の研究は、近年内部構造に着目してその形態分類と編年を行った宇野隆夫の研究[3]等がある。宇野は井戸の部分を井桁・井戸側・水溜と区分して分類を行い、各時期の井戸の様相を論じた。今回取り上げる井戸の構造物はＢⅨ類（桶積み上げ井戸）と呼ばれるもので、福岡県太宰府史跡SE745（12世紀中頃）を最古の例としている。また、朝日西遺跡出土の井戸については既に長島広の論考[4]がある。長島は朝日西遺跡で検出される井戸は、上部構造を明らかにしたものは存在せず、また井壁保護の施設である井戸側と水溜の区分が不明瞭であるとして、井戸の下部構造を内部構造と称している。そして、平面プランと内部構造物の分類を行い、Ⅰ期（11～13世紀）は井戸の内部構造物に曲物を利用し、Ⅱ期（16～17世紀初頭）は桶を利用するという各時期の様相を明らかにした。ただ、この論考はⅠ期（曲物）とⅡ期（桶）の大区分と規模の分類に留まる。

一方、結桶に関する研究は、考古学の方面からは三浦純夫等の研究[5]があるに過ぎない。また、民族学の方面から用途・製作過程等に関する論考[6]がある。

2

清洲城下町遺跡から出土した井戸桶のうち、遺存状態が良好で分析に耐えるものは現段階で第１表に提示した27基34点である。この大部分は本来井戸桶を数段重ねたものと思われるが、上部の井戸桶が抜き取られたり腐敗したりして滅失する場合が多く、２段以上良好な状態で残存したものは数基に過ぎない。

これらを桶下端部の形態から次のように分類できる（第１図）。

Ａ類　下端部の内面を薄く削り取り、先端部は鋭利にならないもの。

Ｂ類　下端部の内面あるいは外面を厚く削り取り、先端部を鋭利にするもの。

Ｂ－１類　内面のみを削り取るもの。

Ｂ－２類　外面のみを削り取るもの。

B－3類　内・外面ともに削り取るもの。

C類　下端部の内面を薄く、外面を厚く削り取り、先端部を鋭利にするもの。

D類　下端部を特に削り取らないもの。

2段以上井戸桶を確認したものについて見ると、下から2段目あるいは3段目の井戸桶の下端部は、後述するIII類を除き全てA類に属す。これは井戸桶を下に重ねるために、上段に位置する井戸桶の下端部の内面を削ったものと見られる。一方、最下段に位置すると思われる井戸桶はB・C類が多い。これは最下段の井戸桶はこの地域の湧水層である上部砂層に突き刺すために下端部を鋭利に加工したものであろう。このように、井戸桶は最下段とその上段とでは、下端部を作り分けていることが推測される。従って、C類の場合はA類とB類の両要素を持ち、古い井戸から抜き取って新たな井戸へ転用された可能性がある。例えば、清洲城下町遺跡61A区SE05出土の井戸桶は、一度別の井戸の上段の井戸桶として用いられた後、SE05の最下段に転用されたと考えられる。また、D類の井戸桶は全て後述するIII類の小型の井戸桶にしか存在しない。この場合、上段と最下段における下端部の加工に差異は見られない。

3

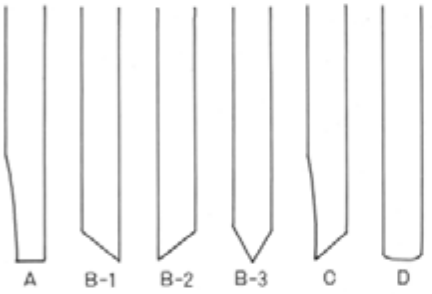
次に井戸桶の板材を製作する加工法で分類する。分類は以下の通りである。

I類　打ち割り法による製板を行ったもの。

II類　ノコギリを用いた製板を行ったもの。

III類　特に加工痕が見られず、丁寧な整形が施されたもの。

I類は木材に刃物を打ち込んで板材を縦割りにする、いわゆる打ち割り法による製材を行ったものである。打ち割った後は形をある程度整えるためチョウナ等の道具で削っている。このように加工した井戸桶の板材は、大部分が節目のない好材料を用いており、板目



第I図　桶下端部の形態分類
（断面の模式図　左を内側とする）



I類(62H区SE01)



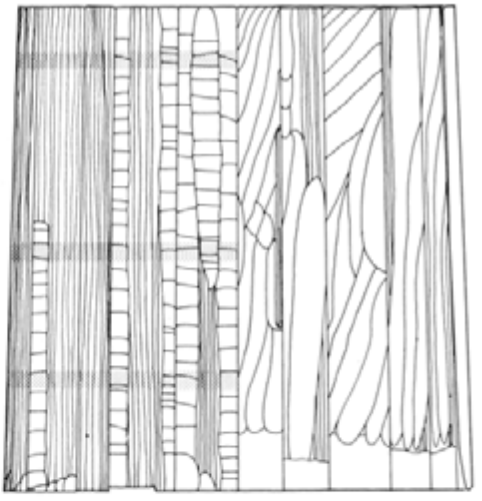
II類（63C区SE03）

板材とするものが多い。以下具体例として、朝日西遺跡57ＳＥ004を取り上げ詳説する。

朝日西遺跡57ＳＥ004（第２図）は井戸桶を５段重ねている井戸であり、16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。分析に用いたのは下３段分の井戸桶である。３つの井戸桶は最大径約74cm、器高約76cmとほぼ同じ規模である。いづれの桶も製板・整形の加工法は共通する。板の内・外面ともに整形加工を施していない部分には縦に割り裂けた痕跡（横断面を見ると凹凸が明瞭である）があり、板は刃物等を打ち込んで縦割りにして作製されたと推定される。製板された板材の荒れた表面は簡単に整形加工を施す。外面は部分的に縦方向にはつった痕跡が見られ、また内面はやや斜め方向に抉るように削った痕跡があり、



下から３段目



下から２段目



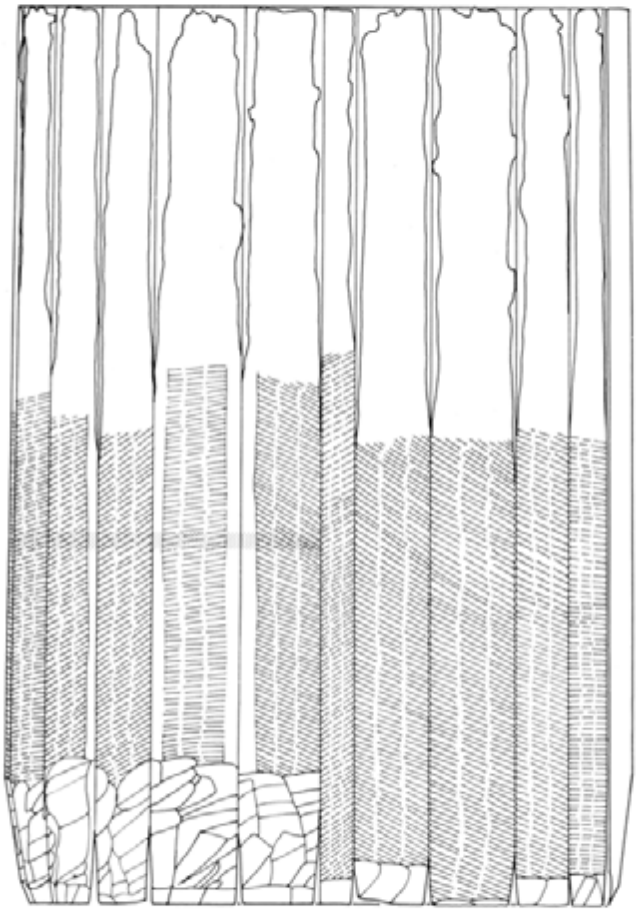
最下段



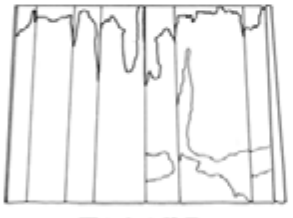
第２図　朝日西遺跡　57ＳＥ004出土　Ｓ＝1/12

製板後の表面の荒れを削除する一方、桶材としての曲面も形作っている。しかし、内外面の表面はカンナ等によるより丁寧な整形は全く施されていない。一方、桶材の側面すなわち各桶材の接合面は、特に加工痕が見い出せないくらいカンナ等で丁寧に削られている。

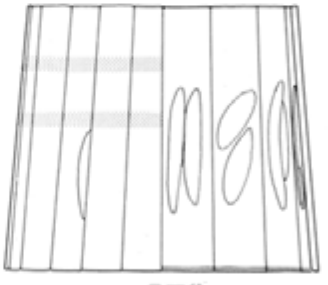
II類はノコギリで板材を作製するものである。ノコギリによる製板後は桶材としての曲



清洲城下町遺跡　63C区SE03出土



下から2段目



最下段

0　50cm

第3図　清洲城下町遺跡　62E区SE01出土　S＝1/12

面を意識した削りが見られるものもある。このように加工した桶の板材は、大部分が節のある材料であり、打ち割り法に適さない。以下具体例として、清洲城下町遺跡63C区SE03（第3図）を取り上げる。

清洲城下町遺跡63C区SE03は桶組の井戸で、井戸桶は最下段のみ出土した。出土遺物から見て、19世紀以降の井戸と思われる。上端部は遺存状態が劣悪であり、下半部のみ加工痕が見い出せた。井戸桶の最大径100cm、器厚138cm以上を測り、板材の厚さは3.8cmと他に比して厚い。桶材の内外面ともに板材に対して斜め方向に走る間隔の狭い傷痕が無数に存在し、ノコギリによる製板の可能性が高い。製板後の整形加工は、外面を縦方向に削り取り桶の形を整えている。各板材には節が数ヶ所存在し、良好な材料を用いていない。

III類はI・II類で見られた加工痕が存在せず、板材の内・外面ともにカンナ等による丁寧な整形を施したものである。本来は打ち割り法あるいはノコギリによる切断の整板を行っているはずであるが、それは不明である。これらは全て器高が50cm以下であり、他類に比して小型である。具体例として清洲城下町遺跡62E区SE01を取り上げる。

清洲城下町遺跡62E区SE01（第3図）は井戸桶を2段確認した。出土遺物はほとんど見られないが、16世紀から17世紀初頭の井戸と推定される。上段の井戸桶は最大44.4cm、器高31.5cm、下段は最大径50.0cm、器高41.9cmを測る。内外面の表面ともに製板に伴う加工痕は見い出せない。カンナ等による整形が丁寧になされ、内面中央部を抉るように削り取っている。

1基の井戸に用いられた井戸桶は細部で相違は見られるものの同一の加工法である。I類の井戸桶は22基27点であり、全て15世紀後半から17世紀初頭までの井戸から出土した。一方、II類の井戸桶は2基2点であり、19世紀以降の遺物を伴出する。特に清洲城下町遺跡63C区SE05は井戸桶の上部に漆喰の井戸側を設けている。このことから、井戸桶の加工法はI類（打ち割り法）からII類（ノコギリ法）への変遷が想定される。変遷の時期については、17～18世紀の資料を欠き詳細は不明であるが、17世紀初頭以降であることは間違いないだろう。中近世の製板技法は大鋸と呼ばれる縦挽きのノコギリが用いられる以前は、打ち割り法が用いられたことは既に論じられており[7]、この大鋸が通常用いられるのは15～16世紀と考えられている。今回用いた井戸桶に関しても、打ち割り法からノコギリへという変化が辿れるが、その時期が若干遅れる。これはノコギリによる製板では、曲面を要する井戸桶の板材を製作するのに不都合であることが影響していると思われる。しかし、少なくとも19世紀にはノコギリが用いられるようになり、それと対応するように板材は節を持つ粗雑なものに変わっている。このことから、江戸時代後期には打ち割り法に好都合な良好な板材が入手しにくくなった背景も考慮されよう。尚、III類の井戸桶も15世紀から

17世紀初頭のものと思われるが、他類に比して規模が小さく異質である。整形が丁寧であることから、生活容器としての結桶・結樽の転用の可能性もあり[8]、更に検討を要する。

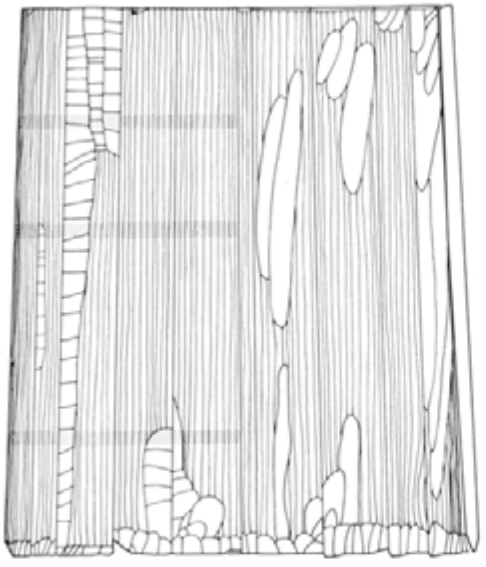
また、地下水を溜めやすくする工夫と見られる加工が存在するものも数例ある。清洲城下町遺跡62F区SK30（第5図）は井戸桶を2段重ねた井戸であり、16世紀～17世紀初頭に比定される。上段の井戸桶は遺存状態が不良であり、分析は下段の桶のみ可能であった。井戸桶は打ち割り法（I類）の製板を行う。各板材は1枚あるいは2枚おきに、左右両側



下から3段目



下から2段目



最下段



第4図　清洲城下町遺跡　62H区SE01出土　S＝1/12

面あるいは一方の側面に切り込みを施しており、結果として各板材の接合面で長方形の孔が設けられている形となる。一方、清洲城下町遺跡62H区ＳＥ01（第４図）は井戸桶を３段重ねたもので、16世紀末から17世紀初頭の井戸である。３段ともＩ類の加工法で製板されているが、下から２段目の井戸桶には、20枚の板材のうち４枚に直径0.5cmの孔がいくつか穿れている。この２例は、他の板材を転用したものではなく、井戸桶のための固有の加工と考えられ、水を有効に得るための工夫と想定される。

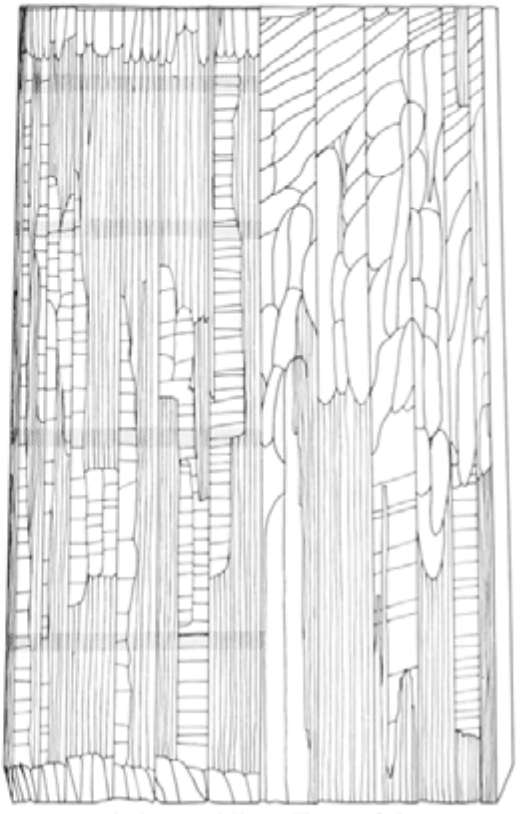
4

清須城下町に関連する井戸は、Ｉ・Ⅲ類の井戸桶をもつものと考えられるが、このうちＩ類は更に大きさによって２類に区分できる。

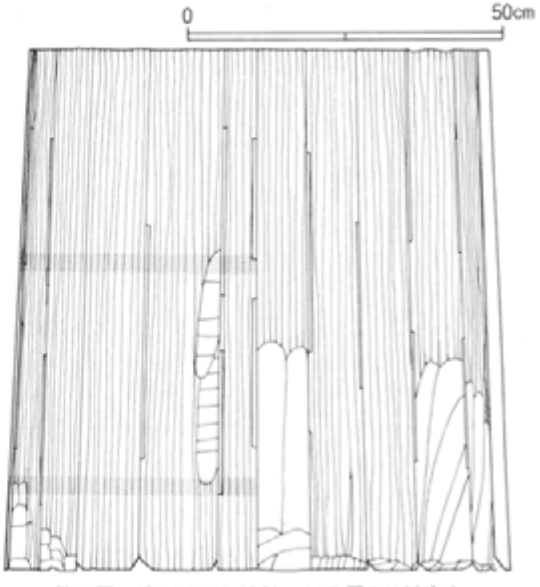
Ｉ－１類　器高が100cmを超えるもの(例えば清洲城下町遺跡62Ｈ区ＳＥ02（第５図))。

Ｉ－２類　器高が50～90cmのもの。

この二者の井戸桶の分布には次のような特徴がある。すなわち、Ｉ－１類は全て清洲城下町遺跡における五条川東岸の田中町地区・本町地区北部に集中する。一方、Ｉ－２類は特定の地区に集中するのではなく、ほぼ全域で出土している。また、清洲城下町遺跡62Ｈ区・61Ｂ区のようにＩ－１類とＩ－２類が近接して出土する例が見られる。特に62Ｈ区では、Ｉ－１類であるＳＥ02をＩ－２類であるＳＥ01を切るとい



清洲城下町遺跡62Ｈ区ＳＥ02出土



第５図　清洲城下町遺跡　62Ｆ区ＳＫ30出土

う切り合い関係が存在する。Ⅰ－1類とⅠ－2類の相違が時期的要因によるものかは問題があり、出土遺物の詳細な検討を要す。本稿では、筆者の力量不足で井戸出土遺物の細かい分析ができず、今後の課題である。しかし、大型のⅠ－1類が特定の分布を見せることは、Ⅰ－1類は限られた地区で用いられた特殊な井戸桶であり、しかも、分布する地区の異質性を物語ると思われる。奇しくもちょうど城下町期前期（1478年頃～1586年頃）の大小の方形区画が分布する地区[9]にⅠ－1類が集中することは興味深い事実である。これに対して、Ⅰ－2類は特定の分布を見せず、清須城下町においては普遍的に存在したものであると推測される。（分布図は第6図を参照）

5

本稿では、井戸桶の形態分類を行い、分析を試みた。取り上げた資料の制約および浅学のため十分な論考とならなかったが、以下に内容の要約と問題点を述べる。

1．井戸桶は最下段と上段で作り分けを行っている。

2．井戸桶の板材は製板の加工法から分類でき、17世紀初頭以降に打ち割り法からノコギリ法へ変遷したことが伺える。ただし、整形加工のあり方に若干の差異が認められること、板材の側面の加工法の問題[10]、加工具（大工道具）の問題等、更に詳細な検討を加えなければならないだろう。

3．いわゆる城下町期の井戸桶は3類（Ⅰ－1類、Ⅰ－2類、Ⅲ類）に区分できるが、この相違が何に起因するのかは更に検討を要する。しかし、これらの分布の偏重から、この相違が地区の機能的差異によることが想像でき、清須城下町の構造解明への手がかりとなる可能性がある。

4．また、本稿では全く触れなかった問題点も多い。タガの問題、井戸桶を全て抜き取られた井戸を含めての検討、他の内部構造物をもつ井戸（曲物・石組・瓦積・漆喰等を用いた井戸）との関係の問題、地域的な問題等課題は山積みの状態である。

本稿が今後の井戸および結桶の研究に対し、少しでも寄与できれば幸いである。

〔注〕

(1) 清洲城下町遺跡の調査は、環状2号線関連の調査のうち五条川の東側を「朝日西遺跡」と称し、他の調査区は全て「清洲城下町遺跡」と称して実施された。両者とも清須城を中心とする城下町の遺跡であり、本稿では、これらの総体を「清洲城下町遺跡」として記述することにする。ただし、各井戸跡の名称は混乱を避けるため「朝日西遺跡」の名称をそのまま使用する。

(2) 結桶は細長い板材を側板として何枚も結い合わせたものに底板を設けたものである。底板を持たない井戸の構造物の場合に、結桶（あるいは桶）という表現が適切か否か問題があるが、ここでは、側板を何枚も結い合わせた井戸側を「井戸桶」または単に「桶」と呼ぶこととする。

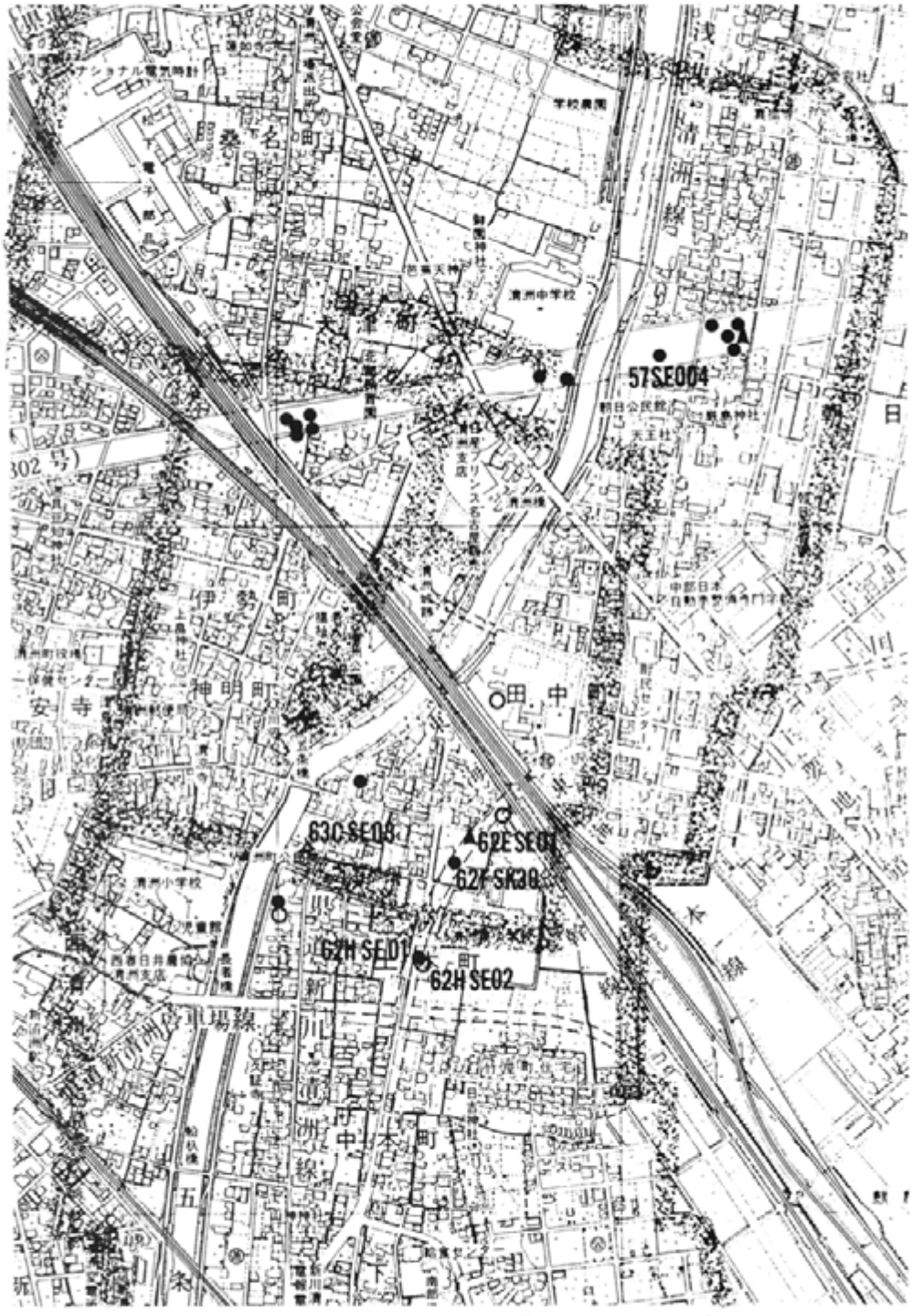
(3) 宇野隆夫「井戸考」『史林65巻5号』1982

(4)　長島広「朝日西遺跡の井戸について」『年報昭和60年度』(財愛知県埋蔵文化財センター1986
(5)　三浦純夫「結桶の出現と普及」『古代の技術』1988　この他に拙稿「増上寺子院群出土の早桶について」『村上徹君追悼論文集』1988などがある。
(6)　宮本常一「民具とその素材―民具試論(3)―」『民具論集』３慶友社1971、小泉和子「桶、樽」『講座・日本技術の社会史』第七巻日本評論社1983、村山麗子「桶のある生活」『民具論集』慶友社1969等がある。
(7)　村松貞次郎『大工道具の歴史』岩波新書1973等による。
(8)　Ⅲ類の井戸桶である朝日西遺跡59Ｅ区ＳＫ57出土の最下段の井戸桶の内面に、底板がはめ込まれていた痕跡が見られる。すなわち、底板を持つ本来の結桶から井戸に転用した可能性がある。尚、結樽を井戸に転用した例として増上寺子院群遺跡Ｂ地区３号井戸などがある。
(9)　梅本博志「清須城とその城下町」『清須―織豊期の城と都市―』1988
(10)　井戸桶の板材の側面はほとんどが凹凸のない丁寧な仕上がりである。これがノコギリによる切断をしたものか、また台ガンナで加工したものか等の問題があり、筆者の力量ではこの点を明確にし得ない。

No.	出土地点		最大径	器高	下端部の加工	製板の加工法	時期
1	朝日西遺跡	57SE004下から3段目	74.6cm	77.0cm	A	I－2	Ⅳ－2
2	〃	57SE004下から2段目	75.6cm	75.1cm	A	I－2	Ⅳ－2
3	〃	57SE004最下段	75.8cm	78.0cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
4	〃	59B区SE04下から2段目	66.2cm	66.8cm	A	I－2	Ⅳ－2
5	〃	59B区SE04最下段	67.2cm	70.7cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
6	〃	59E区SK03最下段	67.8cm	73.2cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
7	〃	59E区SK41最下段	60.6cm	79.2cm	B－3	I－2	Ⅳ－2
8	〃	59E区SK57下から2段目	43.0cm	32.1cm	D	Ⅲ	Ⅳ－2
9	〃	59E区SK57最下段	41.2cm	26.4cm	D	Ⅲ	Ⅳ－2
10	〃	59E区SK79最下段	62.8cm	77.9cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
11	〃	59E区SK106最下段	44.8cm	47.3cm	D	Ⅲ	Ⅳ－2
12	〃	59E区SE09最下段	66.6cm	62.5cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
13	清洲城下町遺跡	59D区SE03最下段	64.3cm	83.1cm	B－1	I－2	Ⅳ－2
14	〃	59D区SE04最下段	56.2cm	78.0cm	A	I－2	Ⅳ－2
15	〃	60B区SE01最下段	73.8cm	85.2cm	B－2	I－2	Ⅳ
16	〃	60D区SE01最下段	72.8cm	75.0cm	B－3	I－2	Ⅳ－2
17	〃	60F区SE01最下段	－	68.5cm	A	I－2	Ⅳ－2
18	〃	60F区SE02最下段	－	69.1cm	A	I－2	Ⅳ－2
19	〃	60F区SE03最下段	－	72.6cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
20	〃	61A区SE05最下段	82.0cm	85.9cm	C	I－2	Ⅳ－1
21	〃	61A区SE10最下段	77.2cm	86.2cm	A	I－2	Ⅳ－2
22	〃	61B区SE02最下段	70.4cm	161.0cm	B－2	I－1	Ⅳ－2
23	〃	61B区SE03最下段	－	78.0cm	B－2	I－2	Ⅳ－2
24	〃	62E区SE01下から2段目	44.4cm	(31.5cm)	D	Ⅲ	Ⅳ－2
25	〃	62E区SE01最下段	50.0cm	41.9cm	D	Ⅲ	Ⅳ－2
26	〃	62F区SK30最下段	80.2cm	83.0cm	B－1	I－2	Ⅳ－2
27	〃	62H区SE01下から3段目	70.8cm	80.5cm	A	I－2	Ⅳ－2
28	〃	62H区SE01下から2段目	70.6cm	86.0cm	A	I－2	Ⅳ－2
29	〃	62H区SE01最下段	75.0cm	86.4cm	B－3	I－2	Ⅳ－2
30	〃	62H区SE02最下段	81.8cm	125.8cm	B－2	I－1	Ⅳ
31	〃	63C区SE03最下段	100.0cm	138.5cm	B－2	II	Ⅴ
32	〃	63C区SE05最下段	86.2cm	90.0cm	D	II	Ⅴ
33	〃	63G区SK09最下段	57.2cm	125.0cm	A	I－1	Ⅳ
34	〃	大和製本SE01最下段	67.6cm	150.0cm	B－2	I－1	Ⅳ－2

時期は「清洲城下町遺跡」「昭和62年度年報」に準拠した。すなわちⅣ＝城下町期、Ⅳ－1＝城下町期前期、Ⅳ－2＝城下町期後期、Ⅴ＝宿場町期である。

第1表　清洲城下町遺跡出土井戸桶一覧



第6図　加工法からみた井戸桶の分布図　S＝1/10000

埋蔵文化財センターの活動

埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

県教育委員会並びに地元教育委員会との共催により、三河・尾張の両会場で「土器作りの技」をテーマに「埋蔵文化財展」を開催した。また両会場とも、会期中に、併せて「埋蔵文化財講演会」を開催した。

埋蔵文化財展

	尾張地区	三河地区
会場	愛知県埋蔵文化財調査センター	蒲郡市郷土資料館
会期	8月15日(月)～8月31日(水) (8月21日(日)を除く16日間)	7月29日(金)～8月7日(日)(9日間)
展示品 (両会場共通)	1．出土品（約250点） 朝日遺跡……赤彩壺、赤彩高杯、S字状口縁甕など（弥生～古墳時代） 廻間遺跡……赤彩壺、ヒサゴ壺、S字状口縁甕など（弥生～古墳時代） 諏訪遺跡……壺、台付甕、高杯など（弥生～古墳時代） 岡島遺跡……壺、甕など（弥生時代） 三の丸遺跡……土塁土層転写（江戸時代） 清洲城下町遺跡……天目茶碗、長石釉碗、羽釜など（安土・桃山時代） 2．写真パネル（約34点）	
入場者	945人	1586人
その他	入場者に解説明パンフレット（B5判8頁）を配布	

埋蔵文化財講演会

	尾張地区	三河地区
会場	愛知県埋蔵文化財調査センター（研修室）	蒲郡市市民会館（中ホール）
開催日	8月28日（日）	7月30日（土）
講師 演題	奈良大学教授　水野正好氏 「古墳とまつり　－その考古学」	㈶大阪文化財センター理事長　坪井清足氏「奈良時代の尾張・三河と平城宮」
入場者	250人	700人





発掘調査技術等研修会

県教育委員会との共催で、市町村の埋蔵文化財担当職員を対象とした「発掘調査技術等研修会」を実施した。参加者は、基礎研修会が24名、専門研修会が26名であった。

基礎研修会日程

8月25日（木）	8月26日（金）
開講式	「発掘調査資料の保存と活用」 講師　㈶愛知県埋蔵文化財センター 赤塚　次郎ほか
「文化財保護法解説」 講師　愛知県埋蔵文化財調査センター 加藤　安信	
「発掘調査にかかる予算の組立て方と補助金制度」 講師　愛知県教育委員会文化財課 赤羽　一郎	「名古屋城三の丸遺跡発掘調査現場見学」
「埋蔵文化財の保護」 講師　愛知県埋蔵文化財調査センター 伊藤　稔	開講式

専門研修会日程

1月26日（木）	1月27日（金）
開講式	「伊勢湾周辺の竪穴系横口式石室」 講師　㈶南山大学教授 伊藤　秋男
「日本の旧石器文化－発掘調査法・石器分析法を中心に－」 講師　文化庁調査官 岡村　道雄	
「中世都市遺跡調査の成果と問題点」 講師　国立歴史民俗博物館助教授 小野　正敏	「年輪年代学について」 講師　奈良国立文化財研究所主体研究官 光谷　拓実
「水田調査の現状と課題」 講師　三重大学教授 八賀　晋	開講式







資料の貸出・提供

センター保管資料の利用については、出土品の貸出について10件、写真等の資料の使用について　件の依頼があったが、いずれもその要望に応じた。

出土遺物の貸出

貸出先	目的	貸出し資料	期間
名古屋市博物館	常設展『尾張の歴史』	勝皮廃寺清洲城下町遺跡出土品　計6点	63年7月9日 〜 9月9日
『日本列島発掘展』企画実行委員会	『日本列島発掘展』	朝日遺跡出土品　計2点	63年7月10日 〜 元年9月20日
岐阜市歴史博物館	特別展『信長　岐阜城とその時代』	清洲城下町遺跡出土品　計13点	63年9月1日 〜 10月19日
愛知県陶磁資料館 財団法人王島美術館	特別展『日本陶磁絵巻』	朝日遺跡　勝川遺跡 廻間遺跡　出土品計4点	63年9月25日 〜 12月10日
京都国立博物館	特別点『畿内と東国－埋もれた律令国家－』	勝川廃寺 出土品　計4点	63年10月4日 〜 11月23日
安城市教育委員会 市文化センター	『土器が語る文化交流－古井遺跡群を中心として－』	廻間遺跡出土品　計9点	63年10月4日 〜 10月29日
長久手町教育委員会町郷土資料室	特別展『長久手の中世～その城館跡を中心に～』	清洲城下町遺跡　出土品計15点	63年10月26日 〜 元年2月10日
春日井教育委員会 市文化センター 市民ギャラリー	『春日井の歴史展』	町田遺跡・松河戸遺跡出土品　計230点	63年11月1日 〜 11月30日
	『やきもの美展』	勝川遺跡出土品　計30点	
名古屋市見晴台考古資料館	『城と町のデザイン－戦国～江戸の考古学－』	清洲城下町遺跡・朝日西遺跡出土品　計57点	元年2月1日 〜 元年3月31日

写真等資料の提供

提供者	目的	提供資料	提供日
ニューサイエンス	『考古学ジャーナル』63年6月号掲載	朝日遺跡　写真2点　スキ　ワク　出土状況 勝川遺跡　写真1点　SX01　検出状況	63年4月18日
焼津市歴史民俗資料館	第4回特別展『日本農耕文化の黎明－稲のシルクロード』展示コーナーへの展示	朝日遺跡　写真1点　全景	63年6月6日
図書出版　風媒社	『親と子の化石探偵団』掲載	勝川遺跡　写真4点　発掘状況ほか	63年6月7日
向日市文化資料館	『竹の文化』　展示コーナーへの展示	朝日遺跡　写真2点　竹櫛	63年8月1日
東京大学　教育学研究科 江間史明氏	社会科　歴史教育の教材	朝日遺跡　写真4点　環濠、柵、杭群	63年8月17日
名古屋市比良小学校	『比良小学校創立20周年誌』掲載	比良遺跡　写真1点　発掘状況	63年9月2日
名古屋市博物館	常設展『尾張の歴史』 展示コーナーへの展示	朝日遺跡　写真16点　遺構出土品など 勝川遺跡　写真4点　遺構出土品	63年9月13日
春日井市教育委員会 市民文化センター	『春日井の歴史』展示コーナーへの展示	町田遺跡　勝川遺跡ほか写真64点 遺溝、出土品ほか	63年10月6日
長久手町教育委員会 町郷土資料館	特別展『長久手の中世～その城館跡を中心に～』展示コーナーへの展示	清洲城下町遺跡　写真1点　発掘状況	63年10月20日
株式会社講談社	工楽善通編『古代史復元』 第5巻『弥生人の造形』掲載	朝日遺跡　写真2点　人形　鳥形木製品	63年11月17日
名古屋市博物館	『遺跡の発掘調査』掲載	朝日遺跡　阿弥陀寺遺跡　清洲城下町遺跡 朝日西遺跡　写真37点　出土状況	63年11月18日
株式会社碧水社	世界文化社版『復元日本大観』 第5巻『古墳と古代住居』掲載	朝日遺跡　写真1点　人骨	63年12月19日
株式会社浜島書店	『図説資料日本史』掲載	朝日遺跡　写真1点方形周溝墓	元年1月18日

現　地　説　明　会

昭和63年度の現地説明会は、名古屋城三の丸遺跡や清洲城下町遺跡の城郭遺跡を中心に、7回にわたり実施され、参加者は延べ1500人以上に達した。

現地説明会等開催状況

遺跡（発掘区）	開催日	所在地	内容	参加者
下山古墳	88・7・9	幡豆郡幡豆町	径16mの円墳とその横穴式石室、須恵器・馬具等の出土品を展示	200名
名古屋城三の丸遺跡（F区）	88・7・23	名古屋市中区三の丸	「那古野城」のものと考えられる堀、江戸時代の建物跡と出土品を展示	250名
加美遺跡	88・8・13	安城市小川町	古代の竪穴住居郡、中世の屋敷地・火葬場と出土品を展示	320名
清洲城下町遺跡（C区）	88・11・26	西春日井郡清洲町	清洲城の中堀、敷石遺構、地震・噴砂痕と出土品を展示	150名
名古屋城三の丸遺跡(A-C-D区)	88・12・27	名古屋市中区三の丸	江戸時代の屋敷地、弥生～平安時代の竪穴住居群、方墳と出土品を展示	300名
麻生田大橋遺跡	89・1・21	豊川市麻生田町	縄文時代の土器棺・石斧・石棒、中世の掘立柱建物と出土品を展示	160名
松崎貝塚遺跡	89・3・11	東海市大田町	古墳時代～平安時代にわたる製塩遺構、貝塚と製塩土器などの出土品を展示	150名
朝日遺跡 清洲城下町遺跡	89・3・18	西春日井郡清洲町	清洲町民センターにおいて、63年度調査成果の報告会	120名













付　　篇

受贈図書目録　（昭和63年2月～昭和63年12月）

※報告書

〔北海道〕

釧路市桜ヶ岡2遺跡調査報告書	釧路市埋蔵文化財調査センター
平取町イルエカシ遺跡―発掘調査概報―	室蘭開発建設部 北海道平取町
平取町二風谷小学校校庭遺跡―埋蔵文化財発掘調査報告書―	北海道平取町 平取町教育委員会
北埋調報44	
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊　調査の概要	(財)北海道埋蔵文化財センター
〃　〃　第2分冊　美沢川流域の遺跡群XI	〃
〃　〃　第3分冊　ペンケナイ川　〃　II	〃
北埋調報45	
函館市　石川1遺跡	〃
〃　46	
函館市　桔梗2遺跡	〃
〃　47	
上磯町　矢不来天満宮跡	〃
〃　48	
江別市　西野幌11遺跡、西野幌13遺跡、西野幌14遺跡、下学田遺跡	〃
〃　49	
深川市　音江2遺跡	〃
〃　50	
深川市　国見2遺跡	〃
〃　51	
深川市　内園2遺跡	〃
〃　52	
桔内町　新道4遺跡	〃
弁天貝塚II　幕末期以降におけるアイス貝塚の発掘調査報告書	苫小牧市埋蔵文化財調査センター

〔青森県〕

八戸市埋蔵文化財調査報告書第25集	
史跡根城跡発掘調査報告書X（昭和62年度）	八戸市教育委員会

〔岩手県〕

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
馬立I太田遺跡発掘調査報告書　東北自動車道関連遺跡発掘調査第1分冊	
〃　〃　第2分冊	〃
〃　第124集	
笹間館跡発掘調査報告書　は場整備事業笹間地区関連遺跡発掘調査	〃

〔福島県〕

いわき市埋蔵文化財調査報告　第20冊	
小申田横穴群―古代墓跡の研究―	福島県いわき市 (財)いわき市教育文化事業団
〃　第19冊	
石坂遺跡―古代から近世の集落跡の調査	(財)いわき市教育文化事業団 建設省磐城国道工事事務所 いわき市教育文化委員会
〃　第18冊	
寺台遺跡―古代集落跡の調査―	〃 〃 〃
〃　第21冊	
屋敷前遺跡　縄文―江戸時代の調査	いわき市教育委員会
都山カルチャーパーク関連報告第1集	

東丸山遺跡	
〃　第2集	
丸山遺跡	
東山東部ニュータウン関連発掘調査報告書3	
猫田C遺跡　猫田D遺跡	
中山地区土地改良共同施工事業関連発掘調査報告書2	
滝ノ口遺跡	
郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書1	
赤沼遺跡	
中山太田遺跡―発掘調査概報―	
郡山東部ニュータウン関連発掘調査報告書2	
深田A遺跡	
清水台遺跡―第10次A地点発掘調査概報―	
〃　―〃　B	〃　―
〃　―第1次A	〃　―
〃　―〃　B	〃　―
〃　―〃　C	〃　―
〃　―〃　D	〃　―
安積区画整理関連	
大根畑遺跡―発掘調査報告書―	
郡山東部7　館遺跡、永作遺跡、大島遺跡、中井田C遺跡、倉屋敷遺跡	
〃　8　北山田遺跡、北山田3号墳、堂跡遺跡、風呂遺跡	
〔茨城県〕	
茨城県教育財団文化財調査報告第38集	
一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1（総和地区）	
〃　第40集	
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15　屋代B遺跡II	
〃　第41集　墳松遺跡	
主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書	
〃　第42集　塙貝塚	
一般県道矢幡潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書	
〃　第43集	
霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書	
〃　第44集	
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16　南三島遺跡3・4区（I）	
茨城県教育財団文化財調査報告第45集	
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17　矢代B遺跡III	

郡山市都市計画部	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
〃	
〃	
〃	
福島県住宅供給公社	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
中山土地改良共同施工	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
郡山市・福島県住宅供給公社	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査団	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
福島県住宅供給公社	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
大和土地商事	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
大同生命保険相互会社	
郡山市教育委員会	
(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	
郡山市教育委員会	
農林水産省東北農政局	
〃	
〃	
(財)茨城県教育財団	
住宅・都市整備公団　つくば開発局	
(財)茨城県教育財団	
〃	
〃	
〃	
(財)茨城県教育財団	
住宅・都市整備公団　つくば開発局	
(財)茨城県教育財団	
〃	

茨城県教育財団文化財調査報告第45集	(財)茨城県教育財団
一般県道新川・江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書	〃
茨城県土浦市　永国遺跡	日本窯業史研究所
茨城県内原町　杉崎コロニー古墳群	〃
〔栃木県〕	
宇都宮市埋蔵文化財調査報告第24集	
聖山公園遺跡Ⅴ　—根古谷台遺跡発掘調査概要—	宇都宮市教育委員会
〃　第68集	
御城田　(本文編)　1987	栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団
〃　第74集	
下野国府跡Ⅶ　木簡・漆紙文書調査報告(本文)	栃木県教育委員会
〃　第82集	
下野国分寺跡Ⅲ　昭和60年度発掘調査概報	〃
〃　第83集	
花の木町遺跡—栃木県子ども総合科学館(仮称)建設に伴う発掘調査報告	栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団
〃　第84集	
稲荷塚・大野原　運転免許センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	栃木県教育委員会
〃　第85集—宇都宮競馬内居総合きゅう舎建設地内遺跡—	
御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡	〃
〃　第86集	
自治医科大学周辺地区　昭和61年度埋蔵文化財発掘調査概報	(財)栃木県文化振興事業団 住宅・都市整備公団
〃　第87集	
三ノ谷遺跡	(財)栃木県文化振興事業団
〃　第95集	
一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過	〃
〃　第96集	
自治医科大学周辺地区　昭和62年度埋蔵文化財発掘調査概報	〃
考古学研究室報告　甲種第2種	
栃木県宇都宮市　永道山瓦屋	国士館大学文学部考古学研究室
栃木県馬頭町　北向田7号墳	日本窯業史研究所
栃木県佐野市　蓮沼3号墳	〃
栃木県上三川町　西赤堀狐塚古墳	〃
栃木県小川町　浄法寺遺跡発掘調査概報	〃
栃木県喜連川町　三菱自工自動車試験場内遺跡	〃
栃木県高根沢町　上の原遺跡	〃
栃木県小川町　大森遺跡・谷田1号墳	〃
〔群馬県〕	
下斉田・滝川A遺跡・滝川B・C遺跡—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書　第17集—	群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
新保遺跡Ⅱ　弥生・古墳時代集落編—　〃　第18集—	〃
	〃
新保遺跡Ⅲ　蛭沢遺跡　奈良・平安時代編—　第19集—	
〃	〃
	〃
勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ—　〃　第20集—	〃
	〃
鳥羽遺跡Ⅰ・J・K区　〈本文編〉・〈図版編〉	〃
	〃
—　〃　第21集—	
上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書　第8集	〃
三ツ寺Ⅰ遺跡　古墳時代居館の調査　(本編)・(木器編)	東日本旅客鉄道株式会社
〃　第10集	〃
深沢遺跡・前田遺跡(縄文時代後期配石遺構の調査)	〃
	〃
一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
書上下古祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木宿町田遺跡	〃
	〃
群馬県佐波郡境町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書	建設省
三筆古墳群	境町教育委員会
専光寺付近遺跡　昭和62年度発掘調査概報	山武考古学研究所

桑原遺跡群　発掘調査報告書	〃
群馬県前橋市	
堰越遺跡　発掘調査報告書	〃
柳久保遺跡群　Ⅵ	〃
〔埼玉県〕	
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第59集	
樋の上遺跡　県立熊谷西高等学校関係埋蔵文化財調査報告	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〃　第68集	
女堀Ⅱ・東女堀原　霞ヶ関土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ	〃
〃　第69集	
下辻遺跡　県道三ヶ尻新堀線関係埋蔵文化財発掘調査報告	〃
〃　第70集	
小山ノ上遺跡　県道堀兼根岸線関係埋蔵文化財調査報告書	〃
〃　第72集	
姥原遺跡　自治セミナーハウス関係埋蔵文化財発掘調査報告	〃
〃　第71集　(第1・2分冊)	
将監塚・古井戸　歴史時代編Ⅱ　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告	〃
鵜ヶ島町遺跡群発掘調査報告書	鵜ヶ島町教育委員会
〔東京都〕	
多摩ニュータウン	
No.57遺跡―遺跡の概要と整備のあらまし―	東京都教育委員会
東京都遺跡調査・研究発表会　13　発表要旨	新宿区教育委員会 武野文化協会　考古学部会
三栄町遺跡	新宿区教育委員会
北区埋蔵文化財調査報告第2集　宿遺跡	北区教育委員会
芝公園一丁目	
増上寺子院群　光学院　貞松　院跡、源興院跡	港区教育委員会
虎ノ門五丁目	
芝神谷町町屋跡遺跡	〃
栄又河川敷遺跡	森ビル開発株式会社
大島町　野増遺跡　和泉浜C地点遺跡	葛飾区教育委員会
東京都埋蔵文化財センター調査報告　第9集	大島町教育委員会
多摩ニュータウン遺跡　昭和61年度(第1分冊)	(財)東京都埋蔵文化財センター
葛西城址　葛飾区青戸7丁目36番地点発掘調査報告書	葛西城址調査会
東京都板橋区	
根ノ上遺跡　発掘調査報告	東京都住宅局 根ノ上遺跡発掘調査会
武蔵国分寺跡南方地区発掘調査報告書	
都立府中高等学校体育施設建設予定地の調査	都立府中高等学校遺跡調査会
日野市	
落川遺跡調査概報告　Ⅴ	日野市落川遺跡調査会
旧芝離宮庭園　浜松町駅高架式歩行者道架設工事に伴う発掘調査報告	旧芝離宮庭園調査団
考古学研究室報告　甲種第3冊	
考古学研究室発掘調査報告書	国士舘大学文学部考古学研究室
〃　甲種第4冊	
古代安積出土古瓦の需給関係	〃
江戸・仙台坂遺跡(Ⅰ)	立正大学文学部考古学研究室
物見処遺跡　東京都三宅村　伊豆	国学院大学文学部考古学研究室
あざみ野遺跡	〃
慶應義塾藤沢校地内遺跡	
発掘調査報告Ⅰ　試掘調査の概要	慶應義塾大学藤沢校地 埋蔵文化財調査室
明治大学和泉校地遺跡　発掘調査報告書	明治大学
法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ	法政大学
〔千葉県〕	
御料牧場遺跡	
―麻薬犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査―	建設省 (財)千葉県文化財センター
東金市久我台遺跡	
―房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(本文・挿図篇)	水産資源開発公団 房総導水路建設所 (財)千葉県文化財センター

八日市場市平木遺跡

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―佐原地区(1)―

東金市・外荒遺跡発掘調査報告書
―国道409号交通安全対策事業に伴う埋蔵文化財調査―

成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告
山口雷土遺跡

松戸市彦八山遺跡―北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―

山武町椎崎遺跡

片山古墳群内D地点遺跡―北千葉導水事業に伴う埋蔵文化財調査―

関宿城跡―東葛飾郡関宿町久世曲輪に所在する関宿城確認調査概報Ⅱ―
千葉市浜野川遺跡群

㈶茂原市文化財センター調査報告第３集
千葉県茂原市　第六天向遺跡

〃　　第４集
千葉県茂原市　山崎横穴群

〃　　第５集
千葉県長生郡長南町　上小沢遺跡

「王賜」銘鉄剣　千葉県市原市稲荷台一号墳出土

㈶市原市文化財センター調査報告書第13集
川中遺跡

〃　　第16集
下鈴野遺跡

〃　　第17集
上大堀遺跡

〃　　第18集
下ヶ谷台遺跡

〃　　第19集
沢遺跡

〃　　第22集
南富士台遺跡

㈶君津郡市文化財センター発掘調査報告書第20集
―千葉県木更津市―　高千穂古墳群

〃　　第23集
―千葉県袖ヶ浦町―　念仏塚遺跡

〃　　第24集
―千葉県木更津市―　林遺跡

〃　　第25集
―千葉県君津市―　富田遺跡群

〃
〃
千葉県教育庁施設課
㈶千葉県文化財センター
日本道路公団　東京第一建設局
㈶千葉県文化財センター

千葉県土木部
㈶千葉県文化財センター
千葉県企業庁

㈶千葉県文化財センター
日本鉄道建設公団
㈶千葉県文化財センター
千葉県土木部
㈶千葉県文化財センター
建設省関東地方局
㈶千葉県文化財センター
千葉県教育委員会
㈶千葉県文化財センター
千葉県教育委員会文化課
㈶千葉県文化財センター

鷹巣土地区画整理組合
㈶茂原市文化財センター

千葉県住宅供給公社
㈶茂原市文化財センター

㈶長生郡南部開発公社
㈶茂原市文化財センター
市原市教育委員会
㈶市原市文化財センター

㈶市原市文化財センター
若葉建設株式会社

市原市企画部企画調整課
㈶市原市文化財センター

市原市都市街路課
㈶市原市文化財センター

市原市都市部農業土木課
㈶市原市文化財センター

市原市教育委員会保険体育課
㈶市原市文化財センター

千葉県土木部
㈶市原市文化財センター

㈶君津郡市文化財センター
袖ヶ浦町

㈶君津郡市文化財センター
木更津市

㈶君津郡市文化財センター
千葉県

㈶君津郡市文化財センター
原田内科・小児科医院

〃	第26集	
—千葉県富津市— 富士見台遺跡		(財)君津郡市文化財センター
〃	第29集	
—千葉県富津市— 野々間古墳		山王不動産株式会社 (財)君津郡市文化財センター
〃	第30集	
—千葉県袖ヶ浦町— 西萩原遺跡		(株)芝　崎 (財)君津郡市文化財センター
〃	第31集	
—千葉県木更津市— 上ノ山遺跡		木更津市 (財)君津郡市文化財センター
〃	第32集	
—千葉県木更津市— 宮脇遺跡		(株)大東土木 (財)君津郡市文化財センター
〃	第34集	
—千葉県富津市— 上野塚古墳		富津市 (財)君津郡市文化財センター
—千葉県袖ヶ浦町— 三箇遺跡群Ⅰ		袖ヶ浦町 (財)君津郡市文化財センター
—　〃　— 三箇遺跡群Ⅳ		袖ヶ浦町 千葉県木更津土地改良事務所 (財)君津郡市文化財センター
(財)印旛郡市文化財センター　発掘調査報告書第９集		
千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書		印旛郡市広域市町村事務組合 (財)印旛郡市文化財センター
〃	第10集	
千葉県印旛郡酒々井町		
酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告書—尾上広畑遺跡、墨小盛田古墳—		酒々井町 (財)印旛郡市文化財センター
〃	第11集	
四街道市第２福祉作業所建設予定地内調査報告書　中久喜No.２遺跡		(財)印旛郡市文化財センター
〃	第13集	
千葉県印旛郡印西町　天神台遺跡発掘調査報告書		印西町 (財)印旛郡市文化財センター
〃	第16集	
千葉県印旛郡白井町		
船橋カントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書　神々廻遺跡群		(株)船橋カントリー倶楽部 (財)印旛郡市文化財センター
〃	第22集	
千葉県成田市		
全日空成田プロジェクト造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　堀之内まえはた遺跡発掘調査報告書		全日本空輸株式会社 (財)印旛郡市文化財センター
〃	第26集	
千葉県印旛郡八街町		
用草宮の前遺跡発掘調査報告書		八街町 (財)印旛郡市文化財センター
千葉県木更津市		
諸西遺跡群発掘調査報告書		木更津市教育委員会
千葉県木更津市		
丹遺遺跡確認調査報告書		〃
千葉県栗源町		
平山台遺跡群発掘調査報告書		栗源町教育委員会
千葉県流山市		
下屋敷遺跡　発掘調査報告書　昭和61年		山武考古学研究所
千葉県市原市		
毛尻遺跡　〃　昭和58年		〃
千葉県佐原市		
新林古墳発掘調査報告書		〃
〔神奈川県〕		
神奈川県埋蔵文化財調査報告30　昭和61年度　神奈川県内埋蔵文化財発掘調査概要		神奈川県教育委員会
神奈川県文化財調査報告書第47集　厚木市山ノ上遺跡１		〃
小田原市文化財調査報告書第24集		
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ		小田原市教育委員会

〃	第23集	
小田原城三の丸・大外郭		〃
神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15		
宮久保遺跡II		神奈川県立埋蔵文化財センター
泥牛庵縄やぐら群II		神奈川県土木部横浜治水事務所
新吉田町四ツ家横穴墓群	〃	〃
神奈川県立博物館発掘調査報告書 第17号 小糸遺跡		神奈川県立博物館
海老名本郷 (II)		富士ゼロックス株式会社
		本郷遺跡調査団
〃 (IV)		〃
		〃
〃 (V) 本文編・図録編		〃
		〃
神奈川県横浜市		
釜利谷やぐら遺跡 発掘調査報告書		釜利谷やぐら遺跡調査団
神奈川県		
横浜市 宮沢遺跡		日本釜業史研究所
観福寺裏遺跡		〃
神奈川県		
川崎市 柵山代官山遺跡		〃
神奈川県		
横浜市 市ヶ尾・川和地区内		〃
川崎市		
麻生区 山口台遺跡群		〃
神奈川県		
平塚市 御所ヶ谷遺跡		〃
〔富山県〕		
都市計画街路		
七美・太閤山・高岡線内遺跡群 発掘調査概要(6) 黒河尺目遺跡 調査報告書		富山県埋蔵文化財センター
富山県大山町		
花切遺跡 発掘調査概要		大山町教育委員会
〔石川県〕		
高松町中沼C遺跡—民間土砂採取事業関係—埋蔵文化財発掘調査		高松町教育委員会
〔福井県〕		
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報2		
吉河遺跡発掘調査概報		福井県教育庁
		埋蔵文化財調査センター
福井県埋蔵文化財調査報告 第13集		
長屋遺跡 県営長屋地区土地改良総合整備事業に伴う調査		〃
		〃
〔山梨県〕		
山梨県埋蔵文化財センター 第21集		
釈迦堂II 山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	本文編・図版編・写真図版編	山梨県教育委員会
		日本道路公団
〃 第23集		
二之宮遺跡 山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	本文編・図版編1・2	〃
		〃
〃 第26集		
丘の公園地内遺跡範囲確認調査（第1次）報告書		山梨県教育委員会
		山梨県企業局
〃 第27集		
山梨県北巨摩郡人泉村 寺所遺跡		山梨県教育委員会
〃 第32集		
清里の森第1遺跡範囲確認調査報告書		〃
〃 第33集		
一の沢遺跡他発掘調査報告書		〃
		関東農政局笛吹川農業水利事業所
山梨県埋蔵文化財センター 第35集		
国指定史跡		
銚子塚古墳附丸山塚古墳—保存整備事業報告書—		山梨県教育委員会
〃 第36集		
関山遺跡I 埋蔵文化財発掘調査報告書（県道部分）		〃
〃 第38集		

稲荷塚古墳	〃
宮間田遺跡	武川村教育委員会
	峡北土地改良事務所
〔長野県〕	
堂の前・福沢・青木沢　発掘調査報告書	塩尻市教育委員会
辺原遺跡―縄文時代中期の環状集落址　長野県塩尻市大原遺跡発掘調査概報	〃
丘中学校遺跡―長野県塩尻市広丘野村丘中学校遺跡発掘調査報告	〃
史跡	
平出遺跡　埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	〃
松本市文化財調査報告No.57	
松本市島立三の宮遺跡―県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書―	松本市教育委員会
〃　No.58	
松本市島立条里的遺構―　〃　―	〃
〃　No.59	
松本市島内遺跡群　北方遺跡Ⅱ・北中遺跡―　〃　―	〃
〃　No.60	
松本市向畑遺跡Ⅰ　―県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書―	〃
〃　No.61	
松本市林山腰遺跡　―県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書―	〃
〃　No.62	
松本市前田木下遺跡　―遺構確認調査報告書―	〃
松本市文化財調査報告No.63	
松本市島立条理的遺構　―県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書―	〃
〃　No.64	
松本市宮の下遺跡　―県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書―	〃
〃　No.65	
松本市島立北栗遺跡　―　〃　―	〃
〃　No.66	
松本市杵坂遺跡・松本市本郷小学校敷地遺跡　―緊急発掘調査報告書―	〃
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第８集	
長峯古墳群	佐久市教育委員会
	佐久埋蔵文化財調査センター
〃　第９集	
中原遺跡群　梨の木　長野県佐久市中込梨の木遺跡発掘調査報告書	〃
	〃
〃　第10集	
普田Ⅲ・新町Ⅲ・宮の上・中曽根・藤塚　発掘調査報告書	〃
	〃
〃　第12集	
西祢ぶた　長野県佐久市香坂西祢ぶた遺跡発掘調査報告書	〃
	〃
〃　第13集	
痢沢　　蔦石	〃
	〃
増田町埋蔵文化財試掘調査報告	増田町埋蔵文化財発掘調査団
国学院大学文学部考古学実習報告第15集	
小馬背遺跡　長野県木曽郡開田村	国学院大学文学部考古学研究室
長野市	
松代　屋地遺跡	日本窯業史研究所
〔岐阜県〕	
岐阜市長良龍門寺古墳	岐阜市教育委員会
関市文化財調査報告第13号	
国指定史跡　弥生寺跡―範囲確認発掘調査報告書Ⅰ―	関市教育委員会
前田遺跡	恵那市教育委員会
道場遺跡	〃
歴史の道「中山道」遺構確認調査概要報告Ⅰ	
槙ヶ根追分・茶屋跡	〃
恵那市文化財調査報告書第24集	
鹿路山遺跡　第２次発掘調査報告書	〃
〔静岡県〕	
川合遺跡（S．60．61年度静清バイパス（河合地区）埋蔵文化財発掘調査概報）	静岡県埋蔵文化財調査研究所
瀬名遺跡（S．62年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報）	〃
長崎遺跡（S．62年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査概報）	〃

一の谷中世墳墓群	磐田市教育委員会
昭和62年度遠江国分寺跡周辺	
国分寺・国府台遺跡―発掘調査報告書―	〃
旬坂上４遺跡発掘調査報告―昭和62年度―	
昭和62年度	
坂上遺跡　藤上原３遺跡発掘調査報告書	〃
焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ	
兜沢古墳群	焼津市教育委員会
半田山古墳群（Ⅳ中支群―浜松医科大学内―）	浜北教育委員会
富塚地区蔵平遺跡発掘調査報告書Ⅱ	〃
浜北市吉名第５号・第６号古窯跡―明神池運動場造成に伴う発掘調査概報―	〃
石畑遺跡　発掘調査報告書	菊川町教育委員会
菊川町埋蔵文化財報告書　第９集	
古川遺跡	〃
〃　第10集	
森前遺跡・森前外屋敷遺跡	静岡県袋井市土木事務所
〃　第11集	
猿田谷遺跡	菊川町教育委員会 牧之原農業用水建設事務所
〃　第12集	
殿ヶ谷遺跡発掘調査報告書	菊川町教育委員会 静岡県袋井土木事務所
〃　第13集	
豆尻Ⅱ遺跡発掘調査報告書	〃 〃
〃　第14集	
東横地西原遺跡発掘調査報告書	〃 〃
〔愛知県〕	
愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅵ）常滑古窯跡群	愛知県教育委員会
水源山南古墳　1988	〃 豊田土木事務所
熱田区夜寒町　名古屋市文化財調査報告ＸＸ	
高蔵遺跡発掘調査報告書	名古屋市教育委員会
愛知県東海市	
松崎貝塚第２次発掘調査報告書　付衆　塚森遺跡	東海市教育委員会
愛知県小牧市堀の内一丁目地内	
史跡小牧山発掘調査概要報告書(1)	小牧市教育委員会
愛知県小牧市大字上末・下末	
桃花台沿線開発事業地区内埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
知多市八幡	
細見遺跡　知多市文化財報告　第18集	知多市教育委員会
愛知県知多市八幡	
細見遺跡（第二次発掘調査）　知多市文化財報告　第20集	知多市教育委員会
〃　（第三次　〃　）　〃　第22集	〃
上白田古窯址群　常滑市文化財調査報告　第16集	常滑市教育委員会
知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅲ	知立市教育委員会
山西遺跡	豊川市教育委員会
清洲町埋蔵文化財報告Ⅰ	
清洲城下町遺跡Ⅰ―田中地区発掘調査報告―	清洲町教育委員会
一宮東部地区は場整備事業に伴う	
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　番場遺跡・金山遺跡・東上条理遺構・宮沢遺跡	一宮町教育委員会
愛知県三好町	
福谷城跡第１次発掘調査概要報告書	三好町教育委員会
〃　2　〃	〃
大久手遺跡発掘調査概報	足助町教育委員会
人類学博物館紀要　第８号	
愛知県西春日井郡師勝町　能田旭古墳　―第一次発掘調査報告―	南山大学人類学博物館
〃　第10号	
高蔵貝塚Ⅲ　―1985年度夜寒地区発掘調査	〃
岩倉市史　上・中・下巻	岩倉市史編集委員会
春日井市史　資料編３　考古	杉崎　章　他
〔三重県〕	

井田川茶臼山古墳	三重県教育委員会
亀山の古墳　―埋もれた古代権力―	亀山市教育委員会
四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅰ	
北山Ｃ遺跡	四日市市遺跡調査会
〃　　Ⅱ	〃
水沢町製炭窯跡	
安濃町埋蔵文化財調査報告３	
安芸郡安濃町中川中大谷　中大谷13・16号墳発掘調査報告	安濃町遺跡調査会
人類学博物館紀要　第９号	
三重県安芸郡安濃町　平田古墳群	南山大学人類学博物館
〔滋賀県〕	
圃場整備関係遺跡発掘調査報告書　Ⅶ―４	滋賀県教育委員会
	(財)滋賀県文化財保護協会
〃　　Ⅷ―４	〃
	〃
〃　　Ⅵ―３	〃
	〃
〃　　ⅩⅣ―３	〃
	〃
〃　　ⅩⅣ―５	〃
	〃
〃　　ⅩⅣ―６	〃
	〃
尾上遺跡発掘調査報告書―東浅井郡湖北町所在―	〃
	〃
蛇塚遺跡発掘調査報告書	〃
	〃
市三宅遺跡発掘調査報告書	〃
	〃
唐橋遺跡　瀬田川浚渫工事関連文化財範囲確認調査	〃
	〃
文化財調査出土遺物仮収納保管業務	
昭和62年度発掘調査概要	〃
	〃
石田団地２期工事に伴う	
石田三宅遺跡試掘調査概要	〃
	〃
南郷遺跡発掘調査報告書―一般国道一号（京滋バイパス）関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ―	〃
	〃
吉身北遺跡発掘調査報告書―守山市文化財調査報告書第24冊―	守山市教育委員会
近江八幡市埋蔵文化財調査報告書（Ⅷ）	
勧学院遺跡発掘調査報告書	近江八幡市教育委員会
〃　　(Ⅸ)	
西中遺跡・大殿遺跡・森ノ前遺跡	
近江八幡市　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ	〃
〃　　ⅩⅢ	〃
近江出土の施釉陶器　実測図集成Ⅱ	〃
〔京都府〕	
埋蔵文化財発掘調査概報	京都府教育委員会
昭和59年度	
京都市埋蔵文化財調査概要	(財)京都市埋蔵文化財研究所
京都府遺跡調査概報　第26冊	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〃　第27冊	〃
〃　第28冊	〃
〃　第29冊	〃
〃　第30冊	〃
京都府遺跡調査報告書　第８冊	〃
京都府遺跡調査報告書　第９冊	〃
長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第３集	(財)長岡京市埋蔵文化センター
〃　第19冊	長岡京市教育委員会
〃　第21冊	〃
向日市　埋蔵文化財調査報告書　第22集	〃

同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.20	同志社大学校地学術調査委員会
公家屋敷二条家東辺地点の調査	〃
〃 No.21	〃
大本山　相国寺境内の発掘調査II	〃
〔兵庫県〕	
繁田古窯址発掘調査報告書	神戸市教育委員会
兵庫県三田市文化財調査報告第５冊	
武庫川下土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録'81～'87	三田市教育委員会
〔大阪府〕	
大阪府藤井寺市	
津堂遺跡　―86-1区の調査―	大阪府教育委員会
南花田遺跡発掘調査概要・II	〃
大阪府藤井寺市所在	
はさみ山、土師の里遺跡他発掘調査概要・昭和61年度	〃
府中遺跡発掘調査概要II―府道和泉中央線道路改良工事に伴う発掘調査―	〃
湯屋の下遺跡・石ナ町遺跡発掘調査概要	〃
大里遺跡発掘調査概要III	〃
萱振遺跡発掘調査概要II―八尾市緑ヶ丘２丁目所在―	〃
恩智遺跡発掘調査概要―八尾市柏村所在―	〃
稲葉遺跡発掘調査概要I―府立玉川高等学校建設工事に伴う調査―	〃
成法寺遺跡発掘調査概要II―八尾市南本町所在―	〃
河西西部地区農業用発事業に伴う	
寛弘寺遺跡発掘調査概要IV	〃
〃 V	〃
中筋遺跡発掘調査概要IV	〃
志紀遺跡発掘調査概要―府営志紀住宅建替に伴う調査―	〃
大塚西遺跡発掘調査概要	〃
府道貝塚中央線	
森B遺跡発掘調査概要II―貝塚市森所在―	〃
府立泉陽高等学校校舎増築に伴う	
堺環濠都市遺跡発掘調査概要I	〃
石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要II	〃
新家・西板持遺跡発掘調査概要	〃
池尻発掘調査概要―狭山町池尻所在―	〃
大和川・今池遺跡発掘調査概要III	〃
小阪合遺跡発掘調査概要報告書　柏原・八尾幹線管渠築造工事に伴う発掘調査	〃
昭和60年度	
向泉寺跡発掘調査概要	〃
長峰地区府営圃場整備事業に伴う	
長峰丘陵遺跡発掘調査概要III―堺市富蔵所在―	〃
大阪府立	
錦織公園古墳群発掘調査概要	〃
淡輪遺跡発掘調査概要報告書VIII	〃
近鉄自動車道天理　～吹田線建設に伴う	
亀井（その３）埋蔵文化財発掘調査概要報告書	大阪府教育委員会 ㈶大阪文化財センター
久宝寺南（その２）―久宝寺・加美遺跡の調査―	〃
亀井北（その１）　〃	〃
亀井北（その３）　〃	〃
久宝寺北（その１～３）　〃	〃
城山（その２）　〃	〃
城山（その３）　〃	〃
福田遺跡（その１）―調査の概要―	〃
井上遺跡（その４，６）― 〃 ―	〃
小阪遺跡（その２）―　〃　―	〃
小阪遺跡（その３）―　〃　―	〃
小阪遺跡（その４）―　〃　―	〃
太井遺跡（その１）―　〃　―	〃
太井遺跡（その２）―　〃　―	〃
〃　（その３）―　〃　―	〃
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う	〃
新家（その１）埋蔵文化財発掘調査概要報告書	〃
㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第７輯　発掘調査報告書	㈶大阪府埋蔵文化財協会

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う畠中遺跡		〃
〃	第8輯 〃	
近畿自動車道和歌山線建設に伴う芝ノ垣外遺跡		〃
〃	第10輯 〃	〃
近畿自動車道和歌山線建設に伴う清瀬遺跡		
都市計画道路・府道磯之上山道線建設に伴う軽部池西遺跡	第11輯	〃
	第12輯	〃
近畿自動車道和歌山線建設に伴う信太山遺跡		
	第13輯	〃
都市計画道路磯之上山直線建設に伴う箕土路遺跡		
〃 第14輯		〃
近畿自動車道和歌山線建設に伴う向井代遺跡 〃		
史跡 難波宮跡―環境整備事業報告(4)―		大阪市教育委員会
昭和58年度		
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書		大阪市教育委員会
		(財)大阪市文化財協会
昭和59年度		〃
〃		〃
昭和60年度		〃
〃		〃
神並遺跡II		東大阪市教育委員会
東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要29		
東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和62年度		〃
鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告		(財)東大阪市文化財協会
鬼虎川の木質遺物―第7次発掘調査報告書第4冊―		〃
若江遺跡第27次発掘調査報告		〃
若江遺跡第35次発掘調査報告		〃
高槻市文化財調査概要X II		
嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要12		高槻市教育委員会
泉南市遺跡群 発掘調査報告書V		
泉南市文化財調査報告書 第15集		泉南市教育委員会
柏原市文化財概報 1986―X		
柏原市遺跡群発掘調査概報II―太平寺遺跡・安堂遺跡―		柏原市教育委員会
〃 1987―I		
柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1987年度		〃
〃 1987―II		
玉手山1号墳範囲確認調査概報		
〃 1987―III		
柏原市所在遺跡発掘調査概報―1986年度公共事業に伴う―		〃
〃 1987―IV		
柏原市遺跡群発掘調査概報―大県遺跡・玉手山遺跡・田辺遺跡―		〃
蛍ヶ池西遺跡		豊中市教育委員会
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1987年度		〃
		阪急宝塚線豊中市内連絡
		立体交差遺跡調査団
		豊中市教育委員会
新免遺跡 第23次発掘調査概報		
(財)八尾市文化財調査研究会報告13		
八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度		(財)八尾市文化財調査研究会
〃 14		
昭和61年度事業概要報告		〃
〃 15		
小阪合遺跡―八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査		〃
梶原南遺跡発掘調査報告書		梶原遺跡調査会
待兼山遺跡II		大阪大学埋蔵文化財調査委員会
野畑春日町遺跡―第一次調査報告書―		野畑春日町遺跡発掘調査団
〃 ―第二 〃 ―		〃
大谷女子大学資料館報告書 第17冊		
下池田遺跡―第2次発掘調査報告―		大谷女子大学資料館
〔奈良県〕		
平城京跡発掘調査部発掘調査概報 S.62年度		奈良国立文化財研究所
奈良国立文化財研究所学報第45冊		
藥師寺発掘調査報告 本文・図版		〃
平城京東市跡推定地の調査VI 第8次発掘調査概報		奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和62年度	〃
大和郡山市文化財調査概要9　四反田地区	
美濃庄遺跡　発掘調査概要報告書	大西郡山市教育委員会
〃　10	
大和郡山市出屋敷町　菩提山遺跡　発掘調査概要報告書	〃
〃　11	
箭井城第2次平城京右京八条二坊四坪　発掘調査概要報告書	〃
天理市埋蔵文化財調査概報　昭和61・62年度（1986年度）	天理市教育委員会
天理市平等坊・岩室遺跡　発掘調査概報	〃
考古学調査研究中間報告13	
別所裏山遺跡　豊田山遺跡発掘調査報告	埋蔵文化財天理教調査団
〃　14	
奈良県天理市布留遺跡　縄文時代早期の調査発掘調査報告書	〃
〔鳥取県〕	
鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書	鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県鳥取市秋里遺跡発掘調査報告書（西晋竹地区）	
〔島根県〕	
―飯梨川中小河川改修事業に伴う―	
富田川河床遺跡発掘調査概報	広瀬町教育委員会
〔岡山県〕	
岡山県埋蔵文化財報告18	岡山県教育委員会
岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊	
鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
〔広島県〕	
賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群Ⅲ	財広島県埋蔵文化財調査センター
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第73集	〃
小奴可城跡　発掘調査報告書	
〃　第72集	〃
植ヶ坪3号遺跡（B地区）	
〃　第66集	〃
大宮遺跡　発掘調査報告書　九反田地区　Ⅰ・Ⅱ	
〃　第67集	〃
糸井馬場第2号古墳　糸井塚ノ本第2号古墳	
〃　第68集	〃
和田原遺跡	
〃　第69集	〃
宮風呂遺跡　発掘調査報告書	
〃　第70集	〃
大和遺跡（A地点）	
〃　第71集	〃
宮本古墳	〃
開所十周年記念	
草戸千軒町遺跡　―発掘調査十年の成果―	草戸千軒町遺跡調査研究所
草戸千軒町遺跡　―第35・36次発掘調査概要―	〃
〔山口県〕	
山口市埋蔵文化財調査報告第26集	
大内氏築山跡Ⅱ　大内氏遺跡発掘調査概報	山口市教育委員会
〃　第27集	
小路遺跡	〃
〃　第28集	
瑠璃光寺跡（中世墓群の調査）遺跡	〃
山口県雨乞台遺跡の発掘調査	
山口大学人文学部考古学研究室研究報告第15集	山口大学人文学部考古学研究室
〔徳島県〕	
土成町北原遺跡	
―内陸工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	徳島県教育委員会
〔香川県〕	
高松城東ノ丸跡発掘調査報告書	香川県教育委員会
〔高知県〕	
土佐国分寺跡　―第一次発掘調査概報―	南国市教育委員会
〔福岡県〕	
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第8集	
有田・小田部	福岡県教育委員会

〃	第174集	
比恵遺跡群(8)		〃
〃	第175集	
井尻B遺跡		〃
〃	第176集	
博多11 —博多遺跡群第33次調査報告—		〃
〃	第177集	
博多12 — 〃 35次調査報告—		〃
〃	第178集	
重留遺跡 —重留古墳群C—2号墳・重留古窯址の調査—		〃
〃	第179集	
井相田C遺跡II		〃
〃	(別冊)	〃
〃	第180集	
福岡市 羽根戸遺跡 西丘西部墓園建設に伴う調査		
〃	第181集	〃
南八幡遺跡 —南八幡遺跡群第3次調査の報告—		〃
〃	第182集	
立花寺古墳群		〃
都市計画道路博多駅築港線関係 第183集 埋蔵文化財調査報告I 博多		〃
〃	第184集	
〃 II 博多		〃
〃	第185集	
長峰遺跡		〃
〃	第186集	
都地遺跡・金武城田遺跡 発掘調査報告書		〃
〃	第187集	
吉武遺跡群		〃
〃	第188集	
羽根戸原C遺跡群III		〃
〃	第189集	
戸原麦尾遺跡（I）		〃
〃	第190集	
柏原遺跡群V 先土器・縄文時代 遺跡A-2・C・H・J～N遺跡の調査		〃
〃	第191集	
〃 VI—古墳・古代遺跡M遺跡の調査—		〃
〃	第192集	
田村遺跡—V—		〃
〃	第193集	
博多 —高速鉄道関係調査(4)— 調査報告		〃
大西遺跡 豊前市文化財調査報告書 第5集		豊前市教育委員会
北九州市文化財調査報告書 第43号 北方遺跡		北九州市教育委員会
〃	第66集	
徳力土地区画整理事業関係調査報告I		(財)北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
〃	第67集	
上徳力遺跡 第15-1地点		〃
〃	第68集	
菊水町遺跡（I区の調査）広州縦貫自動車道関係文化財報告書13		〃
〃	第69集	
楠橋貝塚—遠賀川中流右岸の縄文時代前期の貝塚		〃
北九州市文化財調査報告書 第70集 寺田遺跡		〃
〃	第71集	
砥石坂遺跡、上清水遺跡（第2地点）、新池坂本遺跡（第3地点）		〃
〃	第72集	
西池ノ内遺跡		〃

〃　第73集	
貫川遺跡Ⅰ　貫川都市小河川改修工事に伴う発掘調査報告書1	〃
〃　第75集	
朽網・原遺跡　北九州市小倉南区朽網東4丁目所在	〃
〔佐賀県〕	
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(8)	
長尾関苅遺跡	佐賀県教育委員会
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報　第10集	〃
伊万里市文化財調査報告書第23集　伊万里市二里町所在遺跡の調査概要	伊万里市教育委員会
西尾遺跡　―A地点―	
〃　第24集　伊万里市内古窯跡調査報告第5集	
金石原窯辻窯跡　焼山上窯跡　焼山中窯跡　市の瀬高麗神上窯跡	〃
下白川窯・年木谷1号窯　―肥前地区古窯跡調査報告書第5集―	佐賀県立九州陶磁文化館
〔長崎県〕	
長崎県文化財調査報告書　第90集	長崎県教育委員会
中道埋遺跡	
〃　第91集	
長崎県埋蔵文化財調査集報XI	〃
〃　第92集	
百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	〃
〔熊本県〕	
石原遺跡　研究室活動報告22	熊本県教育委員会
〔大分県〕	
朝地地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ	朝地町教育委員会
小田遺跡群Ⅰ　大分県珠郡珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書	珠町教育委員会
陣箱遺跡　大分県大野郡三重町所在の弥生時代後期住居跡の調査	三重町教育委員会
〔宮崎県〕	
野尻町文化財調査報告書第3集	
紙屋城址遺跡	西諸郡野尻町教育委員会
〔鹿児島県〕	
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（45）　下山田遺跡Ⅱ	
竜郷―新奄美空港線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　和野トフル墓	鹿児島県教育委員会
〃　(46)	
新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　長浜　金久第Ⅱ遺跡	〃
〃　(47)　土浜ヤ―ヤ遺跡	
主要地方道竜郷・新奄美空港線改良事業に伴う埋蔵文化財報告書	〃

※年報

奈良国立文化財研究所　年報	奈良国立文化財研究所
長岡京市埋蔵文化財センター　年報	(財)長岡京市埋蔵文化財センター
神戸市埋蔵文化財年報　昭和60年度	神戸市教育委員会
岡山大学構内遺跡調査研究年報5　1987年度	岡山大学埋蔵文化財調査室
福岡市埋蔵文化財センター　年報6号，7号	福岡市埋蔵文化財センター
年報Ⅲ　昭和61年度	(財)広島県埋蔵文化財調査センター
埋蔵文化財調査室4　昭和61年度	北九州市教育文化事業団
鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ	鹿児島大学埋蔵文化財調査室
知多市民俗資料館年報2	知多市民俗資料館
枚方市文化財年報Ⅷ	(財)枚方市文化財研究調査会
名古屋市博物館年報No.11	名古屋市博物館
港郷土資料館館報6　昭和62年度	港区教育委員会
年報　昭和61年度―7―　昭和62年度―8―	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瑞浪陶磁資料館年報第7号	瑞浪陶磁資料館
茂原市文化財センター年報No.2　昭和61年度	(財)茂原市文化財センター
岐阜市歴史博物館年報No.2　昭和62年度	岐阜市歴史博物館
年報7　昭和62年度	(財)茨城県教育財団
千葉県文化財センター年報No.12	(財)千葉県文化財センター
史跡　斎宮跡	三重県都宮跡調査事務所
秋田県埋蔵文化財センター年報6　昭和62年度	秋田県埋蔵文化財センター
年報　No.2　No.5	(財)君津郡市文化財センター
〃　2　昭和61年度	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
静岡県埋蔵文化財調査研究所年報Ⅱ・Ⅲ	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
大阪市文化財年報　創刊号	大阪市教育委員会　文化振興課

京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度	京都大学埋蔵文化財研究センター
山武郡南部地区文化財センター年報	(財)山武郡南部地区文化財センター
甦る埋蔵文化財―埋蔵文化財センター10年の歩み―	(財)岩手県文化振興事業団
年報　昭和62年度	大垣市歴史民俗資料館
見晴台考古資料館年報Ⅴ	名古屋市見晴台考古資料館
考古学研究室彙報第24号	立正大学文学部考古学研究室
年報4	山梨県埋蔵文化財センター
福岡市埋蔵文化財年報　1986年度	福岡市教育委員会埋蔵文化財課
天理参考館報　創刊号	天理大学附属天理参考館

※紀要

名古屋市博物館　研究紀要11　昭和62年度	名古屋市博物館
研究紀要5	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
研究紀要3	日向市文化資料館
研究紀要1	(財)滋賀県文化財保護協会
研究紀要3	秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要4	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
研究紀要2	岐阜市歴史博物館
研究紀要2	(財)北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
長野県埋蔵文化財センター紀要1	長野県埋蔵文化財センター
研究紀要4	山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター
研究紀要第4号	(財)埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団

※雑誌

古代　第86号	早稲田大学考古学会
日本全国書誌　No.1654～No.1666	国立国会図書館
研究連絡誌第21号～22号	(財)千葉県文化財センター
マージナル　No.8～No.9	愛知考古学談話会
木簡研究　10号	奈良国立文化財研究所 木簡学会
岡崎市史研究　10号	岡崎市史編さん委員会
山陰地域研究　No.4	島根大学山陰地域研究総合センター
うつわ　2号	国学院大学第Ⅱ部考古学研究会
京都府埋蔵文化財情報　27号～29号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
金大考古第15号	金沢大学大学部考古学研究室
研究論集Ⅵ	東京都埋蔵文化財センター
教育愛知	愛知県教育委員会
'87 創立30周年記念誌	愛知県教育公務員弘済会
子とともに	(財)愛知県教育振興会
研修概要　昭和63年度	愛知県自治研修所

※展示図鑑・目録

中信平の弥生文化　―農耕社会の始まり―	塩尻市立平出遺跡考古博物館
松本平における縄文時代祭祀遺物	〃
日本農耕文化の黎明　―稲のシルクロード―	焼津市歴史民俗資料館
豊田市郷土資料館報告24	
豊田市郷土資料館収蔵品図録Ⅶ	豊田市郷土資料館
知立市歴史民俗資料館展示案内	知立市郷土資料館
〔特別展〕	
信長　―岐阜城とその時代	岐阜市歴史博物館
図録・枚方の遺跡	(財)枚方市文化財研究調査会

※分布地図

全国遺跡地図　佐賀県	文化庁
千葉県埋蔵文化財分布地図(4)―安房・夷隅地区―	(財)千葉県埋蔵文化財センター
静岡県文化財地図Ⅰ	静岡県教育委員会
静岡県文化財地名表Ⅰ	〃

名古屋市	
史跡　名勝地図	名古屋市教育委員会
西尾張地盤図	(社)愛知建築士会一宮支部
京都府遺跡地図　第１分冊〔第２版〕	京都府教育委員会

※文化財関係

宇都宮の民俗　文化財シリーズ第１号	宇都宮市教育委員会
宇都宮の手仕事　〃　第３号	〃
宇都宮の絵馬　〃　第９号	〃
港区指定文化財　昭和62年度	東京都港区教育委員会
豊前市の文化財	豊前市教育委員会
郷土から見た山内一豊	岩倉市教育委員会
岩倉市文化財調査報告Ⅰ	
大山寺柿経	〃
岩倉市の石造文化財	〃
岩倉市の文化財	〃
岩倉市指定有形民俗文化財	〃
山車とからくり人形	

※資料・その他

シンポジウム	
北陸の古代土器研究の現状と課題　資料編・報告編・発掘等	石川考古学研究所 北陸古代土器研究会
第１回北陸中世土器研究会資料	
北陸の中世土器・陶磁器・漆器	北陸中世土器研究会
第24回埋蔵文化財研究集会	
定型化する古墳以前の墓制　第１分冊	埋蔵文化財研究会
―九州・中国・四国編―	
〃　第２分冊	〃
―近畿・中部以東編―	
〃　第３分冊	〃
―発表要旨―	
弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題　1988　Ⅰ	東海埋蔵文化財研究会
〃　〃　1988　Ⅱ	〃
〃　〃　1988　Ⅲ	〃
第５回東海埋蔵文化財研究会	
清須　織豊期の城と都市　資料編	東海埋蔵文化財研究会
〃	
〃　〃　発表要旨	〃
〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題　縄文から弥生　資料編Ⅱ・研究編	愛知考古学談話会
西三河の横穴式石室　資料編	愛知大学日本史専攻会 考古学部会
昭和60年度　兵庫県教育委員会　発掘調査現地説明会資料	兵庫県教育委員会
昭和60年度　遺跡現地説明会資料	神戸市教育委員会
昭和61年度　〃	〃
昭和62年度　遺跡現地説明会資料	〃
山陽カラーシリーズ10	
吉備の巨墳	山陽新聞社
〃　21	
吉備の古代山城　鬼の城	〃
日本の歴史と文化　国立歴史民俗博物館　展示案内	国立歴史民俗博物館
10年のあゆみ	財)枚方市文化財研究調査会
京都大学文学部博物館	京都大学文学部
叡仁宮　―15年の調査の歩み―	京都府教育委員会
感想集　―松本市立考古博物館の雑記帳から―	松本市立考古博物館
考古遺者資料集　第８集	財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
考古資料ソフテックス写真集　第３集	名古屋大学文学部考古学研究室
名古屋大学文学部研究論集CI史学34〔考古学抜刷第３集〕	〃
律令期祭祀遺物集成	律令祭祀研究会
歴史考古学を考える　―古代瓦の生産と流通―	帝塚山考古学研究所

下野古代文字瓦譜	日本窯業史研究所
古代窯業の実験研究(1)	〃
室町時代の建築　附著作目録	川上　貢先生　定年退官記念事業会
仲村家年中録（二）―在郷町富田林商家日記―	大谷女子大学資料館
稲沢文化財愛護少年団　活動記録第９集	稲沢市教育委員会
三訂増補　総合資料日本史	浜島書店
近世豊田の俳人	豊田市教育委員会
尾張の文化財とくらし	愛知県社会科教育研究会
現政権と世界経済　県民大学叢書10	(財)愛知県教育サービスセンター
活きづく木曽の清水	東海農政局

年　報　昭和63年度

平成元年３月

編　集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
発　行

印　刷　株式会社　刈谷高速印刷